
魔王の歌姫

千ノ葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王の歌姫

【Nコード】

N1725Q

【作者名】

千ノ葉

【あらすじ】

まだ魔王が存在し、世界が混沌としていた時代。

ある都市の広場で一人の少女が絞首台への階段を上っていた。

彼女は歌う、悲しい唄を。

その歌声は”魔女”と呼ばれるのに相応しいほど美しかった。

そんな少女を救ったのは、人間から忌み嫌われる魔王という存在であった。

プロローグ — Gallows —

私は一段一段と階段を登っていた。裸足のせいか酷く足の裏が痛い。おそらくは研磨されていない木材の木屑が刺さっているであろう。

しかし、私の後ろについた屈強な男は、私に階段を登るようにと促す。

深く被った帽子は男の表情を見えにくくする。

だが、彼がどんな心境で私を追いたてているのかはわかる。

男の腰にはサーベルが見えるのだ。

その無機質な銀色の輝きは冷たく、そして重いものだった。

一歩、歩くごとにギシギシと音が鳴る。

ギシッ———

これでその音も12回目だ。

13段目を登り切ると、私の目には先ほどまで見えなかった光景が目に入ってくる。

そこはいつも見ていた町並み。

夕刻時の太陽の光が眩しいのは、今まで暗い地下に閉じ込められていたからであろう。

皮肉にもここから眺める景色はとても美しかった———

しかし、それも数秒の間のみ……………

目が慣れてくると飛び込んできたのは、下方にいる人々の群れ。

全員の目が見ているのだ——私のことを……………

目の前にはロープが垂れ下がっていた。

それは素っ気ないが切れる心配がないほど太い。

良く見ると、ロープには擦れたような跡がいくつもあった。

それはそうだろう。

このロープは何人もの首を通したのだから。

その跡は人々の苦しみを露にしており、己が死刑道具であることを誇示していた。

再び、下を見る。

人々が私のことを見ている——

その顔には期待、恐怖、憎悪など様々なものが渦巻いていた。

私が絞首台を登ると、司法官らしい男が、罪状を読み上げる。

男は堅苦しい形式に沿って、長々と文章を口にしていった。

もう、自分の罪状がどのようなものであるか、それは悪いことなのか、考えるのは止めていた——

それを理解した所でもう運命は変わらない。

この男がそれを読み上げたときに、私の首はこのロープへとかけら

れるのであるのだから。

気が付くと、私は自然と唄を歌っていた。

別に歌いたかったわけでもない。

どのような唄を歌うか考えていたわけでもない。

一言で云うならば自然と口にしてしまったのだ。その唄を――――

衰弱しきっているせいか、声は掠れ、音量も出ていない。

少し強い風が吹けばかき消えてしまうであろう、小さな声。

私は誰が聞いているわけでもない唄を歌い続けた。

ナンノタメー？

ワカラナイー？

ダイスキナヒトノタメー？

イヤ、

ジブンノタメ……………

後ろから、男の気配がする。

気がつけば、いつの間にか自分の罪状は読み終えられていたのだ。

首にはチクチクとした環状の物体が掛けられる。

しかし、私は歌を歌うことをやめなかった。

ガタンッ———

音とともに感じたのは一瞬の浮遊感と首に掛かる圧迫感———
空気を遮断され、私の視界は一気に歪む。

苦しさ……それは想像を絶する——

苦し紛れにジタバタと手足を動かすが、空を掻くだけでなんの意味もない——
すぐに視界は暗転し、手足は血流が行かなくなったように冷たくなる。

クルシイ——

ダレカ、タスケ——

意識が途切れる瞬間見たのは夕日。

それは今まで見た中でも一番に美しい。

その夕日を見たせいか身体が急に軽くなったような気がした。

これが死ならば、これは神様が最期に私にくれたプレゼントなのかもしれない。

恐怖も無い。むしろこの温かさは———

そこで私の意識は完全に闇へと堕ちていった。

自称“魔女”と青玉の魔王 ―前編―

その朝、少女は目を覚ました。

しかし、瞬時に周囲に異変があることに気が付くのである。

いつもならば隙間風吹く寒い部屋の中で、

硬いベットに目を覚ますところなのだが……………

ここは暖かい。

しかも自分の頭とベッドの間には何かフワフワしたものを挟んでいるのだ。

枕だ——その触り心地から羽毛であろう。

フワフワしているのはそれだけではない。

今さっきまで自分が掛けていた布団でさえ、この世の物とは思えぬほど柔らかいのだ。

寝具で驚かされた少女だが、周りの様子を見てさらに驚きを加速させる。

部屋の中はとても広く見たこともない家具が並んでいる。

モノクロのソファークローゼット、深紅のハイチェスト——

どれを取っても高級感を漂わせている家具ばかりだ。

まるで王宮の一室のようだと彼女は直感的に思った。

とはいっても実際に王宮の内部など見たことあるはずはなく、すべて自分の想像でしかないのだが。

だが彼女の感想はあながち間違っていないだろう。

それほど、この部屋は豪華に見えるのだ。

ここまでくると、これが夢ではないかと思ってしまう……………

彼女の最期の記憶――

それは絞首刑台からの見た夕陽だった。

あれは夢だったのか？

てっきりそう信じ込んでしまいそうになる。

しかし、自分の首にはクッキリとロープの痕が残っている。

その痛々しい痕は昨日の苦痛を蘇らせた。

あの窒息感、首に掛かる痛みはしっかりと思い出せる……………

これが夢か幻か。

そんな疑問はすぐにどうでも良くなった。

頭が回るにつれて身体は今、必要な物を求めてきたのだ。

とても喉が渴いて仕方が無かった。お腹も減っていた。

それもそのはずだろう。

死刑執行までの3日間ほとんど何も食べさせてもらえずに、わずかな水のみで過ごしたのだから。

欲望に駆られ、彼女は部屋を出ることにした。

部屋の扉は施錠されてなく、手で押すと、すんなりと扉は開いた。

扉の外からは部屋とは違う冷たい空気が流れ込んでくる。

当然ながら部屋を出た先は廊下になっていた。

廊下は無機質な石作りで、シンプルというよりは寂しい。

裸足でその石の廊下を歩くたびにヒタヒタと音が木霊する。

その反響音はまるで誰かが自分の跡をつけてくるように思えて、不気味だった。

それに拍車をかけるように廊下には得体も知れない生物の置物があったり、

悪魔の彫刻が施された柱が何本も立っていた。

飢えが無ければ、一目散に逃げ出しているところだろう。

しかし、恐怖もこの飢えと渴きには敵わなかった。

それほど身体は衰弱していた。

一步、歩くごとに身体が左右にぶれる。

倒れそうになりながらも、一步、また一步と壁伝いに廊下を歩く。

その廊下は急に終わり、少女の目には光が差し込んできた。

思わず目を瞑り、しばらくその場に立ち尽くす――――

しばらくして、目は視力を取り戻した。

かなり眩しい光に思えたが、それは月の光であった。

廊下の終点はバルコニーになっており、

中に進入してくる風によってガラスの扉がガタガタと揺れている。

バルコニーから外を眺めると、目の前には森林が飛び込んできた。

月の光は木々を照らし、幻想的な空間を作り出す。

人の手では決して作れないものがそこにはある。

ここまで綺麗な自然を少女は生涯見たことがなかった。

自称”魔女”と青玉の魔王 ―後編―

ふと、横を見ると、そこには少女以外のもう一人の”人間”がいた。しかし、少女はその人が”人間”でないことにすぐに気が付く。

その男はとても美しかった――――

緑銀に輝く長い髪。

雪のように白い肌。

そして凍りつくような蒼い眼をしていた。

人間には無い美しさを見せ付けられ、少女は恐怖は愚か、飢えも乾きさえも忘れ、

その場に立ち尽くしてしまった。

その時間はどのぐらいか分からない。

数秒、あるいは数分だったのかもしれない。

その間、少女は決して彼から目が離せなかったのだ――――

静の均衡を破ったのは彼のほうだった。

森に向けていた視線を逸らし、少女のほうを見る。

「小娘。名はなんと言う？」

決して頭の良いとは言えない少女にも答えられる、簡単な質問だった。

「あう……………」

それにも関わらず、彼女はすぐに答えることはできない。
それはそうだ。あの吸い込まれそうな瞳を見てしまったら、
どんな人でも同じような状況になるだろう。
恐怖を覚え、逃げ出す人もいるかもしれない。

「着いて来い」

彼はそう静かに言うと、彼は急にバルコニーを去り、歩き出した。

本当について行っても良いのだろうか……………
しかし、いくら考えても辿りつく結論は一つだった。
ここにいても仕方がないのだから。

前を進む男の背中を追い、少女は歩きだした。

男は少女の前に行く。不思議なほど静かで優雅な歩き方だ。

一回も振り返っていないのに少女との距離は常に一定であった。
彼女がふらつき、速度が下がれば彼もゆっくりになり、
逆に追いつこうとすれば彼も早くなる。

だが、そんなことができて何もおかしくは無い。
彼は人間ではないのだから。

彼は急に止まる。その先には紅く塗りたてられた大きな扉があった。それを待ち焦がれたように、音も無く扉は開く。彼がその部屋に入るのを見て、少女も跡を追った。

その部屋は廊下とはまったくの別空間であった。白い長テーブル、天井には巨大なシャンデリア、そして壁には数々の絵画。

言うまでもないようだが、ここは食堂らしい。部屋の中は暖炉によって丁度良い温度に保たれており、食欲を誘うとてもいい香りがした。

「座れ」

彼は少女にある席を指差しそう言った。指示通りにそこに少女は行く。

そのテーブルにはすでに食事の用意がされている様だ。近づいてみると、長机の上にはバスケットに入ったパンと熱気を立てているスープが置いてあった。

少女は躊躇せず^{ちゅうちゅう}に食事の前へと座る。

その時から口の中は唾液でいっぱいになっていた。目の前にご馳走があるのだ。

こんな状況でなければ、すぐにでもパンを口に頬張り食欲を満たしていただろう。

だが、今の状態ではそれもできそうにない。

少女は周りの様子を窺い、まだ席にも座っていない男を見た。

男はすぐに席に座る。そこは少女から見て左斜め、食堂を一望できる特等席である。

ここに座る事が出来るのだ。彼はこの城の主なのだろう。

少女のことを見かねたのか、

「食べないのか？」

男はそう言ってくる。感情の入っていない様な静かな声でだ。

それをスイッチにしたように少女はパンを頬張った。

噛むことを忘れたように、パンを食べ続けた。

なぜか分からないが涙が出てくる――――

一旦出た涙はまるで決壊したダムのように止まらない。

食事を口に運びながらも彼女は泣き続けたのだ。

嗚咽か啜る音か分からないほど彼女は泣き、そして食べた。

食事を終えたとき、不思議とその涙は止まっていた。

顔を上げ、正面にいる彼のことを見る。

いや正確に言えば彼の胸辺りまでだ。

顔を見る勇氣などない。

ましてや泣いて自分は酷い顔をしているはずだ。それを隠すように、
俯く。
うつむ

「落ち着いたか？」

彼は静かに言葉をかける。

「はい……」

自分にしか聞こえないような声で少女はつぶやく。

しかしその声は彼にも聞こえたらしい。

彼は質問を続ける。

「名前は？」

その質問に少女は驚く。

自分の名前など聞かれたのはいつ振りだろうか？

過去に名前と呼ばれたことなど、ほとんど無かったんだと思う。

どうせ名前を聞いても、番号や物として呼ばれるだけの生活をして
いたのだから。

「エレンです……………」

これはエレンが親からもらった正真正銘の名前であった。
とは言っても彼女はこの名前が好きではなかった。

「そうか、エレンか」

その名を復唱する彼。

名前を呼んでもらい、エレンの警戒心はいささか解けたようだ。

そうなれば今の状況が気になってくるものだ。

だから彼女は聞くことにしたのだ。目の前の彼に。

「あの……………あなたは？ 人間じゃないですよね？」

いきなりストレートすぎる失礼な聞き方だと思った。

しかし彼は眉ひとつ動かさず、こう答える。

「いかにも、私はこの周辺を統治する”魔王”だ」

”魔王”、その言葉を聞いてエレンは驚かなかった。

この世の中には魔族という種族がいて、

それを統一する者が魔王と呼ばれていることを知っていたからだ。

でも魔王というのはもつと恐ろしい者かと思っていた。

幼いころ絵本で呼んだ魔王は強靱な肉体に醜惡な顔をして、

人々に最惡をもたらす、そんな感じだった。

しかし、この魔王の容姿は今まで見てきたどんな人間よりも美しいのだ。

「エレン。何故、人間のそなたが処刑されそうになったのだ？」

魔王はそう語りかけてくる。

何故………その理由は分からなかった。

「罪を犯したのか？」

エレンは首を振る。

処刑台での司法官の読み上げた罪状が頭を過ぎる。

だがそれがどうして罪なのか分からなかった。

だからエレンは一言、こう言った。

「私は魔女だから」

魔女と呼ばれる者 ―前編―

エレンは貧しい農村に生まれた子供だった。

両親は小さな雑穀畑を所有しているだけの農夫で、親子3人で暮らしていた。

農業は辛い。

朝から晩まで土に塗れて働き、

数か月の苦労は大雨や日照りで一瞬のうちに台無しにされる。

豊作なら豊作でその四分の三は税金として徴収されてしまう。

僅かな収入はすべて食費で消え、エレンたちは年中同じ服を着て、まるで奴隷のように働いていた。

しかし、そんな生活に彼女は一言も文句は言わなかった。

むしろ幸せであったのだ。

大好きな父と母と片時も離れることなく生活できるのであるのだから。

だがその生活も長くは続かなかった。

エレンが8歳の誕生日を迎えた日。黒い服を着た男が家に来た。

両親はその人にエレンを連れて行かせた。

母は言う

「エレン。この人たちに着いて行けば、たくさんいいものが食べられるよ」

エレンは想う。

いいもの？ そんなものいらぬ。わたし、おかあさんの手料理が大好きなのに……………

父は言う

「エレン。この人たちの言う事を良く聞くんだ。いつか迎えに行くからね」

おとうさん……………なぜ、わたしが嫌がっていることに気が付かない振りをするの？

それに”いつか”って、いつなの？

エレンが不安な顔をしようが泣こうが、彼らは娘を見ようとはしない。

男たちは泣きじゃくるエレンを馬車の荷台へと閉じ込めた。背後からした金属音は、鍵が閉まる音だろう。

子供のエレンでも自分の置かれた状況が分かった。自分は「売られた」のだ。

実の娘を売る。農家の収入では3人を賄いきれなくなった両親の決断であった。

父親と呼ばれた男に手渡されたのは銀貨5枚。

贅沢な食事をしなければ1月分ぐらいの食費に相当するお金だ。

それがエレンの価値だった。

エレンは男に連れられながら何度も両親のほうを振り向いた———だが彼らはエレンを最後まで見送ってはくれなかった。

馬車が家から去るのを確認すると、ボタンと粗末な戸を閉め家へと

消えていったのだ。

娘が窓からずっと見ていた事に気が付かず。

そこでエレンは気がついてしまった。自分が両親に愛されなかった
ということ。

見捨てられてしまったということを――――

魔女と呼ばれる者 ― 後編 ―

馬車に乗り、知らない大きな街に着いた。
幸か不幸か、エレンの買い手はすぐに見つかった。

知らない黒い男から、知らない太った男にエレンは渡される。
そこでエレンは初めて奴隷となるのであった。

太った男は街の工場を経営していた。
そこですぐさまエレンは働かされたのだ。

しかし、小さい少女に工場の労働環境は過酷過ぎた。

冬にも関わらず布の薄い一枚服を纏うことしか許されず、
一日中立たされ、綿を紡がされるのだ。

エレンは仕事を覚えるまで幾度となく鞭で叩かれた。
もちろん鞭で叩かれるのは嫌なのですぐにでも仕事を覚えた。

半日以上仕事をさせられ、部屋に戻ることを許される。
そこは粗末なベットがあるだけの汚い、カビ臭い。部屋のみ。

そこに男女関係なくエレンと同じ年頃の子どもたちが押し込められたのだ。

会話を交わす気力もなく、粗末な食事をし、夜は泥のように眠った。

その生活の最中、耐えられずに仕事中に倒れてしまう子を見た。
工場長はそれを見つけると鞭で何度も叩いた。
だがその子は起き上がる気力もないほど衰弱していたのだ。

次の日からその子の姿は見えなくなった。

その時のエレンでも理解できた。

あの子にはもう会えないのだと……………

そう思うとなんとも言えない悲しい気分になった。

何度その子を思い出して、夜に息を殺しながら泣いたことか。

だが、そんな生活でも彼女は楽しみを知っていた。

夜に耳を澄ませていると不意に聞こえる、街角の音楽。

おそらく近くにあったパブから聞こえるものなのだろう。

それを聞き、その音楽に合わせ彼女は歌を口ずさむのだ。

その時から彼女は歌を歌うようになった。

時にはトイレに行っている時でさえも口ずさむ。

エレンの唄はとても綺麗だった。

外で歌う時には鳥さえもその歌に寄ってくる。

その噂を聞いてか、彼女を買いたいという男がやって来たのだ。

それは劇団の団長であった。工場長はそれに応じてエレンを売った。

工場長にとっては唄の上手いだけの子供など、金貨5枚の価値すらなかったのだから。

エレンは劇団に入ると、すぐにステージに立たされて、唄を歌った。その名も無き唄はすぐに人々の心を捉え、一躍エレンは一座のスターとなるのだった。

考えれば、この時間ほどエレンが楽しかったことは無かったのかもしれない。

給料など、出ないが劇団での生活は奴隷生活と比べると何倍もマシであった。

寒さに凍えることもなく、食事も、もらえるのだから。

何と言っても、自分の好きな歌を歌えるのがとても楽しいのだった。

しかし、エレンの人気に嫉妬した劇団員の恨みは最悪な形となり、エレンを襲うのであった。

公演をしたとある大きな街で奇病が流行ったのだ。

それは偶然にも劇団が街へと来た頃と重なった。

その奇病に団長もかかり倒れたのだ。

その時人々は噂をした。

この街にあの輩が来てから病気が流行し出したのだと。

あの中には魔女がいると。

その魔女こそ、エレンのことだった。

彼女の歌は聞いたものを恍惚にするほど上手かったのだから。

ある時、エレンは部屋から呼び出され、冷たい牢獄へと連れられた。なんでも団員の一人がエレンが魔女だと公表したらしい。

それを聞いた王はエレンに処刑を命じたのだ。

もちろんエレンが本物の魔女のほうではない。

しかし、疑いをかけられた劇団はエレンを簡単に見捨ててしまったのだ。

街の広場で、エレンは魔女裁判にかけられた。

もちろん彼女は魔女であるとは言わない。

しかし、司法官はあの手この手を使い、エレンの自白を強要したのだ。

ある時には熱い鉄の塊を彼女に押し付け、ある時には息が果てるほど水に沈めた――――

辛かった。苦しかった。悲しかった。

そしてエレンはついに自ら魔女を名乗ったのであった。

ただ”解放されたい”という一心の言葉は彼女に”魔女”という烙印を与えた。

その瞬間市民の目は恐ろしいものに変わった。

自分たちが苦しんでいるのはこの魔女のせいだと。

どんな些細な不幸でさえも、エレンのせいにされる。

広場に吊るされた彼女に何人もの人が唾を吐いたり、暴言を言った。酷い時には四肢に石をぶつけられた。

少女の心は壊れる寸での所まで来ていた。

この状態が続かないならば……………この苦しみが続かないのならば

……………

死さえも受け入れようとしていた。

「魔女め。死んじゃえ！」

自分よりも小さい子供が自分へと侮蔑の言葉を投げ掛けて行く。
それを見て、大人たちも同調するように汚い笑みを浮かべる。

どうでも良い———

もうどうでも良いのだ———

エレンは心の中で思った。

あと3日経てば、楽になれるのだと……………

二人の少女 ―前編―

話が終わった所で、エレンは今まで我慢していた分の酸素を一気に肺へと吸い込む。

そのせいか、頭はガンガンするし、目頭には涙が浮かんでいた。

目の前の魔王は一言も発することなくエレンの話を聞いていた。彼はどんな言葉を聞いても眉ひとつ動かさなく、自分の話が伝わったのかすら確認できない。

「魔女か―――愚かな」

彼は静かにそんな台詞を吐いた。

そして、椅子を立ち上がると

「ついてこい」

と、一言残し、食堂を出てしまう。

不意を突かれたエレンだったが、見失ってはいけけないので慌てて彼の後を追うのであった。

廊下を二人で歩く。食事をしたせいか、疲労も取れ、足取りも軽い。

魔王は自分の前を歩き、階段を下りて行く。

階段は蝋燭ろうそくの光のみで照らされており、

足を踏み外さないようにエレンは一步一步、確実に踏みしめて歩く。

しばらくすると魔王は扉の前で止まる。

そこは先ほどの食堂より小さな扉があり、彼はそこへと入っていつ

た。

扉をくぐると、そこは小さな部屋があった。その作りから、そこがお風呂の脱衣所であることは容易に理解できた。

服を脱ぐためだけの部屋。その部屋の造りでさえ、エレンが住んできたどの部屋よりも豪華である。

「ダルク」

魔王は何もない空間にそう呼びかける。

それに応えるように、何もない闇の中から少女が現れた。

白いメイド服風の衣装を着た、その子はエレンと大差ないほど幼く見える。

綺麗な黒髪、それと同じ色の瞳が特徴的だ。

酷く冷淡な印象を受けるのは、彼女が微動だにせずそこに立っているのが原因だろう。

「そなたのために作った眷属^{けんぞく}だ。何でも申しつけるがいい」

そう言うとき魔王は脱衣所を出て行くのであった。

ダルクと呼ばれる少女と脱衣所に取り残されるエレン。

この少女からは先ほどの魔王のような絶対的な存在感はない。

だが作り出されたという言動を見ただけでも、彼女が人間ではないことが分かる。

遠目から、彼女のことを観察するが、

そんな様子にも動じずに彼女はエレンの前に立ち尽くしている。表情すら変えずに。

「あの……………」

空気の重さを感じ、エレンはダルクに話しかけてみた。

「何でしょうかお嬢様？」

ダルクは静かに答える。

思った以上に可愛らしい声なのだが、感情が全くもって籠っていない。

その乾いた声を聞き、エレンは少し怯えてしまう。

だが、このままここに居る訳にはいけないのでエレンは会話を続ける。

「あの……………ここで私は何をすればいいのですか？」

恐る恐る聞くと、彼女は先ほどと同じトーンで言葉をかけてくる。

「ここは脱衣所でございます。お召し物をお脱ぎになってください」

彼女に逆らう理由もないので、エレンは静かに服を脱ぎ始めた。

服と言っても質素な布でしかないのだが。

ここ何日も風呂に入っていないせいか布からは汗や排出物の匂いがした。

服を脱ぎ終えたところで、ダルクは浴室の扉を開けた。
途端に温かな湯気に包まれる。

「どうぞ」

彼女に誘われるがまま、エレンは浴室へと入った。

二人の少女 ―後編―

「わぁ……………すごい……………」

一目で声が漏れた。

ため息が出るほど、浴室の豪華さは異常であった。

数々の彫刻が施され、天井は一面ステンドグラスで覆われており、七色に姿を変えた月光が浴室全体を明るく照らしていた。

湯は鏡色に染まり、良い匂いがする。お湯に浮かべられた紅の花弁の香りだろう。

「こちらへどうぞ」

ダルクは次に彼女をシャワーの前へと案内する。

そこにある木のイスにエレンを座らせるとシャワーを持ち、彼女の身体にかけていく。

そのお湯の温かさはエレンが初めて感じるものであった。

彼女はこの生涯でお湯に浸かったことなど一度もなかったからだ。今までの沐浴といえば川などで冷たい水で体を流すものであったのだから。

初めてのお湯はとても優しく、エレンの身体の穢れを流し取るかのように清いものであった。

ダルクはスポンジに石鹸を擦りつけ、エレンの背中を洗う。

その手つきは優しく、背中から伝わってくる、

くすぐったい様な感覚はエレンをとても幸せな気分にした。

「もうよろしいでしょうか」

ダルクはエレンにそう尋ねる。

もう少し洗っていても良かったところだが、身体はもうすでに綺麗になっていた。

「もう大丈夫です。ありがとうございます」

そうエレンは答える。ダルクはその台詞を聞くと、立ち上がり浴室の扉を開けた。

「ではごゆっくりお身体を温めください。何かあればお呼びを」

そう言い残し、彼女は浴室を去る。

あれだけ洗ってもらったにも関わらず、彼女の服は全く濡れていなかった。

不思議に思いながらもエレンは浴槽へと足を入れる。

シャワーの温度と同様に、お湯もいい湯加減だ。

「夢みたい……………」

浴槽に浸かりながら、エレンはそう漏らした。

手でお湯を掬うと、掌に紅い花卉だけが残し、お湯は逃げて行ってしまう。

「薔薇かな？」

手の中の一枚を指で摘み、まじまじと見る。

その花は紅い。まるで血のようだ。そう思った。

（このお湯に浮かんでいる花は私の血なんだ……………）

エレンは小さい頃からの旅路を思い出す。

苦行は彼女に血を見せることなどしょっちゅうであったのだ。だからだろう。紅い物が血を連想させてしまうのは。

ふと、自分の腕を見た。

左肩の辺りには魔女の焼印がされていた筈だった。

しかし、いくら首を振じつても、忌まわしき印は見えてこない。

それどころか自分の身体には以前に付けた傷痕すらない。

鞭で叩かれた痕や、ナイフで切られた痕はどこに行ったのだろうか。どんなに考えても、その答えは出て来ない。

しばらく、思いに耽ることで長湯になったエレンはさすがに上がることを思い出した。

欲を言えば、もう少し入っていたかったが、すでに身体は逆上のぼせる寸前であったし、

第一、メイドの彼女を待たせている可能性もある。

未練を振り払うようにエレンはお湯から身体をあげた。

脱衣所に出ると、大きなタオルと着替えの服が置いてあった。

彼女が用意をしてくれたのだろう。

タオルに身を包む。

その綿布の柔らかさに何度顔を埋めたか分からない。

着替えは下着と簡単なローブであった。どちらも自分のサイズピッタリだ。

簡単に体を拭き、衣服を身に纏う。

これまで着てきた粗末な布とは比べ物にならないほどその下着は着心地がよかった。

これが絹というもののなのだろうか。

ローブを着たところで、丁度良いタイミングでダルクは廊下から扉を開けて姿を現した。

「お召し物の具合はどうでしょうか」

「はい。とても気持ちいいです」

率直な感想を述べると、彼女は一礼し、廊下の扉を開ける。

「では、お部屋へと案内します」

そう言った。

今度はどこへと連れて行かれるのだろうか。エレンは期待と不安を胸に、メイドの少女の後を追った。

ダルクの足取りは静かで、後ろ姿にも気品が感じられる。街のメインストリートで彼女が歩いていたら男性は愚か、女性さえも振り向いてしまうのではないだろうか。

そう思いをはらせているうちに、ダルクは2階の廊下へと階段を上がる。

この廊下には見覚えがある。最初にエレンがいた部屋の廊下だ。

その一室の扉をダルクは開ける。そこは先ほどまでエレンが寝ていた部屋だった。

違うことといえば、乱雑に起きたはずのベットがしっかりとメイキングされているところだろう。

自分がいないうちに直されたのだろうか。

「では、私は失礼します。御用の時はお呼びください」

頭を下げ、ダルクは出て行く。

扉が完全に閉まり、部屋に静寂が訪れた。

その静かさのせいかエレンの身体は急に重くなった。

満腹から来る眠気もあり、彼女はベットへと横になるのだ。

清潔なシーツを引かれたベットの寝心地は最高のものであった。

今日の出来事を頭に浮かべる。

今日はたくさんのことがあった。

自分の処刑。魔王との出会い。

ひとつとして、現実であると確信できない物事ばかり。

今ここ——寒くなく、居心地の良いベッドに寝ている事が夢であるように思えて仕方が無いのだ。

だが今までこれほどまで覚めて欲しくない夢は無かった。

この夢が覚めてしまえば、また苦しい毎日が始まってしまうかもしれないのだから。

今までは楽しい夢から覚める事を望まなかったというのに……………

その考えが頭の中を巡り巡って、彼女の意識はゆっくり闇の中へと

落ちていった。

小鳥のさえずる声がする。

まぶた越しに入ってくる光によりエレンは目を覚ました。

ベッドが良かったおかげか、昨夜はとても良い夢を見れた気がする。とは言っても内容はおぼろげにしか覚えていないのだが。

部屋にある入り口とは違う扉を開けた。

昨日は気が付かなかったが、この扉の向こうは洗面所になっていた。そこにはトイレ、バス、水道が付いている。

水道の蛇口を捻ると、透明な水が出てくる。手で触ってみると、思った以上に冷たい。

その水を手に取り、顔を洗う。

タオルで顔を拭くと正面に自分の顔が映った。

鏡などどのぐらいぶりに見るだろうか。

だがそこに映った自分の顔は以前に見た時よりも健康そうだった。昨日、しっかりと食事をし、お風呂に入り、ぐっすりと寝たおかげであろう。

いや、気のせいかもしれないのだが。

トイレを済ませ、部屋に戻るとメイド服の少女が窓を開けていた。

「おはようございます」

エレンの姿を確認すると、ダルクは頭を下げ、挨拶をする。相も変わらず、彼女は優雅だ。

「おはようございます」
と、エレンも挨拶をする。

ダルクは窓を開け終わると、エレンを化粧台の前へと座らせる。

「失礼します」

そう言い、ダルクは髪へと櫛をかけた。

彼女が黙々と髪を梳かすのを鏡越しに見つめるエレン。

彼女の手つきはとても手馴れているようだ。丁寧かつ優しい。

他人に髪を繕ってもらったのは、いつぶりだろうか………良く覚えていない。

だが、最期にもらった人物が母である事は覚えている。

しばらくするとボサボサだったエレンの髪もすっかり真っ直ぐになった。

いつもは途中で跳ねてしまう髪が今日は綺麗なのは、昨日お風呂で付けた泡の良く出るシャボンのお陰なのかもしれない。

次に姿見の前で着替えさせてもらう。

彼女がクローゼットから取り出したのは真紅のドレスであった。

こんなドレスを着ているのは貴族のお嬢様方だけだ。

そんな服を着せてもらっているのか、自分に似合うのか、などとエレン考えてる。

しかし、そんな彼女の考えなど微塵にも気にせずに、ダルクは黙々とドレスの着付けを行う。

彼女が最後のリボンを結び終え、鏡に映る自分の姿を見て、エレン

は驚いた。

そこには別人が映っているのだ。

いや、それは正真正銘自分自身なのだが、そうは思えなかった。

鏡の向こうのドレスを纏う少女は、まるでどこかの国のお姫様がいるようにさえ感じられたのだ。

エレンはダルクがいるのにも関わらず、

鏡の前で、手を上げてポーズを取ってみたり回ってみたりした。

鏡はそれに応えるようにエレンの姿を映し出す。

その様子を見て、鏡の中のお姫様が自分であると認識するのであった。

「朝食の準備が整っておりますので、食堂へご案内します」

そう言い、ダルクは小さな箱を取り出す。そこにはドレスの色と同じ紅いヒールが入っていた。

ヒールは劇団時代に良く履いていたので慣れていたつもりだった。しかし、今までは居ていた靴とは感覚が全く違う。

それはそうだろう。

今までエレンが履いてきた靴は、大人から譲り受けたものばかりで彼女の足にフィットする物は少なかったのだから。

しかし、今用意された靴は明らかにエレンの足のサイズを考慮して用意されたものだ。

履きやすいに決まっている。

自分用の靴まで用意してくれる心遣いにエレンは人知れず感謝をす

るのであった。

ダルクの後を追ひ部屋を出る。

廊下は朝日が入り込んで昨日のような不気味さを感じさせない。

むしろここは豪勢なお城で、

そのお城のお姫様が自分だと想像してしまい、エレンは嬉しくなるのであった。

ダルクの足はまっすぐに食堂へと向かっていく。

彼女に案内されなくても食堂の場所は分かる。廊下までとても良い匂いが届いているのだから。

これを辿れば、そこが厨房か食堂であろう。

食堂に着くと、そこにはもう先客がいた。

「おはよう」

と、魔王と呼ばれる男性はエレンに声をかける。

「おはようございます」

と、エレンも挨拶を交わし、頭を下げる。

エレンは迷わず昨日と同じ席に座る。

コップやナプキンなどが置いてあるのでここが指定席なのだろう。

魔王は食堂に入ってからエレンのほうをずっと見つめている。

威圧感を感じるような目線ではないのだが、エレンは下を向いてしまう。

気恥ずかしさというのだろうか——いつも着ない服を男性に見

られているのだ。
嫌でもそういうことを意識してしまう。

「ドレスを気に入ってもらえたかな」

魔王は急にそんな質問をしてきた。

「は、はい。とても……」

堂々と感謝の気持ちを伝えようとしたエレンだが、それ以上の言葉は喉から先へは出て来なかった。

「そうか」

答えを聞き、魔王は少しだけ微笑む。

微笑んだように見えたのは彼の口元が少し浮いたからだ。

だが、それは彼の笑顔なのだと、エレンは勝手に決め付ける。

そうでもない緊張で心臓が飛び出してきそうであったから。

ここですっと気になっていたことを口に出した。

「あのっ………ここは……どこなんでしょうか？　なぜ………」

私はここにいるんですか？」

それは彼女としては当然の質問であった。

死刑にされたと思ったら、違う場所に来ており、しかもこの待遇だ。先送りにしていた疑問もそろそろ解決せねばいけない。

「まずは食事にしよう」

魔王はそう答える。それを聞いたようにダルクが食事を運んでくる。勇気を振り絞ってした質問が食事によって後回しにされるのは少々残念だった。

突発的過ぎたのだと自分に言い聞かせ、エレンも食事に備え、見よう見まねでナプキンを肩から掛けた。

ダルクがワゴンからエレンの前に置いたのは、パンとポタージュス
ープ、

そして生野菜のサラダであった。

いつもなら手づかみでマナーも気にせずに食べるところだが、ドレスを着ている手前そんなことはしたくない。

エレンは横にあるスプーンとフォークを使い不恰好ながら食事を進める。

昨日は空腹のせいか、料理の味など分からなかった。

しかし改めて食べてみると、テーブルに並んだどれもが最高に美味しいのだ。

パンはふっくらしていて噛み締めるごとに甘みが出てくる。これは焼き立てなのだろう。

黄金色のスープは甘くて口の中がとろける様だ。

サラダにおいてはとても優雅だ。以前、町の料理屋で食べたものは、ただの野菜の群れという感じであったが目の前にあるものを例えるならば、行進^{マーチ}。

色、種類、味に統一性があるのだ。

スープにしろサラダにしろ、見た目、味ともに上品だ。

貴族はいつもこのような食事をしているのだろうか、と少し嫉妬に駆られてしまう。

食事を終えるころには身も心も満足感でいっぱいになっていた。ダルクは空になった食器を下げてくれる。

食器を運ぶカチャカチャという音が遠くなるとまた食堂に静寂が訪れた。

先ほどの質問の続きをしたいのだが、こちらから話しかけていいものなのか、とエレンは悩む。

それが顔に出たのか、魔王は良いタイミングで立ち上がる。

「着いて来い」

そう言い残し、彼は食堂を後にした。

エレンは魔王と共にバルコニーへと来ていた。

昨日は夜だったせいもあり、目の前にある森林しか目に入らなかった。

しかし、今日の天気は快晴であり、遥か遠くにある山々や湖がはっきりと見えた。

昼と夜でこんなに風景が変わる物なのか——エレンはとても感心する。

「この景色を見てどう思う？」

エレンの横にいる魔王は静かに言う。

「綺麗です……………」

これはエレンの本心の言葉であった。
まずこの景色を見て美しいと思わない人間はいないはずだ。

「私は美しいものが好きだ」

魔王は続ける。

「あの時、そなたの歌が耳に入ってきた。それはとても美しかった」

あの時というのはエレンが処刑台に上った時だろう。

「だから私を助けてくれたんですか……………？」

死を覚悟した時の温もりはこの人のものであったのだ。

エレンは感動を覚える。

初めて人に助けてもらったのだから。

それが人間じゃないとしてもとても嬉しかった。

涙が出そうになる。

「歌ってくれないか」

魔王は静かにそう言う。

こんなことを言われるのも初めてだ。

エレンは誰かの為に歌うことはなかったのだから。

今までの唄は自分のため、そして仕事のためにしか使わなかったか

ら。

魔王の言葉だけで胸の中に幸せが込み上げてきた。

彼女は歌った。名も無き唄を————

自分で歌にこれほどの感情を籠めたことはない。

エレンの目には自然と涙が浮かんだ。

悲しくないのに涙が出ることは彼女にとっては初めてなのだ。

胸がいっぱいになって、苦しくなって………それでも彼女は歌い続けた。

歌が終わったときにはエレンは肩で息をしていた。

一曲の歌でこれほど疲れたことはあるだろうか。

魔王の顔を見る。表情は変わっていないものの、その雰囲気は明らかに変わっていた。

いやその変化はエレンの心境の変化から来るものなのかもしれない。エレンの目から見て、彼はとても愛しい存在になっていたのだから。

「美しい歌だな」

そう言い、魔王は尊い目で湖の方を見る。

湖面は冬の穏やかな風を受け静かに波を立てる。

聞こえるはずのない波紋の音が心の中に響いた気がした。

その唄、黄昏時の庭にて

エレンはその日の午後を森で過ごしていた。

魔王はエレンの行動を特に制限しなかったのだ。

だから午前中は城内をくまなく探索した。

どの部屋も今まで見たことのない奇妙な作りで、とても面白かった。だが半日を使っても、すべての部屋を回りきれなく、午後はこうして森へと出て休んでいるのだ。

城の周りは森が拓けており、雪ひとつない。昼過ぎの陽光は木々を緑に染めていた。

ほかの木は枯れて、裸の幹を露呈しているというのに、ここの木だけは葉を生い茂らせているのだ。

常識に反した木を不思議に思った。しかし、疑問は生まれなかった。ここは魔王の庭なのだ。何が起こっていても不思議ではないだろう。そこの切り株に腰を下ろし、エレンは唄を歌った。

エレンの唄は相も変わらず綺麗で、遙か遠くを飛ぶはずの冬鳥でさえ、その唄声を聞きに降りてくるほどであった。

上空が赤く染まってくる。その頃、エレンの目の前にメイド姿の少女が現れた。

「お食事の用意ができました」

ダルクはそう囁く。夕焼けに染まった彼女の顔はどこか寂しげであった。

「ありがとう。でももう一曲、歌っていいですか？」
「どうぞ」

ダルクはそう言い、少し離れた所に立った。
エレンはいつも通りに、唄を歌う。

本当は彼女に言われた時にすぐにでも食事に行くつもりであった。
お腹はペコペコだったのだから。

だがダルクの寂しそうな顔を見たとき、彼女はその少女を笑顔にさせた
と思ったのだ。

息を吸い込み、一気に発声する。柔らかな声と優しい詩が辺りの空
間を満たす。

ダルクは夕日に染められた美しい歌姫を唄の間ずっと見つめていた。

唄が終わり、辺りを闇夜と沈黙が覆う。

そこに響くのは微かな風の音と虫の声。

「どうだったかな？」

エレンは、はにかみながら彼女へと疑問を投げかけた。

「美しい歌ですね」

ダルクはそう言う。その声は少しいつもと違う気がした。

「ダルクさんは唄を歌わないんですか？」

興味本位に聞くエレン。

「魔族は唄を歌えないんです」

ダルクはそうとだけ答えた。それは初耳だった。

エレンの感覚では唄を歌えないことはとても不幸だと感じるのだ。

「ここは冷えます。中へどうぞ」

それ以上の会話は続かず、エレンは城の中へと入っていった。

魔族という存在

食堂に入った瞬間に肉のいい匂いがする。

エレンの口の中はその匂いを嗅いただけで唾液に満たされた。

期待したとおり、その日の夕食はとても豪華なものだった。

今日のメインディッシュはシチューらしい。

何の動物のかは知らないが、とても柔らかいお肉が入っており、その食感を口で楽しみながらエレンは食事を終えた。

夢中になるものが無くなると、この空間がとても静かなことに気が付く。

窓から見えるのは暗闇と庭へと降り注ぐ雪のみ。

幻想的な眺めだが、この壁を越えてしまえば一晩で人を凍え死にさせるほどの死の世界が待っているのだ。

そんな世界の真ん中で、こうして温かい部屋くうかんに居る自分自身を不思議に思ってしまう。

そして、この広い食堂にはエレンと魔王しかない。その不可解さが静寂を増大しているのだ。

魔王は食事の前も後も黙ってエレンの方を見つめていた。

彼はエレンを観察しているようにも見えた。

穴が開くほどの視線を送られたら、普通の人は嫌になるだろう。

しかし、エレンにとってその視線は嫌悪を催すものではなかった。

もしかしたら自分は注目されても動じない人種なのかもしれない、そう思い、内心、苦笑した。

確かに思い当たる節はいくつもある。

例えば劇団でステージに上がっていた頃の話だ。

唄を歌っている時の客からの視線は心地よいものであった気がする。

だが、さすがに会話をしなくてはならないという焦燥感に駆られる。静かな空間が嫌な訳ではない。

しかし、エレンは朝から思っていたのだ。誰かと話したいと。

食事を除いてエレンは一人であった。

魔王は食堂から出てすぐに行方不明になってしまふし、たまに廊下で見かけるダルクは雑用に忙しそうであった。

彼らとの会話は両手で数えられる程度だろう。

一日にここまで喋らなかつたのは牢獄に閉じ込められていた時、以来だ。

こんなことが続いたらいつか言葉を忘れてしまふかもしれない。

自分の欲を満たすために言葉を探す。

ふとした拍子にある言葉が彼女の頭に思い浮かんだ。それはダルクが言った先ほどの言葉であった。

「あの……魔王さん」

「なんだ？」

「魔族は唄を歌えないって本当でしょうか？」

「例外はあるが基本的に魔族は唄を歌わない」

魔王は淡々と言葉を続ける。

「唄の美しさを理解できない魔族にとって、唄など歌えても無意味だからな」

彼はエレンにも考える時間を与えるようにゆっくりと話した。

「もっともセイレーンやマーメイドは唄を使い、他種を惑わすがな」

漠然とは魔族のことを知っていたが、こういうことを聞くと自分が

知っている知識はほんの些細なものなのだと痛感する。

「逆に聞こう。人間はなぜ唄を歌うのだ。それになぜ音楽を奏でるのだ」

「えっと………楽しいから、でしょうか」

自分なりの答えを言ってみるが、その答えが釈然としない事が分かる。

エレン自体は歌うことも音楽を聞く事も楽しいと思っているが、そうでない人などたくさんいる。

それなのになぜ、人間は音楽を奏でるのだろう。

逆に、魔族にとっての音楽の考えの方が合理的に感じる。

狩りや防衛に使えない物に興味を持たない。

それが生き残る為には必要なものなのだから。

「なるほど。音楽を聞いて、楽しむことができるとは人間は不思議だな」

エレンの抽象的な答えにも、どうやら魔王は納得したようである。人間の価値観を知り満足そうにする魔王に対し、エレンは自分の浅はかな考えを彼に植え付けてしまったのではないかと、軽く出してしまった自分の言葉を後悔するのであった。

「魔王さんは唄などは歌わないのでしょうか？」

ばつの悪さに嫌気が差し、空気を入れ替える為にエレンは新たな質問を彼にした。

「私は歌えん。そなたや鳥のように自在に声を出すことはできないのでな」

「そうですか……………」

透き通る氷の様な声を持つ彼が歌えばどれだけ美しいか。
そんな幻想を抱いていたエレンだ。答えを聞き少し肩を落とす結果となった。

「しかし、私は唄の美しさならば感じ取れる。エレン。そなたの唄は美しい」

「あ、ありがとうございます」

見つめられ、そんな言葉を貰ったのだ。エレンは顔から火が出そうになる。

それを隠すために、エレンは大げさに顔を逸らす。

「どうした」と、彼はエレンの顔を追ってくる。どうやら、なぜエレンが顔を見せたくないのか分からなかったらしい。慌てて、「なんでもない」とエレンは惚けた振りをする。

エレンの様子を気にかけてか、彼はそれ以上の質問を投げ掛けて来なかった。

話題は、人間の美的感覚についての事に戻る。

「人間は弱いくせに、美術においては素晴らしい」

彼は食堂の一角を見る。そこには一枚の大きな絵が飾ってあった。こんなに大きな絵が飾ってあるのに二日間も気が付かなかった自分の鈍感さに愕然とするエレン。

絵を見ていると、そんなことどうでも良くなった。それほど、この絵は壮大なのだ。

タイトルを付けるならば『神の降臨』と、だろうか。月並みだが。絵の中央には神と思われる人物が大きく描かれており、天から洩れた光は彼を優雅かつ力強く照らし出している。

地上の人々は手を合わせ、降臨された神に祈りを捧げている。その表情からも彼らの歓喜が読み取れる。

絵のことは詳しくないが、絵の素晴らしさは、ひと目で感じ取れた。エレンだけではない。子供に見せても、老人に見せても同じ感想を持つだろう。

「お前も分かるだろう。この絵の美しさを」

「はい……………」

「だが、普通の魔族にとってはこの絵は一枚の分厚い紙、同然なものだよ」

表情こそ変わらないが、魔王の声は寂しげであった。

森の胎動

エレンはベッドに入り、夕食後のことを思い出していた。

魔王の話を聞いていると、魔族はかわいそうにも思えてくる。

美しさ、感動などを理解することができずに、殺戮と混沌の中で生きていくのだから。

部屋の窓がガタガタと音を立てて揺れている。

夕食時には何とも無かったのに、ここ数時間で風が強まったようだ。その音はまるで闇に住まう凶獣の咆哮のように聞こえる。

まさか、魔王の城へと乗り込んでくる命知らずな魔族は居ない、と考えたいところだが、

ここは魔族の土地。人間のエレンは何が起こるかなど予想できないでいた。

そんなことを思っているうちに寝付けなくなってしまっていた。

部屋の隅にある柱時計を見れば、もうその針は零を超え、静かに回っている。

こんなに寝付けないのは、久しぶりの体験であった。

奴隷のときも、旅芸人をしていたときも夜、ベッドに入ったらすぐ眠れた。

というよりは寝なければ次の日にとてもしゃないが、身体が持たなかった。

ふと昔のことを思い出してしまう。

夜眠れないでいると、母さんがよく子守唄を聞かせてくれたものだ。

その唄を思い出そうかと思ったが、エレンは直前でやめる。

今まで幾度と無く家族のことを思い出すことがあった。

そのたびにエレンの心はいろいろな感情でいっぱいになってしまう

のだ。

懐かしみ、喜び、怒り、悲しみ……………

そのたびにエレンは泣いてしまった。

まるで心からあふれ出した感情が流れ出したかのように涙は止まらなくなってしまうのだ。

だがら今回も思い出したら泣いてしまうだろう。

エレンはベッドから起き上がり、廊下への扉を開けた。

目的とする場所はバルコニーだ。あそこからの景色を見れば少し気持ち落ち着くだろうから。

思いつきの勢いで部屋を出たエレンだったが、その事をすぐに後悔する。

部屋と比べ、廊下はとても寒かった。せめて靴だけでも履いてくれば良かったと思う。

しかし、このまま部屋に戻れば、温かいベッドの誘惑に勝てなくなりそうだったので、足裏から込みあがってくる感覚を黙殺することにした。

頼りない足音を友にエレンは廊下を歩く。

バルコニーには先客がいるようだ。その後姿から彼が魔王だとすぐに分かった。

指先一つ動かさない彼はまるで闇に溶け込んでいるように見える。しかし、銀の髪だけは闇に惑わされること無く光り輝いていた。

エレンは彼の邪魔にならないように静かにバルコニーの柵へと詰め寄った。

景色を共有すれば彼の考えも分かると思ったのだが、それは間違いだったようだ。

ここから見えるのは、深い森と闇だけ。今日は月光も雲に遮られている。

昨日と同じ場所なのに今日は少し不気味に見えた。

「こんな時間にどうした？」

魔王は静かに尋ねる。

「寝付けなくて」

エレンはそう答える。

「魔王さんはここで何をしているのですか？」

少し怖い様な気もしたが、エレンは尋ねてみる。

「ここからは森の様子がよく見える」

彼はそう言う。

エレンはその言葉を聞き、森の方を向くが、目の前にあるのは何の変哲もない、木の群衆だ。

「人間には見えないだろうが、私には感じれるのだ。木々のざわめき、獣の雄たけび………今日もゴブリンたちが森の奥で小競り合いをしている」

エレンは思った。この人と自分が見ている景色は違うものなのだろうと。

「今日の森を見て、どんな唄を歌う？」

「どんな……」

エレンはイメージを言葉で表そうとしたが、なかなかそれを表現はできない。

だから歌ったのだ。イメージをリズムに乗せて。

それはとても悲しく、暗く、そして美しい歌だった。

魔王はその唄に聞き入った。

「いい唄だ」

短い唄が終わると魔王は彼女の方を向き、そう言った。

表情からは読み取れないが、エレンはその言葉に温かさを感じるのだ。

「ここは冷える。そろそろ中に入れ」

「はい」

エレンは魔王の言葉に促され、部屋へと戻る事に決めた。

手足はかじかみ、感覚を無くしていたし、身体は急に疲れを感じ始めている。

こんな状態で、寝付けないなんてことはないだろう。

魔王の後ろをエレンは歩く。彼は自分より二回りも大柄なのだが、その足音は殆どない。

しかも、歩幅の違うエレンを置いて行かないように、その足取りはゆっくりとしている。

自分のペースで歩いているのではないというのに、とても自然かつ美しい足取りにエレンはつい見とれてしまう。

魔王はエレンの寝室まで来ると、その扉を開けてくれた。
その仕草は紳士的で無駄が無い。この人の動作すべてが優雅だ。

「おやすみ、魔王さん」

「おやすみ」

部屋の前で彼と挨拶をし、エレンは寝室へと入る。

廊下とは違い、ここは暖かった。

みるみる身体が温まっていくのが分かる。それに応じて身体の底から眠気が込み上げてきた。

ベッドに入ると自然と瞼が落ちてくる。

今夜はいい夢が見れる。何となくだが、そんな気がしていた。

愚王の憂い 狂気の街

ここはかつては街の広場であった。

そこには曜日に関係なく、人々が集まり、お祭りになれば多くの出店が並ぶ。

いわば街の活気と繁栄の象徴だった——数年前までは。

しかしその賑わいも過去のものになろうとしていた。

先代の王が倒れ、新しく王についたのはその息子。

しかも、王座を期待されていなかった筈の二男バルカス王であった。父と兄の不可解な死。そしてバルカスの就任。

人々の間で黒い噂が流れるのは当然のことであった。

しかし、民衆は思う。

どんな形で王になったにせよ、自分たちの生活が一層豊かになればいいと。

就任後の国は祝福ムードだ。誰もかもが新王へと期待を込め、杯を交わした。

だが、その淡い期待はすぐに絶望へと変わる。

バルカスが強いたのは過去に撤廃された筈の絶対王政であった。

彼は権力者の貴族や親族の地位を剥奪し、その財力と権力を自らの元へと引き寄せた。

その金で彼はみすばらしかった城を改築する。

床には上質な大理石を敷き詰め、すべての柱に宝玉を埋め込んだ。

自分だけの大浴場を作り、さらに使用人はすべて歳の若い女に替えた。

それだけの事をして、金が足りなくなれば、市民、農地から税を巻き上げるのだ。

税は今までの三倍以上に膨れ上がり市民は苦しむ。

当然、革命を起こす人物は出てくるのだが、強力な軍の前にことごとく失敗に終わる。

そして、人々から英雄扱いされた人物は見せしめのために殺されるのだ。

街の中心部の広場の処刑台で。

そんな忌まわしき場所に市民は寄ってくるはずはなく、国の衰退と共に広場の活気は消えていった。

そして、今、広場には誰もいない。

あるのは黒い土と灰と焼けた石のみだった。

この事件が起こったのはある日のことだった。

その日、魔女と呼ばれた少女が処刑されようとしていた。

まだ成人していない幼い顔には絶望の色が浮かんでいた。

死んだように絞首台に登る少女を不幸だと思う常人は、もうそこにはいない。

見物人は見世物を見る様に広場に群がり、人の死にゆく姿に狂喜するのだ。

今回は女。しかも子供と言うのだから、その数も多い。

狂っている――――

普通の人はそう思うだろう。

だが、これがこの国の真実なのだ。既に国の法も人々の心も壊れている。

国の狂気に苛まれた少女を救ったのは勇者でも聖者でもなく、ましてや人間でもなかった。

少女が、もがき苦しんでいる時、その男は突然現れた。

男は疾風の早さで少女の首にかかった縄を切り、少女を抱きかかえる。

その様子はまさに威風堂々。

男は駆け寄ってきた兵士を人の身体ほどある大剣でなぎ払う。

人間が一瞬で肉塊に変わる様子を見て、人々の反応はそれぞれだった。

一目散に逃げる人、叫びを上げる人、その場で呆然とする人………だがその人々の末路は同じであった。

魔王は遙か上空へと飛び上がると、赤い光の雨を降らせたのだ。

光は一瞬でその広場を包み込み、そこに居た人は焼けた鉄板の上に落ちた水が如く、蒸発してしまった。

おそらく三百もの命が瞬く間に奪われた。

焼け野原となった広場には未だに肉の焼けた悪臭が漂っており、立ち寄った人の吐き気を誘うのだ。

そんな事件を見てから人々は、少女が魔女だったのだと信じ始めていた。

そうでなければ、あの魔王が助けるはずがないのだから。

魔王の降臨により、市民の不安は高まっていた。ただでさえ税が重く住みにくい街なのだ。

その上、安全性が確保されなかったら、結果は言うまでも無い。ここ半月で移民の数は五千人を超えている。

人々の不安の声は王宮のほうにも広がる。

魔王軍が攻めてくる、などという噂が蔓延り、国民の不満は高まっていた。

そして遂に王もその重い腰をあげることになったのだ。

魔王の住んでいる所の目星はついていた。この国から程近い西の森。太古から魔が住む森と伝えられてきた場所だ。

国の兵数は約十万。徴兵をすれば約一万五千の増強もできる。近隣の国とは比べものにならないほどの軍勢力だ。

だが、相手は人間ではない。数で計算できるほど簡単なものではない。

不用意に攻め込んでも兵を無駄に浪費するのみで魔王を討伐するはおろか、返り討ちにもあいかねない。

「どうしたものか……」

中年の太った王は、その脂ぎった顔に頬杖をしながら王座で悩んでいた。

そもそも魔王が国へと攻め込んだことなど今までなかったのだ。未曾有の恐怖に王は身体を震わせる。

「なぜ、あの小娘一人のために……」

いくら考えても、血族というだけで、のうのうと王座を受け継ぎ、考えることをしなかった王に答えは出せなかった。

「失礼します」

「おお、待っておったぞ」

王の間には3人の男が入ってきた。

それぞれの男がこの国の大臣で無能な王に代わって国政を任されていたのだ。

「で、結論は出たのか」

「はい」

一人の男が跪き、王へと羊皮紙を渡す。

「これが西の森の見取り図です。このように森の奥に古城があります」

「そこが魔王の居城だというのだな」

「はい」

王は渡された羊皮紙をまじまじと見る。

森までの距離は約2日、そこから奥まで行くのに約3日という補足をされた。

「兵を全軍送り出すのか？」

「いえ、全軍で森に入れば、魔王に気が付かれる場合があります」
「なるほどな」

王は自分の安易な考えを引っ込めて、大臣たちの説明に耳を傾けることに専念する。

「少数の優秀な兵士を森に送り、居城に火をつけます」

「だが魔王はどうするのだ？」

「魔王をおびき出し、残った兵で足止めをするのです」

3人の男が立てた計画は2方から魔王を追い詰める作戦であった。

「で、肝心の魔王を誘い出す作戦ですが――」

大臣の一人が王へと耳打ちをする。

「なんと、そのような方法が………だが、そんなことをして大丈夫なのか？」

「心配はございません。それに陛下へと不満を募らせる貧民の処分もできて一石二鳥ではありませんか」

「確かに………」

王は魔王と同じぐらい民衆の暴動に怯えていた。その心理を読んだ大臣は悪魔の誘いをするのだ。

もうこの時既に、王には判断力はなく、大臣の言葉を鵜呑みにし首を縦に振る事しかできなくなっていた。

王の了承を得て、大臣は最大規模の国営工場を閉鎖する。

そこに代わりに造られたのは牢獄だった。

工場のフロアに鉄格子を取って付けた様な粗末な造りは牢としても奇妙である。

そしてこのようなおふれを出したのだ。

『魔女、魔王の化身と思わしきものを捕らえたものには金貨3枚を与える』と。

飢餓で植えていた貧困街の人間たちはこのおふれを聞き、そのチャンスをものにしようとしたのだ。

ある者は身内を魔女といい兵士の前に突き出し、あるものは因縁をつけて旅人を襲い、その身を引き渡した。

おふれが出て5日もしないうちに牢獄は半分埋まってしまった。

これは大臣が予想していたよりも遙かに速いペースである。

大臣はこの結果を見て身震いする。

そして思うのだ。「この国は破滅に向かって進んでいる」と。

そう差し向けたのは自分。だが、止まる気はない。止まらないのだ。ここで止まれば今まで築きあげてきた財や名誉はおろか、命まで危ういのだ。

王と同じぐらい大臣も病んでいた。

狂喜の進行は未だに止まっていない。

この国を止められるのは破滅のみなのだろうか……………

歌姫と鏡部屋

エレンが魔王の城に来てからすでにひと月が経っていた。

城の中で何一つ不自由せずに過ごしていたエレンだったが、最近はその生活に何か物足りなさを感じていた。

以前は一日の大半を仕事で過ごし、仕事の無い時間は食事をしているか寝ているかのどちらか。

そんな生活を送っていた。

だからなのかもしれない。退屈だと思うのは。

昔の自分が今の自分を見たら文句を言ってくるだろう。

しかし、物足りないという気持ちは本当だ。

出所の良く分からない気持ちにエレンは少しの苛立ちと不安を覚えていた。

歌うことに疲れると、彼女はよく妄想に耽^{ふけ}る。

大体は近い将来の事について考えを膨らますのだ。

このまま、ここにいつまでも居られるわけでは無いとは分かっている。

だからこゝそこれからの人生をどうするかを模索する。

自分ひとりで生きていけるのか……………

街に戻れば、また魔女として捕えられるのではないか……………

どうすれば自分は幸せな人生を送れるのか……………

などと考えても現実的な答えが出るはずもなく、いつも中途半端なところで妄想は途切れてしまう。

そしてすぐに忘却する。

そして次の日にはまた思い出したかのように妄想に浸る。
この自問自答の繰り返しが続いていた。

ある日の午前、エレンはいつものように城の中を探検していた。
この一カ月で城の中の殆どの部屋を調べ終えてしまった彼女だが、
こうして歩いていると見たことも無い部屋に遭遇する場合があるの
だ。

その部屋が自分の見落としなのか、何か条件によって表れるような
魔法の部屋なのかはよく分からない。
だがどちらにしても、部屋に入ること知的好奇心を満たし、暇を
潰せることには変わりはないのだ。

「あれ？ この扉は……………」

地下を歩くエレンはその扉の前に立ち止まる。

そこにあつたのは見たことも無い藍色の扉。他の扉と比べ、デザイ
ンも装飾も素っ気ない。

だからこそだろう。彼女の目に留まったのは。

この廊下は以前も来ているので、この部屋には入ったことがあるの
かもしれない。

ただ自分が忘れているだけで。

けれど、このようなみすばらしい扉に手を掛けた覚えはない。
これも記憶違いなだけだろうか？

———答えは簡単だ。入ってみればいい。

エレンはノブに手を掛け、右に回す。

ノブは何の抵抗も無く回った。

地下なので金属の擦れる音はいつもの数倍は大きく聞こえる。

だが、その音を誰が気にするというのだろうか。

エレンはそのまま無遠慮に手を前に出すと、音を立てることなく扉は開いていった。

部屋の中は仄かに明るい。地下で窓が無いはずなのに、明るいのだ。蠟燭でもついているのかと思ったエレン。

だが、部屋の中に身体をすべて入れるとその考えは覆された。光を放っていたのは、その部屋の壁、いや、壁に立てかけている鏡だ。

どちらを向いても少女の姿が映る。

何人にも分身した少女は心細そうな目でキョロキョロと周りの様子を窺っていた。

それがすべて自分自身の実像であることを確認した後、エレンは光の出所に目をやる。

鏡は一つの光を増幅しているらしい。

その源になっているのは、部屋の奥にあった小さな手鏡であった。

大きさは掌に乗るぐらいで、外見に高価な装飾などは見当たらない。ただの古い鏡のように見える。

エレンは警戒することも無く、その手鏡を覗いた。

そこに自分の顔は映らない、その変わりに鏡の表面が蠢いて、青白い光を放ち続けている。

まるで風に吹かれる水面のように。

「綺麗……………」

吸い込まれそうな鏡面を理由も無く見つめてしまうエレン。

指で鏡の表面を触ってみるが、伝わってくるのは無機質な冷たい温度だけ。

中で蠢いているモノに触っている感触は微塵も無い。
それが不思議でたまらない。

いきなり背中に悪寒が走った。瞬間に振り返るがそこには影も形もない。

自分の像だけが心細げな顔で映っているだけ。

気のせい———なのか？

向き返り、手の中の鏡を再び見る。

「えっ———」

鏡の中の青が強くなった。そう感じた。

そして、鏡面が盛り上がり———エレンに向かって来たのだ。

「きゃっ！」

驚いたエレンは虫を払うかの如く、鏡を地面へと投げつけてしまう。

「あっ……………！」

彼女が自分のしたことに気が付いたのは、その音が部屋の中に響いた後だった。

鏡は地面に叩きつけられ、その表面が完全に割れてしまった。

先ほどまで放たれていた光も消え、部屋の中は完全な闇に支配されてしまう。

エレンは震えた。それは辺りが暗くなったからではない。

この城にあった物を壊してしまったからだ。

エレンが今まで私物を壊したことは何度かあった。

奴隷時代、彼女が仕事に入りたての頃だ。

彼女は綿を紡ぐ機械のレバーを折ってしまったことがあった。

もちろんわざとではない。機械が古かったことも原因だ。

しかし、自分の不注意がその結果を生み出したことは明確であった。工場長はエレンを裸にして何度も鞭で叩いた。その痛みは今でも思い出せる。

あの怒りに満ちた表情は2度と見たくはないと気を付けていたはずなのに……………

この城の主人の顔を思い出し、サツと血の気が抜けた気がした。

あろうことか、エレンを叱るであろう人物は人間ではない。

人間の力を超越した魔王の怒りを買ってしまったのだ—————

「ど、どうしよう……………」

割れた鏡を何とか直そうと、暗闇の中を手探りで探す。

「い——っ！」

瞬間に指に鋭い痛みが走る。

どうやら鏡の欠片で指を切ったらしい。

暗闇で分からないが血が出ているのだろう。

それでも作業は止められない。

しばらく暗闇の中で悪戦苦闘するが、それは無駄な行為だとすぐに知った。

仕方がないので重い足を引きずりながらもドアの所へと辿り着く。

自分が取っ手に手を掛けて無いというのに扉は勝手に開いた。
廊下の光の中に一人の少女が立っている。

「エレン様。中で何か物音がしたようですが」

いつもの無機質な表情でダルクはエレンへと言った。
まだ言い訳の思いつかないエレンにとって、彼女の登場は不意打ちに等しい。

「あ———あの……………」

嘘を付く———という選択肢もあったのかもしれない。
しかし、目の前の少女は嘘など簡単にばれてしまうだろう。

「ごめんなさい！ 私……………これを割ってしまいました」

結局、何も言い訳などできずに、後ろ手で持った鏡を恐る恐る彼女へと提示する。

「鏡……………ですか」

ダルクはエレンから割れた鏡を受け取ると掌に乗せ十秒ほどそれを凝視する。

何も言わない彼女に不安になり、エレンは何度も顔を上げ、ダルクの顔を見る。

「あの、それはお高いものでしょうか？」

壊しておいて値段を聞くのはおかましいことだと思ったが、この

不安を拭い去るためにエレンも必死であった。

「私は何も言うこともできません。魔王様に聞いてみなければ価値を計りかねます」

「そうですか……………」

ここで気にするなと言われればどんなに心が軽くなっただろう。しかし、そう簡単にはいかない。彼女も一従者なのだ。主の許し無しに許すことなどできないだろう。

「えっと……………じゃあ、魔王さんに直接謝ります。魔王さんはどこに居ますか……………」

「今の時間では寝室にいらっしゃると思います」

「分かりました……………」

頭の中に城の見取り図を思い浮かべ、魔王の寝室を思いだそうとする。

しかし、同じような部屋が連なるこの城、どこに彼の寝室なのか分からなかった。

「案内します」

困り顔が目に残ったのか、ダルクはそう言い出してくれたのだ。断る理由など無いのでエレンは「はい」と短く返事した。

魔王と星見部屋

ダルクはエレンの前を歩き、エレンはダルクの後ろを歩く。
その足取りは、いつも通り優雅で体重を感じさせない。エレンとは大違いだ。

「ここです」

螺旋階段を何段も上がったところで、ダルクはある部屋の前で立ち止まった。

銀と月の装飾のされた重そうな扉が目の前にはある。

「では、私はここで」

ダルクは一礼し、行きと同じ足音を響かせ階段を降りて行った。
エレンはその場に一人残される形となる。

孤独により不安は増大する——ノックしようと扉の前に立つも、手が出ない。
少し重い左手を見る。そこには先ほどに割ってしまった鏡があるのだ。

逃げちゃダメなのだ。謝らなければいけない。

（よ……………よしっ！）

覚悟を決めてエレンは扉に手を伸ばす——

「入るが良い」

「は、はいっ！」

突然声が掛かり、エレンは上擦った大声で返事をしてしまう。
それだけではない。急に扉が開いたので、前に乗り出していた身体
が支えを無くし——

「わっ！ わわっ！」

そのまま前に転げ落ちてしまった。

転んだ時にそれほど痛みを感じなかったのは、その部屋の入口に柔
らかい絨毯が敷いてあったからだろう。

視線を上げると、ソファアに座った魔王の姿が見えた。

彼はエレンの方を向き、近づいてくる。

エレンは近づく彼に目を取られ、起き上がることさえ忘れていた。

彼は手を指し伸べる。

ポカーンと手を見つめ、固まってしまうエレン。

数秒経ったところでやっとその意味を理解し、彼の手を取る。

この時数秒遅れで恥ずかしさが込み上げて来て、エレンの顔は桜の
ように赤くなってしまった。

慌てて足に力を入れると、思った以上に軽い感覚で身体が持ち上が
る。

まるで彼に体重を吸い取られたような、不思議な感覚だ。

「ありがとうございました」

すぐにエレンは魔王に礼を言い、頭を下げる。

少し笑みを浮かべると彼は部屋の中にある椅子に座った。

彼を追っていた目線が視野を広めると、部屋の様子の上方が入ってくる。

魔王の部屋——金の絨毯に天蓋付きのベッド。

もちろんシーツは絹で出来ており、それに床はすべて大理石でできていて……………

というのがエレンの想像であつた。

しかし、城の主の部屋は驚くほど質素だ。

エレンの寝室の半分程度しかない大きさの部屋に机と椅子があるだけの造りで、その小さな机には透明な液体の入ったボトルと小さなグラスが置いてあるだけ。

なんだかとても寂しい印象を受ける。

「どうしたのだ？　こんな所まで来て」

そんな印象を思い浮かべている最中、魔王はエレンへと疑問を投げかけた。

「あつ……………はい……………それが」

エレンは謝罪をしなくてはいけないことを思い出し、鏡を両手の上に乗せ、彼へと見せた。

「ごめんなさい。これを壊してしまいました……………」

目を伏せているので彼がどんな表情をしているかは分からない。だが、手の中の重さは消える。

そつと顔を上げると、すでに鏡は彼の手中には無かつた。

すぐ隣にあったテーブルに鏡は置かれていた。

「気にするな。大したものではない」

「で、でも……その……」

罪の意識からか許されたというのに、エレンはその言葉を受け入れることができなかった。

「エレン。お前は叱られたいとも思っているのか？」

「えっ？　そ、そうではありませんけど……」

「私が許したのだ。そんな申し訳なさそうな顔はするな」

その言葉を聞きやっとな肩の荷が降りた気分になる。
安堵混じりのため息が自然と口から洩れた。

「手を出せ」

「え？」

「手を出すんだ」

「は、はい………」

なぜ手を？　そんな疑問を考える暇も無く、エレンは手を彼へと伸ばす。

「違う、逆だ」

「は、はい……」

エレンの差し出した手を魔王は自分の手の上に乗せた。

不思議だ——自分よりも白い手の筈なのに、そこから伝わってくる体温はとても温かい。

魔王は指の先に優しく触れる。

そこを見ると、うっすらと紅い線が見えた。

忘れていたが指を切ったのだ。

今でも血が滲んでいるということから中々深く切れていたことが想像できる。

「――――」

魔王は何かを詠唱する。それが何の言葉なのかエレンの耳には聞き取れない。

雑音のような音楽のような不思議な言葉だ。

だが、その言葉の効果は分かった。自分の指の傷がみるみるうちに塞がっていったのだ。

初めて見たがこれが噂に聞く”魔法”というやつなのだろう。

十秒ほどのことだったが、皮膚は完全に元の姿を取り戻している。もちろん痛みなどない。

「あ、ありがとうございます……」

驚きを隠せないエレンにとってその言葉が精一杯だ。

だからこそ、エレンはその分を動作で補った。

頭を深々と下げるお辞儀で。

謝ってしまえば用事はそこで終わってしまう。

エレンがここに居る意味もなくなってしまうのだ。

だが、エレンはまだこの場に留まり、魔王と話したいと感じていた。彼と話せるタイミングと言えば食事の時と夜のバルコニーだけなのだ。

しかし、そこでは静寂に飲まれ、思うように会話ができない。

だから、今が待ち望んだチャンスなのだ。

何か話そうと口を開けようとするが言葉が出ない。心音がうるさく、考えることに集中できないのだ。

「あの、魔王さん……その鏡はいったいどういう物なのですか？」

真っ白になったエレンの頭が浮かべたのはこの鏡のことだけ。思わず口にしてしまった。

「気にするな。大したものではない」

先ほどと同じ台詞を言う。彼の表情は変わらない。そこからは言葉の真偽が見抜けない。

本当に大したものではないのか、それとも――――

「あつ、はい。分かりました……………」

最初の話題が切られ、エレンは黙り込んでしまう。

何か話したいと思うのにそれ以上の会話は見つからない。沈黙がますますさを生む。

「あの……私は失礼しますね」

その空気に耐えかねて、エレンは部屋から退散するのであった。

鏡に住まう魔

扉が完全に閉まったところで、魔王は机の上に置いた割れた鏡を見る。

「居るのだろ。姿を現せ」

何もないはずの部屋の隅を睨み、彼はそう言った。

「くっくくくっ………さすが魔王の旦那だ。気づいていやしたか」

影から現れたのは一人の男。青い髪に黄褐色の瞳。爪は伸び、ボロ布から露呈した肌は皺でクシャクシャだ。

人間が見ればみすばらしい老人に思うだろう。しかし、彼も立派な魔族なのだ。

「どうだった。鏡の中は」

「くっくくくっ………とても住みやすかったぜえ、死ぬほどなあ」

男は不気味に笑う。

笑ってはいるが、その表情の中には魔王へ対する遺恨が垣間見えた。

「あの餓鬼には感謝しなくちゃなあ………なんせ、五十年ほどぶりに外に出られたのだからな」

エレンのことが話題に出て、魔王は眉を顰めた。

その表情の変化に気が付いたのか、男はゲラゲラと笑う。

「あんな人間の小娘を飼ってるとは旦那もモノ好きだ。まさか幼女趣味だとはなあ」

挑発とも取れる言葉にも魔王は表情を変えない。
ただその目線は先ほど以上に鋭利なものになっている。

「逃がしてやる。どこにでも行け。ただしエレンに手を出したら、お前を消す」

「消すとはこわいねえ。何、小娘には借りがあるってもんだ。言われなくたって何もしねえよ」

人間が聞いたら心臓が凍るような台詞を男は笑って受け流す。

「アンタはあの小娘を好いているようだが、どうするんだあ？　このままここに閉じ込めておくのかあ？　あの小娘は逃げるぜえ？　旦那は恐ろしい魔王なんだからなあ。ここに居るのが幸せなわけはねえ」

「……………」

魔王の表情が一層険しくなったのを知りながらも、青の男は口を止めない。

「唄を歌わせたいならば、四肢を千切って、柱に縛り付けておけばいい。唄なんぞ、生きていて口が動けば歌えるんだからなあ」

「黙れっ！」

魔王は一足飛びに男へと近づく。その手にはいつの間にか漆黒の大剣が握られている。

剣が男の首に届く瞬間——男の姿が割れた。
まるで鏡が碎けるかのように。

「くっくくく……………旦那の腕も落ちたものだなあ。まあ、それ

でも強ええよ。

あっしは退散させてもらうぜえ」

不気味な笑い声を残し、男の気配は完全に消えた。

「死に損ないが……………」

魔王は剣を納め、ため息をついた。

「ダルク」

「はい。何でしょうか？」

部屋の中にはいつの間にもやらダルクの姿があった。

「エレンを守ってやれ」

「命令とあらば」

ダルクは一礼をし、闇の中へと消える。

また一人になった魔王は再度ため息を付く。

「幸せか……………」

誰も居ない部屋に、彼のそんな言葉が浮かび、すぐに消えた。

苦悩。そして郷愁

その夜、エレンはいつものように寢床に着く。昼間のことなど忘れて。

窓から見える外の闇の中をゆっくりと雪が舞い落ちて行く。冬も本番なのだろう。

寒そうな夜だが部屋の中は暖かい。暖炉があれば暖かな毛布もあるからだ。

以前ならばこんな夜は寒くて眠れなかった。

ふと気が付くと考えていることがある。

自分はこんなに恵まれて良いのだろうか？

一日中自分の好きなことをでき、何もしたくても食事が貰え、暖かい所で眠れる。

生活を振り返ればすべてのことが自分には過ぎた物なのではないのかと思えてくるのだ。

エレンがこうして居る間にも貧しい農村は夜寝ることも許されない程冷えているのだろう。

だが、同じ農村出身の彼女は……………

一瞬、凍えながら固い床に寝そべる両親の姿が浮かんだ。

急いで妄想を振りはらい、違う物を想像しようとする。

しかし、一度浮かんだ考えは中々拭い去ることができない。

「お父さん、お母さん……………」

遂に言葉が出てしまった。自分の言葉を自分で聞いて分かった。物足りなさの正体。それはきっとエレンが恋しいからだ。

「お父さん、お母さん……………」

エレンは泣いた。涙を流してしまうと、今まで溜めこんできた物が爆発し、溢れだす。

「お父さん、お母さん……………逢いたいよ」

その日、エレンは泣き疲れるまで寝付けなかった。

その夜から彼女はことあるたびに家族のことを思い出すようになっていた。

物心ついた時から数えて家族と過ごした時間はすべて思いだせるほど短いものだった。

厳しい生活だったけど、楽しかった。満たされていた。

だが思い出は彼女の心を縛り迷わせた。

寝れば夢を見る。起きていれば浮かぶ。唄になれば籠められるのは寂しげな感情ばかり。

不眠のストレスでかエレンの食欲は日に日に落ちて、顔色も悪くなっていた。

ダルクも魔王もそんな彼女を心配する。

しかし、その心配は逆に罪悪感となり彼女を傷つけるのであった。施しをしてもらっているのに自分が考えているのは帰ることばかり。エレンは彼らに心配してもらう資格はないとずっと思い続けていた。

老と華

その日ダルクはいつもの通り家事を片づけていた。

使った食器を洗剤を付けて洗う。皿、まな板、包丁――

右手に持った刃物をダルクはそのまま後ろ手で投げる。

振り向かずともそこにあるモノの気配がしたからだ。

「おいおい、あぶねえなあ。こんな物刺さったらいてえだろ」

そこには青い髪あぐらの男が胡坐をかいて座っていた。

左手には先ほど投げられた包丁が握られている。

「狙いましたので」

ダルクは振り向きもせずに食器を洗い続ける。

「おいおい。あつしは無視ってか？ 魔王でもないくせにいい度胸だなあ」

「私は魔王ではありませんが、貴方を葬り去るぐらい簡単なのですよ」

冷淡な声でダルクは言う。

「こええなあ。アンタも魔王の旦那も。だが短気はいけねえ。あつしはあのお嬢ちゃんを救う方法を話したかっただけさあ」

男は余裕の笑みを浮かべ、ダルクを見ていた。

その顔にはいつも通りの不気味な笑いが浮かんでいる。

「あのお嬢ちゃん、いつも一人泣いているだろ？　なぜか理解できてるかあ？」

ダルクは黙って食器を洗い続ける。水音と金属が当たる音だけが調理室に響いている。

「分からねえだろうな。いや、仕方ねえ。アンタは魔族。お嬢ちゃんは何人間なんだからなあ」

意味深な言葉を並べ、一人笑うアイキヨウ。

感情などを持ち合わせないダルクにとってもその言葉はさぞかし耳触りだろう。

「何が言いたいのですか？」

「俺はなあ、あのお嬢ちゃんに恩返しをしたいのさあ。出してもらったんだからなあ。それだけさあ」

彼の声色が変わる。それはまるでダルクを説き伏せる様に優しい声だ。

「……………救う方法とは？」

ダルクは彼へと質問をする。

普段ならこんな胡散臭い言葉を鵜呑みにしないダルクだが、今回はやはりエレンの様子が頭に浮かんだのだ。

最近のエレンはこの城に來た時と同じような顔をしている。いや、それ以上に酷いだろう。

上辺では笑っていたりするが、一人になればすすり泣いている。その理由が理解できないダルクでも彼女が苦しんでいる事は分かった。

「なあに簡単さあ。俺にお嬢ちゃんと話させてくれればいい。心配か？　ならアンタも陰から見守っていればいい。得意だろ？」

皮肉を流し、ダルクはアイキョウの持ちかけた案を頭の中で思い浮かべていた。

彼が何をするかは分からない。しかし、それでエレンが元気になるのなら――――

そうだ。危なくなったなら自分が守ればよい。自信はある。

「分かりました」

ダルクはタオルで手の甲の水を拭うと、不気味に笑う男の方を向いた。

「交渉成立だな」

「最初に言っておきますが、エレンに触れないようにしてくださいね。触れたら――――」

「おいおい、そんな可愛い顔で恐ろしい事言うなよ。ただ言葉を掛けるだけだぜ」

アイキョウは笑い、何も無い空間へと消える。

「ふう……………」

ため息一つ付き、ダルクは残った食器洗いを再開するのであった。

藍鏡―アイキョウ―

「ふう……………」

夕食を終えたエレンは部屋に戻り、ベッドに倒れ込む。
今日の夕食はとても豪勢でどの料理も美味しかった。

けれど、エレンは満たされていない。お腹も心も。

ほとんど料理に手を付けないエレンを見て、皿を下げるダルクはいつも不思議そうな表情をするのだ。

そんな彼女の表情を見るのも辛くなってきた。

「私……………いいのかな？」

「良きやねえだろう。くつくつく……………」

独り言を言ったと思ったのだが、誰かに聞かれていたらしい。
恐る恐る振り返る。

そこには青い髪をしたみすばらしい老人がいた。

「な、なんですか……………あなた……………」

警戒心を顕わにしながらもエレンは老人に言葉を掛ける。

「なあに、あっしはアイキョウというモノさあ。そんなに怯えなくてもいい。魔王の旦那のトモダチだからなあ」

「と、友達？」

その言葉の真偽は明らかではないが、エレンの警戒心は和らぐ。
それでも二人の距離は以前ベッド1つ分離れている。

「ああ、そうさあ。エレン。悩んでいるそうだなあ」
「えっ……………はい……………」

男は褐色の目でエレンを見つめる。

「逢いたいよなあ。両親に。分かるよお。ここの暮らしは贅沢だが……………寂しいんだろお？ 分かるよお」

「あっ……………その……………」

心を見透かされたことでエレンは口ごもってしまう。

「隠さなくてもいいさあ。あっしはエレンの味方なんだからなあ」

「み、味方……………」

「エレンはどうしたい？ ここで一生過ごすのかい？」

「そ、それは……………」

「帰りたいんだろう？ 帰ればいいさあ。なあに簡単さ。この城から西に少し行けば村がある。そこまでたどり着ければ、帰れるさあ」

「ほ、本当ですか！」

「ああ、あっしは嘘はつかないよお。なんせエレンの味方なんだからなあ」

「で、でも、ここを出て行ったら魔王さんが……………」

「魔王の旦那が一度でも帰ってダメなんて言ったかい？ 言ってないだろお」

「言ってません……………」

「まあ、どうするかは自分で決めるんだなあ。だがエレンが帰ってきたら両親は喜ぶんだろうなあ。なんせ魔王を虜にした歌声の持ち

主だ。すぐに良い仕事が見つかり、簡単に3人で良い生活ができるようになるのだからなあ」

「3人で……暮らせる………」

エレンは言葉を復唱し、その場面を想像する。

笑顔で笑う両親。その真中にエレンが居る――

「わ、私………帰りたい……」

「ひひひ……エレンの好きにすりゃいいさあ。お前の人生なんだからなあ。じゃあな。あっしは、ちよっくら出かけてくるぜえ」

「あっ、あの……」

部屋を出ていこうとするアイキョウをエレンは呼び止める。

「ありがとうございます。なんかスッキリしました」

「いってことよお。エレンはあっしの友達なんだからなあ」

彼は笑う。最初是不気味だったその笑顔も最期には嫌な感じがしなかった。

白と銀の森にて

アイキョウ。彼と会った日からエレンの心には帰るという思いが強く宿っていた。

エレンは密かに食事中に食べ残したパンを部屋に持ち帰って蓄えている。

旅に役立つと思った物はすべて部屋に持ち帰りベッドの下へと押し入れた。

ある晴れた日の夜。エレンは遂にここから出ていくことを決心した。今まで拾い集めた道具をシートで包み、それを首から掛ける。

エレンは布団をロープ状にしてバルコニーの柵へと縛りつけた。

ここから地面までは結構な高さがあり怖かったが、彼女は躊躇せず、柵に足を掛ける。

かじかむ手で懸命にロープを握り、慎重に下へと降下していった。

何とか無事に地面に降り切り、エレンは自分の部屋を見上げる。

エレンは手紙を机の上に残していた。魔王への感謝と謝罪の文章を記して。

ダルクがああ部屋に入るのは明日の朝のこと。手紙を読んだ二人はどんな顔をするのだろうか？

心が音をたてて痛んだ気がする。

だが、あそこにはもう戻れないのだ。

ここまで来てしまった以上進まなければならない。

そう思い、エレンは深い雪を掻き分け、城を離れていった。

夜なので森の中は真っ暗だ。

小さいランプを持ってきたといえど、その光は自分の足元を照らす程度のものでしかない。

もしかして自分はとても無謀なことをしているのではないだろうか？
そうも思ってしまう。

しかし、それでも両親に会うという気持ちは変わらないのだ。

白く雪の積もった地面を一步一步、歩いていく。

庶民の着ない豪華なドレスといってもこの寒さの中じゃ、なんの機能性もない。

かじかむ手を温めながら、前に進む。

何となく後ろを振り返れば先ほどまで居た城が目に入る。

一か月ほどだったがあの城ではとてもお世話になった。

罪悪感や寂しさから、エレンの目からは涙があふれ出していた。

その城へと一礼し、さらに森の奥へと進んでいく。

それからしばらく、頼りない明かりをぶら下げながら、彼女はひたすら前へと歩いていく。

手と足はこごえ、赤くなっている。

もう感覚はほとんど無い。

暗闇に覆われた森の中にどのぐらいいるのであろうか？

重くなった足を止めたいが、そんな余裕はないだろう。

身体は思った以上に冷えているのだ。

ここで寝てしまったら間違いなく死ぬ。

城から見た森は雄大で綺麗なものだったが、いざその中へと入って見ると自然の恐ろしさというものを身を持って感じる。

白銀の雪は足を取り、容赦なく体温を奪う。裸の木の枝は頬に当たり生傷を作る。

森の動物たちは不気味に吼え、エレンを驚かせるのだ。

城に居た時には怖いなんて思わなかった森が、今はとても怖いのだ。
二つの意味で身体は酷く音を立てて震えた。

その時であった。自分以外の何かの足音が聞こえたのだ。
いや、それは人のものではないのかもしれない。
ここは魔族の住む森だ。もちろん凶悪な生物もいる。
いつ怪物に襲われてもおかしくは無いのだ。

その恐怖でエレンは足を止め、近くにあった木に身を寄せる。
呼吸を抑え、自分の気配を消そうとする。
静かにしようとすればするほど、自分の鼓動が大きくなる。
その音に釣られるように足音は近くなってきている。

彼女は目を閉じて心の中で祈った。

それでも足音は止まらない。

気配が感じ取れるまで近くに来ている。

（お、お願い……………見つからないで）

足音は自分のすぐ近くで止まった。

止まってしまうと相手の位置が分からなくなり、一層の恐怖が押し上げてくる。

目を開けられずにいると自分の肩に何かが触れたのだ。

その感覚に驚いて目を開けると、そこにはある男性が立っていた。
夜に惑わされぬ白銀の髪、そして青玉サファイアのような蒼く透き通った瞳。
何度も見た顔であるはずなのに、エレンは彼に見とれてしまった。

「魔王……………さん……………？」

魔王はエレンの手を静かに包むと、何か呪文のようなものを唱え始めた。

驚いて何も言えないエレンは彼の行動にオロオロと、うろたえるばかりだ。

状況はすぐに変化した。彼に握られた手は淡い光に包まれる。その光はとても柔らかく暖かい。

まるで光の手袋をしたように――――

不思議なことに彼女の冷えた手は体温を取り戻した。

「あの……魔王さん」

エレンは今の状況を説明しようと口を開いたがそれ以上口は動かない。

決して寒さのせいだけではない。

魔王はなぜここにいいのか、とか。

勝手に出て行って怒っていないのか？

などと質問もしたいのだが、それを口に出せないでいたのだ。

彼は呪文をかけ終わると、来ていた銀色のローブをエレンへと着せた。

ローブに袖を通すと、不思議なほど暖かい。まるで暖房のついた部屋にいるような感覚だ。

「あ……………あの……………」

身体が温まったところで、もう一度、彼へと言葉を掛けようとするが、また喉辺りでフレーズが消えてしまうのだ。

「森の出口まで送ろう」

エレンに代わって魔王はそう静かに言った。

「はい……………」

エレンにできたことは小さく返事をし、頷くことだけであった。

魔王の後ろに続き、エレンは森の中を歩いていた。

森は先ほどの暗さが嘘のように輝いていた。

星や月からの光が木の枝に積もった雪に反射されとても幻想的だ。その中を2つの影は静かに歩いていく。

エレンがこのように外を魔王と共に歩く事は初めてであった。

しかし、それも長くは続かない。

少し歩いたところで森の終わりはやってきた。

ここからは人工的な光の集団が見える。おそらくは村だろうか。

魔王はそれを確認すると後ろを振り返る。

言わずとも分かる。彼は行ってしまふのだ——

エレンは何か言おうと必死に頭を回転させる。

ごめんなさい？

いや違う……………

「ありがとうございます」

エレンはこれまでにないほど深々とお辞儀をする。

その言葉と動作にすべてを籠めた。

「礼には及ばん。何かあれば、また訪ねるがいい」

その気持ちが伝わったのか、魔王は穏やかな台詞を残すと森の中へと消えていった。

振り向きもしなかったが、その後ろ姿は圧巻である。

エレンはその姿が見えなくなっただけでも頭を上げなかった。

しばらくして頭を上げると、ローブのポケットから何かが地面へと飛び出した。

それは金貨であった。

ポケットの中には大量の金貨が入っていたのだ。

その金貨を握り締めるとエレンは声を殺して泣くのである。

帰郷、そして……………

その日からエレンの旅は始まった。

魔王のくれた金貨は旅費として十分なものであり、馬車や船を使い、彼女は15日ほどで自分の故郷に帰るのであった。

雪に覆われた農村はとても寂しく、寒い。

だがこの寒さが懐かしい様に感じた。

村の様子は以前にもまして貧しく見える。

農夫たちは雪が降り続いているのにも関わらず、凍えた手で土を耕している。

冬に育つ、わずかな作物でもこの地で生きていくためには必要なのだ。

エレンはは幼い記憶を頼りに自分の家を探す。そしてついに見つけたのだ。

男女が畑の中で農作業をしている。その姿は昔見た姿と殆ど一緒であった。

いや、それよりも彼らは痩せて見える。

自分が帰ってきたと知ったら彼らはどんな顔をするのだろうか？

エレンはそんな妄想を浮かべながら、彼らへと近付いて行く。

「お母さん、お父さんっ！」

エレンがそう言い放った時にはその目からは涙が溢れていた。

「ま、まさか、エレンかい？」

声を掛けられた方向を見た父親は驚いた様子でクワを地面へと落とす。

母親も作業を中断して、その場に立ち尽くしてしまう。

「ただいま……………」

エレンは胸いっぱいになる喜びを噛みしめながら、その一言を言った。

その夜、エレンは家族団らんで食事をした。

最後に両親と食事したのは6年前の事なのでさぞかし久しぶりのものである。

家の中は隙間だらけでとても寒い。

食事も魔王の城で食べたものと比べてしまうと、とても美味しいとは言えないものだった。

しかし、それを超える至福がエレンの胸には広がっていた。

「私、工場の仕事を辞めた後、劇団で唄を歌っているんな国を旅してきたんだよ。あと、それから———」

エレンは今までどんな仕事をしてきたのかを両親に話した。

出来るだけ辛かったことを言わないように。

そんな過去の話を知ってもらいたいエレンだが、魔王に逢ったことだけは秘密にしていた。

両親が怖がってしまうといけないから。

「あと、これ」

エレンはポケットから数枚の金貨を取り出し、両親の前へと出した。見たこともない金貨を目にし、両親は驚きの顔を見せる。

「これ、使って美味しいもの食べて」

エレンは元々、帰ったらこのお金を両親のために使ってもらおうと思っていた。

「いったいこんなお金をどこから——」

「えっと………劇団で溜めたんだよ」

エレンの口調から嘘をついている事が分かる両親だが、背に腹は代えられないのが現状である。

エレンを売った後も、彼らの生活は一向に楽になってはいなかったのだから。

両親はその出所を気にしながら、そのお金を受け取った。

エレンは自分の部屋へと久しぶりに入る。

そこは何も無い部屋で僅かにあった本や家具でさえそこには無かった。

母親が用意してくれた藁を床に敷き、そこで眠る。

旅で疲れているはずなのに、エレンは寝付けなかった。

夜になると、どうしても思い出してしまうことがある。魔王とあの森のことであった。

いつも唄を聞いてくれる動物たちは今、何をしているのだろうか？いつも見ていた庭園の花は枯れていないだろうか？

そして魔王さん。この時間はまたバルコニーで一人、森を眺めているのであろうか？

そんなことが頭の中を巡って眠れなくなってしまう。

両親に会うために自分勝手に城を抜け出した私にそんなことを思う資格は無いのに………

しばらく眠れずに天井を眺めていると、壁越しに両親の声が聞こえてきた。

「あの子、いったいどうやってこんなお金を……………」

「あの噂はまさか本当に……………」

何の話か分からないが、エレンは耳を澄ませる。

「もしそうだとしたら、兵に知らせたほうがいいんじゃない？」

その言葉を聞き、エレンは耳を手で覆った。

きつと聞き間違いだ！

そう自分に言い聞かせ、エレンは目を硬く瞑った。

エレンの脳裏にはあの日の記憶が蘇る。知らない人に売られる自分、両親の背中……………

そんなわけないのだ！

あの日、両親は仕方が無く自分を売ったのだ……………

エレンはそう言い訳をせずと自分を支えていた。

両親は売りたくて自分を売ったのではないと———

鼓動が早くなる。息をし過ぎて部屋の酸素が薄くなった気がする。

息ができない……………

「タ……………ス……………ケ……………」

声にならない声をあげるエレン。当然ながらその声は両親には届かない。

その時だった、何者かが自分の頭を中に浮かせたのだ。

そして優しく包み込む。後頭部には先ほどの床の固さに代わり、何か柔らかいものが当たる。

それが何なのか、確認したかったのだが、体が動かない。

次第に胸の奥の息苦しさは無くなっていく。

まるで魔法に掛かったような奇妙な感じだ。

何か自分の中に優しいものが入ってくる———そんな感じであろうか。

その感覚に包まれながら、エレンは眠りへと落ちていった。

血族という檻の中で — The Bird Cage —

朝目覚めて、自分の周りを確認する。だがそこには何も無い。昨日の夜のことは夢だったのだろうか。

疑問を感じながらも気だるい身体を起こし、エレンは寝巻から私服へと着替える。

袖を通したのは麻でできた、いかにも地味な服だ。

これは旅の途中に布服屋から適当に選んだものだった。

ドレスと比べてしまうと生地がゴワゴワし、擦れた素肌が痒くなつたが、それは慣れの問題である。

それに元々エレンは豪華な服よりも粗末な服を着ていた時間の方が長いのだ。

そんな違和感は旅の途中で完全に無くなっていた。

扉を開け、朝の茶の間へと顔を出す。

昨日の夜の事もあって、両親がどんな反応をするのか怖かったが、彼らの態度はエレンが考えていたものとは対照的であった。

「おはよう。エレン」

母はとても優しくエレンに話しかける。

すでに食事の用意は出来ており、粗末なテーブルには父が座っていた。

「おはよう」

椅子に座ると向かいに座っていた父が挨拶をしてくる。母と同じような笑顔だ。

「さあ、ごはんにしようか」

母の一言で食事が開始される。

両親は食事中にも関わらず、エレンに今日の予定などを話してきた。工場の下働きをした頃からずっと食事は静かにするものだと思っていたので、会話のある食事に少々戸惑ってしまう。

それに、自分が幼い頃、食事中に会話などしたのだろうか？ 記憶は曖昧だ。

けれど、この雰囲気はどうも落ち着かない。

食事も昨日よりは豪勢な気がする。

とても賑やかな食事だ………だけど、なにか胸につつかえている気もするのだ。

この両親の優しさがなんだか怖い………

でも、その時エレンはその感情を見て見ぬ振りをしたのだ。

彼女は怖かった。疑えば、自分の想像が本当になりそうで………

「さてと、エレン。食事は片づけておくから、父さんの農作業を手伝っておくれ」

「あ、うん」

「どうしたの？ 具合でも悪いんじゃない——」

「ううん。大丈夫だよ」

自分の感情を相手に悟られぬようにエレンは笑顔を見せ、返事をした。

農村の冬は厳しい。市街とは違い雪の量が半端ないのだ。

畑に積もった雪をかくだけで一苦労だ。

エレンは畑に生えたツタを辿り、地面を掘る。

道具も使わずに土を掘り返すのだ。指先は血が出るほど痛む。

しかし、彼女は任された仕事を一心にこなすのだ。

そうだ。こうして仕事に精を出していれば、心のざわめきも消える。

それに両親にも喜ばれる。一石二鳥ではないか――

彼女の心配は杞憂だったのかもしれない。

故郷へ着いてから、何事も無く3日が経っていた。

その間、エレンは1日も休まず両親の農作業の手伝いをしていた。

久しぶりの畑仕事は過酷でとても疲れる。

固い土と寒さで指先は割れ、腕の筋肉は悲鳴をあげる様に痛んでいく。

もしかしたら工場にいた時以上に厳しい事をしているのではないかと錯覚してしまう。

しかし、両親を楽にさせるためにも自分が頑張らないと――その一心で彼女は畑を耕していた。

そう。この時にはエレンは両親を信じ切っていた。

もう豪華な生活をできなくとも、魔王に逢えなくとも、両親さえいてくれればいいと思っていた。

――しかし、それは儚い幻想だった。

その日の午後、農村にはいつもは訪れない者達が現れた。

赤い鎧を纏った屈強な男たち。エレンはその格好に見覚えがあった。

鎧を見た瞬間、エレンの頭の中に警鐘が響く。

逃げようとしたエレンに気が付き、男は剣を抜き、散開する。

すぐに逃げ場を無くした彼女を男たちは囲む。

帽子を深く被っていて分からないが、その瞳はエレンに対し敵意を剥き出しにしているだろう。

「お父さん！ お母さん！」

咄嗟に叫び後ろを向く。しかし、そこには誰もいなかった。
先ほどまで一緒に両親が居たというのに……………

「魔女め、大人しくしろ！」

兵士たちは剣で威嚇をしながら、エレンに近づいてくる。

「お母さん！ お父さん！」

両親に助けを求めてエレンは叫ぶ、しかし彼らにそれは聞こえない。
もし聞こえたとしても、彼らは助けに来ない。

そうだ。本当は分かっていたのだ……………

その時、エレンの中で何かが崩れ落ちた。

彼女は膝を折り、その場へとしゃがみ込んでしまう。

そんな様子を気にせず兵士たちは彼女の手足に金属の鎖を結んだ。

抵抗する気力も無い彼女の体を半ば引きずるようにして馬車へと投げ入れた。

「どうして……………お母さん、お父さん……………」

固い床に頬をつけながら、エレンは呟いた。

狂気の境界

それから何日かの旅の後。少女は牢獄へと入れられた。この埃臭い空気を吸うのは人生二度目である。

でもそんなことは彼女にはどうでもいいことだった。

少女は牢獄で鎖に繋がれながら一日をボーっとして過ごしていた。力なく石の窓から空を見上げては、時折思い出したように何かを口ずさむ。

それが唄なのか言葉なのか分からない程小さな声で。

そんな彼女の牢へとやってくる人物がいた。

ここ数日の間、同じ人物が”餌番”をしているらしい。

顔つきにまだ幼さを残している兵士は鉄格子越しに数切れのパンと水の入った皿を置く。

牢の中の少女は動かない。

まるで糸の切れた操り人形のように、壁にもたり掛かり光の無い瞳で青年を見つめていた。

ここ数日、同じ様子だ。

食事は摂るものの、生気を感じられない

。投獄されてから数日の間に身体は幾分痩せたのではないだろうか。青年は彼女の様子を見て声を掛けそうになった。

しかし、その感情を押し殺すように帽子を深々と被る。

牢番が囚人に話す事は禁じられているのだ。話したら刑罰として鞭で打たれる。

施しなどしたらそれこそ投獄されてしまうだろう。

良心の呵責かしゃくに悩まされながらも、彼は黙ってその場を去っていった。

幾人かの囚人を巡った所でやっと休憩になる。牢番といっても激務だ。

この短い休憩を挟んで、一日12時間は囚人の餌番や監視をしなければならぬ。

しかも、最近では囚人が増え過ぎて同じ牢に何人もの囚人を入れる場合がある。

そうなれば何かと争いことも多くなる。

ここに入って1年ちよつとだが、青年は神経をすり減らす毎日を送っていた。

仮眠室の机に座って休憩を取っていると、部屋の扉が開き中年の男が入ってきた。

それは青年が上司と慕う、ベテランの牢番であった。

「なんだ。今日もやけに疲れた面してるな」

男は部屋に入るや否やそんな言葉を青年に掛ける。

「ええ。囚人たちの様子を見てると気が滅入りますよ」

「はっ。今の若い奴は根性が無いねえ」

男は向かいの机に座ると葉巻を吸い始めた。

「——つっても、俺もこれがなければやってられないけどな。こんな仕事」

煙を吐きながら男は言う。

この数週間の間、牢番の間でも不満を耳にする事が多くなった。

今まで重犯罪者が入るはずのこの牢獄に今は大勢の人が投獄されているのだ。

その中には年半ばも行かない様な子供も含まれている。
牢番と言っても本質は人だ。その現状を見て良心を傷めない者は居なかった。

「王様は何をしようとしてるんですかね」

この状況に反抗するかのように青年は呟く。

「さあな………まあ、ロクでもねえ事が起きるのは確かだ。こんなに”犯罪者”が出るんならば、長くもないかもな」

男がこんなことを言うのは初めてであった。

いつもならば王の悪態をつけば、「本人にでも言いやがれ」と怒る筈なのに。

「誰か、王を咎めないのでしょうかね？」

「どうだろうな。まあ、お前みたいに身勝手に批評する若い連中が沢山居れば、

革命ぐらい起こってもいいと思うが………無理だな。みんな怯えっちまってるよ」

最近、王に対して物申した政治家の老人が処刑されたのは有名な話だ。

日に日に法は厳しくなり、街中で政治の話をする人物も少ない。

「魔王ぐらいなんじゃねえのか？ 王様を咎められるのは？」

男は自嘲気味に縁起でもない事を言う。

「魔王？ あの、噂の？」

「ああ、処刑される寸前の少女を助けるぐらいだぜ。俺らの窮地を救ってくれるかもしれないぜ」

「まさか……………はは。魔王なんか来たらこの国が滅びちゃいますって」

「まあ、この国を終わりにするならそれでもいいんじゃないのか？」

男は口の中で葉巻を燻^{いぶ}し、その煙を空へと吐く。

石の壁に跳ね返った煙は部屋の中を白く染める。

「噂じゃあ、その魔王が助けた少女が、この牢獄に入れられたらしいぜ。誰だか知らないがな」

青年の頭の中には、先ほど食事を与えた少女のことが思い浮かぶ。まさかと自嘲し、その考えをかき消した。

「さてと、そろそろ仕事に戻りますか」

男の葉巻の煙が部屋中に広がった頃、休憩時間は終わり、二人の牢番はまた激務へと駆り出されるのであった。

夜の獄中にて、少女は光を見る

目的の魔女が捕まったと報告を受け、王宮では作戦の開始が秒読みされていた。

大臣たちは必ずや魔王が助けに来るという確信を持ち、作戦の日にちに合わせてエレンの処刑日は決まったのだ。

そしてエレンは処刑日前日の夜を迎えていた。

明日の夕方には自分の処刑が行われる。もう一日として時間はないのだ。

1度目の”この日”は怖くて眠れなかった。

明日になれば自分がこの世から居なくなってしまうと思うと涙が出た。

少しでもいい楽しい事を思い出そうと必死に過去を振り返った。

しかし、今の彼女は……………

力無く牢にもたれ掛かっているだけ。

その視線には自分の細い足と腕に繋がれた鎖が映っている。

別に外そうとか思っているのではない。

うなだ項垂れているのが一番楽なのだ。

視線さえ擦れ、自分が現実にいるのか夢にいるのかも分からなくなっていた。

まあ、どちらでも良い。もう疲れたのだ。

今まで心の支えであった両親にまた裏切られた。

その事実を突き付けられ、エレンの心は限界に来ていた。

「もう……………疲れた……………」

誰に言うでもなく、そんなことを口走る。

空気に混じり消えるはずの、その言葉を聞いている人物がいた。

「エレン様」

力無く振り向くと、そこにはメイド服の少女が立っていた。
その凜とした容姿はこの汚い牢にはそぐわなく、いつも以上に浮き
立って見える。

なぜ彼女がここにいいのか……………

ふと、疑問が浮かぶが、面倒臭くなり思考を止める。

そんなことはどうでもいい。

そんなことはどうでもいいのだ———

どうせ、あと少しで死んでしまうのだから……………

エレンはまた視線を地面へと向けた。

「エレン様、何故、助けを求めないのですか？」

ダルクは静かに口走る。まったく感情が籠っていない声で。
それは彼女の純粋な疑問なのだろう。

「もう、生きている意味ないから……………」

エレンは力なく言う。

「生きることに意味なんて必要なんでしょうか？」

ダルクは言葉を続ける。

彼女がこうして質問を返すのは珍しい。

「両親に捨てられて……魔女扱いされて……もう嫌なの……」

エレンはその言葉に感情を籠めた。自分の絶望と悲しみを。

しかしその目からは涙すら出ない。もう枯れてしまったのであろうか。

その台詞を聞き、ダルクはしばらく黙る。その仕草は何かを考えているようにも見える。

一分ほど経ってダルクは口を開いた。そして静かに言葉を紡ぐ。

「申し訳ございません。あなた様の気持ちは理解できません」

彼女ははっきりとした口調でそう言った。

「そうだろうね。ダルクさんには分からないよ……私の気持ちなんて」

さすがに気を悪くしたエレンは彼女を睨み、厳しい口調で台詞を吐く。

しかし、目の前の少女は眉ひとつ動かさない。

立っている彼女、座っている自分。立場的にも見下されている気がする。

「ダルクさんはいいよね。これからもあんな豪華な城で過ごせるんだからね。これからの人生ずっと幸せなんでしょ！ 私は、こんなに辛い人生を送ってきたのにさっ！」

エレンはそのまま心の深い所に溜まっていた言葉を吐き出す。

一方、ダルクは少し首を傾げるが依然、無表情のまま。

少し怯えでもしてくれれば、エレンの気持ちも止まったのだろうか

その態度は火に油を注ぐようなものだ。

「何その顔？ 本当に理解できないの？ そうだよね！ ダルクさんは造られたんだからね。人形みたいなものなんですよ！」

エレンはハツとする。今まで無表情だったダルクが一瞬悲しそうな顔をしたのだ。

そうだ。自分はなんて酷い事を言ってしまったのだろうか。

「申し訳ありません。あなたの言う通り、私は作り物です。感情などありません」

「あ……………あの……………」

エレンが謝罪の言葉を言えずにいるのを見て、ダルクは静かに会話を続けた。

「ですが、存在意義と問われれば答える事が出来ます。私はあなたの為に造られたのです。あなたが居なくなれば私の存在する意味は無くなります。これは悲しいということなのでしょうか？」

ダルクは真剣な眼差しでエレンを見つめる。まるで彼女へと答えを求めの様に。

「それに、魔王様も大層悲しむと思われます」

「なぜ？ 私はただの人間なのに……………」

エレンは魔王のことを思い出す。

彼が何故自分を助けたのかは今まではっきりとはしなかった。
エレンは勝手に、自分のことを唄う道具にしているに過ぎないと考えていた。

「魔王様はあなたの事をずっと気に掛けていらっしやいました」

「それは私が唄が上手いから？」

「いえ。私が言うのも何ですが、魔王様は特別な意味であなたを大切にしていらっしゃったのですよ」

「特別って？」

「はい。私のイメージが間違っただけならば、それは”愛”という感情です」

ダルクがあまりにも無感情に言うものだから、一瞬では重要なフレーズに気が付かなかった。

数秒遅れで”愛”と言う言葉が頭に浮かび、エレンの頬は自然と紅くなった。

「あなたはそんな魔王様の気持ちさえも裏切ろうとしているのですよ」

ダルクの口調は変わらない。しかしその言葉には先ほど以上に重みがあった。

それは恐らく、エレンの心が言葉を受け入れようとしているから――

「それでもあなたは死にたいとお考えなんですか？」

両親に捨てられたとき一度は死のうとした。でも生きて生きて……
……魔王に会った。

彼はエレンの唄を静かに聞いてくれた……………

目を閉じれば思い出す。深き森の中の城を。そこで過ごした穏やかな時間を。

そして、自分を救ってくれた魔王の事を。

彼は毎日のように自分の唄を聴いてくれた。

どんな人よりも長く、多く――――

「生きたいよ……………私、もっと生きたい……………もう一度、魔王さんに唄を聴かせたい」

その言葉を口走った時、エレンの瞳からは大粒の涙が零れ落ちた。

一度流れだした涙の滝は止まらない。

ダルクは泣く少女を抱き寄せるとその腕に包んだ。

この匂い、あの夜と同じ……………

エレンはずっと見守られていたのだ。

決して一人ではなかったのだ。

魔王降臨 ―前編―

今日の夕刻。それがエレンの処刑時間だと、司法官らしき男は言う。

「時間まで神に祈り、悔いを改めるのだな」

そのような台詞を言われた。

だが、男は間違っている。

祈るのは神へではない。助けに来る人へだ。

エレンは手を組み、神と真逆の性質を持つ魔王へと祈りを捧げる。
望めば来てくれるという、ダルクの言葉を信じ――――

太陽の光が弱くなってきた頃、遂にエレンは兵士に牢から出された。
エレンの前には同じように鎖で繋がれた人々が沢山歩いている。

この人たちも自分と同じように処刑台に向かっているのだ。

そこに居たすべての人が俯き、絶望を身に纏まとっている。

だが、エレンだけはその瞳に強い意思を浮かべていた。

控室に入れられ、そこから一人ずつ連れて行かれる。

連れられた先は処刑場だろう。

そこに居た人々は自分が選ばれないようにと、その身を潜め目立たないようにする。

少しでも長く生きようと。

「や、やめてくれえ！ お、俺は、まだ死にたくないっ！ 死にたくないっ！」

中年の男が連れていかれる前に騒ぎ立てた。その声に耳を塞ぎそう

になる。

しかし、手にはめられた手枷はそれすら許してくれない。

エレンは無言で祈るのだ。魔王の降臨を——

一人いなくなり、二人いなくなり——

二十人程度居たはずの囚人たちはすでに半数になっている。

「次はお前だ。立て！」

指差されたのはエレンだ。

「ちょ、ちょっと待っておくれよ！ そんな幼い子を死刑にするなら、私を先に——」

歳が一番若い囚人の指名に声を上げる人物がいた。彼は人の良さそうな老人だった。

「黙れ！」

男は口答えた老人へと鉄の棒を向ける。だが、彼は言葉を続けた。

「お前さんたちは良心が痛まないのか？ こんな子を——」

鈍い音が薄暗い部屋に響いた。老人がすべて言う前に男が棒で肩を強打したのだ。

「お前ら全員死ぬんだよ！ 今すぐ、ここで殺してやろうかつ！」

激昂した男は鉄の棒を振り上げる。

「やめてっ！ 私は行くからっ！」

エレンの声で男は動作を止めた。

「そうだ。それでいい」

従順するエレンに気を良くしたのか、男は鉄棒を下ろし、エレンの鎖を乱暴に引く。

「お嬢ちゃん！」

「大丈夫だよ。おじいさん。私、行ってくる」

兵士には開き直りの言葉に聞こえたかも知れない。

しかし、老人は見たのだ。

幼い少女の目に宿る強い光を。

外に出ると、沈みかけの日光が目刺激した。

目が慣れてくるとある光景が目飛び込んでくる。

それは広場の一角に出来た山である。

この日、色々な人が首を吊られ、その死体が山積みされているのだ。その人たちの表情は自分の無念を語るように苦痛で歪められ、処刑を行った兵士たちでさえその死体の山を見ないようにしていた。

エレンは心を痛めた。目からは自然と涙が溢れた。

そして考える。この人たちの為に何かできないのか……………

自分は王のように権力も無ければ、魔王のように、この場から人々を救う力も無い。

出来る事はただ一つだ。

彼女は歌ったのだ。彼らに捧ぐ唄を……………
それはとても悲しく美しい唄声。

以前ここで歌ったものよりもずっと……………

今から死ぬ者の唄声だというのに、兵士たちはその唄に聞き入ってしまった。

処刑台というステージに立つ、歌姫の唄声はそれほど美しかったのだ。

スポットライト

夕陽が完全に消え、辺りを闇が包んでも彼女は唄を歌っていた。

彼女の唄声をかき消したのは、街の見張り台にある警鐘の音だった。金属の反響により増幅された音は街すべてに聞こえただろう。

いままでの沈黙が嘘のように兵士たちは慌て出す。

その表情は恐怖で引きつっている。

ついに来たのだ。魔王が。

耳を劈くような爆音と衝撃でエレンはその場に伏せる。

それでも身体が安定しない。処刑台となったこの高台ごと揺れているのだ。

エレンが目を開けた時には街の入口の方が赤く燃えていた。

その炎は真っ直ぐと自分の方へと向かっている。

目を凝らせば、その炎の真ん中には自分が待ち焦がれた人物がいることが分かった。

昨日のダルクの言葉をを思い出した。

「あなたが望めば魔王様は必ず助けに来ます」

彼女の言うとおり、魔王はやってきたのだ。
一人の少女を救うために。

魔王降臨 ―後編―

「絶対に逃がすなっ！」

広場の入口には20、30人程度の兵士が集まり向かってくる魔王へ対して突撃を行う。

「ふん」

だが、それは愚行だ。

彼が剣を振るうたびに肉片が宙を舞った。

一人、また一人と断末魔を上げ兵士は死んでいく。

エレンはその非現実的な場面を目の当たりにするも、目を逸らさなかった。

彼の眼は、自分に向けられている事が分かっていたから。

数十秒もしないうちに兵士は居なくなり、代わりに路上は紅い染料と肉の塊で埋め尽くされている。

「化け物だ……………」

突撃を命令した隊長は思うのだ。これが魔王と人間の力の差だと。彼自体が死であることを――――

絶対的な力に、兵士たちは後退せざるを得なかった。結果、魔王に広場への侵入を許してしまう。

「魔王さん！」

エレンは叫ぶ。

それに応じるように、魔王は処刑台の上に視線を送った。

「やつの狙いは処刑台の女だ！ 逃がすな！」

指揮官の声に兵士たちは陣形を取り、魔王を囲む。

「だああああっ！」

屈強な戦士がサーベルを抜き、魔王の横を走り抜ける――――
すれ違った時、彼の頭は既に無かった。
無くなった首からは大量の血液が噴水のように噴出する。

「命を粗末にする愚か者は来るがよい」

冷淡な声。だが、その声はエレンがいつも聞いているものとは全く違った。

耳から入ったその言葉は身体全体を氷のように冷たくする。

「うっ……………」

先ほどのまでの勢いも薄れ、兵士たちはたじろぐ。

ここに居る全員が等しく死の境界線に立っているのだ。

「っ……………ぐううう……………この餓鬼い」

一人の男がエレンに近づいてくる。

その瞳の色は明らかにおかしい……………

サーベルを抜き、その切っ先をエレンに向けている。

「お前が……お前がいるから、こんなことにつ……………」

うわ言のようにそんな言葉を呟き、フラフラと歩いてくる。

「ひっ……………いやっ……………」

自分の危機を感じ、エレンは逃げようとする。

しかし、彼女を繋ぐ鎖はその男が持っているのだ。

鎖を引くとエレンの身体は男の方へと引き寄せられてしまう。

男はサーベルを振り上げる。

その研磨された刃には怯えた少女が映っている。

「きゃあああああっ！」

振り下ろされた剣の勢いに思わず目を瞑ってしまう。

痛みには怯え、身体を強張らせるが、何も感じない。

耳の奥に金属音が響いた。

目を開けると、そこに男の姿は無かった。

鎖を引かれる感覚も無くなっていた。

鎖の先には男の腕だけが力なくぶら下がっている。

この腕の持ち主はどこに行ってしまったのだろうか……………などという考えが頭に浮かんだ。

よく動かない頭のまま、正面の広場に視線を戻すと、そこには手を伸ばした魔王の姿があった。

その先を辿ると、黒い大きな剣が片腕の無い男ごと鉄柱へと突き刺さっている。

目は見開き、如何に瞬間的に絶命したかを物語っていた。

「剣を手放したぞっ！　かかれっ！」

それを好機だと踏んだ指揮官は突撃命令を下す。

剣の無い魔王を見て、兵士たちは果敢に飛び出した。

だが、結果は変わらない。

斬殺されるか撲殺されるか。死因が違うだけだ。

ついに処刑台の下まで来た魔王はその勢いのまま地を蹴った。

一跳躍で数メートルの高さを飛び、エレンの前へと降りたった。

「魔王さんっ！」

エレンは魔王に抱きついた。魔王は黙って彼女を抱きしめる。

「ごめんなさい……………私……………」

「気にするな」

魔王は、その瞳に涙を溜め謝る少女の頭をポンと撫でた。

しかし、その様子を見て、不敵に笑う者がいた。

魔王の侵入を許すこと。これも大臣たちの描いた通りのシナリオであつたのだ。

魔王が広場に入った瞬間に魔導師たちに魔力を封じる結界を張らせていた。

その結界がようやく完成をしたのだ。

淡い紅い膜の様な物が広場の空を覆った。

魔王は何が起こったのかすぐに判断し、エレンを抱き寄せ、剣を柱から引き抜いた。

「エレン。目を瞑れ。絶対に力を緩めるな」
「はい」

手枷をはめたまま、彼の首に手を回すと、エレンの身体はいとも簡単に宙に浮く。
片手で支えられているというのに身体は安定しているし、体勢的にも苦しくない。
何よりも抱いてもらっているという安心感がある。

「いくぞ」
「はいっ！」

エレンの返事を聞き、彼は一気に処刑台から飛び降りた。
地面では当然のように兵士が待ち構えている。
相手は魔力を封じた魔王なのだ。名をあげる為に彼らは長槍を向け突進してくる。

「五月蠅い！」

魔王はエレンを抱えたまま、片手で剣を振り、兵士たちをなぎ倒す。
魔力を封じたと言えど魔王は魔王なのだ。その強さはまさに一騎当千。

彼はそのままエレンを抱え、広場を疾走する。
エレンは言いつけ通り、目を固く瞑り、耳だけで広場に響く断末魔を聞いていた。

広場の半分に差しかった所で、空から矢の雨が降ってくる。
いつもなら魔力の壁を使い簡単に払える小さな矢でも今の彼にとっては脅威だ。

魔王は剣を振り、最低限の矢だけを撃ち落としていく。

矢の雨は止まない。それでも彼は走るのだ。

ただひたすら前へと。

後ろからの弓矢を受けながら魔王はそのまま走っていく。

時折、彼は苦しそうなうめき声をあげるが、そのスピードとエレンを抱きしめる手の強さだけは変わらなかった。

広場を抜け、結界を出たところで、魔王はエレンを抱えたまま急上昇した。そしてそのまま森の方へと飛んでいった。

「逃がしたか」

大臣はポツリとそんなことを口走る。

だがこれで終わりではない。森に潜ませた兵士へと連絡をするのだった。

別れと誓い

魔王は城のバルコニーへと着地をする。

だが地に足がついた瞬間にぐったりと倒れかかった。

前に抱えられたエレンにはその体が鉛のように重く感じられた。

「魔王さんっ？」

「だい……じょうぶ……だ」

ゴホっという咳とともに赤いものが口から吐き出される。

血だ………エレンは彼の身体を改めて見る。

さっきまでは抱えられて分からなかったが、彼の背中には無数の矢が刺さっているのだ。

そこからは大量の血が流れ、床へと血だまりを作っている。

「そんな………」

自分のために………エレンは泣きたくなかったが、その頬をバシッと叩いてその気持ちを消した。

泣くことよりも今はこの人を助けたいのだ———
助けなければいけないのだ。

「誰か、誰かいませんか！」

彼女はこれまで無いぐらいの大声を出し助けを呼んだ。
それに応えるように一人の少女が駆け寄ってきた。

「ダルクさん！　魔王さんが………」

「とりあえず、その部屋まで」

彼女とその身体を支えて、魔王を一番近くの部屋まで運びベッドへと座らせる。

「魔王様。失礼します」

そう言うと、ダルクは魔王の身体から一気に矢を抜く。
ブシュっ、という音と血が部屋の中へと響く。

彼女は同じようにして、矢を次々と抜いていった。

その音がするたびに、エレンは心を痛める。

これすべてが自分を守る為に出来た傷なのだ。

エレンはタオルを持ってきて彼の傷口を懸命に押さえる。
自分の身体が汚れるのを気にせずに。

ダルクが最後の一本の矢を抜いた時にはベッドは赤く染まっていた。
彼女も返り血を浴び、真っ赤に服を真っ赤にしている。

そんなことを微塵も気にせず治療道具を用意し、傷口の消毒と止血を開始する。

だがいくら包帯を巻いても、その傷口からは血がにじみ出てきていた。

「ダルクさん……大丈夫ですよね!？」

エレンは居ても経ってもいられず彼女へと話しかける。
だが彼女は黙ったまま作業を続ける。

「ダルクさん………教えて………」

エレンは涙を目に溜めながら強く言う。
その言葉に心を動かされたのかダルクは口を開いた。

「この傷にはある種の魔法が施されていて、ここまで酷いと手の打ちようがありません」

彼女は静かに言った。

「そんな……」

エレンの目の前が真っ暗になる。自分を助けた為に、この人が死んでしまうなんて………

「泣くな……エレン」

いつの間にか魔王は目を開けてこちらを見ていた。それは死にかけているとは思えないほど強い目だった。

「ごめんなさい………私のために」

エレンは泣きじゃくりながら、謝った。

だが、彼はエレンを傍へと寄せると静かに抱きしめた。

「魔王にも寿命がある。私は近いうちに死ぬ運命にあったのだ」

「そんな………」

「だからかもしれない。自分の寿命が近くなり、私は長い人生で初めてこの世界が美しいと感じ始めたのだ」

エレンは彼の言葉に耳を傾ける。

その言葉を脳裏に焼きつけるように何度も何度も頭の中で詠唱しながら。

「そして、そなたと出会った」

エレンの髪を撫でる彼の手はとても優しい。

「今までゴミとしか思っていなかった人間はとても素晴らしいと思
ったのだ。エレン……………そなたの唄はどんな美術品よりも美しか
った」

「そんな……………」

「そして初めて他者を守りたいと思わせてくれた。魔王の私にもそ
んな気持ちを芽生えさせたのだ。そなたは」

魔王の息は荒い。血と一緒に生命力までもが流れ出ている様だ。

「だから今回のことはその礼だと思ってくれていい」

だが、彼の言葉は弱くならない。むしろ先ほどよりも力強いのだ。

「でも！　魔王様は私の……………大切な人なんですよ！　なのに…
……………」

その時であった。

窓が割れる音とともに、部屋の中に何かが飛んできた。

それは矢であった。

先には油が染み込ませてあり、瞬く間に紅の火は部屋を焼いていく。

「きゃあ！」

慌てるエレンをなだめて、彼はエレンをもっと近くまで抱き寄せる。
魔王の周りは不思議と炎に飲まれない。
炎に囲まれても彼は話を続けた。

「大切な人か………恨まれるのが魔王の性ださがと思っていたがな」

魔王は嬉しそうに笑う。その表情は美しいほどに穏やかだ。

「そうです。だから………だから死んじやいや……」

エレンはワガママを言うように彼にすが縋りつく。

そんなエレンの髪を魔王は撫でた。

子供をあやすような、とても優しい手つきだ。

「心配するな。死は終わりではないのだ。代々、魔王は死期に魔力を他者に受け継がせるのだ。そなたが良いと申すならば、私の魔力を引き継いでほしい」

魔力を受け継ぐ、それは一種の同化のようなものである。

力や記憶、そして何より、”魔王”ということを引き継いでしまう。だが、この申し出にエレンはすぐに答えるのだ。「はい」と。

「本当にいいのか？そなたの足枷になるかもしれないのだぞ」

人間を捨てる事、それは今まで当たり前としてきた日常を捨てることだ。

それでも、この人が生きていたという印をこの世界へと残せるのだから。

そう考えエレンは迷いなく答えるのであった。

炎の熱さを感じるようになってきた。彼の魔力が弱まって来たのだろう。

魔王はエレンの額に手をかざすと、目を瞑る。

これから魔力の受け継ぎが始まるのだろう。

エレンは自分の中が熱くなり、同時に数々のモノが流れ込んでくるのを感じた。

これが魔力………その膨大な量に頭の中はパンクしそうになる。だけどこれが彼の存在した証なのだ。

エレンは取りこぼしをしないように、その力を内の中へと留めるよう努力する。

身体を動き回る魔力は徐々に動きを止め、エレンの奥底へと沈んでいく。

すべてのモノを渡し終え、魔王は息を吐く。

ぐったりと下がったその手にはもう先ほどまでの力強さはなかった。

「さあ行け。私はこの城の主として、ここに残る。ダルクはエレンについて行け」

「はい」

ダルクは一礼をし、部屋の外へと出ていく。

残されたエレンは小さく息をする魔王の傍へと寄る。

「私は、あなたのことを一生忘れません………魔王さん………最後にひとつだけ………」

エレンは彼の唇にそっと口付けをした。

そして、静かに口を離す。

一秒ほどの出来事であったが、エレンにとってそれは生涯、最初そして

大切な人との最後のキスとなったのだ。

「さようなら」

涙を見せる事無く、エレンは部屋を立ち去った。

彼女の最期の言葉を聞き、魔王は笑う。

最後の最後にやっと理解できた気がした。

人間がなぜ、ああも美しいものを作れるということ——

力の使い方

兵士たちは少し離れた所から燃え上がる城の様子を確認していた。炎は城全体を包み、城壁は今にも崩れかけていた。

恐れていた魔王の反撃もなく、そこにいた全員が勝利を確信していたのだ。

だが、炎の中から何ものかが出てくる様子を目の当たりにして、その余裕の表情はかき消えた。

そこにいた全員が武器を構えなおす。

そこに現れたのは魔王ではなく、魔女と呼ばれた少女だった。

彼女は細腕に大剣を持ち、それを引きずりながら男たちへと近付いてくる。

「どうする？」

一人の男は戸惑った声をあげる。

「決まってるだろ！ 一人も逃すなどの命令だ」

その言葉が合図になり男たちは弓を引く。

だが放った矢は彼女手前で弾かれてしまった。

まるでそこに透明な壁があるように。

「化け物め！」

男の一人がサーベルを抜き、少女に切りかかる。その一撃が届く手前で男の身体は真っ二つになった。

「ひいっ……………！」

男たちに戦慄が走った。この悪寒、この恐怖。そこで気付くのだ。この少女こそ魔王の成り代わりなのだと。

その後も森に断末魔が響いた。白い雪に絵の具のように塗られた赤い血。

その中心の彼女だけが血に濡れずに佇んでいた。

銀の長い髪を宙に漂わせ、その蒼い目から出た涙は頬を濡らしていた。

遙か遠くの森を焦がす粉塵に王と大臣たちは兵士の報告を心待ちにしていた。

多くの犠牲を出したが、魔王に勝利した国と言えば隣国との力関係にも影響が出る。

今後の国営は明るいと、彼らは信じ切っていた。

「失礼します！」

兵士がいきなり王座へと飛び込んでくる。

「おお、どうした」

勝利の吉報だと思い、王は玉座から乗り出して兵士の言葉を待つ。

「魔女が……街へ！」

その兵士の口から出た言葉に動揺が走る。

「魔女だと……？　魔王ではないのか？」

「いえ、さきほど処刑しようとした少女が城下まで来ています！」

「小娘ひとりに何ができるというのだ！」

現状を見ていない王は激昂する。

しかし、城下は王が想像している以上に悲惨であった。

少女に切りかかる兵士たちは、いとも簡単に両断され、彼女の歩いていく道端には肉片と悲鳴が飛び交う。

その光景を見て町の人たちは我先にと逃げ出す。兵士たちも使命など忘れ、逃げ出す始末だ。

時折飛んでくる矢を払いながら、少女は王城の方へと向かい歩いていく。

「ごほっ……ごほっ……」

「大丈夫か？　くそっ……何故、誰も来ないんだっ！」

牢に閉じ込められた人々は誰も居なくなった牢獄でただひたすら助けを求めている。

外がどうなっているのかは分からない。しかし、これだけの煙が屋内へと入ってきているのだ。

大規模な火災が街で起こっている事はすぐに分かった。

「嬢ちゃん。とりあえず、これで口を塞ぐんだ」

青年は見ず知らずの少女に自分の服を渡すと、それで煙を吸わないように知恵を授けてやる。

「おーいっ！ 誰か。誰か助けてくれっ！」

自分の手が壊れるのも構わずに鉄格子を叩き、叫ぶ。

彼だけではない。その棟にいた囚人すべてが声を上げ、助けを求めている。

煙の量が増え、諦めかけていた時、その牢へと何者かが向かっている事に気が付いた。

悲鳴や騒音がどんどん近くなっているのだ。

その正体が何物かは分からない。けれども、それが普通の人間で無い事はよく分かる。

その気配はおぞましく、囚人たちは助けを求めるのも忘れ、戦慄する。

鈍い音——まるでバケツの水を地面にぶつけたような、そんな音が聞こえた。

地上から転がり落ちてきたのは兵士だった。

その身体は上下に引き裂かれ、まだ生きようと必死なのか、指先は痙攣を繰り返している。

そんな男を乗り越えて、戦慄の中心人物は現れる。

黒い剣を引きずり、ゆっくりと牢の方へと歩いてくる。

剣には大量の赤い染料が付いている。その量が多すぎて、それが血だと理解するのに時間が掛かった。

「うわあああっ……………」

囚人棟は数秒遅れの恐怖に包まれ、囚人たちは悲鳴を上げる。

悲鳴が余程うるさかったのか、少女は剣を振り上げた。

「な、なにをつっ！」

青年は少女を庇うように、彼女を腹部へと抱きかかえ、声をあげる。

「斬られたくないなら、下がって！」

少女はそう叫んだ。その声は想像したものとは正反対の透き通った優しい声だ。

「あ、ああ……………」

その声を聞き、青年は頷く。そして混乱で判断力を無くした囚人たちを鉄格子から離れさせた。

全員が剣の間合いから離れたのを見て、少女は剣を振った。頑丈な鉄格子はいとも簡単に根を上げ、うるさいほどの金属音を響かせる。

逃げ道が出来た牢獄から、我先と囚人たちは逃げだした。

今の状態ならば兵士たちも囚人に構っている時間は無いだろう。

「お姉ちゃん……………」
「ありがとう」

青年に抱えられた少女は笑顔でそんな台詞を言った。

「ここは危険よ。すぐに街を出なさい」

その子の頭を撫でながら彼女は言う。

その手つきも言葉も優しい。これだけの力があるというのに。

「そうさせてもらうぜ。ありがとう」

青年は走り出す。向かう先は彼女に指示された通り、街の外だ。青年たちの後ろ姿を見た後、少女は囚人棟のさらに奥へと向かう。この悲鳴の先には助けるべき人物がいる事が分かっていたから。

その後、少女は牢をまわり、無実の罪で捕えられた囚人たちを助け出していた。

ほとんどの人間が彼女に怯え逃げ出す始末だが、時折感謝を述べる人がある。

そんな人には笑顔を見せ、安心させてやった。

一通りの牢を巡り、数千人の人を助け、彼女は呟く。

「さて、終わりにしないと」

その足の向きは変わる。元凶を討ち払う為に。

国の終わり 獣の声

王室には王と三人の大臣が居た。彼らは身を震わせながら自分の無事を祈りを続けていた。

その恐怖を払拭ふつしょくさせるかのように一番信頼の置ける兵士たちを身の周りに

配置してみたものの、死の気配が近づいている事実は変わらないのだ。

騒音と兵士たちの断末魔がどんどん近づいている。

こんなことならばプライドなど捨て、早い所逃げおけば良かったと思う。

しかし、もう無理だろう。

断末魔は王室のすぐ外の廊下まで来ているのだ――――

ついに扉が破られ、銀髪の大剣を持った少女が姿を現した。

彼女の全身は血でベットリと濡れており、銀の髪と青い瞳だけがその色を変えていない。

それはいつか見た魔王と類似、いや、全く同じものだ。

近衛兵たちは集団で少女へと切りかかる。

しかし彼女の一振りで、兵士たちは個々の断末魔を上げ、絶命する。先ほどまで「王を守る」と心強い言葉を放っていた兵士が、既に言葉を話さない肉塊になっているのだ。

その非現実さを目の当たりにし、頭の中は真っ白になる。

「ひいひい！」

大臣の一人が逃げ出そうと駆け出すが、彼女の横を通った瞬間にその首が無くなった。

宙を舞った首はゴツツという音とともに王の前へと落ちる。
その眼は恨めしそうに、王の顔を眺めていた。

「頼む、助けてくれ……………」

そんな様子を見て、王は泣きすぎる様に命乞いをする。

王が地面に這い、頭を下げるのは初めての事である。

散々、市民や使用人にさせたこの行為が如何に屈辱的であるかを今知ったのだ。

しかし、恥や自尊心などを気にする事も出来ない程、王は追い詰められていたのだ。

大臣たちも同じように頭を地面へと擦りつける。

そんな仕草も言葉も彼女の心には届かなかった。

ただただ自分の命ばかりは助かろうとする、浅はかで愚かな行為しか見えなかったのだ。

だが、少女は剣を振り下ろすことはしない。代わりに唄を歌った。
彼女の歌う唄は、恨みを込めているのにも関わらず美しい。

こんな状況にも関わらず、そこにいた3人は聞き入ってしまった。

しかし、しばらくすると、彼らは身体に鋭い痛みを感じた。

まるで身体の奥底から新たな骨が出てくるような痛みと熱さ。

苦しみの様子を見ながらも少女は歌い続けるのだ。彼らが悶絶するまで。

「ううっ……」

王は重たい身体を起こし周りを確認した。
そこには先ほどの少女の姿は無い。

「助かったのか……？」

疑問と安堵のため息を口にする。

詳しい状況は分からないが、どうやら気絶をしてしまったらしい。
窓の外からは先ほどと同じ位置に月が覗いている事から、時間が経
っていない事を推測できる。

足に力を込めると難なくその身は持ち上がった。
だが妙に体が熱い。喉も異様に渴いている。

よろよろと前進すると、何かを踏んでしまう。

足先を確認すると、そこには毛むくじやらの異形の化け物がいた。
動物と人間の汚い部分だけを混ぜたような、図鑑でも見た事のない
ような生物だ。

体臭も凄まじい。辺りは腐敗したような臭氣に囲まれている。

「な、なんだ！　どこから入ってきた！」

足で蹴飛ばすと、ソレは呻きをあげた。

苦しげな咆哮だ。

「ひいっ！」

王は王室から逃げ出し、廊下へと出た。その頭にはここから逃げ出
すことしか考えてなかった。

とにかく安全な場所へと辿り着きたかったのだ。

城の中には血の匂いがしない所が無かった。壁は紅く染まり、床は
絨毯を引いたように

血の跡が王座まで続いている。

これすべてが”あの少女”の所業だと思いと、血の気が引く。
そして人知れず悔いるのだ。魔王に挑んだ事を。

しばらく逃げ回ったところで兵士らしき人物に会った。

自分以外の”人間”に逢うのだ。王は心なしか早い速度で若い兵士へと近寄る。

線が細く、頼りなさげな面持ちをしているが居ないよりはマシだろう。

いざとなれば身体を盾にしても自分を守ってくれるのだから――

――
だが王の姿を見た瞬間に彼は顔を引きつらせたのだ。

それだけではない。腰の剣を抜くとそれを構えたのだ。

「王に向かって貴様は何をしているのだ！」

そう叫んだ、だが彼はその表情を険しくするばかりで、剣を構えることを止めない。

「ば、化け物め！ 来るな！」

「化け物だと……………」

突如、兵士は王へと切りかかる。剣は王の鼻先をかすめ、空を切る。

「ま、待て……………話を聞け！」

そう叫んでいるつもりであった。だが兵士は迫ってくるばかり。

王はその場から逃げ出すしかなかった。

城の中を走る。後ろを振り向くと、いつの間にか兵士の数は3人に増えていた。

どこに逃げるかなんて分からない。王の足は自然と自分の寝室へと向かっていた。

扉を閉め、鍵をかける。何故自分が追われるのか分からない。

とりあえず、王は喉の渴きを潤すために、洗面所まで近づいた。

考えるのはこの喉の渴きを抑えてからでもいいはずだから――――

その時、水道の鏡に醜い何かが映ったのだ。

瞬間に王は振り向く。だがそこには誰もいない。まさか……

王は恐る恐る鏡を見る。そこには醜悪な顔の化け物が映っていた。それは王座にいたあの化け物と同じ姿をしていた。

「ま、まさか……」

寝室に戻り全身、鏡を見る。そこには化け物がいるばかりで以前の姿など影形なかった。

啞然とする王の背中に、兵たちが扉を壊そうとする音が聞こえてくる。

そしてついに蝶番はメキメキという音を立て破壊された。

そして兵士たちは各々の剣を抜き、異形の怪物へと切りかかる。

王の最期の言葉は獣の咆哮そのものであった。

決着 ―もうひとつの元凶―

エレンの唄は街中に届く。それは心の中の魔性を呼び覚ます唄であった。

その唄を聞いた貴族や富豪は怪物へと変貌していった。自らの心に住まわせた魔物と同じように醜悪で残忍な。

そして彼らの末路は王と同じだろう。

街中に響く、悲鳴と騒音。それはまるで唄のように聞こえた。

そんな唄を聞きながらエレンは森へと入る。

対照的に森の中はとても静かだった。降ってくる雪の音が聞こえそうなくらいに静かだ。

エレンはたどり着いた。魔王の城へと。

城壁は燃えることを続けており、冬とは思えない熱気が顔へと掛かってくる。

今の力を持てればこの火災を消すことなど容易い。しかしエレンはそれをしなかった。

「いいのですか？　すべて燃えてしまいますよ」

いつの間にかエレンの傍に居たダルクは問いかける。

「ここは魔王さんの城。この中のものはすべて彼の物なの」

エレンは静かにそう言う。

その意味を理解したのか、ダルクも黙り、燃える城を見上げる。

城の中にあつた数千という宝玉や絵は炎に巻かれその形を失ってい

く。

エレンの瞳に映る紅の炎はとても綺麗なものであった。彼女はその炎を見つめながら唄を歌う。

それは魔王への鎮魂歌^{レクイエム}であった。

火の粉と唄は北風に乗り、宙へと飛翔し、消えていく。

だが、彼女の心に残った魔王との思い出は消えないだろう。

この血の臭い、炎の熱さ、心の痛み、すべてを忘れないようにしよう。

それがあの人が存在したという証なのだから……………

「ぐっ……………」

急にエレンは跪き^{ひざまず}、両手で肩を抑える。

「大丈夫ですか。エレン様？」

「からだ…………が、熱い…………」

まるで高熱を出した時のように節々が痛みだし、頭は何かが暴れ回っている様にズキズキとする。

「魔力の暴走^{ちから}ですね。すぐに休息を……………」

魔王に成り立てであるそこまでの魔力を使ったのだ。こうなるのは明確であった。

ダルクはエレンを介抱するために横にしようとする。だが、その前に黒き森の中を睨んだ。

「エレン様。少しお待ちを」

ダルクは落ちていた兵士の剣を拾い上げると、それを何も無い空間へと投げる。

「ひゃああっ！ 相変わらず怖ええな」

その声はエレンも聞いた事があった。

「出てきなさい。アイキョウ」

ダルクは今まで見せた事の無いほどの目つきで森を睨む。

「くっくくっく」

それに応じ、森からは老人が出てきた。

「何しに來たのですか？ 用が無ければ去りなさい」

「用？ あるぜえ。アンタにじゃなくて、その譲ちゃんにな」

アイキョウはダルクの後ろで横たわるエレンを指差す。

「見てたぜえ。その譲ちゃん魔王の力を受け取っただろ？ それが欲しくてなあ」

男は不気味に笑う。その挑発的な行為にもダルクは冷静だ。次の行動をするために地面の剣を拾う。

「そんなことはさせません。アナタごとき、私が消します」

「そうか。じゃあ、やってみな。キキ……………」

アイキョウは構える。ダルクの向ける尋常じゃない殺気にも動じて

いない。

どちらも本気でやり合うつもりらしい。

「ダルクさんっ！」

エレンは彼女の身を案じて声を上げる。

「大丈夫です」

振り返らず、彼女はそう答えた。

そして、地を蹴り、男へと刃を振りかざす。

「甘えっ！」

斬撃は速い。しかしダルクが斬ったのは鏡。

その後ろには何もいない。

アイキョウは身をひるがえし、空中へと逃げたのだ。

「逃がさない！」

ダルクは追撃姿勢に入る。地を蹴り、空中へ飛翔する。

人間の時なら目にも止まらない二人の動きにも今はついていけるのだ。

エレンはアイキョウを見失わないように、二つの眼でしっかりと捕える。

「さあ、コイツを使わせてもらうぜえ！」

ダルクの眼にはアイキョウが懷から何かを取りだしたのが見えた。エレンもその様子を見逃さない。

彼が取りだしたのは手鏡。一度見た事がある。
自分が誤って割ってしまったものだ。
なぜあんなものを……………

「ぐっ！」

ダルクはその鏡を出された意味を瞬時に理解し、バックステップで間合いを離そうとするが遅かった。

手鏡から出た光がダルクの身体へと当てられる。

瞬間———彼女の姿は消える。

ダルクはエレンの目の前で吸い込まれてしまったのだ。鏡の中へと。

「ぎやはははっ！ 良い様だあ。クソアマがあ！ 俺と同じ気分を味わいやがれ！」

アイキョウは狂喜乱舞し、鏡へと罵声を掛ける。

「ダルクさんっ！」

エレンは起き上がろうとするが手足に力が入らない。
それでも目だけは懸命に前を向けた。

「くっくくくく……………スマンなあ、お嬢ちゃん。折角、あっしを出してくれたというのになあ」

「ダルクさんに何をしたのっ！」

「なあに。少し閉じ込めてやっただけさ。まあ、一生出て来れないかも知れないがなあ」

「ダルクさんを出してあげて！」

エレンは声を張り上げ、アイキヨウと対話する。

エレンの怒りを受け流すかのように、彼は不気味に笑うのだ。

「出してか……………それはならねえなあ。なんせ、アンタを殺すには邪魔だからなあ」

「殺す？ なぜ……………」

「おいおい。お嬢ちゃん。アンタ自分の貰ったものの価値を理解してないのかい？ その力は魔族にとっちゃ喉から手が出るほど欲しいモノなんだぜい？」

アイキヨウは”魔王の力”の事を言っているのだろう。

「魔王の旦那は寝首を掻いても殺せねえが、今の魔王ならなあ」

動けなくなったエレンに侮蔑の表情を向けるアイキヨウ。その笑い方は腹立たしい。

「そんなにカッカするなってえ。アンタには感謝するんだぜ？ アンタが勝手に旅立って、勝手に捕まってなければ魔王の旦那は死ななくて済んだんだからなあ」

「そんな……………」

自分のしてしまったことは理解していたつもりであった。しかし、その原因を改めて付きつけられた時、その重さが心を押しつぶすのだ。

「無駄話してても、なんだ。さあて、最期の仕上げとするか」

アイキヨウは余裕の笑みを浮かべ、エレンを見る。
表情は大して変わって無いが、殺気が伝わってくる。

「くそっ……………」

危機を感じたエレンは剣を杖代わりにし、立ち上がる。

だがそれ以上の行動はできなかった。逃げる事も戦う事もできないのだ。

「その眼……本当に魔王なんだな……………くくく……………」

アイキヨウは自分の絶対的有利な状況でもその眼光を見逃さなかった。

目の前に居る少女は紛れもない魔王なのだ。このまま飛び込んで一撃でも浴びたら自分の死は確実。

だからこそ近づかない。

彼には目立った能力などない。だがどんな魔族よりも狡猾ことうかつだった。そしてその知恵は今の状況でも生かされるのだ。

アイキヨウは正面に鏡を作り上げた。その鏡はパズルのピースのように分割される。

「っ！」

エレンは咄嗟に構える。彼が何をするか分かったから。その思考と同時に鏡はエレンに向かって飛んできた。その先端は鋭い。容赦なく彼女の肉を引き裂くのだ。

「がはっ……………」

両手両足に貫通するほどの刺激を受け、エレンは膝を落としそうになる。

一瞬構えるのに遅れていたら部厚い鏡の破片は首筋を貫いていただろう。

痛い——エレンはこんな痛みを生涯感じた事が無かった。

それもそうだろう。人間ならばとくに死んでいる程の傷を受けたのだ。

彼女が生きていられるのは体中に満ちた魔力のおかげであった。

「まだ死なないとは、やるねえ！ たかが人間の癖に」

アイキヨウは上機嫌に笑う。

エレンはアイキヨウを睨む。唇を噛み締め、ガクガクと碎けそうな足を必死に支えるのだ。

「苦しいだろお？ 今、楽にしてやるからなあ」

アイキヨウは先ほどと同じように、自分の前に鏡を出現させる。あれが飛んで来れば、今度こそ死ぬ——

「はあはあはあ……………」

エレンは渾身の力で剣を持ち上げる。

剣閃も視線も定まらない。足腰にはもう力は残っていない。けれども——諦めることはできないのだ。

「死ねえっ！」

声と共に鏡がエレンを目掛けて襲ってくる。

その迫力に思わず、目を瞑った——

普段の時間間隔ではもう痛みは自分の全身を襲っている筈だった。けれど、痛みも他の感覚も無い。

もしかしたら、もう自分が死んでしまったのではないのか、と錯覚するほどであった。

目を開けると、そこは白い雪に覆われた森であった。

上に見える空からはゆっくりと雪が降り注ぐ。

息を吸えば、肺へと凍えた空気が侵入してきた。

白く凍える息を辿り、ふと、横を見ると魔王の姿があった。

「エレン。傷だらけだな」

彼は、優しく頬へと触れる。その体温は世界と異なり温かい。

「魔王さん。ごめんなさい……………」

エレンは彼の顔を見ずに頭を下げる。

「ふっ。まだ謝るか」

魔王はゆっくりとエレンの手を取った。

「後悔などいくらでも出来るぞ。長い人生になるからな。今は生きる事だけを考えろ」

「で、でも、私はこんなに傷だらけですし、身体も——」

「大丈夫だ。お前は奴になど負けない。ゆっくりとだ。ゆっくりと
魔^{ちから}力を解放しろ」

魔王は後ろからエレンの手を握り締め、魔剣を再度構えさせる。

「魔王さん……………」

エレンは目を閉じ、集中する。

彼から与えられた言葉は少なかった。

しかし、気持ちを奮い立たせるにはそれだけで十分だった。

深く息を吐き、目を開ける。

目の前には鏡の弾丸が映る——

そうだ。

冷静になれ。

エレンは自分に言い聞かせ、剣を振る。

大剣の風圧に飛ばされ、鏡は空中で粉々になった。

「なっ……………まだ、そんな力がっ！」

勝利を確信していただけに、アイキョウの驚きはとてつもなく大きかった。

その隙を逃す訳にはいかない。

エレンはなりふり構わず、前へと出る。

「はぁぁぁぁぁあっ！」

「くそっ！」

その気迫に押され、アイキヨウは鏡を正面へと出す。

構わずにエレンはその鏡を一閃する。だが、その後ろに男の姿はない。

「ぎぎぎぎ………小娘と侮ったが、さすがは魔王の力——」

後ろからの飛来音。咄嗟に振り向き飛んできた鏡を割る。

また別の方から——

今度は回避に失敗し、肩口を切られた。

「ククク………」

一度は驚かされたアイキヨウだったが、すぐに違う戦術を練り、エレンを狙う。先ほどよりも慎重に。

「アンタには驚かせられたが、今度こそ終わりだなあ………」

360度、どこから飛んでくるか分からない攻撃に対処する手立てなど

エレンには無い。

けれど、やることは何となく理解していた。

「地獄に行ったら魔王の旦那によろしく言っといてくれよ………」

（集中しろ——）

心の中からはそんな声が聞こえてきた気がした。
はつきりしなく幻聴かもしれない。

エレンは目を瞑る。

そうすることで視界は暗転する。

これでいいのだ。不可視の相手に視界などという情報は煩いだけだ。

聞くのだ――――

地を踏みしめる音――――

空気を裂く音――――

これらは自分の紡ぐ唄と何が違う――――

唄。それは自分の真後ろからするのだ。

そしてそれはアイキヨウへの鎮魂歌――――

一筋の剣閃と断末魔。これが楽章の終焉の合図であった。

「ギギギ……………俺があ、人間なんかにい……………ががががあっ！」

アイキヨウは醜い悲鳴を上げ、この世から完全に抹消された。

「はあはあはあ……………私は……………魔王だっ！」

エレンはそう叫んだ。

そして彼女の視界は歪む。身体が落ちてるのも分かる。

しかし、その身体は地面へとぶつかる前に柔らかい物に支えられた。

「申し訳ありません。エレン様。すぐに治療を致しますので」

目はもう見えなかったが、その声がダルクのものである事はすぐに

分かった。

「ダルクさん……よかった。無事で……ごめんなさい。少し寝ます——」

「ええ。ごゆっくり」

ダルクは自分の胸の中で寝息を立てる少女の頭をそっと撫でた。

エピソード ― Journey ―

森の中はすでに冬を越え、春を迎えていた。

雪を掻き分けて花々は芽を出し、動物たちは冬眠から目を覚ます。春、それは始まりの季節。当然人間にとっても――――

森の中には一台の馬車が止まっていた。

「ふう、こんなもんな」

銀髪の少女は馬車の荷台へと荷物を積み込む。

「少し積みすぎではないでしょうか？」

隣にいる黒髪の少女は心配そうな面持ちで荷台を見た。

「いいんだって、長い旅になるんだから」

「それならば現地調達でいいのかと……」

「あゝ。ダルクちゃんは心配性なの」

「そうでしょうか。それよりもダルクちゃんとは」

黒髪の少女は不思議そうな顔をする。

「だって、ダルクちゃん。私より年下でしょ？」

「はい、4ヶ月目ですの」

「だったら、いいよね？」

「……命令とあらば」

その言葉を言う前に時間が開いたのは明確だった。

「あと、敬語とか礼儀も禁止ね！」

「分かりました。エレン様」

「だから様付けは無しだって！」

エレンは銀の髪をブンブンと振り分けて、ダルクへと注意を喚起する。

「私たちは家族なんだから、ね」

エレンの笑顔にダルクは黙って返事をするしかなかった。

荷物も積み終わりダルクは黒馬の手綱を取る。

荷台にはエレンが乗り込んだ。そこには水や食料、そしてこの森で取れた花々の種が大量に乗せてあった。

「それでどこへ向かうのですか？」

ダルクは聞く。

「うーん。決まってないや」

エレンはそう答える。

幸先不安になる答えだったが彼女の表情は楽しそうであった。

「まあ、目的は決めてるんだけどね」

「目的？」

「うん、もちろん世界征服でしょ！」

馬車は2人を乗せ、森の中を抜けていく。そこからは美しい歌声が響く。

その後、世界各地で唄を歌う魔王の姿がたびたび目撃されたらしい。それはまた別のお話である。

エピローグ ― Journey ― (後書き)

「魔王の歌姫」をご愛読して下さった皆さん。

この場を借りて感謝を述べたいと思います。

皆さんのおかげで連載を最後まで続けることができました。

ありがとうございました。

続編予定など詳しいことは活動報告にてお伝えしたいと思うので
今後”千ノ葉”をよろしくお願いします。

荒野の歌姫

荒野の真ん中を馬車は砂煙を上げながら走っていた。その荒々しい運転に似合わず、運転席には可憐な少女の姿があった。長い黒い髪を風になびかせ、手綱を取る姿は大人顔負けな程、凜としている。彼女が鎧でも着ていれば、どこかの名家の騎士だと間違われるだろう。しかし彼女の服装と言えば、白のフリルのついた黒いメイド服なのだ。従者が馬車を操るのは分かるが、彼女のようなメイドを連想させる人物が運転する馬車は珍しいだろう。

「ダルクちゃん……………暇あ……………」

彼女の背後から別の少女が顔を出す。その表情はいかにも気だるそうだ。

「お昼寝でもしたらどうですか」

ダルクと呼ばれる少女は彼女のことは見向きもせず、無関心な声でそう言う。

「さっきまでしてたんだよ」

馬車から顔を出した少女は銀の髪を風になびかせながらそんなことを言う。

「暇だし、運転変わってよ」

「エレンの運転は荒いので、ケンブスも嫌だと言っておりますが」

ダルクは静かに答える。それに同意するように黒馬もヒヒーンと声をあげた。

「うわぁ、ケンブスまでも嫌われてるのかぁ。私……………」

少女は頭を垂れる。だがその落ち込みも束の間、窓から這い出し、走っているにも関わらず荷台の上へと飛び乗る。

エレンは黒いドレスのスカートを抑えながら周りを見渡した。

「何か見えますか？」

ダルクは運転席からそんなことを聞く。

「ううん。岩と砂ばかり……………」

エレンが言う通りこの辺りの荒野には何もなかった。最後の村に立ち寄ってから既に三日が経っている。夜を除いて走り続けているというのに村一つ見えない。

（やはり勘に頼ったのは間違いだっただけかなあ……………）

エレンは一面の荒野を眺めながら、そんなことを思った。でも後悔したところで今更仕方が無い。今、彼女に出来ることは馬車の上から少しでも早く面白そうな場所を見つけることであつた。

それから数刻が経ち、夕闇も迫り野宿を覚悟したその時、エレンの目には人工的な明かりが飛び込んできたのだ。

「ダルクちゃん！ 西見てよ。明かりだよ、明かり！」

エレンは興奮したように馬車の上から騎手席へと声をかける。

「では、進路を変更します」

「わっ！」

ダルクの手綱捌きによりケンブスは西へと向きを変える。勢い余つてエレンは馬車から振り落とされそうになった。

「まったく、ケンブス！ もっと主を気遣いなさい！」

漆黒の馬は叱咤するエレンの言葉を無視するように荒々しく足音を立てる。そんな仕草に腹を立てながらも、エレンを乗せる馬車は着実に明かりのほうへと近づいていった。

数分後、その明かりが街のものであることが確認できた。大きな都市ではないが宿と食べ物補給は十分に出来るだろう。

「まずはシャワーを浴びたいなあ……………」

エレンはドレスの胸元をパタパタしながらそんなことを呟く。

「あと、食事も。ここの特産品はなんだろう？」

一度始まった妄想は止まらない。彼女は目を輝かせながら馬車の窓から街を眺めていた。

二人を乗せた馬車は街のゲートをくぐる。まず目指すは牧舎付きの宿屋だ。エレンたちのように馬車で旅をする人は多いので、この

ぐらいの街には一、二件はそのような宿があると決まっている。

案の定、すぐに宿は見つかる。二人と一匹分の宿賃を払い、二人は部屋へと入る。なかなか高価な宿だけあって部屋の中もちゃんとした造りをしている。清潔にメイキングされたベッド、そしてシャワールーム、トイレまで完備されている。

「どしゃああああ！」

エレンは部屋に入るや否や、ベッドへとダイビングする。それは宿に入るときの定例行事であった。以前、安宿でそれをやったらベッドの底が抜けて弁償させられたこともある。だが、彼女いわく？
譲れない行為”らしく、エレンは止める気配を見せない。

「エレン、シャワーを浴びたらいかがですか？」

「あつ、私、先でいいの？」

「ええ。私は街の中を見てきますので」

「じゃ、よろしくね」

エレンはそう言って衣服を脱ぎ捨て、シャワールームへと入っていく。それを確認するとダルクは部屋を後にした。

それから数分、ダルクは街のメインストリートを歩いていた。食事の時間というだけあって、飲食店にはたくさんの人々が群がっている。だが目的としていた旅用品を扱っている商店は閉まっている。どうやら時間が遅すぎたらしい。

引き返そうとしたその時だった。背後から不穏な気配を感じたのだ。

「ダルクちゃん、見つけ！」

そんな声と共に少女が空から降ってくる。

「エレン。場所をわきまえて下さい」

彼女は周りの人の様子を伺いながらダルクは注意を促す。幸い着地の瞬間は見られていないので騒ぎにはなっていない。しかし、こんな町中で大声名前を叫ばれるのは勘弁だと思ふダルクである。

屋根の上を渡ってきた少女の髪はまだ濡れている。おそらくお風呂
呂上りの運動ってところなのだろう。

「で、何か用ですか？」

ダルクは無感情にエレンへと聞く。

「ん……街中を歩いていたら、ダルクちゃんだ！　って思って」

「歩いてきてはいないと思うんですけど」

「まあ、細かいことは気にしないで」

そういつてエレンはダルクの腕へとしがみ付く。

「ダルクちゃん、目立つよね。こんな美人さんだものね。一発で分かっちゃった」

彼女の言うことも一理ある。ダルクのようなメイド服を着た少女がいれば視線も彼女の方を向くというものだ。その理由だけではないが、彼女は極力、他人の視線を避けて移動をしているのだ。

「そういうエレンはもっと目立つと思います」

そんな配慮はエレンにすべてぶち壊されてしまう。彼女の透き通ったような声と、その黒いドレスが通りの人々の視線を釘付けにしているのだ。まあ本人が気にしてないのならいいのだろうが………

「ダルクちゃん。お食事しよ！」

そういつて、エレンは相方の少女の手を引っ張り、近くのPUBへと入っていく。

ドアが開いた瞬間に、客人たちは店に入ってくる二人の姿に驚く。それはそうだろう。酒場にとって彼女たちのような客層は珍しいのだから。

そんな視線を気にせず、エレンはカウンター席に腰を下ろした。

「おいおい、お譲ちゃんたち、ここは酒場だぜ」

隣の客人が早速、茶々を入れてくる。

「ん？　わかってるけど？」

エレンはそれを当然のように返す。

「ダルクちゃん、何がいい？」

「そうですね——」

「ミルクなんかいいんじゃないか？」

突然、外野から聞こえてきた声に店の中は笑い声に包まれる。

「あー、そうだね、お風呂上りのミルクもいいかも——」

エレンの発言にまた店の中が沸く。

「エレン、私たちはからかわれたのだと思いますけど」

ダルクは気が付かないエレンに皮肉の意味を説明する。

「ああ、そういうことか——って、馬鹿にしないでよ！」

彼女は怒るが、頬を膨らます、あどけない怒りの表情は客人の笑いを誘うだけであった。余程、頭に來たのかエレンはカウンターをドンッと叩いて、

「マスター、ここで一番強いお酒持ってきて！」

そう叫んだ。

「おい、讓ちゃん、止めときなって……」

マスターも心配そうにエレンのことを見る。しかしエレンは頑なに注文する姿勢を止めない。しかたなくマスターはジョッキの三分の一ほどのお酒を用意する。それはここでは強酒と知られるもので、酒を飲めないものが一口含めば、それだけで気絶するという代物であった。

エレンはそのジョッキの透明な酒をじっと見つめる——そして、一気に喉へと流し込む。

「お、おい！」

マスターは慌ててエレンへと駆け寄る——

「うええ……変な味……」

だがマスターの心配を他所に、エレンは渋い顔をするだけであり、そんな仕草は酒にやられたとは到底思えない。

「おい、マスター何百倍に薄めたんだ？」

「い、いや……」

困惑するマスターを他所にエレンの隣へと屈強な男が座る。

「どうだ、讓ちゃん。酒の味は？」

「美味しくない……」

「はっは、まだガキには早いってことだ」

だがその男の挑発はエレンの闘争心に火をつけてしまった。

「マスター、この人と同じものお願い！」

エレンはムキになりマスターに注文をする。

「おいおい、こいつは結構強いぜ？　それとも俺に勝つつもりか？」

「そうよ！」

エレンは男に食って掛かる。

「あとで泣き面見せるなよ」

こうして、男とエレンの戦いは始まった。前代未聞の勝負が起るということで酒場の中はかつてないほどに盛り上がっていた。

客たちは興味本位で二人の様子を見る。そんな中、ダルクは一人離れた席で特性ピザを頬張っていた。

「おい、いいの？　お連れさん」

「ええ、エレンは負けませんから」

二人が並んだカウンターに酒が持つてこられた。男は先手必勝とばかりにそれを一気に飲み干す。エレンもそれに続き、ジョッキを空にする。そしてすぐに二杯目が持つてこられる。

しばらくは兩人とも互角な勝負が繰り広げられていた。しかし五杯目に突入したところで屈強な男は椅子から転げ落ちた。

「あれ？　もう終わりなの？」

その瞬間、客から壮大な拍手と歓声を送られる。

「マスター。鼯^{ひつき}肩してんじゃねえ！」

とか、

「次は俺と勝負しようぜ！」

とかギャラリィから声が飛ぶ。

「よーし、次の相手こいやーっ！」

エレンはその雰囲気が悪乗りして男たち挑発する。それに乗ったかのように次々と男がカウンターへと寄ってきた。ダルクは楽しそうに酒を呷る少女を見て、ため息を付くのであった。

それから数時間後、エレンの背後には潰れた男たちの山が出来ていた。

「お客様、お願いですから、お帰りください」

マスターは頭をエレンへと下げる。これ以上やれば明日からの営業に支障をきたすと判断したのだろう。半ば追い出されるようにして二人は店から出た。

「あっ、結局、何も食べてない！」

エレンはハツとしてストリートの店を見るが、どこもクローズの看板を下げている。

「ダルクちゃん」

隣の少女にすがりつくが、「自業自得です」そう言って彼女は宿のほうへと向かって歩き出す。

「そんなー」

「宿に行けば保存食を食べられますよ」

「あの乾燥肉は飽きたよ！」

エレンはその場で地団太を踏む。だがそんな行為は余計にお腹を減らすだけであった。

街道　―新たな旅路―

朝が来る。鳥の声とともにエレンは目を覚ました。久しぶりにベッドで寝たおかげで身体の調子も良い。彼女が部屋の中を見渡すとダルクが静かに縫いものをしている。窓から射す朝日の下、黒髪の美少女はいつも以上に神秘的に見える。彼女が針を通すたびに、少しだけ黒い髪がふわりと宙を舞う。

声をかけるのを少しためらったが、ダルクが少し視線を変えた事に気づくと、エレンは彼女へと朝の挨拶をする。

「おはよう。ダルクちゃん」

「おはようございます」

彼女は静かにエレンへと頭を下げる。まるで水が流れ落ちる様に自然で優雅な挨拶だ。

「何を縫ってるの？」

「エレンのドレスの裾がほつれていたの」

そうだ。彼女が持っているのは自分のドレス。昨日まで着ていたものだ。

「そんなのいいに。毎回動き回るんだから、キリがないよ」

エレンは毎度のようにこう言うのだが、ダルクにとってドレスの手直しは日課のようになっていた。それに無駄な行為では決してない。ダルクがドレスを修復しなければ、エレンは三日に一度はドレスを新調しなければならぬのだから。

「そんなことより朝ごはん！」

「はいはい」

エレンはいつものように自分の欲望に正直に答え、そんな声を上げた。ダルクはエレンが耐えられなくなり部屋から飛び出す前に椅子から立ち上がった。そして、化粧台の前に置いた自分の手荷物からブラシを取り出した。

「エレン。髪をとかすのでこちらへ」

「うん。お願いね」

ダルクはエレンを椅子に腰掛けさせると、その髪に櫛を入れる。無秩序に反乱を繰り返していた彼女の髪は驚くほどすなりと櫛を受け入れ、すくたびに銀の髪は朝日を反射し光り輝く。その柔らかさは生まれたての朝日のようにも見える。

「終わりです」

ダルクの言葉を合図にエレンは椅子から立ち上がる。

「よし。おいしい朝ごはんを調達だ！」

エレンはドレスに袖を通すと、すぐに部屋を飛び出した。ダルクは慌てず、身の回りの整理をした後、飛び出した少女の後を追うのであった。

宿を出ると涼しい風が頬を撫でる。そんな清々しさが彼女に自然と背伸びをさせる。朝という事で昨日開いていた店にもカーテンが引いてある。もしかしたらちょっと早めであったのかもしれない。まあ、自分たちと同じで少し早起きな店もあるだろうと、エレンは足を進める。たまに会う小鳥に挨拶をしながらストリートを歩くと、料理屋の群衆を見つけた。幸運な事に何ヵ所かの店には「OPEN」の看板が掲げてある。

「さてと。どこに行こう？ どこがいい？」

「どこでもいいですよ」

エレンがうきうきして店を選ぶのに対し、ダルクは呆れた声でそんなことを言った。

「もう、毎回それなんだから！ じゃあ、私が責任もって美味しそうな店を見つけるから！」

勝手にそう決意したエレンは上機嫌に店を探す。そして良さそうなカフェを見つけるとそこに急行した。オープンテラスのテーブルに

座ると、彼女はメニューの隅から隅までを確認する。

「おっ、ここ、美味しそうだよね？」

メニューも見せずにエレンはダルクへと質問する。答えようがないが、とりあえず頷いておく。ダルクはエレンほど食事にこだわってはいないし、エレンが食べたいものを食べさせたいとも思っていたから。

「じゃあ、座って」

エレンは椅子を引くと、ダルクを座らせた。そしてメニューを開く。もちろんダルクにメニューを押し付けるのも忘れていない。

「ダルクちゃん。決まった？」

「はい」

「私は――この三色サンドイッチでいいかな。ダルクちゃんは何を頼むの？」

「私はモーニングコーヒーのみで」

「えーっ！　ちゃんと主食も頼みなよ！　コーヒーだけじゃもたないよ？」

エレンはダルクの鼻先まで顔を近づけ、彼女へと言葉を発する。だがダルクは眉一つ動かさない。

「宿の保存食を食べたいと思いますので」

保存食といってもいつまでも食べなければ当然悪くなる。エレンの食べ飽きた保存食の処理は決まって彼女の仕事であった。

「だーめ！　店に寄ったんだからちゃんと注文しないと！　返事は？」

「はい……」

エレンの押しにダルクは「はあ」と、ため息をつき、再びメニューに顔を近づける。

「んー。んんんー」

あろうことか、エレンも再びメニューを持ち、悩みだす。そしてすぐに、メニューを木製のテーブルの上に置いた。

「このアンチヨビサンドなんていいんじゃないかな？　ダルクちゃ

ん食べれくないよね？」

「はい。大丈夫です」

「じゃ、決まりで——すいませーん！」

エレンはメニューが決まり次第、店員を呼ぶ。いつものことながらダルクは彼女の行動力に呆氣に取られてしまうのであった。

「はあー、美味しかった」

店から出るとエレンは満足げな笑みを零す。そんな彼女と引き換えダルクは無表情である。機嫌が悪い訳ではない。これがダルクという人物の普段通りの表情なのだ。

「さてと、これから何しようか？ 買い物？ お昼寝？」

「買い物はこの先に大きな町があるそうなので、そこでしたほうがいいでしょう」

さすがにダルクもお昼寝宣言に対しては何も答えない。

「そっか。じゃあすぐに出発しちゃう？」

エレンは大きな町というフレーズに興奮したのか、目を輝かせながらそんなことを言ってきた。こうなればエレンが止められないことをダルクは知っている。急ぐ旅ではないが旅費などを考えると無駄な町に長居するのは賢くない。ダルクはそんな計算を巡らせ、彼女の意見に同意するのであった。

先ほどの集落でお昼ご飯を買い込み、エレンたちを乗せた馬車は街道に行く。荒野とは違い整備された道を馬車は快走していく。草原が近いのか植物や動物の数のだんだん増えて行っている気がする。

エレンはいつものように馬車の上に上がり、遠くのほうを見つめた。

「エレン、町はまだまだ先ですよ」

運転席からダルクは屋根へと声をかける。

「うん。分かってる。でもこうやってると、風がいろいろな匂いを運んでくれるんだよね」

ダルクの鼻には何も感じない。乾燥した空気だけが鼻腔から肺へと進入していく。エレンが何を感じているのか彼女は理解できなかった。

「あー、また難しそうな顔してる。こういうのは雰囲気で匂いとか感じ取るものなんだよ」

エレンは無表情な彼女に笑顔を見せ、そんな言葉をかけた。ダルクはもう一度、舗装された道を見る。なるほど――確かに雰囲気はある。街から来たのか行商の馬車や警備兵の一団と頻繁にすれ違うようになっていく。確かに賑やかになってきているのだ。これはこの先に待つ街の吐息のひとつかけらだろう。ダルクはエレンが屋根に登り遠くを見つめる行為の意味が少し理解できた気がした。

街の名はダルゴン

夕刻前に目の前には街のゲートが見えてきた。夕焼けと同じ茜色に染まる門は遙か遠くにあるというのに、その姿を現している。その門の作り、大きさからして大層大きな都市である事が分かる。

「うわぁ……本当に大きい街だね」

エレンはただただ好奇心に身を任せて興奮しているようだが、ダルクの考えは違った。こういう街に入る場合、通行料や荷物チェックなどいろいろと面倒事は避けて通れないのだ。大抵の場合、門番が金を持ってそうな旅人を見つけては何癖を付けて、賄賂を要求してくるのだ。そういう事態が起こった場合、面倒くさい。その回避方法を頭の中で計算していた。

「エレン。ゲートが近づいています。降りてください」

「あっ、はい」

エレンは言葉を素直に聞いて、荷台へと降りてくる。彼女が荷台の窓から外を眺めると、人、ヒト、ひと……まるで河のように通行人が緩やかに列を成している。

夕刻前ということもあり、門の前には人々是我先にとゲートに近づこうと試みている。それもそのはずだ。街の近くとは言えど、夜の野外には魔獣が徘徊しているのだ。そんな危険な野宿を避けたいと思うのが当然である。

「すごいね。これだけの人が居るのに、どんどん進んでるよ」

「ええ。この街の収容力は並外れているみたいですね」

小さな城塞都市などでは旅人の数に制限が設けられており、門前で締め出されるなんていうこともしょっちゅうだ。外壁の外で野宿をする人が多くなれば、旅人をターゲットとした露店などが横行する。しかし、ここには露店はおろか、野営の準備をする人が誰一人として見当たらない。

ダルクが列に目をやると、いかにも貧しそうな人々が所々にいる。

おそらく異国からの移民が行く当てもない浪人だろう。他の街では一目で入場を拒まれる人々が堂々と並んでいるのだ。「随分懐の広い街だ」と、ダルクは呟いた。

人の列に並んで数分。エレンたちの入場審査の順番が回ってくる。鎧で身を包んだ兵士三人が馬車を停止させるように言ってきた。

「パスを見せろ」

男は感情の籠っていない声で要件を言ってくる。

パスというのは一種の身分証明書で、この国では旅をする場合での携帯が義務付けられている。パスには名前、生年月日、出身地など個人情報書き込まれているのだ。

ダルクはエレンの分と二人分の羊皮紙を見せる。これがパスだ。男はパスを受け取ると、ダルクの顔をマジマジと見る。そこに書かれた情報と彼女らの特徴を比べているようだ。とは言っても書いてあるのは年齢と性別と人種程度なので、それだけで判断できているとは言いがたいだろう。

「よし、荷台を調べさせてもらおうぞ」

今度は他の男に指示をし、荷台を調べさせるようだ。これは主にパスを持っていない密航人を見つけるためだ。

「こんにちはー」

エレンは荷台に乗り込んできた男たちに脳天気な挨拶をしている。当然の如く、その挨拶は無視された。

荷台で大方の荷物を調べられた後、許可が下り、二人の馬車は街へと入っていく。随分簡単に通れたというのが率直な感想だ。

「えへへ。偽造パスって便利だねえ」

エレンは荷台の窓から顔を出し、満足そうにそんなことを言う。

「エレン。まだ門が近いですよ」

「ごめん。ごめん」

ダルクに釘を刺され、エレンは両手で口を抑える。

そう、このパスは偽造なのだ。なぜなら二人に通常のパスは発行できないから。パスは通常出身地証明が必要なのだが、ダルクもエレ

ンもそれができないのだ。だからこそ、三年前からこの偽造パスに頼って旅をしている。とはいっても精巧な偽造ではないので、バレて街を追い出されることなど多々あるのだが。

「でも、よかった。折角、久しぶりの大都市に來たのに追い出されるのは嫌だからね」

「そうですね」

ダルクはエレンの会話に応えながら、街の中の様子を確認していた。都市部という事もあり、工場やいろいろな店が立ち並んでいる。今歩いているのはおそらくメインストリートなのだろう。夕焼けに染まる街の中を様々な年代層の人々の群れが動いている。ここなら路銀を稼ぐことも可能だろう。

「あっ！ あの店、美味しそう！ あとで行ってみよ！」

ダルクが真剣なことを考えているのにも関わらず、エレンはいつもと同じように食べることに、楽しいことばかり考えているらしい。彼女はそれに半ば呆れながら馬車を走らせ、宿を探すのだった。

夕暮れ時で宿を探すのは困難であると思っていたが、その思考は杞憂に終わった。苦労もなく馬屋付きの宿は見つかったのだ。決して値段は安いとは言えないが、この部屋の造りならば文句も言えないだろう。部屋の中は明るい装飾と清潔なベッドが二つ並んでいるシンプルな構造だ。先日泊まったあの宿よりは遥かに綺麗で、居心地がいい。

手荷物を置くとエレンがダルクの顔を見つめてくる。その表情からして何か待ちきれないようだ。

「ダルクちゃん。さっそく——」

「ええ、何か食べに行きましょうか」

ダルクはエレンの考えを見通し、彼女が気持ちを発する前に自分の口で代弁した。

「やったっ！」

余程嬉しかったのか、エレンは両手を胸の前に構え喜びを表す。もちろん顔には笑みが浮かんでいる。もし許可をしていなかったらエレンはどんな顔をしたのだろうか。

エレンはダルクを急がせるように、ストールを首に巻き、部屋を出た。いつもならばダラダラと支度をするというのに、食べ物が絡むと人が変わったように素早くなる。その単純な思考に呆れながらも、ダルクは後を追う。急がなければエレンに全財産を食べ物に使われてしまう恐れすらあるのだから。

都市の名前はダルゴン、この国で四番目に大きい都市だと宿屋の主人に教えてもらった。その評価の通り、町の中は田舎部の村々に比べて、ものすごい活気に満ち溢れていた。夕方の大通りには何の相談もしてないというのに数々の人々が集まり、列を成す飲食店までもある。街の中には様々な匂いを乗せた煙が漂い、食欲を煽るのだ。「うわあ。やっぱり都会はいいよね！」

エレンはいつもよりも一回り高いテンションでキョロキョロと街の様子を見渡す。見る人から見れば、田舎人のように見えるだろう。しかし、そんな人目も気にせずに、興味が向くままに彼女は店を巡っていた。

「ねえ、ダルクちゃん。このお店ってどうかな？」

エレンは一番近くの飲食店を指した。木でできた看板には鳥の彫刻がしてある。どうやら鳥肉料理専門店らしい。外まで油と香辛料の香りが漂っている。

「いいと思いますよ」

ダルクはそう言った。本音を言えば何でもいいのだ。

「それじゃあ、ここにしようか——あっ！」

店の扉に触れる寸前、エレンは目にある物が目に入ってしまう。それは次の店の看板だ。

「東国の料理店だって！ 異国の料理もいいかもっ！ ねっ？ ど

うかな？」

たまらずエレンはダルクへと意見を求める。

「いいと思いますよ」

「それじゃあ——あっ！ 向こうにもいっぱいお店がある！」
新たな店が視野に入ってきて、またエレンは走り出す。それが十数回ループして……いつの間にか人気の無い通りに出てやつとエレンの足が止まった。そこはとても静かで、先ほどの賑やかな音は遥か後ろの方で木霊している。人の会話も足音もここには届いていない。そんなことも伴って、ここは別の空間に感じるのだ。

「スラムですね。都市部では珍しくありませんね」

ダルクは、きょんとしたエレンに補足説明を入れる。だが彼女はそんな説明を聞いていたのか、そのまま歩みをやめない。足は暗闇の街へと向かっている。

「エレン。そっちに行っても何もないと思いますよ」

ダルクはエレンを止めるためにそんなことを進言する。だが興味に火を付けたエレンは止まる気配を見せない。

「そうかもしれないけど、何かある予感がするんだよね」

ダルクはその台詞を聞いて、ため息を付く。エレンがこのような言動をする時は大抵、悪いことが起こるのだ。

「ほらっ、早く、早く！」

エレンは足早に暗い路地に行く。今日何度目か分からないため息を付きながら、ダルクは後を追うのであった。

スラムの聖域

スラム街の中は暗く、どこかジメジメした印象を受ける。道の脇には壊れかけの廃屋が並ぶだけで何も無い。先に行く少女もそれに気が付いたのか、先ほどまでとは違い、表情は曇り、足取りまでもが重くなっている。

「エレン。言いましたよね？ 何も無いって」

「そ、そんなことないよ！ 何かしらあるって！」

エレンはそんな言葉を発したが言葉はどこか弱々しい。大方、？何かある？と言った手前引き返せないとしても考えているのだろう。

「そうですね」

ダルクはそう言い、彼女の後ろを黙って歩く。ここで何か言ったら意固地になって本当に何かあるまで歩き続けると彼女は分かっていたからだ。だからこういう場合は彼女が飽きるまで付き合っているのが一番の方法だとダルクは知っていた。それがいつになるのかは分からない。しかし、時間など腐るほどあるのだ。ダルクは文句も言わず、無言で少女の後ろを歩くのだ。距離は付かず離れず一定を保って。

しばらく狭苦しい通路を歩いていくと、ふと二人の男の姿が目に入る。どちらもボロきれのような服を纏っている。その身なりからスラム街の住人だろう。エレンが二人の横を通り過ぎた時――――「おっと、お譲ちゃんたち。ちょっと遊んでかない？」男の一人が手を出し、エレンを呼び止める。どうみてもナンパだろう。

「えっと……こういう時はどう言うんだっけ？」

「はあ？」

エレンはその場で何か思い出す仕草を見せる。急に取ったエレンの行動に男も頭に疑問符を浮かべているようだ。

「そ、そうだ。？おととい来やがれ！ このヤロー？だ」

彼女は台詞を思い出せてスッキリしたような顔をしている。この台詞をダルクは聞いたことがあった。確か幾分前に訪れた街でやっていた劇で、男に絡まれたヒロインが言った台詞だ。といってもそのヒロインはエレンの様な可憐な容姿ではなく、屈強な戦士の様な人物であったが。

「で、どうだい？ 俺たちと遊ぶの？」

男はエレンのひねり出した台詞を無視すると話を路線に戻そうとする。

「あれ？ こういうセリフを言うと、悪者って去っていくんじゃないの？」

「それは劇中だけだと思いますよ」

「そうなの？ はあ……折角、思い出したのに」

エレンは肩を落とし落胆する。

「ちょっと、お嬢さん方、無視しないでくれる？」

流石の男たちも呆れ顔だ。

「えっと、夕飯近いし、遊ぶのはちょっと無理かな？」

エレンは正論を言って、その場から去ろうとする。しかし男は腕を壁に当て彼女の行く手を阻む。その顔には不気味な笑みが広まっている。

「何か用？」

エレンはキョトンとして疑問符を相手へとぶつける。

「みすみすこんな可愛い子たちを逃がす俺らじゃないんでね」

男はそういつて欲にまみれた視線でエレンを見た。

「やったっ！ 可愛い子だって。褒められちゃった」

「そうですね」

ダルクはため息をつき、エレンの言葉を流した。

「ってことで——」

前の男がいきなりエレンの肩を掴み、そのまま壁へと押し付けようとする——

その瞬間だった。鈍い音が暗い通路へと響き渡るのであった。その音源は男の体であった。エレンに手が伸びる寸で、ダルクが男の腕を掴み、投げ技の要領でそのまま地面へと叩きつけたのである。

「っ！ このっ！」

一瞬躊躇ったが、もう一人の男は懷に手をいれ、何かを取り出す。鈍い光を放つ刃渡り数センチのナイフだ。男はダルクに向かって、ナイフを振る。しかし、彼女の体に当たる前に男の持っていたナイフが宙へと舞い上がる。

男は何が起きたか分からなかった。ただ目の前にあるのは翻るスカートとそこから出た長い脚——そして、顎下からの重い衝撃に男の体は後ろへと吹き飛ばされた。

「おおっ、スカートでハイキックとは」

エレンは興奮気味にそんな言葉を漏らしていた。

「さ、行きましょう」

ダルクはスカートの埃を軽く払うと、エレンの前に出て、通路を進んで行く。その足取りは何事も無かったように軽やかであった。

ひたすら薄暗い路地を歩く。しばらくすると寂れた通りへとたどり着いた。崩れた外壁の住居。人はいなく、不気味なほど静かだ。しかし、感じる………人の視線を。誰かに見られているのだろう。ダルクは警戒心を強めながらもエレンの後ろを歩く。

エレンはふと足を止めた。そこには古ぼけた外観の教会が佇んでいた。ステンドグラスは割れ、女神の像であったろう石は半分以上が欠けて、その威厳すら無くなっている。聖なる場所である教会ですらこの有様——ここは信仰ですら救えない場所なのだろう。

エレンは静かに教会のほうへと近付く。どうやら興味が出てしまったらしい。彼女は手でゆっくりと扉を押す。

古い木特有の軋んだ音が鳴り、中から冷たい空気が流れてくる。教会の中は薄暗く、ステンドグラスから差し込む光で何とか内装が見える程度。内部には粗末な長椅子が数組と祭壇があるだけだ。祭壇の後ろにある女神像も形さえ分かるものの、美しいと思える代物ではなかった。

「何かご用でしょうか？」

声の方向を向くとそこには初老の女性が立っていた。服装からしてこここのシスターなのだろう。

「えっと、用はないんですけど――もう少し見ていても大丈夫ですか？」

「ええ、構いませんよ」

「ありがとうございます」

エレンは最前列の長椅子へと腰を掛け、祭壇の方を見上げる。先ほどより少し傾いた夕方の淡い光がステンドグラスを抜け、祭壇の女神像を照らし出している。

「ダルクちゃん、すごい！」

エレンはその様子を興奮気味に伝えようとしてくる。ダルクはエレンに言われるまま前方を見る。

確かに――先ほどまでみすばらしかった女神像が輝いて見える。そう、それはまるで女神様が天から降り立ったように見えた。

「いい時に来ましたね。これは？黄昏の女神像？と呼ばれるほど、夕方時が一番綺麗に見えるのですよ」

シスターはそう補足をし、手を組み、祈りのポーズをとる。エレンもそれを真似して、祈りを捧げた。しかしダルクは祈るようなことをしなかった。沈黙を守り、その場に居座る。

太陽が沈み、辺りを完全に闇が包む。二人はまだ教会の中にいた。シスターが付けてくれた蠟燭の光により中は仄かに明るい。

「ダルクちゃん。いい唄ができたかも！」

先ほどから何かを考えていたエレンがいきなり立ち上がりそう叫ぶ。これはいつものことだ。エレンは何かあることに唄を創る。それを

一番に聞くのがダルクの役割であった。

すう……………

周りの空気を吸い込み、彼女は歌い始める――

それはとても温かい唄であった。

まるで女神に何かを捧げるように――

それはとても優しい歌であった。

二分ほどで彼女の唄は終わった。ダルクはその間、ほとんど瞬きもせずに彼女へと釘づけになっていた。

「どうかな？」

はにかみながら、エレンは笑みと言葉を漏らす。

「いい唄だと思いますよ」

ダルクはそう静かに答えるのであった。

「素晴らしい唄ですね」

だがそこには評価をしてくれる人がもう一人いた。奥にいたシスターが姿を現す。エレンが歌っていたのが聞こえたのだろう。

「えへへ。照れるなあ」

エレンは恥ずかしそうに頭を掻く。

「お嬢さん。あなたは歌姫なのですか？」

歌姫とは唄を生業として生きている女性のことを指している。この時代では結構有名な職業でもあった。

「うーん。そういう訳ではないんだけどね」

エレンにとって唄を歌うことは仕事ではないのだ。彼女は歌いたいから歌う。それだけの事だった。

「この教会で唄が響くなんて何年ぶりのことでしょうか……」

蝋燭の明かりが揺れてその表情が目に入った。やつれた顔には正と負の感情が均衡した様な色が浮かんでいた。彼女がどんなことを

思い、そんな表情をしたのか、ダルクには良く理解できなかった。
シスターは昔の話をしてくれた。この教会は革命以前、街一番の教会であり、毎日に溢れていたらしい。しかし、ここの領主が変わると、その様子も一変した。

商業化を推し進める人々によって街の様子は変わっていった。人々は仕事に追われ祈る時間を忘れ、能力のない人は時代に置いてかれスラムへと追いやられたのだ。

「スラムには貧しい人が多くいます。しかしお金持ちの人はそれを見て見ぬふりをするのです——何と悲しいことでしょうか」

「むむむむ……」

シスターの話を聞き、エレンは複雑な表情をしていた。また、エレンの悪い癖が出そうだ。ダルクはそう思い、ため息をついた。
その予想が当たったのは教会を出て宿までの道を歩いている時であった。

「ダルクちゃん。明日からの予定が決まったよ！」

声を大にして彼女は叫ぶ。

「スラムの人たちをパッと明るくしようぜ！ 作戦に決定」

ネーミングの通り、この街の状況に首を突っ込む気にいるらしい。
そんなことをしてどうなるのだろうか？ 一人が頑張ったところであの場所の何人の救えるのだろうか？

ダルクはそう思ってしまった。しかし、やる気になった彼女の顔を目の前にそんなことを言えなかったのだ。というより、言った所でエレンの行動を止められる自信がダルクには無かった。文句の代わりに彼女は大きなため息を付くのであった。

スラムと孤児院と盗人少年と

次の日の朝、エレンは珍しく早起きをし、ある準備をしていた。昨日バザーで買ってきたパンに野イチゴのジャムを挟み、それを二つ折りにする。

不格好に具材を詰める彼女の様子をダルクは縫物をしながら見守っていた。

「よしっ。お弁当完成！」

エレンは弁当箱をバスケットの中に詰め込み寝巻を脱ぎ始める。さっそく外にいくつもりなのだろう。ダルクは手慣れた手つきでドレスをエレンへと差し出す。エレンのお弁当完成宣言が飛んでくる前に？ほつれ？の修復は終わっている。

「さあ、ダルクちゃん！ 行こう！」

朝一発目の大声を合図に二人は宿を後にした。

昨日のルートを通ってエレンはスラムの広場へと足を運んだ。広場には数人の大人がおり、何か会話をしているようだ。エレンはそこに荷物を置く。

何をするか興味本位で見る人もいれば、荷物を盗む隙を窺っている人もいるのだろう。警戒心を持ち合わせないエレンの代わりにダルクは周りの様子を繊細に感じ取るのだ。

「よしっ、頑張るぞ」

誰に宣言するでもなくエレンは叫び、そして歌い始めた。いきなりこのことでぼかんと口を開けている人もいる。しかし彼女はそんなことを気にせず歌い続ける。エレンの唄は朝一番とは思えない程透き通っている。朝の少し凍えた空気を通し、耳に入ってくる唄はとても美しい。彼女ほど唄が上手ければ、立ち止まって聞いてくれる人も必ずいた。大きな街で歌えば、人だかりができるほどだ。しかし、ここの人々はそうはしなかった。こちらをチラ見するだけで、足も

止めてくれない。歓声や拍手などは無く、空間にあるのは唄声だけ。それだけではない。エレンを一瞥する人々。その瞳には黒い感情が宿っていることにダルクは気づいていた。

「お嬢ちゃん」

唄の合間の小休止に老人が近寄ってきた。

「はい」

エレンは元気よく返事をする。いつものように唄に興味を持ってもらったとでも思ったのだろう。しかし老人は明るい表情をしてはいなかった。

「悪いことは言わん。唄を歌いたいなら街のほうでやるんじゃない」「えっ？」

そう言い残すと彼は足早にその場を去ってしまった。

「どういう意味だろ……」

老人の言葉の意味をエレンは考え込む。しかし、その真意に彼女は気付けなかった。答えが分からないまま、唄を歌うことを続けたのだ。しかし、お昼まで歌い続けてもエレンの唄を聞いてくれる人は誰も現れなかった。人通りがあるのに、ここまで唄を聞いてもらえなかったのは初めてである。

「ああ、ちよつとシヨックかも……」

？まるで道端の小石になったようだ？ともエレンは溢した。落ち込んだように地べたに座わり、広場の中央に生えている多年草を見つめている。

「まあ、こんな場所ですから落ち込まずに」

「でも——」

その時、ふと後ろを見ると女の子がそこにいた。十歳ぐらいだろうか。薄汚い服を着ている事からしてスラムの子だろう。彼女は少し警戒した様子でエレンへと近付いてくる。いち早く少女に気付いたのはダルク。そして少し遅れてエレンも視線を彼女へと向けるのだ。「なに？」

その子の目線に合わせるようにエレンはしゃがみ込み話しかける。

久々の来客にエレンはニヤケ顔だ。

「えっと……………あの……………」

刹那——彼女は踵を返し走り出したのだ。

「えっ？」

「エレン後ろです！」

エレンが振り向くと、自分の足元にあったはずのバスケットが無くなっていた。遠方にバスケットを抱える、少年の姿が捉えられる。

「あーっ！」

エレンは叫びをあげる。しかし、そうしている間にも男の子は広場から姿を消してしまう。

「っ！」

エレンは目線を戻す。隣に居るはずのダルクが逃げようとする女の子の襟首を捕まえ、自分の方へと引き寄せる様子が目に入った。その手つきは乱暴だ。

「離してっ！」

じたばたする女の子をダルクは抱える形で抑え込む。その顔には何の感情は浮かんではない。だからだろう。エレンの目にはダルクが少女を絞め殺してもおかしくないように映ったのだ。

「ちよっと、ダルクちゃん。暴力は——」

「この子もさっきの少年のグルですよ」

少女はまだダルクの腕の中で暴れていた。しかし、一向にダルクの力は弱らない。逃げられないと分かると、その顔は泣き顔へと変貌していった。

「うわああああ……………ご、ごめんなさい……………」

ついに泣きだしてしまった。だがダルクはその子を許してあげる気配はないようだ。冷徹な目で少女を睨んでいる。こんな表情をされたら子供なら誰でも泣いてしまうだろう。

「ダルクちゃん。降ろしてあげて」

エレンに言われ、ダルクは腕の力を弱め、彼女を地面へと降ろした。しかし、逃げられないようにと、その子へ目配りすることは忘れて

いない。

「えっと、大丈夫？」

さすがに同情し、泣く子供の頭を撫でるエレン。

「ごめんなさい。ごめんなさい……」

少女は謝るばかりだ。瞳と目の周りはウサギのように赤くなってしまう。余程、？無口のおねえちゃん"が怖かったのだろうか。

「まんまと盗まれましたね」

「うん……そうだね」

アハハとエレンは乾いた笑いを洩らす。あのバスケットには昼ご飯が入っていただけに少しショックではあった。

「この子をお昼御飯にしますか？」

「ひい！」

ダルクは冗談とは思えないトーンの声でそんなことを提案してくる。少女は恐怖を覚え震え始める。きっと彼女の言葉を真に受けてしまったのだろう。

「もう、ダルクちゃん！」

エレンはダルクを一喝すると、その子の目線まで腰を下ろす。

「もう盗みなんてやっちゃダメだよ」

そう言ってエレンは少女を解放してやった。少女はこちらに目もくれずに走り去ってしまう。

グー——タイミングを計ったようにエレンのお腹が鳴った。

「あはは。お昼どうしようか」

はあ、とダルクは本日一回目のため息をついたのであった。

お唄を歌えば――

結局、空きっ腹を抱えてエレンは唄を歌い続けていた。しかしその態度は先ほどまでとは違い元気がない。お昼一食でえらい違いだ。

「エレン、今日は切りあげた方がいいのではないのでしょうか？」

「うーん……どうしよう」

手応えなし、昼御飯なしでエレンは根を上げそうになっていた。そんな彼女の様子を覗いている視線にダルクは気がついた。

「エレン、あれを」

「えっ？」

エレンが指差された所を見ると、そこには先ほどの男の子がいた。壁に隠れながらこちらの様子を窺っているようだ。

「ほらっ、隠れてないで謝ってきなさい！」

「で、でも……」

誰かと話している声が聞こえ、観念したのか少年は広場のほうへと姿を表した。その後ろには初老の女性がいる。その手には見慣れたバスケットが抱え込まれている。少年は黙ってエレンに近づくと、そのバスケットを差し出す。

「あっ、返しに来てくれたんだ――」

エレンはバスケットを受け取ると早速ゴソゴソと中身を確認する。

「あっ……ない……」

だがそこにはサンドイッチはなく、エレンは期待を裏切られたと言わんばかりに寂しい声をあげた。

「ほらっ、謝りなさい」

後ろの女性は男の子の頭を下げるよう、催促する。

「ごめんなさい……」

男の子はつまらなそうに呟いた。

「エレンさん。ごめんなさいね」

何故、この人は名前を知っているのだろうか？ エレンがそう思い顔

を覗くと、その人が昨日のシスターであると分かった。私服を着ていたのすぐには気がつかなかったのだ。

「この子も悪気があってやったのではないので許してもらえないでしょうか？」

「あつ、いいんですよ。別に――」

ぐう――

？大した事ない？と言う前に空気を読まずにエレンのお腹は見事に音を立てて鳴った。

「罪滅ぼしという訳ではないのですが、食事を御馳走したいと思うのですが――」

「行きます！」

彼女の言葉を受け、エレンはすぐに返事をした。おそらく奢ってもらう相手がスラムの住人である事を彼女は忘れていたに違いなかっただろう。

シスターに連れられ着いた所は教会の裏にある孤児院であった。建物の外観は古いが、敷地の面積は大きく、門を入った所には庭が広がっている。

「私はここでの院長も務めているのですよ」

そう言い、彼女は大した手入れされていない庭を進む。先の窓には人の顔が映っている。おそらく子どもたちだろう。ダルクの目線に気がつくと彼らはその頭を柵外へと引っ込めてしまう。

視野を大きく持つダルクに比べ、エレンの目指しているのは昼食だけのようだ。彼女は院長を追い越してしまう程の早足だ。

「さあ、ここから中へどうぞ」

院長は正面の一番大きな扉を引き、二人の来客を中へと招き入れる。

「おじゃましまーす！」

院内すべてに聞こえる様に大声で挨拶をし、エレンは玄関から建屋内に入る。

壁はひび割れ、どこか埃っぽい。築何年になるか分からないが、建て替え時なのは明らかだ。そんな感想をダルクは持った。一方、エレンは建物にさほど興味を示していないようで、黙って廊下を歩いて行く。十数秒歩いたところで、廊下の片側に扉が見えてきた。シスターが大きな扉を開けると、そこは食堂であることが分かった。椅子の数は三十ほど、そこに子供たちが付くのだろう。

「少々お待ち下さい」

院長はそう言うと言食堂の先にある小さな扉に消えていった。

「よかったあ。このままお昼ご飯抜きだったら倒れちゃったよ」

エレンは笑いながらキョロキョロと辺りを見渡した。食堂の所々には子供が描いたであろう落書きが多く見られた。

「これって、リンゴかな？ それともナシかな？」

「ポツポツが描いてある点でナシではないかと」

「じゃあ、こっちはメロンとスイカどっち？」

「縞模様が無いのでメロンなのでは？」

壁画当てクイズをしているうちに院長が奥から出てきた。その手には木のトレイが持たれており、その上には湯気を立てたスープとパンが乗っていた。もちろん二人分だ。

「どうぞ」

彼女はそれを机の上に置く。その場所がゲストの席なのだろう。

エレンとダルクはそれに従い料理の前に座り、机の上に並べられた皿を眺める。スープはタマネギとイモが入っているだけの質素なものだし、パンはカサカサとしている。

「うわあ、おいしそう」

だが、エレンはそんな声を出し、食事へとかぶりつく。余程、お腹が空いていたらしい。その表情は無我夢中そのもの。空腹が最高の調味料とは良く言ったものだ。ダルクもそれに見習って、静かに食事をする。

「ふう……満足、満足！」

数時間ぶりの食事にありついたエレンはすっかり元気を取り戻していた。お腹が満たされた所でエレンとダルクは孤児院内を散策することにした。目的も無く歩いていると中庭で子供たちが遊んでいる様子が見えた。しかし、エレンの姿が見えると、子供たちはクモの子を散らすように逃げて行ってしまった。

「ああ、逃げられちゃった……ダルクちゃんが怖い顔をしてるからだよっ！」

「そんなことはないと思いますよ」

「うむむ……嫌われるのは少し悲しいかな………よし」

エレンは少し考えた後、荷物を地面へと置いた。このような状況でエレンがする事の一つだ。

「ほらっ、ダルクちゃんも。楽にして」

エレンは肩に力を入れ、息を吸い込む――

彼女は歌う。その瞬間、空気が変わった――

彼女の唄は空気に乗り、辺りへと広がって行く――

唄につられたように子供たちが徐々に姿を現してくる。

エレンが口を閉じる――その瞬間にピタッと唄が止まる。

そして沈黙――

パチパチパチ……

誰かが拍手をした――

パチパチパチパチ――

一つの合図にするかのように子供たちは拍手をする。その拍手は連鎖するかのうちに中庭に響いた。拍手の中、彼女は恥ずかしそうにペロツと舌を出した。

祈りの唄と笑い声

子どもというの生物は慣れるのが早いと思う。スラムという悪環境で育った所でその性質は変わらないようだ。

「お姉ちゃん、名前は？」

「エレンだよ。こっちはダルクちゃん」

先ほどとは大違い。エレンとダルクを中心に子供たちが円を作っている。真中に向かい子供たちは無邪気に質問を投げ掛けてくる。それにすべて答えようとエレンは三百六十度回っている。二人で質問に答えれば労力は半分なのだが、ダルクが答える事がないのは分かっていたのでエレンはこの質疑応答を一人でこなす気である。

「ねーねー。こっちのお姉さんは何かできるの？」

突然、六歳ぐらいの女の子がダルクを指差してそんなことを質問してきた。本人に聞くのではなく間接的にエレンへとだ。まあ、しかめっ面で黙っているダルクに直接質問しにくいのは分かる。

「ダルクちゃんは何でもできるかな」

「ええ、人殺しでもなんでも」

その冷徹なる声に子供たちはビクツと身体を震わせる。質問した女の子も聞いてはいけない事を聞いてしまったのだと、青ざめている。

「こらっ、ダルクちゃん。みんな怖がってるでしょうが！」

すかさずエレンは開きそうな子供たちをフォローする。

「本当のことを言っただけです」

ダルクが小声でそんなことを呟いたのがエレンの耳には届いた。そう言うところが怖いのだとエレンは思うのであった。

「それより、エレン。もう一度歌ってくれない？　ボクもう一度聞きたい！」

「あたしもーっ！」

質問攻めによりエレンが無害な存在だと知った子供たちは唄の催

促をしてくる。

「はいはい。リクエストとあらば――」

子供たちを目の前にし、エレンは唄を歌った。子どもたちは聞いたことのない彼女の唄を聞き入っていた。数曲が終わった頃にはすっかり仲良しだ。

「お疲れ様です」

ダルクがコップに入った水を差しだして来たのをエレンは受け取る。唄を歌い続けただけに喉を通るその水はとても美味しかった。子どもたちはお祈りの時間らしく、ここには居ない。お祈りの時間をサボり唄を聞くといい子供を諭すには随分骨が折れた。結局煮え切らない態度のエレンに代わりダルクが眼力により、子供たちを散らす結果となった。

「人気でしたね」

「うん。思った以上にね」

街で歌う時にはなかった子どもたちの盛り上がり方にエレンは驚きを隠せなかった。子供に唄を聞かせる機会は多くあるが、感心はしてくれるがここまで盛り上がってくれた例は無かったのだ。

「スラムですから。子どもたちも面白い遊びを探していたのかも知れませんか」

「ああ、なるほど」

エレンを見る子供たちの目は輝かしかった。まるで見たこともない動物を見ているかのような興味津々の目。

「うん。今日は来て良かったかも」

背伸びをしながらエレンは満足げに言った。

「そうだ。ダルクちゃん。教会に行ってみない？ 丁度良い時間帯だし」

「丁度良い」とは夕刻を指しているのだろう。彼女は昨日の女神像をまた見たいと思っているのだ。

「いいですよ」

「やったっ！ 行こう！」

途端、腕を掴まれ引っ張られる。その勢いに思わず転びそうになる。そんなに焦らなくてもいいのにと呆れながらもダルクはエレンに手を引かれ、教会へと向かうのであった。

教会の扉を開けると、中では何やら子供たちがお祈りをしているようだ。祭壇の前ではシスターは女神像に祈りを捧げている。しかし、一部の子供はそれをいいことに椅子の下に屈み談話をしている。教会内が静かなだけあって、その「ひそひそ話」はよく聞こえる。

「今度、院長先生のお布団にカエル入れてやろうぜ」

「それより、エレンにも何か悪戯しようよ」

内容はどこにでもいる子供の会話だ。

「エレン。悪戯されるみたいだけど、良いのですか？」

「んー。悪戯されたらやり返す」

「百倍返しですか？」

「いや、そこまではしなくていいよ。というか、ダルクちゃんはやり返さなくていいからね」

ダルクの目つきが厳しくなったのを見つけ、エレンは慌てて言葉を追加した。

「あっ！」

一人の子供がそんな声をあげる。その子はエレンのことを見つけ声を漏らしたのだ。みんなその声に釣られ、エレンの方を見る。

「エレンだ！」

「あっ、本当だ！」

子どもたちはお祈りの時間とも忘れ、エレンへと駆け寄ってくる。

「エレンもお祈りに来たの？」

「いやあ……そういう訳では……」

「ほらっ、こっちだよ！」

「わっ、引っ張らないでよ！」

強引な男の子に引っ張られ、エレンは最前列の椅子へと腰を掛けさ

せられる。

「こらっ、お祈りに集中しなさい」

シスターも苦笑いを漏らしながら子供たちを席へと戻す。先ほどは教会内の席に広く座っていた子供たちが今度は中央に密集している。その中心はもちろんエレンだ。

「では、改めて――ほらみんな、エレンさんとお祈りをしましょう」
シスターはそう言って、手を組み、女神像を仰ぐ。エレンはそれに倣い手を組む。門の前で動かずにいるダルクはその様子を見守っていた。

「では、お祈りの唄を歌いましょう」

しばらくの瞑想の後、シスターがそう言った。子供たちは「はい」と一斉に返事をする。それに続きエレンも同様に返事をするのだ。子どもたちはエレンと共に唄を歌った。祈りの唄と賑やかな笑い声は世界が暗闇に包まれてからも、しばらく続くのであった。

夜の密会

「エレンは僕の隣に座るの！」

「えー！ 私の隣！」

「まーまー。落ち着いて」

お祈りの時間の後、食事を貰うことになったエレンだが、夕御飯の席順を巡って子供たちのバトルで食堂は異様な熱気に包まれていた。

「まるでヒーローですね」

「あはは。そうだね」

苦笑するエレン。どこでもいいから早く食事をしたいと思うのがエレンの本音だ。そんな彼女の眼には、一人の男の子の姿が映っていた。それは昼間バスケットを盗んだ男の子だった。

彼は祈りの時間も食事でもつまらなさそうな顔をしているだけで、ずっと独りで居たのだ。

「よしっ、決めた！」

エレンは立ち上がるとその子の隣へと腰掛けた。

「ここで食べていい？」

男の子へと話しかけるが返事はない。しかし嫌われている様子もないのでエレンは立ち去らず、その場へと留まった。

「えーっ！」

他の子供たちからブーイングが上がる。

「ほらっ、第二ラウンド！ ダルクお姉ちゃんを取り合いましょう！」

「えっ……………」

子供たちはお互いに顔を見合わせて、困惑の表情を浮かべている。一瞬のうちに静かになった食堂にダルクの大きなため息が響くのであった。

食事の前の祈りが終わり、ついに食事が始まる。子供たちはその旺盛な食欲で出てきたパンに食らいついていた。エレンも負けずにパンに噛みつく。しかしエレンの隣の子はそうしない。お腹が空いていないのだろうか？

「ねえ、食べないの？」

そう聞いても答えは返ってこない。

「じゃあもらっちゃおうかな——いたっ！」

エレンが冗談めいてその子のパンを取ろうとすると手の甲に痛みが走り、手が宙で撃ち落とされる。

「触るなっ！」

男の子は敵意をむき出しにし、エレンをにらみ返す。その迫力に思わず目を丸くしてしまう。

「こらっ！ ジョシュ！」

院長先生は彼を叱ろうとするが――

「あっ、今のは、私が悪いんです」

そう言いエレンは怒声を遮った。

食事の時間は続くがその子はスープには手を付けてもパンに手をつけることはなかった。ここで気がつくのだが、この食堂に昼間のもう一人の子がいないのだ。

「ジョシュ。昼間の女の子は？」

「……………」

彼は答えない。しかし表情に微少の変化があったことをエレンは見逃さなかった。

「あの子もこの辺りの子？」

「……………」

それから何度も会話を試みるが、彼は口を開くことはなかった。食事が終わってもエレンはジョシュのことが気になっていた。彼は他の子に交わらず、談話室の端の方でずっと何かをしている様子だった。

「ねえ、みんな。ジョシュを混ぜようよ」

ふと提案してみるエレン。お節介かもしれないが、この状況はジョシュが仲間外れにされているようで彼女にとっても居心地が良くはなかった。

「ジョシュ君は混ぜたくない」

子どもたちは口々にそう言う。素直にそういうことを言うだけ子供は残酷だ。

「それより、エレン。お唄を歌ってよー！」

「う、うん……………」

エレンは彼のことを気にしながらも子供たちと戯れるのであった。

ふとした瞬間に彼が部屋を飛び出した。立ち上がる前に時計を少し確認した動作がエレンの目には焼き付いていた。

「みんなごめん。少し出かけます！」

「えーっ！　こんな時間に？」

唄の途中という事もあった、子供たちからはブーイングが上がる。

「続きはダルクちゃんと遊んでね」

「ええっ！」

そう言い残し、エレンは部屋を飛び出す。もちろん彼を追うためだ。
「さて、何をして遊びましょうか」

エレンの命を受けてダルクはゆっくりと立ち上がり、子供たちの前へと座る。途端に騒いでいた男の子は静まり、前列で胡坐をかいていた女の子は急にスカートを抑え、姿勢を正座に正すのであった。

「エレンさん」

玄関を飛び出す直前。彼女はシスターの声に足を止めた。

「ジョシュを追うのですか？」

「はい」

「ではこれを……」

彼女はエレンにナプキンを渡す。その不可解な膨らみの上から布地を触ってみると、柔らかい。めくってみるとその中にパンが入って

いた。

「えっと、これは？」

「彼に会ったら渡してください」

この人はジョシュのことを何か知っているのだろう。彼を動かす理由を聞きたかったのだが、そんなことをしては見失ってしまう。エレンはそのナプキンを受け取ると急いで彼の後を追った。

夜のスラムは危険だ。子供や女が一人で歩く場所ではない。しかし、エレンの足は怯むことなく進んだ。ばれないように――彼の姿を見失わないようにエレンは小さき背中を追うのだ。ダルクほどではないが、彼女も気配を消すということを心得ていたので、ジョシュがエレンに気がつく事は無いようだ。

暗い路地を数本入ったところでジョシュは足を止める。そこは道と道がぶつかる少し拓けた空間になっていた。その道に置いてある木の箱の上に少女が座っていた。昼間ジョシュといたあの子だ。こんな夜に一人で何をしているのだろうか？

「おまたせ、少し待った？」

「うん。いいの」

ジョシュは懷から何かを取り出す――それはパンだった。おそらく夕方に出たものだろう。

「ありがとう」

少女は余程お腹が減っていたのか、すぐにそのパンを口の中に運んでしまう。

「ルシュ……痣が出来てる……」

彼の声でエレンも気付いた。彼女の顔には昼間にはなかった大きな青痣が出来ているのだ。あどけない少女の顔に浮かぶその印はずいぶん痛々しい。

「またあの男にやられたのかっ？」

声を荒立てる彼にルシュと呼ばれる少女はコクンと頷いた。怒りを露わにするも、ジョシュは力なく肩を落とした。空いている木箱に

腰を下ろし、ルシュを見つめる。まもなく二人だけの密話が始まる。内容は他愛ないものだ。ジョシュの口からはエレンのことについての話題も出た。彼は話題の本人が近くに居る事にまったく気づいていないのだろう。

秘密の会話に第三者の自分が居る事に罪悪感を覚えながらエレンは二人の幼子を見守り続けた。

「そろそろ、帰るね……」

その会話を切ったのは少女の方だった。彼女は小さく手を振ると暗がりの路地の方へと消えていった。ジョシュは少しがっかりした様子だったが、ルシュの去り際の笑顔を見て、呼び止めの言葉を喉の奥へとしまい込んだらしい。「また明日」とだけポツリと言い木箱から腰を上げる。

「ジョシュ」

ルシュの姿が完全に消えてから、エレンはジョシュの前へと姿を現した。

「っ！ お前！」

尾行されていた事を知ったジョシュは険しい表情でエレンを睨む。

「ほらっ。お腹空いたでしょ？ 院長先生からの贈り物だよ」

彼の怒りを受け流すかのようにエレンは彼にナプキンにくるまれたパンを渡す。それを確認すると彼はエレンを邪険することをやめ、そこにあった木箱に再度腰を下ろした。

「笑いたいなら、笑えよ」

エレンはその台詞を聞き、彼が何を言っているのか分からなかった。

「毎日自分の夕食を分けてやるお人好しだって……」

ジョシュは自嘲しながらそう言った。確かに。こんなスラム街で自分の食べ物に分けてやるなんていうのはありえない行為なのだろう。それでもエレンは彼を笑うことはしなかった。

「ジョシュは優しいんだね」

そう言って彼の頭を撫でてやる。

「だって、私なら空腹なのに人に夕飯譲るなんて事はできないもん」

そう言い、エレンは勢い良く木箱へと腰掛ける。子供たちとは違い、木箱は小さく軋んだ。そして、鈍い音を立てて、崩れてしまう。もちろん体重を預けていたエレンのお尻も地面へと引き寄せられてしまう。

悲鳴と木箱の崩壊の音に思わずジョシユは目を瞑ってしまった。

「あたたた………ともかく、私にできることがあったら言ってね」箱にお尻がはまったまま、エレンはそんな台詞を言う。恰好も付かないその言葉だが、エレンは本心で言ったのだ。

ジョシユはクスリと笑った。自分の言葉、あるいは自分の現状を笑ったのかはエレンには分からない。しかしジョシユは先ほどよりも良い顔をしている気がする。

「お前、本当に変な奴だな」

「よく言われるよ」

木箱の残骸をはたき落としながら、エレンは苦笑する。

「あのさ、さっきの子。この近くの子？」

「うん。そう……ルシュって名前」

質問の答えが返ってきた。これは一歩前進だ。エレンはさらに核心に踏み込むように問いを投げ掛ける。

「痣が出来てたけど、どうしたの？」

「さあ……」

彼は口を閉ざす。目線は泳ぎ、質問者を見ることはしない。その態度は嘘をつく子供のものだ。彼の口から話せないことなのだろう。だからこそエレンは無理やり聞き出そうとはしない。

「今度、ルシュも誘いなよ。一緒に唄でも歌おう」

笑顔で誘いをかけた。

「うん……」

エレンの一言に彼は少し明るく返事をしたような気がした。

「それじゃあ、帰ろう。夜はこわーいオバケが出ちゃうんだぞ」

「そんな訳ないだろ。子供じゃあるまいし、信じるかよ」

頬を膨らまし、ジョシユはエレンの前を歩き始める。その足取り

からは「オバケが出て俺が守ってやる」と聞こえてきそうだった。
小さな騎士さんの背中をエレンは頼もしそうに眺めるのであった。

衝動と願望

暗い路地を歩く二人。しかし、その足音は二つではなかった。近づく気配に気づいた時、エレンの身体は暗闇へと引つ張られていた。

「きゃっ！」

「エレン！」

悲鳴を聞き、振り返る。途端、頭に激しい痛みが走った。

「ガキは黙ってろお！」

それは男の声であった。地面に倒れながらも状況を把握しようと、ジョシュは二つの眼で暗闇を見渡す。男は二人組らしい。一人は拳を構え、自分の目の前に立っている。そしてもう一人はエレンをはがいじめにしているのだ。巨漢なだけあり、細身のエレンとの体格差がはっきりと見えた。

「クツクツク……探したぜ」

男はエレンの耳元で不敵に笑った。その声のエレンは聞き覚えがある。

「もしかして昨日の――？」

「ああ、覚えていてくれて嬉しいね！」

男はエレンの腕にさらに力を籠める。

「あの女にやられた傷の代償をお前に払ってもらうぜ―――身体でな」

男は頭の包帯を指しながら、いやらしく笑う。

「エレン、逃げろっ！」

エレンが何をされるかは分からない。しかし、それが彼女を傷つける行為であることをジョシュは瞬時に感じ取った。地を蹴り、男の下半身に体当たりする。自分では渾身の力を込めたつもりだった。しかし―――

「うるせえ！」

男はたじろぎもしない。お返しと言わんばかりにジョシュは腹部に

蹴りを入れられた。

「うぐっ……………」

想像以上に息の代わりにうめき声が出た。

「ジョシュっ！　ちよつと、乱暴しないでよ！」

エレンは男の腕の中でひたすら暴れるが男は手を放そうとはしない。

「運が悪かったと思うんだな」

男がエレンの胸部に腕を伸ばした瞬間――男の身体が消えたのだ。少なくともジョシュにはそう見えた。

エレンは一瞬の隙を突き、男の手から下へと脱出し、肘で男の脇腹を抉ったのだ。その威力に男は壁に叩きつけられ白目を向く。

あっけに取られるもう一人の男のことも忘れてはいない。彼女は地を蹴り、一瞬にして距離を縮めた。そして鋭い掌手が男の胸元に突き刺さる。その身体は人形のように路地のごみ袋を散らして滑っていった。

二人の屈強な男に何が起こったのかジョシュは理解できなかった。辛うじて分かった事はエレンが男たちを倒したという事実だけだった。

「あーあ。服が皺になっちゃったよ」

当のエレンは平然とし、服の皺を伸ばしそんなことを言う。ひとつの動作が終わった所で彼女はジョシュに手を差し伸べる。

「ジョシュ。怪我は？」

「う、うん。大丈夫……………」

「そっか。よかった。立てる？」

エレンはまるで何もなかったような表情をしている。そんな少女を見てジョシュは彼女の印象を改めた。さっきまでは能天気な変わり者だと思っていたのに、今は目の前の彼女に恐怖すら感じるのだ。気持ちの変化を悟られる前にジョシュは立ち上がり、「行こう」と一言、言った。

二人は足早に路地を歩く。いや、早くなっているのはジョシュだけでエレンはいつも通りマイペースな足取りをしている。妙な沈黙を

嫌い、ジョシュはエレンへと質問を投げかける。

「エレン、強かったんだ……」

「んー。それなりにね」

質問にもなっていない問いにエレンは誤魔化すことなく答える。だが答えは抽象的だ。？それなり？というのがどの程度かはジョシュには見当も付かないからだ。魔族と戦える程度？　それとも人を殺せる程度？

その時、自分の思考の中にある考えが浮かんだ。本当は口にしてはいけないのかもしれない………こんなことは。しかし、同時にある少女の顔が思い浮かんだのだ。

「さっき、？できることがあったら言って？って……言ったよね」

ジョシュは足を止めて少し小さな声で囁く。

「うん。そうだよ」

「じゃあ……」

「えっ？」

エレンは耳を疑った。子どもと思えないほどの冷たい声で囁かれた言葉に。

「えっと……ジョシュ……今なんて——？」

「だから、ある人を殺してくれて言っただ」

彼の声も表情からも冗談じゃないことが分かったらしい。こんな小さな子供でも殺意を持つのか——エレンはその事実に見えて言葉を失っていた。

ジョシュはエレンをまっすぐと見つめる。しかし彼女の瞳は彼の怒りを受け流すように笑った。

「だめだよ。ジョシュ。そんなこと言っちゃ」

当然のようにエレンはそう諭す。だが、ジョシュは諦めない。その瞳の色は強い。

「なんで？　あの男のせいでルシュはあんなに苦しんでいるのに——」

少年の悲痛な叫び。エレンは少し表情を曇らせる。痛いほどの彼の

思いが伝わったのだ。しかし、その悲しそうな表情はすぐに柔らくなる。

「聞くよ？ ジョシュ？ 私でよかったら理由を教えてください？」
ルシュの事は誰にも言わないつもりだった。どうせ言っても大人たちは助けてくれない。そう思っていたから。けれど、エレンの言葉は頑なに心を閉ざしたジョシュの胸に突き刺さった。少年は思うのだ。この人になれば、何かしてもらえるのかもしれないと。

淡い期待を胸にジョシュは息を整える。そして口を開き始めた。

「ルシュは父親に虐待されてるんだよ……」

親からの虐待——それは子供にとっての地獄だ。

「あいつの父親が死ねば……ルシュも孤児院に来れるんだ……だからっ——」

それは子供の浅知恵。けれども彼の思いは十分エレンに伝わっていた。だが、エレンは首を縦に振る事はしなかった。

「ジョシュ。どんなに悪い親でも、ルシュにとってはお父さんなんだよ？ だから？ 死ねば」なんて言っちゃダメ」

エレンは心からの言葉を彼に言い聞かせる。それはエレンにとっての言葉でもあるのだ——

「だから、ね？」

感情を吐き出し泣きそうになるジョシュをエレンは抱き寄せる。

「うっ……うう……」

その温かさでルシュの心のダムは呆気なく決壊した。彼は声を抑えながらもエレンの中で涙を零した。

「ただいまー」

エレンは声を上げ、孤児院の扉を開ける。先ほど子供の声で溢れかえっていた様子はどこに行ったのか、部屋の中は静寂により支配されていた。

「お帰りなさい。エレン」

お迎えのダルク越しに談話室の様子を覗く。どうやら子供たちは部屋の中にちゃんといるようだ。

「ダルクちゃん？ 何して遊んだのかな？ これ？」

中の子供たちは妙に暗い顔をして俯いている。子ども特有の元気を出す者はひとりもない。

「いえ、いっしょに？ 遊んだ」だけですよ」

表情を変えずに言うダルク。しかも？ 遊んだ”というフレーズを妙に強調して来ている。そんな理由もあり、エレンは何をして遊んだのか怖くて聞けなかった。

帰り道、今日も暗い道を通り宿へと戻る。子供たちには泊まって欲しいと、せがまれたのだが、こうしてちゃんと宿へと戻っている。とは言ってもエレンは先ほどまで泊まる気満々だったのだが――

「ケンブスが機嫌崩しますよ」

そのダルクの言葉でエレンは宿へと戻ることに決めたのだ。ただでさえ朝夕二食と限られた食事なのだ。遅くなれば愛馬は怒るだろう。抜きになんてしたらそれこそ絶縁ものだ。

まあ、しかたがないと、エレンは諦める。それに明日はスラムに予定はないのだから。

「ねえ、ダルクちゃん。明日からの予定、決めたから」

「そうですか」

ダルクはエレンの言葉に静かに頷いた。

朝の憧憬

暗い部屋の中に光が射す。そろそろ時間だと思い、ダルクはベッドの方を眺める。そこには寝息を立てている少女がいる。少女はダルクが近づいたのに気づく素振りも見せない。良く見れば口元から出た涎が枕に小さな川を作っている。ダルクが少女の髪を撫でてやると、少し、くすぐったかったのか身体を揺らし、「ううん……」と声をあげる。このまま可愛い寝顔を眺めていてもいいのだが起こさないで怒られるのは自分なのだ。ダルクは彼女の耳元で囁く。

「起きてください。もう朝ですよ——」

「ううーん……あと五分……」

ベタな寝言を言い、エレンはうつ伏せになり動かなくなる。

「はぁ……」

思わずため息がこぼれた。一拍入れてダルクはエレンの頬っぺたをギュッと引っ張る。

「むぐむむむ……」

顔が変に歪むだけで起きない。

「起きないなら鼻に乾麺を詰め込みますよ」

「ひいっ！　そこは食べるための器官じゃないよ！」

ダルクの囁きにより、エレンはあっさりと身体を起こした。

「おはようございます」

「あはは、おはよう……」

エレンは冷や汗をかきながらダルクへと挨拶をする。その手は乾麺が詰め込まれていないか確認するためなのか鼻に行っていた。

「では、私はケンブスの世話をしてくれるので、エレンはごゆっくり

———」

「あっ、今日は私に任せてくれない？」

部屋を出て行こうとするダルクをエレンは止める。

「たまには私が世話するから、ダルクちゃんはゆっくりしててよ」

「ですが――」

「いいから、いいから！」

そう言うときエレンは素早く着替えを済ませ、ケンプスの世話用品の入った鞆を持って部屋を飛び出してしまった。朝から本当に元気だと感心し、ダルクは彼女を見送るのであった。

エレンの足は宿からすぐの牧舎に向かっていた。大きな木の扉を開けると中からは獣の匂いと藁の匂いが漂ってくる。来客が来たのに反応し馬たちは一斉に入口の方を見る。どの馬も自分の主人が来るのを待ちわびているのだろう。

「おはよう。ケンプス」

エレンは牧舎の中にいる、ひと際身体の高大な黒馬に話しかける。しかし、ケンプスは無反応で頭を垂らすだけだ。

鍵を使い足の鎖を外すとエレンはケンプスを外の井戸まで連れて行く。水を汲み、布を浸し身体を拭いてやる。

「ほらっ、ケンプス。大人しくしなさいっ！」

エレンに拭かれるのが嫌なのか、ケンプスは身体を揺すり、それを拒む。

「はあ……そんなに嫌わないでよ……」

悪戦苦闘。汗をかきながらもエレンは何とかブラッシングを終え、餌を出してやる。今日の餌はニンジンだ。餌が出た途端、ケンプスは自分から餌の入ったバケツに首を突っ込み食べ始める。

「もうっ、食事は素直に取るんだから……」

半ば呆れながらも、エレンはケンプスの食事の様子を見守っていた。良い食べっぷりを見ているとこっちまでお腹が空いてくる。生ニンジンをかじってみようとバケツに手を伸ばすが、ケンプスに鼻先で小突かれた。どうやらおこぼれは貰えないらしい。

食事を取らせた後、エレンは街の外までケンプスを連れ出していた。鞍を付け、そこに跨る。

「ほらっ、ケンブス。ゴーっ！」

両足を腹へとぶつけるエレン。しかしケンブスは走りださない。そればかりか暇だと言わんばかりに欠伸をしている。

「ほらっ、走ってよ！」

半分泣き顔になりながらケンブスを走らせようと腹を蹴り付けるエレン。だがその思いは伝わらないみたいだ。命令を出していないのに、しゃがみ込んでしまった。

「なんて馬だ……………」

エレンが諦めかけた瞬間、ケンブスはいきなり走り出したのだ。しかしそれはエレンの目指していた方向と逆、つまり街の方へと――

「ちょ、ちょっと、ケンブス！」

手綱を引き、制止しようとするが、まったく止まる気配はない。ただただ振り落とされないように、その胴体にしがみ付いた。

「ストーっプ！」

その声にケンブスは急ブレーキ。

「きゃっ！」

その反動でエレンは吹き飛び、道端の草原へと落馬する。

「いたたぁ…………お尻ぶつけた…………」

彼女が視線をあげるとケンブスが誰かの手に頭を擦りつけている。

この人を目当てにケンブスは走り出したのだろう。

「エレン。大丈夫ですか？」

「やっぱり……………ダルクちゃんか」

エレンはお尻を撫でながら差し出された手に掴まり身体を起こす。

「ケンブス。それを最悪って言うんだよ！」

エレンの言葉にも黒馬は反省の色を見せない。「ブルルル」と口を鳴らし、エレンを馬鹿にせんとする様子だ。

「はぁ…………どうして私には慣れないんだろう？」

ケンブスの尻をピチピチ叩きながらエレンはそんな愚痴を零した。

「ケンブス。エレンを乗せて少し運動してきなさい」

情けないエレンを見て同情してくれたのか、ダルクはそう言って手綱を渡してきた。そうすると不思議なことに馬は素直にエレンを乗せる仕草を取るのだ。

「なんか、納得できないな——まあいいか」

エレンは手綱をしつかりと掴み、馬を走らせる。

「うはっ、いいねえ！」

テンションを上げ叫ぶエレンを乗せ、漆黒の馬は荒野の道を走っていった。朝方の冷たい空気が頬にぶつかり、痛いくらいだ——だが、その感覚もまた気持ち良かった。

疾走はエレンとケンブスが満足するまでしばらく続いた。

朝のひと仕事を終え、朝食を食べるためにエレンとダルクは繁華街の方へと足を運んでいた。朝市をやっているのだろうか。街のあちこちから活気づいた男たちの声がする。

「やっぱり都市は活気があるよね」

「はい」

エレンはあたりをキョロキョロしながら、出店を覗きまわった。その結果、ダルクとエレン二人体制でも抱えきれないほどの朝食を買うことになってしまったのだ。原因はもちろんエレンの食欲にある。二人はストリートに面する広場の一角に腰を降ろし、食事をすることにした。

「エレン。少し気をつけ下さい。こんな調子じゃ破産ですよ」

「あ———ごめん。ごめん、つい、ね」

そう言いながらもエレンは満足そうな顔で朝ご飯であるサンドイッチをかつ込む。

朝の大通りには様々な人がいる。仕事に向かい足早に走る青年。道端で挨拶をする主婦。鞆を抱え学校に行くであろう子供。その様子をエレンはぼーっと眺めていた。

ふと気がつくと、足元で何かの鳴き声がある。いつの間にやら猫が

集まってきた。

ダルクは自分のパンを千切ると数匹の猫に順々に与える。笑いはしていないがその表情はいつもより暖かく思えた。

「なんででしょう？」

ダルクが不思議そうな顔をして横を見てくる。見つめるエレンが何か用があるかと思ったのだろう。

「いやあ、今のダルクちゃん、可愛かったなあって」

エレンはニコリと笑顔を見せ、そう言う。

「可愛い——ですか？」

だがダルクは首を傾げる。

「うん。ダルクちゃん。笑ってたし」

またまた首を傾げる。ダルクは自分がどんな表情をしていたのか気が付かなかったのだろう。

「おいでー！」

猫に手を差し伸べるエレン。

シャーッ！ エレンの手が出たところでそこにいた猫が一斉にエレンに威嚇の声をあげた。

「はあ、猫にも嫌われてるよお……」

エレンは肩を落とし、片手にあるスペアリブに食らいついた。

文字と音符

朝ごはんを済ませ元気づいたところでエレンは次の目的地へ向かうために足を進めていた。そこは街の中央にある大きな官邸であった。中心街とあって周りの建物も豪華だが、この建物はさらに豪華だ。まるでその威厳を象徴しているように堂々と構えている。

「ここに市長さんがいるのかな？」

どうやらエレンは市長を直接訪ねるつもりらしい。エレンは不審者のようにキョロキョロと敷地内を覗く。

官邸は高い塀に囲まれ、その唯一の入口の正門には屈強なガードマンが立っている。エレンがその横を通ろうとすると、当然の如く彼女は止められてしまう。

「失礼ですが、ここに何のご用でしょうか？」

口調は柔らかくもその男の眼光は厳しい。どうやら二人は不審者に見られているようであった。だがエレンは胸を張り、「市長さんに会わせてください」と、言う。

「アポイントメントはお取りでしょうか？」

「ううん？ 全然」

「それでは約束を取り付けてから再度お越し下さい」

丁寧な言葉であったが実際のところ門前払いされた二人。

「はあ、駄目かあ……」

勝算があったのか、エレンは肩を落としながらため息交じりに言った。

「でも、市長に会ってどうする予定だったんですか？」

「んー。スラムをどうにかしてもらおうかなって……」

一市長がそんな力を持っている訳は無いのだが——それを言いかけたところでエレンが睨んでくる。

「今、すっごい、馬鹿にしたでしょ！」

「いえ」

「本当？」

「……………」

エレンに見つめられ、ダルクは目を下へと背ける。これは否定の意と変わりない。

「もうっ、どうせ馬鹿ですよ！」

エレンはそんなことを吐いて、肩を怒らしながら道を先に行ってしまった。まるで子供のようだとダルクは思う。

行き場を無くした二人は再度公園へと戻っていた。エレンはベンチに腰かけると、「うーん、うーん」と頭を抱え呟いている。どうやらダルクに頼らないで市長に会う方法でも考えているのだろう。だが、その甲斐なく時間だけが刻々と過ぎていく。

ダルクは悩める歌姫の隣で正面の通りを見ていた。そこから見える風景の人々は二人がそこにいる理由など知るよしもなく、目的地向けて足を進めている。ダルクは思う。同じ街にスラムなどあっても、そこに住む人にとっては何の問題も無いのだと。だが住人ではないこの少女はこんなに悩んでいる。その光景が滑稽に思えて仕方がなかった。

「うう……ダルクちゃん……ギブアップします……知恵をお貸しください」

しばらくするとあっけなく態度を翻し、ダルクに縋り付くエレン。これはダルクにとっても慣れたパターンである。

「市長に会うにはまず手紙で陳謝するのがいいと思われます」

「ふむふむ。ラブレターでも書けばいい訳だ」

「……………」

「じよ、冗談だよ！ そんな可愛そうなものを見る目をしないでよ！」

「まずはスラムの現状などを調査して打開策などを市長、もしくは力のある人に聞いてもらうのがいいのでしょうか？」

「なるほどね。でも調査なんてどこですればいいの？」

「まずは図書館にでも行き、この都市の現状を知りましょう」

「らじゃ！」

エレンは敬礼をし、広場を飛び出し道を走りだす。だが、その足はすぐに止まった。

「ところで……………図書館はどこ？」

「こっちです」

ダルクはエレンの進んだ真逆の方向を指差した。

「わあ……………広い……………」

図書館に來たエレンが最初に言った言葉はこうだった。だが彼女が眩きたくなるのもこの広さを見れば納得だろう。そのフロア内には新旧様々なジャンルの本がびっしりと整列している。

「これじゃあ探すのは大変かもね……………」

「ええ。手分けして探しましょう」

ダルクの案により二人は別れて行動することになった。

十分後、ダルクはそれなりの量の本を持ち、一番奥の机に腰を降ろした。だがそこにはエレンの姿はない。しばらく経っても姿を現さない彼女を探すためにダルクは立ち上がる。歴史や社会関係のコーナーに彼女の姿はない。どこにいるのだろうか。いや考えるまでの問題ではないのかもしれない。目星をつけ歩くと、エレンの姿はすぐに見つかった。図書館の隅の方で何かを読みながらクスクスと笑いをこらえている。エレンのいる棚には娯楽の文字が表示されている。半ば気配を消しながらダルクはエレンに近づく。

「何を読んでいるんですか？ エレン？」

「うわあっ！」

急に声をかけられ驚いたのか、彼女は読んでいた本を落とす。それはコミカルな挿絵の入った本であった。

「ち、違うの！ 歴史の本探してたら、この本が目に入っちゃって——」

「……………」

「そ、そのすぐにやめようと思ったんだけど……」

エレンの言い訳にワザと沈黙するダルク。言葉を続けるエレンはそんな顔を見て、どんどん小さくなっていく。

「とりあえず、エレン。図書館では静かに、でないと……」

彼女を止める前に司書さんが姿を現してしまった。注意喚起が少し遅かったらしい。

「何をお騒ぎでしょうか？」

司書さんといえば眼鏡の女性をイメージするが、そこにいたのは青年だ。男にしては長い髪で、声を聞かなければ、女の子と間違えていたかも知れない。

「えっと……」

「すいません。何でもありません」

エレンが話を大きくする前に、ダルクは先手を打つ。

「館内では静かにお願いします」

そう釘を刺す、司書さん。

「あつ、そうだ！ すいません。この街のことを調べてるんですが、その本はどこにありますか？」

釘を刺されたというのにエレンの声は大きい。

「街のこと……ですか。こちらにありますよ」

少し間をおいて、司書はエレンをある棚へと案内する。

「街の歴史に興味を持つ人なんて、あまり居ないですから、僕は嬉しいですよ」

ご機嫌そうに彼は歴史のコーナーへと二人を連れて行く。

「この辺りで探してもらえば……」といっても本がありませんね。誰か使っているのでしょうか？」

そこの棚の一行がごっそりと空欄になっている。

「私が机に移動しました」

指を指す、奥の机には大量の本が山積みになっている。

「すみません。迷惑ならば戻します」

「いえいえ、いいんです。ここだけの話、あの辺りの本ってあんまり人気ないのですよ」

彼は苦笑した。その中には街の歴史が廃れていくという彼の悲しみも少し混じっているようであった。

「では、僕は失礼します。また何かあれば、気軽にお声をかけてください」

彼は一礼して去っていった。

「よし、ダルクちゃん。さっそく作業を開始しようではないか！」

やる気のスイッチが入ったのかエレンは椅子に飛び乗り読書を始めた。だが――

「ふわあああ……」

読み始めて数分後、エレンはすでに大きなあくびをしていた。単に街のこと言っても風俗から産業まで色々ある。エレンが担当したのは最近の主な事件というもので、新聞の切り出し記事がそのまま本として残している物を参考に使っていた。

「トニー・スティグラ―氏が総合球技優勝……ねえ」

彼女の目に留まるのはどうでも良い見出しのみ。平和な文章が新聞には綴られている。

「あつ、また、鉱山のニュース？」

？近郊の鉱山でガス漏れか。犠牲者十二名にのぼる？先ほどから動揺のニュースを読むことが多い。とは言っても、特にエレンの目を引くわけではなく、彼女の集中力、好奇心は共に皆無になっていた。「ねえ、ダルクちゃん………面白いことあった？」

「ええ。人口増加のグラフなどを見ると、この都市が、いかに短期間で発展したのか――」

「そんなんじゃないくて、もっと楽しいような――」

「市議員、強制猥褻で逮捕目前、妻が激昂、五体バラバラ殺人、みたいなのですか？」

「あのさ、そうじゃなくてね………ああ、もう、ちょっと休憩！」
エレンは憤慨し、その場を後にしてしまった。ため息をつくダルク

だが、これで作業に集中できると安堵し、山積みから次の本を手にとった。

図書館から出て、背伸びをする。どうしても閉鎖空間では肩がこっ
てしまうのだ。図書館の敷地内にあったベンチに座り、昼前の日光
を身体全体で浴びる。こんな陽気を浴びたら……「ふわあああ……」
大きな欠伸をして先ほどよりも深くベンチへと腰を掛ける。

こんないい天気なのに図書館での作業がまだまだ残っているのだ。
本音を言うならこのまま逃亡したい。

「でも、そんなことしたらダルクちゃんは何をしてくるか……」
過去、ダルクからされた？お仕置き？の数々を思い出し、エレン
の背中には鳥肌が立った。

「ともかく、今日は頑張って本を読んで、それで……えっと……
……」

「お嬢さん……」

「ん？ ダルクちゃん……？ もう少し寝かせて……」

「あのお……こんなところで寝たら風邪ひきますよ？」

「んー？ 誰え？」

エレンの寝ぼけ眼には一人の女の子、いや、男の子が映る。

「ふがあ？ ダルクちゃんじゃない？ 誰？」

「え、えっと……ボクは——」

「ああ、よく見ればさっきの可愛い司書さんだ。こんにちはー」
「こ、こんにちは……」

可愛いと言われたことを苦笑しながら彼はエレンへと挨拶を交わ
す。

「どうしたの？ こんな所に？ 仕事は？」

エレンは浮かんできた疑問を一気にぶつける。

「いえ、お昼なのでお弁当を食べに来たのですけど」

「おひるう？ あれ、私、いつの間に寝てたんだろ？」

ついさっきは朝だったので、さかのぼって計算すると二時間以上寝ていたことになる。その計算が終わったところで目の前にいる司書さんの姿が映る。彼はお昼を食べに来たと言っていた。

「あつ、私が邪魔なのか。ごめんね」

ここは彼の場所であることに気が付き、エレンは急いでそのベンチから飛び降り、場所を譲る。

「いえ、大丈夫です。僕は別の場所で食べるので」

「えーっ！ ダメだよ。私がどけるから」

「いえ、本当にお気になさらず」

「ダメダメっ！」

変なところで強情になるのがエレンだ。その態度に司書さんもタジタジ。

「んー。じゃあ一緒に座ればいいのか。ほら、ほら」

名案とばかりにエレンはベンチを半分開け、少年を隣に呼び込んだ。

「え、でも……」

「ん？ なにボーっとしてるの？ ほらっ！」

「うわっ！」

エレンは彼の手首を引っ張り、強引にベンチへと座らせようとする――が、

「きゃっ！」

「うわっ！」

勢い余って、彼、諸共ベンチへと倒れこんでしまう。

「あたたた……ごめんね」

「い、いえ……」

彼は慌ててエレンの上から飛び起き、ベンチへと座る。距離を離そうとしてか最大限に端の方まで寄っている。彼の気遣いを知らずエレンは中央ラインを大きくはみ出し左側に詰め寄っている。

「あつ、そうだ。司書さん。名前は？」

「えっ？」

「な・ま・え！ 教えてよ」

いきなり質問が飛んできて、彼は戸惑った表情をしたが、すぐに自己紹介をしてくれた。

「僕はニコル。ニコル・サンドバレーです」

「ニコルか。私はエレン。よろしくね」

エレンは彼へと手を差し出す。また一瞬躊躇った後、彼はエレンの手を取り、ペコリと頭を下げた。こうなればエレンのペースだ。それから二人はベンチに座りながら会話することになる。

「ニコルって司書さんなんだよね？ 毎日ここにいるの？」

「はい、司書の仕事をしながら色々勉強させてもらっています」

「ふーん。勉強なんてすごいねえ。私は字の読み書きぐらいしかできないのに」

エレンは尊敬の眼差しを彼へと向ける。彼は「大したことないです」と恥ずかしそうに次の話題をエレンに振った。

「エレンさんは何かお仕事をなさっているのですか？」

「仕事……うーん。別に何も。ただ旅先で歌ってるだけかな」

「歌……エレンさんは歌姫なんですね」

「まあ、そんなところかな。聞きたい？」

自分のことに興味を持ってもらい有頂天な彼女は歌までサービスしようとしている。

「えっ？ いいんですか？」

「うん。お昼寝後の眠気覚まし」

エレンはコホンと咳払いをし、唄を奏でる。陽気に負けないぐらいの明るい調子の唄だ。

「えへへ。どうかな？」

短い曲が終わったところでエレンは、はにかみ言う。

「……素晴らしい。すごいですよ、エレンさん」

ニコルは目を丸くしてエレンに心からの拍手を送った。

「いやあ、それほどでもないよ———そうだ、一緒に何か歌おうよ」

「えっ、僕、あまり唄は……」

「いいから、適当に。要は楽しめばいいんだよ。はい、いっくよー！」

強制スタートを切るエレン。その様子は楽しげで、ニコルは意を決して即興で唄を歌おうと頑張る。そのせいか声の上擦って何とも言えないトーンの声が出てしまう。恥ずかしそうにボリウムを下げてしまう彼だが、エレンは「気にしないで」と言わんばかりの笑顔で彼に向ける。その表情に押され、また彼はボリウムを上げていく。

美しいソプラノと少しとぼけたアルト。二人の声は誰も居ないお昼過ぎの図書館の庭へと響き渡る。

「あはは。やっぱり誰かと一緒に歌うと楽しいや」

「そうですね。唄なんて久しぶりに歌いましたよ」

「へえ、それにしては上手だったじゃん」

「そんな………」

ニコルはお世辞だと分かっているてもその言葉が嬉しく、思わずはにかんでしまう。

「あっ、そうだ。もうお昼なんだよね？ お弁当の邪魔しちゃいけないや。じゃあね」

突然立ち上がったエレンは手を合わせ、「ごめんね」と囁く。そして踵を返してしまう。

「あっ———また」

エレンは彼に手を振り、図書館の方へと駆けていった。

図書館内に入ると先ほどと同じ場所にダルクが居た。その脇にあったはずの大量の本はだいぶ少なくなり、代わりに十数枚の羊皮紙が重ねてあった。

「ダルクちゃん。お疲れ」

「お疲れ様です」

ダルクはエレンの顔も見ずに挨拶をし、彼女は仕事の手を休めない。

「ごめんね。一人でやらせちゃって」

いつものことだが一応手を合わせ、彼女を労っておく。

「いえ。エレンも色々と忙しそうでしたから。お昼寝とかに」

「うっ……………」

「しかも、あの司書さんと楽しそうに唄まで歌っていましたよね」

「ううっ……………」もしかしくなくてもダルクちゃん、怒ってる？」

「いえ、いつものことですから」

「そ、そんなぁ…………ごめん謝るからさ、機嫌直してよ？　ね？」

「ですから、怒っていません」

「嘘だぁ…………いつもよりも怖いよ…………」

無表情で怒りを表す彼女に平謝りをするエレン。その様子が鬱陶しかったのか、彼女はお弁当の入った袋を持ち、庭先へと黙って行ってしまう。

「ちょ…………その袋には私のお弁当も入ってるんだってば！」

仕方がなくエレンもその後を追うのであった。大好きなものを詰めたというのに、今日のお弁当はあまり美味しくなかった。

「はぁ…………今日は疲れたねえ…………」

宿のベッドにダイヴし、エレンはそんなセリフを言う。今日の成果はダルクが机に置いた羊皮紙の束が物語っている。

「これだけ、調べ物するとなんだか頭が良くなった気がするね」

何の根拠もなくそんなことを言い、彼女は再び羊皮紙へと目を通す。そこには街の成り行きやスラムができた原因などが具体的に描かれていた。

「鉱山の閉鎖が原因かぁ…………」

「はい。おそらく。十年前から今まで鉱山はずっと閉鎖されていま

す。もし、封鎖を解ければ雇用が千人規模で増えますし、スラムの人たちの仕事ができると思います」

「でも、ガス噴出事故で閉山されたんでしょ？　どうやって閉鎖を解くの？」

「それは、私たちが調べればいいんだと思いますよ。近年ちゃんとした調査は行われていないようなので」

「そうだけど……ちょっと怖いかも」

「何を言っているんですか。そんなに軟ではないでしょうに」

「あはは。そうだね」

その後、少し話をし、エレンは蠟燭の火を吹き消す。明日からはまた忙しくなりそうだ。今日はゆっくり寝てしっかりと備えないと。

鉾山へ

次の日の朝はあつという間に来る。ダルクに起こされたエレンはいつも通りの眠気眼でウトウトと着替えを済ます。その間にダルクは朝食の支度を済ました。今日は味付け肉とサラダ菜のサンドイッチだ。朝食を終えるころにはエレンの眼はパツチリと開いていた。必要最低限の荷物をまとめた後、二人は宿屋を出る。向かった先は牧舎だ。

「ケンブス。おはようございます」

「おはよー！」

二人は黒馬に挨拶をすると、彼女を牧舎から出し、餌をやる。大好物のニンジンを食べている間にエレンとダルクは二人掛りでブラッシングをする。食事が終わるころには黒馬の毛並みは綺麗に整っていた。

「じゃあ、準備万端だね。行こう」

「そうですね。夕刻までには帰らないとゲートが閉まってしまいうすから」

「じゃあ、さっそく――」

ダルクの後ろにエレンは乗る。二人が小柄であり、馬が大きいことから二人乗りをしても窮屈とは感じない。

「せいやっ！」

掛け声と共にダルクは馬の腹を蹴る。それを合図にケンブスは走り出す。誰も居ない商店街を抜け、あつという間にゲート前に到着する。

検問であつさりと許可をもらい、扉が開かれる。目の前に広がるのは果てしない荒野。太陽から出る朝日の光が先の先までを照らし出している。風は穏やかで目を瞑れば、寝起きの街の鼓動を感じられそうだ。まさに絶好の疾走日和である。

「ねえねえ、ダルクちゃん。たまにはケンブスにも本気を出させて

みようよ」

エレンはそんなことを言う。いつもなら彼女の意見に否定的なダルクだが、今回の意見には賛成だ。なぜなら馬と言えど、走らなければ感覚を忘れ足が鈍るからだ。それでは緊急時に対応できない。

「分かりました。掴まっけてください——はっ！」

気合の入った声に一段とスピードを上げるケンブス。

「うひょっ！ いいねえ」

長い髪を靡かせながら、エレンは上機嫌に言葉を紡ぐ。そんな耳元で叫ばれた言葉でさえこのスピードでは宙空へと置いていかれてしまう。痛いほどの風を受け、馬はさらにスピードを上げていった。

「ほいつ、到着！」

三十分程度で目的の場所に着く。ここが鉱山跡地らしい。目の前には大きな門があり、正面には太字で「立ち入り禁止」と書かれている看板がある。

「立ち入り禁止……か。どうしよう？」

「そうですね——あっちに廻ってみましょうか」

ダルクは正門から向かって右側を差す。その指示に従って、ケンブスはゆっくりと裏手へと足を伸ばしていった。

裏に続く道も嚴重にフェンスなどが張られ、頑なに侵入者を拒んでいる。だが彼女はセキュリティの小さな穴を見逃さなかった。フェンス上方にある有刺鉄線が一部分だけ不自然に無くなっているのだ。

そこで馬の足を止めさせ、彼女らは数十分ぶりに地面へと足を下ろすのだ。

「はあ、やっと降りれた……さすがに股が凝るなあ……」

他人が居ないことをいいことにエレンはレディーとしては恥じるべき仕草を取る。一方ダルクは彼女を注意もせずに持ってきた鉤爪付きのロープを中へと投げ入れる。先端は見事に引っ掛かり、進路が開かれる。軋むロープを使いながら彼女たちは敷地内へと侵入す

る。

降りたところには数件の建物があり、その外形からそこが以前の詰め所であったことが分かった。

「うわぁ、本当に誰も居ない……まるでゴースタウンだよね」

数件の建物の間を抜けながらエレンはそんなことを言う。以前は賑わっていただろう場所であるからこそ、人を取り除いてしまえば一層寂しく感じるのかもしれない。不気味な雰囲気をもとめず二人は鉱山の入り口を目指して進んでいく。

すぐに目的の場所が見えてきた。木工の壁で囲まれた通路は長く伸びていて、昼間だというのに奥には夜のよう闇が待ち構えている。エレンは鞆から小さなランプとマッチを出すと、火を起こし、光を作った。

「行こう。ダルクちゃん」

「はい」

元気の良い言葉を合図に二人は坑道へと入っていく。通路の幅は思った以上に広い。真中にはトロッコ用のレールが敷いてあり、エレンはわざとなのか、その淵でバランスを取り歩いていく。彼女がよろけるたびにランプの光がぶれ、光と暗闇を反転させる。

「うわぁ、なんか興奮してきた！ 肝試しみたいだね！」

「そうですね」

誰も居ないはずの鉱山なのに、エレンの声だけでなぜか賑やかに感じる。これが本当に肝試しならばペアはさぞかし心強いだろう。とはいっても今のペアはダルクなので、彼女は煩げにため息を付くのだが。

「エレン、少し待ってください」

「えっ？ なになに？ お腹すいた？」

「いえ。ここの鉱石を調べさせてください———お腹が空いたのですか？」

「うん。すいた」

「はぁ……」

ダルクはため息を付き、自分のバックからクラッカーを出し、彼女に渡してやる。

「おおっ！ さすがダルクちゃん気が利くねえ」

エレンは通路の端にあった、トロツコの残骸に腰かけ、満足そうにクラッカーを口に運ぶ。

静かになったエレンを横目にダルクは調査を進める。

「どう。どう？ ダルクちゃん。何か分かったの？」

クラッカーがなくなった
猿ぐつわが外れたエレンはまた口を動かし始める。だが幸いなことにすでに分析は終わっている。

「これを見てください」

「わっ、真っ黒な石。何それ」

「これは燃料石です。それも純度が高い」

「ふへえ……暖炉にくべてある、あれだね」

この時代の大部分の機械は蒸気で動かされている。その動力源の一つがこの燃料石だ。それがこの鉱山にはまだ多く眠っているのだ。

「まるで宝の山ですね」

ダルクはそんなことを呟いた。

「えーっ、宝の山ならダイヤモンドとかルビーとか出てきてほしいよ」

このコメントの差は価値観の違いだろう。エレンは床に落ちていた同類の黒い石を拾うと、一瞥し、それを通路の果てへと投げ捨てた。

「そーいや、ダルクちゃんには宝石とか興味ないの？」

急な質問はエレンの得意分野。唐突に疑問が投げかけられる。

「興味はありませんが、綺麗だと思います」

「へえー。ダルクちゃんには宝石とか似合うと思うんだけどな」

冗談なのか、そうではないのか、エレンは笑顔でダルクにそんな言葉を掛けた。ダルクはどんな表情をしているのか分からず、無表情で通路の先に向かうのであった。

それから十分ほど、ゆっくりと歩を進める。目線の先には相も変わらず、薄暗い洞窟が続いており、変わったことといえば、だんだんと気温が上がってきていることだろうか。

「ムシ暑いね……団扇でも持ってくればよかったかな」

エレンはバサバサとスカートを持ち上げては下ろす。対照的にダルクは服装も表情も乱さずに先に見える暗闇を見据えている。

「エレン。気がつきましたか？」

「何が？」

「この洞窟は人工のものではありません」

「えっ？ そうなの？」

エレンは辺りを見渡す。先ほどまでは木枠で囲まれていた通路が、一部分を境目に無機質な岩肌を露呈した道へと変貌している。たしかに彼女が言う通り、これは天然のものなのだろう。

「どこかの洞窟の横穴と繋がったのかな？」

「そうかもしれませんね」

「なんか、やっと、肝試しから探検って感じになってきたね」

どちらも今回の目的ではないというツツコミを心に留め、浮足立った少女の後を追うダルク。

「ふうふうふう……さらに暑い……」

息を切らしながらエレンは先を進んでいく。まあ彼女が嘆くのも無理はない。ここの温度はゆうに五十度を超えているだろう。湿度と合わさった外気は容赦なく皮膚を襲う。

「ねえ、ダルクちゃん……あっちに光が見えるよ！ 外かな？」

「それは無いと思いますが……」

「でも、光ってるもん！ ぜーったい、外だ！」

余程、この暑さから逃げ出したいのか、エレンは急に走り出した。仕方がないのでダルクも早足で彼女を追う。だが数秒で悲鳴と共に彼女の足が止まった。

「うわあああ！ ダルクちゃん、ストップ、止まって、お座り！
ハウス！ えっと、お手！」

最後の方には言葉の意味が変わっていたが止まれということだろう。ダルクは足を遅め、歩いて彼女の傍へと寄る。

「どうどう……ゆっくりね」

エレンは地面にしゃがみ込んで慎重に何かを覗きこんでいる。ダルクも彼女越しにそこを覗く。その瞬間、強い熱気が顔面へと上がってきた。

「溶岩ですね」

「うん。私だって、それぐらい分かるよ」

縦穴の遙か下には紅く燃える溶岩が踊っている。その溶岩に向かってうように大した舗装されていない道が続いている。

「この下まで行きますか？」

「……いい。熱いもん」

「そうですね。引き返しましょうか」

「うん。でも調査終わったの？」

「ええ、ガスも溜まっていませんし、鉱石も残っています。これならば復興の目途もたつと思います。この溶岩だけが気になりますが……」

「そうだね。暑いとお仕事も大変だからね」

エレンは踵を返し、その場から立ち去る。ダルクはその場にしばらく留まり、遙か下方の溶岩を見つめていたが、

「ダルクちゃん！ 何してるの？」

だが、エレンの声に彼女はその後を後にした。

「はあ……シャワー浴びるっ！ 絶対浴びる！」

調査を終えた部屋に戻ってきた途端、エレンは服を脱ぎだし、シャワールームへと突入した。どうやら余程、鉱山で汗をかいてきたらしい。ダルクは彼女を止めることなく、部屋の中の椅子に座り、

羊皮紙に何かを書き始めた。

シャワールームからは鼻歌が聞こえてくる。まあいつものことだ。その唄を耳に入れながらペンを進める。

「ぷはあ……気持ちよかった！ 次はダルクちゃんの番だよー」

お風呂上がりの少女は頭にタオルを乗せ、いかにも上機嫌だ。しかし彼女の誘いには乗らないダルク。

「すいません。これを完成させてから入らせていただきます」

「ん？ なになに？ 鉦山復興についての意見書？」

表紙のタイトルをそのまま読むエレン。

「ええ。こういうものは早いうちにまとめた方が良いので」

「ふーん。頑張ってるね。私は街の中を散策してくるから」

仕事をダルクに押しつけて、エレンは部屋を飛び出した。扉が閉じる音が聞こえてから、ダルクはため息を付くのであった。

お菓子と子供とシンデレラストーリー

昼過ぎの商店街を歩きまわりながらエレンは店を巡っていた。いつも隣にいる口うるさい従者が居ないせいか、普段以上に衝動買いをしてしまう。気がつけば両手いっぱいにおかしな食料を買い込んでいた。その重量と反比例するように財布の中身は軽くなった。このまま帰ったら十中八九、ダルクに怒られるだろう。まあ、買ってしまったものは仕方がないと、エレンはポジティブに考えるのだ。

「うーん……そうだ。孤児院の子たちにも分けてあげよつと……つと、少し持ち辛いかな」

両手の紙袋のせいで視界が遮られる。フラフラしながらも大通りを歩く。そんな危なげな少女を見て、周りの人は道をあけてくれる。一人以外は――

「うわっ!」「きゃっ!」

前方から衝撃が走り、エレンはそのまま後ろへと倒れてしまう。咄嗟に食料を優先に守ったことで彼女は腰から石畳の地面に打ち付けられた。

「あたたた……」

「ご、ごめんなさい。大丈夫ですか?」

「大丈夫じゃないよ! 食べ物が落ちたらどうするの――って、あれ?」

ぶつかってきた主の顔を見て、エレンは驚愕の声を上げる。

「ニコルじゃん。どうしたの? こんな所で」

先ほどの怒りもどこにいったのやら、エレンは笑顔で彼へと挨拶をする。

「ど、どうも……それより、本当に大丈夫ですか?」

腰で地面に座っているエレンに対してニコルは心配そうに声をかけた。

「えっ? ああ、大丈夫だよ。食料は潰れてないみたいだし」

「えっと、そうじゃなくて……エレンさんが」

「私？ 私は大丈夫だけど」

その場から立ち上がり健在をアピールする。

「本当にすいません。僕、考え事していると前が見えなくなってしまうらしいのです」

ペコペコと頭を下げる少年。その動作からは彼の申し訳なさがにじみ出ている。

「いいって、そんなに謝んなくたって。それより今日は図書館どうしたの？ お休み？」

「ええ。そうです」

「ふーん」

「エレンさんは、お買い物ですか？」

「うん。おやつを買いに」

「おやつ……ですか」

彼はエレンの抱えた紙袋を眺め、引きつったような顔をする。それはそうだろう。エレンの荷物は彼の思うおやつの量より十数倍も多いのだから。

「これからね、みんなにおやつをあげに行くんだ」

「へえ。僕もお手伝いしましょうか？」

「いいの？ 結構重いよ？」

「それなら尚更手伝いますよ」

「じゃあ、お願いしようかな」

ニコルは親切心でそんなことを言った。しかし十分もしないうちに彼は後悔する羽目になるのだ。

「ふうふう……結構重い……ですね」

「ごめんね。軽いほう渡したつもりなんだけど」

街中を目的地に向かって歩く二人。だが、その姿勢は対照的だ。スイスイいつも通り歩くエレンに対して、ニコルの足取りは重い。司書という仕事柄が無いのは仕方がないが、女の子の前で情けない姿を見せられているという事実がさらに彼を苦しめるのであった。

「エレンさん、これをどこに持っていくのですか？」

「孤児院だよ。スラムの」

「スラム……？」

その言葉を聞いて怯えたような声を出すニコル。エレンはその声に気が付き、

「大丈夫。私と居れば安全だから」

そんな言葉を彼に投げ掛ける。何を根拠に言っているのか知らない彼にとって、その言葉の意味は明確には分からないのであった。

「こんにちはー」

元気よく挨拶をし、門をくぐる。その声に釣られるようにしてすぐに住人達は顔を出した。

「あっ！ エレンだー！」

一人の声を二人が聞き、二人のざわめきを三人が聞く。波紋のように情報は孤児院の奥まで伝わっていく。エレンが食堂に入るころには子供全員がそこに集合していた。

「エレン。今日はどうしたの？ 何、この袋？」

子供たちは興味心身に袋の中身を覗こうとする。

「はい。みんな聞いて。今日は奮発しておやつを買ってきました」

「おーっ」

子供たちはおやつという言葉にざわめき、目を輝かせる。

「こっちの人はニコル。おやつ運びを手伝ってくださいました」

エレンの声に子どもたちは拍手をする。

「ど、どうも」

熱意ある歓迎を受け、ニコルは照れたように笑った。

「このお兄ちゃんってエレンのコイビト？」

マセた女の子がいきなりそんなことを聞いてくる。

「えっ？ そ、そんな滅相もない――ぼ、僕はエレンさんと何も――」

「そうそう、ニコルはただの友達だよ」

「そ、そうですよ、あははは……はは」

笑みを浮かべながらもキツパリとエレンはそう言った。彼女は事実を言ったただけだが、ニコルは少しばかり落ち込むのであった。

「とにかく、みんな席について、おやつタイムだー！」

「はいーい！」

仲良く声をあげ、子供たちは席へと座る。エレンはクッキーやナッツなどのお菓子を均等に子供たちへと渡していく、

「はい、これ。ニコルのだよ」

「いいのですか？ 僕も頂いて？」

「いいの。いいの。手伝ってくれたんだし。あと院長先生も分もお土産でー」

「エレンー！ 食べていい？」

分けている最中からソワソワしてた子が遂に切り出してきた。

「待って、ほら、まずは食事の前の祈りだよ。ニコル、祈りの言葉をお願い」

「あっ、はい」

彼は手を組み、瞑想を始める。子供たちもそれに釣られ目を瞑る。もちろんエレンもだ。

「主よ。私と家族と友に大地と海と空の恵みをもたらし頂き、ありがとうございます。これら尊い命を我が糧とすることをお許しください……」

「いただきまーす！」

祈りの言葉を言い終わった瞬間、子供たちは他に目もくれず、お菓子を飛び掛かる。

「おいしーい！」

「本当だ。僕、こんな甘いもの食べるの久しぶりかも……」

余程、お腹を空かせていたのか、子供たちはあっという間に目の前のお菓子を平らげてしまった。だが、エレンも負けてない。競争の如く、お菓子を口の中に詰め込んでいく。

「ふあれ？ にこおる、ふあべないの？」

クッキーでモシヤモシヤになった口でエレンはニコルへと話しかける。子供という歳ではないというのに、その行動はまるで現役だ。そんな彼女の様子を見て、彼はほほえましさを感じるのだ。

「僕はこんなに食べられないので、誰か僕の分をあげますよ」

「えっ？ いいの？」

彼の隣りにいる男の子は目を輝かせながらそんなことを言う。しかし、それを阻むものが。

「ダメだよ。これは彼の分なんだからね」

「はい……」

エレンに怒られ、彼はしょげてしまう。

「エレンさん、本当にいいんですよ？」

「でも、その子だけにあげたら不公平になっちゃうから」

「あっ……」

周りを見れば、みんながニコルを見て物欲しそうな顔をしている。食べ盛りの子供たちばかりだ。お菓子などいくらでも食べたいのであろう。

「あっ、そうだ。本当にお菓子っていらなんだよね？」

「ええ、お腹一杯なので」

「じゃあさ、知り合いの女の子が居るんだ。その子にあげてきてもいいかな？」

「ええ。どうぞ」

「そっか。ありがとう——えっと、ジョシュ。行くよ」

「えっ——あっ、うん」

エレンは立ち上がり、遠くの方に座る男の子を指名し、お菓子を持ち、部屋を出ようとする。

「えーっ？ エレン、行っちゃうの？」

部屋中からのブーイングだ。

「大丈夫。すぐに戻ってくるから。それにニコルが遊んでくれるよ」
「えっ？」

「じゃあ、お願いね」

「あつ、ちよつと――」

彼が慌てて止めようとするのもお構いなしに、エレンは扉の向こうに消えて行ってしまった。

ジョシュはエレンの前を歩き、彼女をスラムへと案内していく。その足取りは心なしか早い。

「あれっ？ ルシュ、居ないや」

ジョシュはスラムと繁華街の間にあるゴミ捨て場でいつも彼女と会っているらしい。しかし、ここに彼女の姿は無い。

「ねえ、あの子たちもスラムの子？」

エレンは大量のゴミの中で手を真っ黒に染めて何かを探す子供たちを指差す。

「うん……そうだよ。スラムで仕事ができない子供は、ああやってゴミの中から使えそうなものを拾って生活しているんだよ」

「そっか……」

エレンは手の中のおやつの入った袋を見る。どう割り算をしてもこの量じゃあの子たちのお腹を満たすことはできない。

「行こう、エレン。ルシュは家にいるかも」

「あつ、うん……そうだね」

二人はまた歩き出す。エレンが振り向くと、先ほどの子供たちは変わらない様子でゴミの山から物を掻き出していた。

歩くこと数分でルシュの家が見えてきた。外見は家だが、外壁は剥がれ、壁の隙間からは家の中が覗ける。家の中からは何者かが動く気配がある。

「ねえ、誰かいるみたいだよ。覗いてみようか？」

「ダメだよ。エレン！ ルシュの父親は怖いんだ。バレたら何をされるか分からないよ！」

「大丈夫。バレなきゃいいんでしょ？」

「そうけど……」

心配する彼を横目にエレンは家の中を覗き込む。気配がした通り、家の中には誰かが居る。だがそれは幼い少女の姿ではない。黒服の男が二人、そしてみすばらしい衣服を纏った、疲れ顔の男——あれがルシュの父だろう。

「誰だ、アイツら……知らない。スラムの人たちじゃないよ」

「そっか。なんだろう？ 何か話しているみたいだけど」

小声で話しているせいかな、その話の内容は聞こえない。しかし父親の表情は芳しくない。

「何の話をしているのかな？」

「さあ？ その窓を開けてみたら聞こえるんじゃない？」

「えっ？ やめなって！」

「よっと……あれ、固いや……とお！」

建てつけが悪い窓を強引にエレンは開けようとする。

ガチャン——

懸念していた通り、大きな音が出て男たちはこちらを振り向く。

「誰だ！」

「うわっ、やばっ！ エレン！ 逃げるよ」

「う、うん！」

男たちが家の外へと出てくる前にエレンたちはその場を駆け出し、一目散へと路地へと姿を消した。

「はあはあはあ……エレン……なんてことするんだよ……」

「えへへ。失敗、失敗」

悪びれた様子もなく、エレンは舌をペロツと出し、笑う。

「ん？ あれって？」

「えっ？」

路地から見える少し大きな通りを歩く女の子を二人は眺める。何

というタイミングであろう。そこにはルシュの姿があったのだ。彼女は片手に鞆をぶら下げて、キヨロキヨロと辺りを見渡している。

「おーい。ルシュ！」

「あつ、ジョシュ」

声でこちらに気が付いたルシュ。彼女は向きを変え、こちらへと歩いてくる。

「こんにちは、ルシュ」

「あつ、えつと……こんにちは……」

エレンの顔を見た途端、彼女はバツの悪そうな顔をする。もちろん彼女がエレンの顔を覚えていたからだ。

「あ、この人はエレンだよ」

「よろしくね」

彼女とは対照的にエレンは笑顔で挨拶を交わす。

「あつ、そうだ。これ、ルシュにあげようかと思って」

「えっ？ なんですか……？」

恐る恐るエレンから紙袋をもらうルシュ。その中身を確認した途端、彼女の表情が明るくなる。

「これ……食べていいんですか？」

信じられないという顔でエレンを見る、少女。笑顔でエレンはお菓子を勧める。ルシュはクッキーを取り、口に含む。

「わっ……甘い……美味しい……」

「そっか、口に合って良かった」

余程お腹が空いていたのか、ルシュはそのお菓子をあつという間に平らげてしまう。

「美味しかったです。ありがとうございます……」

エレンにはにかむルシュ。その笑顔はまだ固いが、二人の距離は先ほどよりも確実に近づいただろう。

「ルシュ、どうしたの？ それ？」

ジョシュは彼女の鞆を指してそんなことを言った。

「あつ、今日はね。お父さんに買い物を頼まれたんだ」

彼女はメモを見せる。そこには色々な品のリストが書かれており、既に彼女の鞆は重そうだ。しかし、彼女の顔はどこか嬉しそうだ。

「これを探しているんだけど、見つからなくて」

「えっと、なにになに？ ストロオム虫除け剤？ それならメインストリートの薬局にあるよ。この薬って苦手なんだよね。臭いが」

自分の感想と共にエレンは彼女へとそんな答えを与えてやる。

「メインストリート……」

ルシュは少し不安げにそんな言葉を呟いた。

「ん？ どうしたの？」

「えっと、私、スラムから出たことなくて――」

「あっ、そうなんだ」

メイン街に住む人にとってスラムが踏み込むべき場所でないように、スラムの住人にとってもメイン街はそのような、不要の場所なのだろう。

「俺が連れていくよ。院長先生の付き添いで何度か行ったことがあるから」

「ありがとう」

「じゃあ、エレン。今日はありがとう」

ジョシュは彼女の鞆を持ってやると、二人で手を繋ぎながらメイン街の方へと歩いて行った。

遠ざかる少女の後ろ姿を見て、幸せに思う一方で先ほど見た黒服の男たちを思い出した。正直、嫌な予感を感じていたのかもしれない。しかし、エレンは予感を拭い去るように一人スラムへと歩き始めた。そうだ。自分がここで心配していてもどうにもならない。エレンを待っている子供たちがたくさん居るのだから。

「ただいまーっ！」

「あっ、エレンだー！ お帰りーっ！」

扉を開けた瞬間に子供からの熱烈歓迎を受ける。みんな先ほどよ

りも機嫌が良い。誰のお陰だろうか。

「エレンさん、お帰りなさい」

「おっ、ニコル。人気者さんだね」

ニコル中心に群がる子供たちを見て、エレンはそう感想を述べた。

「あはは。自分でも驚いていますよ」

子供たちは目を輝かせて彼の次の言葉を待っているようだ。

「ねえ、ニコル。その後はどうなったの？」

「それはね——」

彼は続きの話を紡いでいく。様々な表情で彼の言葉に耳を傾ける子供たち。まもなく話しはエンディングを迎え、ハッピーエンドに笑顔が浮かぶ。

「ニコル、すごいんだよ。いっぱいお話、知っているの」

「エレンより、すごいかも」

「えっ！ エレンの方がすごいよ」

微笑ましい抗争が始まる。その様子を見て、エレンもニコルも子供たちも笑う。今日の孤児院にはいつもよりもたくさんさんの笑顔が溢れていた。

「あーあ。ごめんね。すっかり遅くなっちゃって」

「いえ、大丈夫ですよ。楽しかったですし」

夜が近い空の下を二人は歩く。その顔には先ほどの時間の名残なのか、未だに笑顔が浮かんでいる。

「本当にありがとう。子供たち、喜んでたよ」

「いえ、僕も感謝しなくちゃいけませんね」

「えっ？　なんで？」

「幼いころからスラムは恐ろしい——入ってはいけないと教え込まれてきました……しかし、今日改めて知ったのです。あそこに住んでいる人も同じ街の人なのだって——」

自分の偏見を恥じるようにニコルは真剣な声でそう言った。

「エレンさんはどうしてスラムに？」

旅人のはずの彼女がなぜ一都市のスラムに興味を示すのか疑問を持ち、聞いた。

「んー。どうしてって言われると、どうしてだろ？ スラムのみんなって、暗い顔をしてるでしょ？ 私ってそーいうの、苦手なんだよね。だからかな？ 放っておけなくて」

何を言っているのか自分でも分からない様子で彼女は笑う。

「すごいんですね……エレンさんは。僕なんて、本の上で読むだけで、この現状を知らなかったというのに……」

「すごい？ すごいのかな？ えへへ。でもダルクちゃんは全然ほめてくれないんだよね……やっぱりニコルは良い人だねえ」

この後、話題はエレンのダルクへの愚痴へとシフトする。そしてあっという間に別れの時間が来る。

「じゃあ、僕はこちらなので」

ニコルはエレンの泊っている宿と逆の方向を指さす。

「うん。じゃあね——」

「あの、エレンさん」

エレンが歩き出す前にニコルは声をあげる。

「僕に手伝えることがあったら言ってくださいね。力になりますから」

「うん。ありがとう」

大きく手を振り、二人は別れる。一人になったエレンは今日のことを思い起こす。今日はいつよりも長い一日であった。

「さてと、後は今日の晩御飯を考えなきゃ」

夕飯の時間であることをお腹の虫が彼女に知らせる。その催促に応じ、エレンは足早に宿へと戻って行った。

対話

「あーっ！ もう！ アポイントメント、アポイントメント、うるさいなあ！」

街中で少女は声をあげる。その大音量の透き通った声でエレンは街の人々の目線の的となる。

「エレン、街中です。ポリュームを抑えてください」

「だって！ こっちは徹夜でレポートを仕上げたっていうのに、ちつとも分かってくれない！」

自分は早めにベッドに入ったというのに、エレンは徹夜の当人の如く怒りを露わにする。

「とりあえずは約束をするのが先ですね。とはいっても時間は掛かりそうですけどね」

市長に意見をしようなんて人は大勢いる。普通に待っていれば、いつになるかは分からない。

「それに調べ足りないことがありました。これから図書館に寄ってもよろしいでしょうか？」

「うん。いいよ。あーあ……ぶつぶつ……」

怒りが抜けないのか、エレンは何かを呟いて不機嫌そうに通りを歩く。そのすぐ後ろを歩くダルク。それはいつもの光景であった。

朝の図書館は静かだ。まだ利用客はいないらしい。カウンターには見慣れた顔の少年が座っている。手元が動いていることから何か書き物をしているらしい。

「おはよ。ニコル」

「あっ、おはようございます」

ごく自然に挨拶を交わす二人。

「今日はお早いですね」

「うん。なんかダルクちゃんが調べ物あるんだって——そうだ聞いてよ！ さっき市長さんに会いに行ったら追い返されちゃったんだ

よ！ これで二回目だっというのに！」

誰も居ないことをいいことにエレンは大声で愚痴を言う。

「市長さん……ですか……」

「うん。スラムについての意見書を見てもらおうと思ってね」

「そうなのですか——もし宜しければ見せてもらえないでしょうか？」

少し表情を強張らせてニコルはそう言った。

「うん。いいよ。ダルクちゃん、借りていくね」

彼女の返事を待たずにエレンは机に積み上げられた羊皮紙を持ってカウンターへと戻る。

「すごい量ですね………失礼します」

パラパラと紙を捲り、ざっと目を通すニコル。その表情は真剣そのものだ。

「それ、ダルクちゃんが一晩かけて書いたんだー。すごいよね。字も綺麗だし——」

耳元でエレンがマシンガントークを繰り広げているというのに表情も変えずニコルは文章を追っていく。

「これを市長に読ませたいのですよね？」

「うん。そーだよ」

ニコルは少し間を置く。どうやら何か考え事をしたようだ。

「エレンさん。夕暮れ時に図書館に来てくれませんか？　もしかしたら僕と一緒になら——」

「うん？　もしかしてニコル、市長さんとお知り合い？　やった！　お願いね！」

「えっと、エレンさん——」

「夕暮れ時だね！　分かった。絶対に行くから！　ほらほら、お客さんだよ」

「あっ、ちょっと……」

話を最後まで聞かずにエレンはダルクの元へと行ってしまふ。もっと詳しいことを説明したかった彼だが、図書館の利用客が彼の足

を拒むのであった。

図書館の利用時間が終わり、ニコルはいつものように施錠をし、敷地内に誰か残っていないか見回りをしていた。もう周辺には誰も居ない。もうじき夜なのだから、当たり前と言えは当たり前だろう。その油断が彼を驚かせることになる。

「やつほーっ。約束通り会いに来たよ」

「うわっ！」

物陰から飛び出してきた少女に情けない声をあげてしまった。

「そんなに驚かなくても……もしかして、ニコルって怖いのか苦手？」

「ええ、苦手ですね——というか、エレンさん。いきなり飛び出さないで下さいよ」

「だって、ダルクちゃんが面白いほうが良いって——」

「私は何も言っていないですよ」

どういう経緯で彼女がそんなことをしたのかは不明だが、こうやって約束の時間に来てくれたのだ。頭に思い描いた計画をニコルは実行するのである。

「僕と一緒に来て下さい。市長に会えますから」

「本当？ やったね、ダルクちゃん！」

「じゃあ、行きますよ」

ニコルを先頭に三人はメインストリートを歩く。夕飯時で通りには食べ物匂いが溢れている。その誘惑に惑わされながらも、エレンは目の前の彼の背中を追っていく。

「着きました。ここが僕の家です」

「おおっ、豪邸だ……」

発言の通り、目の前にあったのは普通の民家と比べると何倍も大きな家だ。

「いえ、そんな大したものでは……」

控えめにそう話し、彼は門をぐり抜ける。家まで続いた道の脇にあるのは大きな庭。手入れの行き届いた植物が緑の園を彩っている。

「うわぁ……ニコルってお金持ちだったんだね……」

「いえ、それほどすごくは……父のお陰ですし、僕は何も……」

「へえー。ニコルのお父さんがお金持なのかぁ。こりゃ、美味しいものが食べられそう」

「エレン。晩御飯を食べてないからって、目的を取り違えないでください」

「だって、だって。ダルクちゃんだって、たまには美味しいものを食べたいでしょ？」

「しかし、常識というものがあります。知らない男の家に行って、夕食を頂いて。そんな状況では見返りに何を要求されたものか分かりませんよ」

「おおっ、そうか。可愛い顔してニコルも男の子なんだよね。気を付けないと」

「そ、そんな。僕はそんな目的で呼んだわけじゃありませんよ！」

ニコルは顔を真っ赤にしてダルクとエレンの会話を否定する。

「分かってるって。ダルクちゃん。たまにね、こんな冗談を言うんだよね」

「あはは……そうなのですか……」

引きつった笑みを浮かべるニコル。

会話が途切れたところで丁度、家の玄関に着く。インターホンを鳴らすと、すぐに扉が開いた。

「お帰りなさいませ、ニコル様」

中から出てきたメイド風の初老の女性は礼儀に従って挨拶をする。

「ただいま。彼女は僕のお客さんだから客間に通しておいて」

「分かりました、こちらへどうぞ」

女性に連れられて二人は客間へと案内された。メイドさんが居なくなった途端にエレンは部屋の中の散策を始める。

「すごい。ビンの中にお船が入ってる！　どうやって入れたんだろう？　空間移動の魔法かな？」

危なっかしい手つきで次々と備品を漁る。

「エレン。お願いですから、壊さないでくださいね」

「分かってるって——」

ガチャッ——

「お待たせしました——」

「うわっ！　わわっ！」

登場したニコルに驚き、エレンは手に持った壺を落としてしまう。

「ふっ！」

まるでそれを予測したかのようにダルクが床へと飛び込む。

「おおっ！　ナイスキャッチ！　さすがダルクちゃん！」

「だ、大丈夫ですか……？」

ニコルは慌ててダルクの元へと駆け寄る。

「ええ。壺は無事です」

壺を両手で上げ健在をアピールする。

「いえ、ダルクさんの方は……」

「私は平気です」

凜とした表情で彼女は立ち上がる。服の汚れを払う仕草も可憐だ。
「で、ニコル。これからどうするの？　もしかしなくても夕食？」

「はい。無理言って二食を追加してもらいましたので。食堂にご案内します」

「やったね。ダルクちゃん」

「本当に良いのですか？　私たちは市長に会いに来ただけのつもりなのですけど」

「はい。ち——市長の帰りはまだのようなので」

「早くー！　二人とも、今日は何かな？　ステーキ？　ビーフストロガノフ？」

テンションを三割増しでエレンは食堂に入って行った。

食堂ではすでに料理の準備ができており、三人は純白のテーブルクロスが敷かれた長机に座る。

「うわぁ……すごいなぁ……この雰囲気だけでよだれが出てきそうだよ」

「エレン、まずはナプキンを」

「はいはい。分かってますよーっと」

まだ食事が運ばれてきていないというのに、左手にナイフと右手にフォークを持つエレン。

「まずは何が出てくるかな？ コヨーテのステーキだったりして」

「まずは前菜からでしょう。それにコヨーテのステーキはもっと西側の国の特産品ですし」

エレンと居れば基本的に食事は明るくなるのだ。ダルクもニコルも呆れ顔ではあるが、このような雰囲気も嫌いではない。

「おっ、運ばれてきたーっ！ おお、緑の物体！ サラダだ、サラダ！ やほーっ」

基本肉食系であるというのに、今日ばかりは目の前の生野菜のサラダに目を輝かせるエレン。そしてマナーなどお構いなしで野菜を口へと運ぶ。

「ふわぁ……美味しい！ さて、次は何だろ？」

「あはは、慌てないで下さい。食事はゆっくり食べたほうが健康にいいですよ」

「えーっ、私は一秒でも早く美味しいものが食べたいのに！」

料理が運ばれてくるたびにエレンは新しいリアクションをして迎える。ダルクはそんな連れを見て最初から最後まで呆れていた。

「ふう……ごちそうさま。いやぁ、美味しかったです」

デザートの二色アイスを平らげ、エレンはグラスへとスプーンを置く。

「御馳走様でした」

口を拭き、ダルクも食事を終了する。

「申し訳ありません。このような食事を頂いてしまって」
ダルクは改めて礼を言う。

「いえ、いいですよ。いつも一人で食事するので、楽しかったです」
ニコルはハニかみ、そう答える。

「さてと、宿に戻ったら何しようかな？ 満腹だし良い唄が歌えそう」

「エレン、忘れていませんか？ ここに来た理由を」

「ん？ 理由――あつ、そ、そうだね。食事するために来たんじゃないもんね」

完全に目的を取り違えていたらしい。彼女はオーバーリアクションで誤魔化しにかかる。

「というか、ここに来れば市長さんに会えると思ったのに、ここってニコルの家なんだよね？ なんで？ 遊びにでも来るのかな？」

「今に分かりますよ」

ダルクは静かに囁いた。

しばらく食事の余韻に浸っていると食堂の扉が開く。その音にエレンたちはそちらを向く。そこにいたのは中年の男性で口元に生えた髭が印象的だ。

「お帰りなさい」

彼へと挨拶をするニコル。

「ただいま。ニコル。お前がゲストを家に招くなんて珍しいな」

「急な話で申し訳ありません」

「いいのだよ。お前の客人なら大歓迎だ」

好意的な態度を示し、彼はテーブルへと着く。

「えっと、こちらはエレンさんとダルクさんです」

彼の紹介を受け、二人は軽く会釈をする。

「ねえねえ、この髭のおじさんってニコルのお父さん？」

「ええ。そうですね。ついでに言うとう市長さんです」

ここまでは小声でヒソヒソと喋る二人であったが、最後のワード

を聞いて、エレンは大声で驚く。

「ええっ！ ニコルって市長さんの息子だったんだ！」

もう気が付いていると思っただけに、ニコルは苦笑を洩らす。

「紹介が遅れました。市長のダフロ・サンドバレーです」

彼の正体を知って、エレンのテンションは食事前並みに上がる。

「やっと市長さんに会えた！ ううっ……ニコルのお陰だよ！」

「うわっ！ え、エレンさん」

彼の手を取りブンブンと握手をする。その急な行動に彼は頬を赤く染めてしまう。

「で、エレンさん。私に用があるようですが、どんなことでしょうか？」

状況を把握した市長はエレンへと目を向ける。特に警戒心を抱いていない好意的な視線だ。

「あっ、うん。あの。これを読んでみて下さい！」

エレンは冊子状になった羊皮紙を彼へと渡す。

「スラム改善の方法と鉱山復興についての意見書、か。失礼します」
市長はパラパラと紙を捲っていく。その様子からしつかりと目を通してもらっているらしい。エレンも瞬きすらせずに彼のことを見つめる。

「なるほど、良く書けていますね」

「でしょ？ この意見書、苦労したんだよ。これでスラムも大丈夫になるかな？」

意見書を褒められたことで上機嫌なエレン。しかし市長の顔は厳しい。

「しかし、ここに書かれていたように鉱山を復興させるのは厳しいでしょう」

「えーっ！ なんで」

子供のように頬を膨らますエレン。こんな場ではなかったら可愛い仕草なのだが、市長の眼は依然として真剣なのだ。空気が和むことなんてありえなかった。

「まず、第一に鉱山は立ち入りが禁止されていたはずですよ。あなたがこの都市の市民であったならば処罰されているところですよ」

「そ、そりゃ、黙って入ったことは謝るけど――それでもこうして無事だったんだし、中の様子も見て来れたんだし――」

「個人的な調査だけでは安全の断定はできません。正式な調査団を送って、安全性を確認できれば――」

「じゃあ、早く送ってよ！」

エレンは完全に対立モードになっている。相手が市長だということも忘れ、怒りの籠った声を上げる。ダルクはあえて彼女を止めない。

「エレンさん。何故、そんなにスラムのことにこだわるのですか？確かに貧困問題は重要です。しかし市の方でも救済策を打ち出しています。それにあなたはここの市民ではない。なぜそこまで首を突っ込むのですか？」

本質的な疑問を投げかける市長。その質問にエレンはこう言ったのだ。

「スラムの現状って分かる？ 罪も何もない子供たちが大勢、お腹を空かせているの……疲れ切った大人の心には信仰も唄も届かない――私は嫌。同じ都市に住んでいるのに、不幸な人が居るなんて――みんなが見て見ぬふりをするなら、私が幸せを味あわせてあげるの」

感極まったせいか彼女の目じりにはうっすらと涙が浮かんでいる。そんな彼女を見て、折れたのは市長の方であった。

「ふう……分かりました。努力はしてみます。しかし、本当に鉱山を再開すること、スラムを救うことを実行できるかは約束できませんよ」

彼は言った。それはこの場を凌ぐために無理に繰り出した言葉なのかもしれない、しかしエレンは、「やった！ ありがとうございます！」と、もう万事解決したかのように喜ぶ。そんな裏表の無い笑顔に市長の顔にも戸惑いが現れる。もしかしたら彼の中にあった

罪悪感がそうさせたのかもしれない。

市長とニコルに見送られ屋敷を出た二人。エレンはご機嫌であった。しかしダルクの表情は浮かない。

「ん？ どうしたの？ ダルクちゃん？」

「いえ、いつもながら、エレンは強引だと思ひまして」

「そうかな？ でも結果オーライだし、いいんじゃないかな？」

「どうでしょうかね」

意見が素直に通ったと思うエレン、そしてそれを疑うダルク。二人の考え方は対照的だ。

「市長は何かを隠している。私はそう思います」

「隠し事？」

「ええ、それがどのような事か分かりませんが」

ダルクは基本的に相手が嘘をつく前提で物事を計っている。だからこそ嘘に敏感なのだ。

「大丈夫だよ。私は市長さんを信じたから。うん。何とかなるって何の根拠があって彼女がそんなセリフを言うかは分からない。しかし、その根拠の無い言葉と笑顔でそれが本当のことになる気がする。いつもダルクはこの現象を理解できないのだった。

「とりあえず明日からはやれることをするぞ！ 市長さんに頼らなくたってできることがあるはずだ」

気合十分に叫ぶエレン。

「ダルクちゃんも気合入れてーっ！ ファイトーっ！」

「ふぁいとー」

強制的に言わせられたのでやる気なくダルクは発言する。

「ダルクちゃん！ もっと気合入れるの！ ファイトーっ！」

すっかり周りも暗くなっているというのに大声を出すエレンにダルクはまた、いつもながらのため息を付くのであった。

激昂の歌姫

エレンが市長と会ってから丸五日が過ぎていた。この日も彼女は孤児院へと足を運んでいた。ただの暇つぶしに思えるこの行為も、れっきとした意味がある。

子供たちに聞かせる場合、孤児院でしか歌わなかった唄を彼女は近くの公園で歌うことにしたのだ。これにより少しではあるがリピーターの住人が聞きに来るようになったのだ。

子供たちの笑顔に影響され、暗かった住人たちもその場だけでも明るい表情を見せてくれる。その成果にエレンはスラムを変えていくことへの手ごたえを感じていた。

「はい。今日はこれでおしまい」

パチパチパチパチ――

終了宣言時に拍手がなり、彼女は地面へと座り、ボトルの水で疲れた喉を潤す。歌った後の少休憩、これもエレンの幸せの一つであった。

そんな休憩も束の間、事件は起こるのだ。

「エレーンっ！」

孤児院と逆方向から走ってくる少年。その声と姿形で彼が誰だかすぐに分かった。

「およっ？ ジョシュ。どうしたの、ルシュを連れてくるんじゃないのかったの？」

「そ、それが、ルシュがどこにも居ないんだよ！」

血走った瞳で彼はエレンへと状況を説明する。

「本当にどこにも居ないの？」

「探したけど居ないよ！ 第一、昨日、約束したんだ。一緒にエレンの唄を聞こうって」

「そうなの？ 分かった！一緒に探しに行こう。ダルクちゃん、他の子を孤児院まで連れて行って」

「了解しました」

「それと次は午後の勉強の時間だからしっかりと勉強を教えて、それからお昼寝タイム、小さい子を寝かしつけてね。それから、えっと……もう、任せた！」

「……了解しました」

細かいのか大雑把なのか分からない指示を出し、エレンは走る。すでにジョシュはスタートを切っている。彼に追いつくべく、スピードを上げスラムの方へと消えていった。

「ではみなさん、整列をして帰りましょう。列を乱さないように一列で」

「は、はいっ！」

子供たちは威勢のいい返事をし、彼女の指示通りに孤児院のほうへと向かって行く。それはまるで兵隊さんの行進のようであった。

走って三分ほどで約束の場所へと着く。しかしルシュの姿は無く、寂れた壁だけがそこにはあった。

「やっぱり来てない……ルシュ、どこに行ったんだ？」

「またお父さんのおつかいを頼まれたんじゃないかな？ そんなに心配しなくても——」

「ダメだ！」

いきなりの大声にエレンは肩を竦める。それほど唐突であり、覇気のある声だったのだ。

「母さんも、急に居なくなっただ……俺を置いて……何も言わずに……」

その時、エレンは見たのだ。彼の瞳から一筋の光の粒が流れ落ちるのを——

「ルシュ……」

何の計算をしたわけではない。エレンは無意識に彼を抱きしめていた。

「大丈夫。ルシュは居なくならないよ……私が絶対に見つけ出すから」

「うん……」

エレンは彼がすすり泣くのを止めるまでその場を一步も動かなかった。ただ一心に彼の悲しみや不安を受け入れようと試みていた。

「ごめん………なんか俺、恰好悪いな……」

「うん。そうだね。目が真っ赤だよ」

「っ——早く、ルシュを探しに行こう！」

踵を返し彼は路地を足早に歩いて行ってしまう。その行動を可愛いと思いつつもエレンは彼の後を追う。

彼女の居そうな場所を探したが結局その行為は無駄足となり、何の手がかりも得られず、エレンたちは路頭に迷っていた。

「居ないね」

「うん……」

返事をしたジョシュの声は小さい。十中八九、不安なのだろう。しかしそんな時こそそのエレンの明るさだ。

「じゃ、ルシュの家に行ってみようよ。もしかしたら病気とかで家に閉じこもっているのかも」

「うん……そうだね。最初に尋ねれば良かったかも」

二人は氣力を振り絞って、足を進める。

パカラッ、パカラッ――

音だ。聞き覚えのある音。エレンはいち早くそれに気が付き彼の手を引っ張った。

「うわっ！」

後ろ側からの引力によってジョシュの身体は簡単に前に進むのを止め、後ろへと退く。今さっき彼の居たであろう曲がり角から大きな身体が飛び出してきた。蹄を持つ獣。そう馬だ。

馬と従者は何事も無かった如く、狭き暗い道を猛スピードで突っ切っていた。

「ふう、危なかった。ありがとうエレン……………エレン？」
「っ…………！」

彼女は厳しい表情で顔を強張らせて過ぎ去った馬車の様子を見ている。もう一度馬車を見たところで彼はその理由が分かった。運転席の男の服装。その黒を一度見たことがあるのだ。どこで——ルシユの家で。

「ジョシュ。ルシユの家に行くから」
「エレンっ！」

先ほどとは段違いのスピードでエレンはスラムの複雑な道を掛けていく。後ろからの呼び声に答える暇もなく、ただひたすら走るのだ。

すぐに家に着く。案の定、中からは人の気配がしている。
エレンは玄関のノブを捻る——開く気配は無い。鉤が閉まっているのだ。

だが次の行動は決まっていた。彼女は先ほどは籠めなかった力でドアノブを強引に回す。

錆び付いた金属はすぐに根をあげ、メキメキと木片を巻き込みながら地面へと落下した。

部屋の中は暗い。昼間だというのにカーテン代わりのボロ布が日光を遮断しているのだ。そんな暗い部屋の中心に男が一人いた。彼は軋み果てそうな椅子に座り、片手に酒の瓶を持ってどこか別の世界を見ている。

「おじさん！ ルシユはどこ！」
玄関先から叫ぶエレン。しかし、彼は何も答えない。ただただ何

もない中空を眺め、酒を呷っている。

「おじさんっ！」

無視されたことでエレンの怒りはヒートアップする。彼に詰め寄り真正面からその顔を見つめる――いや、そんな生易しいものではない。いつもの可憐な少女とは同人物とは思えない程の激怒を抱き睨みつけたのだ。

そんな怒りをぶつけられても彼は動じない。それもその筈だ。彼はエレンのことなど見ていないのだから。

ブツブツと何かを囁きながら、彼は酒を呷る。口から溢れた液体は彼の服や床を汚す。それすら構わないと、彼は一心に酒を飲むのだ。

「っ、この！」

怒りに任せ、彼を椅子から床へと跳ねのけるエレン。無理な体勢から倒され、その身体には痛みが走った筈だ。しかし彼の様子は先ほどと大して変わらない。

激昂する彼女の眼にそれは留ってしまった。暖炉の中にある埃被った火かき棒。それを取り出すと憔悴しきっている男性の首にあてる。

「言え。ルシュは！」

彼女がその気になれば火かき棒の先は彼の頸動脈を軽々貫くだろう。文字通り、命を握られた状態なのだ。

「っ……」

エレンの動きは一つの動作で完全に止められたのだ。彼の眼、そこにある感情は――

「エレン！ 何をやってるんだ！」

後ろから声が掛かり、エレンの頭に登っていた血液は完全に下流へと下る。ジョシュの声を聞いたからではない。目の前の彼の悲しげな表情を見てしまったからだ。

「わ、私………ただ、ルシュが……」

火かき棒を後ろ手に抱え、ヨロヨロと二、三步下がる。

「エレン……………それを渡して」

手を出し、彼女へと近づくジョシュ。エレンは大人しく棒を彼へと渡す。

「ふう……………」

火かき棒を暖炉に戻すとジョシュは安堵のため息を付く。それはエレンが人を殺すのを見なくて済んだことだろうか、それともルシュの父親が無事で出たものなのだろうか。

「君か……………確かルシュの友達だったな……………ジョシュとか言ったな」

「えっ？」

彼は驚く。まさかルシュの父に名前を覚えてもらっているなど思いもしなかったのだから。

「すまない……………私は罪を犯してしまった……………」

ルシュの父はゆつくりと口を開く。

「私は……………こんな酒を数本買えるお金でルシュを……………娘を……………」

空いたボトルを震える手で握り締める彼だ。そこからは強い後悔が読み取れる。

「おじさん……………ルシュは、ルシュは、どうしたんですか？」

「ルシュは……………あの男たちが連れて行ってしまった……………」

「……………どうして？」

状況が把握できなく今度はエレンの代わりにジョシュが彼へと詰め寄る。

「？売った？そうでしょ？」

静かな声でエレンはそう言った。

「ああ、そうだ……………」

彼は懷から何かを床に投げつけた。音からして金属だ。傾いた家で転がる金属は暗い部屋で鈍く輝いている。その正体はジョシュもよく知っているモノ。そう金貨だ。

三枚の金貨は柱に当たり小さな音を立てて動きを止める。それをスイッチにしたようにジョシュの時計の針も再び動き出す。

「売った」ジョシュの頭の辞書の中には売るという文字は物にしか使わないと記されているのだ。そのワードと意味を照らし合わせ、彼の脳裏にはまるで稲妻のような衝撃が走った。

「売ったってなんだよ！ ルシュはアンタの娘だろ！ 売ったって……」

泣きそうな表情で詰め寄るジョシュ。その肩を掴みエレンは彼をなだめる。

「待って。もう彼は……」

ルシュの父の瞳、それはルシュと同じ綺麗な水色をしており、そこには小さな水たまりができていた。

「ルシュは、行くことを拒まなかった……知っていたんだ。自分が売られることを……なのに最後は笑顔で？ 行ってきます」と

「おじさん……」

スラム

こんなところに生まれていなければ彼らは普通の家族として幸せに暮らせていたのかもしれない。そう思いエレンの目頭も自然と熱くなる。

「何故、私は……力づくでも止めていれば……」

「失ってからその人の大切さに気が付く」そんな言葉で表わされるのだろう。彼の現状は――しかし、まだ手遅れではない。

「おじさん。馬車の行き先を教えて。ルシュは私が連れ戻すから」

「そんなことを……」

できるわけがない。そう言いかけた彼の言葉を遮り、エレンは床に転がったコインを拾い集める。

「私を信じて。いこつ、ジョシュ」

「あ、ああ……」

絶対的な一言を残し、エレンはその場を後にした。

「信じる、か」

一人残された男はおもむろに部屋を掃除し始めた。こんな家では帰ってくる娘を迎えられないと思ったからだろう。

「あっ、エレン。おかえりー」

「ただいま」

孤児院へと帰還したエレンは子供たちの歓迎を笑顔で受ける。

「ねーねー。エレン。ダルクお姉ちゃんにこれ編んでもらったの」

その子は布切れで作られたと思われるぬいぐるみを一生懸命に提示する。

「あは。ダルクちゃん、縫物、得意だからね」

「エレンも何か作ってよーっ」

布と針を持ってきてエレンに催促をする女の子。しかしエレンは

「ごめんね。お姉ちゃんたち用事が出来ちゃったの。また今度ね」

「えーっ！」

ブーイングが上がる。エレンは笑顔を絶やさず孤児院を出た。

スラムから出る手前の道で急に足が止まる。タイミングを見越し、ダルクは会話を始める。

「エレン。怒っているようですが、何かありましたか？」

「さすがダルクちゃんだね。お見通しって感じか」

「ええ、人間の感情など単純ですから」

「そっか、じゃあ前置きは要らないね」

スツと空気を肺に溜めるエレンその瞬間、周りの空気がどんよりと重くなる。その空気の中、彼女は言い放った。

「探して、ルシュを……………」

いつの彼女の透き通った声とは違う呟きのような低く重い声で。

「それは頼みですか。それとも命令ですか」

「決まってるでしょ。命令よ」

「御意」

返答と共に後ろにあった気配は消える。

「ふう……………」

それを確認し彼女はため息を付き、肩に入っていた力も抜ける。

「ルシュ、待っていてね……………」

ポツりと呟き、エレンは再び歩き出した。

それから夜まで街を歩き回ったが結局どんな些細な手がかりも手に入れることはできなかった。宿に戻るエレン。

部屋を開けてもそこには誰もいない。ダルクはまだ外に居るのだろう。きっと彼女のことでだから今日は帰ってこないだろう。そんなことを考え、エレンはベッドへと倒れ込む。

「両親か……………」

自然に出た呟きに苦笑を洩らす。未だに自分の中にある過去を振り返りそうになる。

「あーっ、ダメだ！ 寝る。もう寝るからね」

そう宣言し、明りを消す。いつも居るはずの少女が今日は居ないことを寂しく思いながらもエレンは眼を閉じた。

可憐少女と黒兎

「エレン、起きてください」

「んー、あと二時間……………」

「エレンー」

「……………」

「起きないなら鼻にピーナッツを詰め込みますよ」

「ひいっ！ そんなことしたら取れなくなっちゃうよ！」

何時ぞや見たようなやり取りを繰り返す彼女ら。しかし効果は絶大なようだ。エレンはベッドから飛び起きる。いつの間にか部屋は生まれわたの朝日に包まれていた。

「あれえ、ダルクちゃんいつ帰ってたの？」

「少し前です。エレンの可愛い寝顔を拝ませて頂いていました」

「えっ？ 私の寝顔ってそんなに可愛いかな？」

「でへへ、とエレンは照れ笑いを漏らす。

「ええ、とても。酷い涎で枕を汚すところなど特に」

「そ、そういうことか！」

ダルクの皮肉で朝からテンション全開のエレンだ。

「冗談はこのぐらいにしておきましょう。見つかりましたよ、ルシユの居場所が」

「えっ、本当？」

「ええ。正確に言えば黒服の男たちの居場所ということですけど」

「十分だよ。さっそく行こう！」

エレンは立ち上がり、一つしかない扉から外へと出ようとする。

「エレン。さすがに着替えて行ったらどうですか」

「えっ？」

エレンは自分の服装を確認する。そこにはいつもの漆黒のドレスは無く、ピンクのフリフリのネグリジェがあった。

「あはは、そうだね。さすがにこの恰好じゃ外に行けないや。髪も

ボサボサだ、ダルクちゃん、お願いしてもいい？」

「ええ、そこに座ってください」

これからすることが非日常的な事だというのに日常的な動作をする二人。その様子からは焦りや緊張感など微塵も感じさせない。

「さてと、行きますか」

「ええ」

それはいつもの静かな朝だった。メインストリート付近に事務所を構えるブラックラビット商会。彼らの仕事は商品の運搬から人物の調査まで、俗に言う「何でも屋」だ。社員総勢七名という小さな規模の会社の筈なのだが、そのオフィスは他の会社では信じられない程の高級な家具で彩られている。

何故そんな設備投資が可能かという疑問が出る。その答えは簡単だ。彼らには他の人には知られていけない裏の顔があるからだ。

「おいっ、朝だぜ、もう起きろ」

「ああ……寝てすらいけないがな………」

そのオフィスのソファで二人の男がそんな会話をしている。二人とも眼の下に隈を作り、浮かない顔をしている。

「何だ、昨日の仕事を気にしているのか？　いつものことだろうが」

「まあ、そうだけだよ……あの子、最後まで泣かなかったなって………」

「………」

「そうだな。見越してたんだろ、自分が売られるって」

一人の男は煙草に火を付ける。そして嫌なことを吐き出すべく、その煙を空間へと向かい吐き出した。

「なあ、俺たちいつまでこんな仕事を続ければいいんだ？　給料も

待遇もいいが正直俺は――」

「おい、それは言わない約束だぜ。これは誰かがやらなくちゃいけない仕事なんだぜ。それに辞めたらどうする？　お前も妻と娘が居るのдарろ？」

「そうだが……………」

「俺たちはクライアント指示に従っているだけでいい。そうだな」

「ああ……………そうだな」

男は立ち上がる。

「外の空気を吸ってくるぜ。少しは目も覚めるだろう」

「ああ、行って来い」

外の空気は以外にも冷たい。外に出るための口実で言った言葉だが、これならば真実になりそうだな。煙草に火を付けるために懷からマッチを取り出す。だが、寝不足のせいかマッチを弾いてしまう。

「ちっ……………何やってんだか……………」

イライラしながら前方に転がったマッチを拾った。

その時、前方の方から人の気配がした。仕事後でピリピリしているせいか自然と胸元に手が行ってしまう。

（何考えてるんだか……………）

数秒後に現れたのは年半ば行かないような二人の少女。黒いドレスとメイド服が特徴的である。

街のお偉いさんの令嬢だろうか？ どうしてこんな所にいるのか？ などという疑問が脳裏を駆け回る。だがその疑問も不要だ。何しろ他人に関わろうなどと微塵も思わないからだ。残ったマッチで火を起こし、煙草に火を付けた。

「ダルクちゃん、ここ？」

「ええ、そうです」

聞こえてきた会話の内容から二人は自分の仕事場を目指している事に気がついた。

（まだ開店してないって言うのに、なんだ……………クソッ、また胸糞悪い仕事じゃないだろうな……………）

だが、仕事のクライアントならば放っておくわけにもいかない。煙草の火を踏み消し、彼女たちに近づく。

「お嬢さんたち、どうなされましたか？ もしかしてウチの事務所

に御用ですか？」

男は腰が低い態度で相手の動向を探る。

「うん。そうだよ」

「すみません、仕事のご用件ならば事務所の方が開いている時間にいらしてください」

「んにゃ、仕事じゃないんだけど。ちょっとお尋ねしたいことがあるの」

「何でしょうか……………」

「ルシュって子知らないかな？　ここの馬車でスラムから連れて来られたと思うんだけど」

「ッ——」

その言葉を聞き、男の胃はまるで氷をそのまま飲みこんだような冷たさに包まれた。

（ど、どうしてそのことを……………こいつら、なんで知ってやがるんだ！）

「す、すみません。そんな事実はウチの方では確認できていないのです……………」

口調が自分でも弱々しくなっていることが分かる。頭の中はもうパニックだ。真実を悟られまいと必死に少女の目を見つめる。

（っ……………なんて眼をしてやがるコイツ……………）

やばい世界を渡り歩いてきた経験上、殺人鬼や精神異常者とも対話を交わしたこともある。しかし、そんな人間と目の前の少女はまるで別物だ——その瞳は純粹無垢。穢れがないからこそその恐怖がそこには存在した。

（殺^やるしかねえ……………そうじゃなきゃ、俺が喰われっちまうっ！）

自然に、相手に悟られないように、懷に手を入れる。しかしそれは愚行だった。

「懷にあるのはナイフでしょうか。長さは約二十センチ、あなたの体格にしては少々軽いのを使っているのですね」

（なっ……………コイツ、何者だよ……………）

柄に当てた手を離し、間合いを取る。

「ダメダメ。ナイフなんて持ってたら危ないよ。で、もう一度聞
よ、ルシュはどこ？」

平凡に質問されただけなのにそれだけで背筋が凍りつく。

「し、知らねえよ。俺たちはただ……仕事をしただけなんだ……
…」

「仕事？」

「ああ、分かるだろ。仕事だ。俺たちは何も悪くないぜ………仕
方がなかったんだ。俺は断ったんだぜ。ガキの買い取りなんざ……
……」

「でも、ルシュをさらって行ったよね」

「さらうなんざ、とんでもねえ………俺たちは正当に買ったんだ
ぜ。あいつの親父さんからよ」

「———」

彼女は呟いた。小さな、些細な声で。

「はあ？」

「言いたいことはそれだけ？」

消えた——少なからず彼の眼に少女の動きは捉えられなかった。
一瞬で距離は零となり構える暇もなく、拳が自分の顔面へと向けて
放たれたのだ。

眼を開けると目の前に少女の胸元付近が見えた。どうやら両目は
健在らしい。そんな冷静な思考は間接視野から入ってきた情報によ
り恐怖へと変わる。

彼女の拳は自分の顔を潰さなかった。その変わりに数センチ横の
丈夫な木の壁を文字通り貫いていた。

この時、男は実感した。彼女は普通の人間ではないことを。人間
だとしても、その力は人知を超えていることを……

「私は——」

今度は彼女の言葉をなんの反論もせずに聞く。

「私はただ、友達を返してほしいだけなの。教えてくれない？　ルシュの居場所を」

とても静かに言った言葉。内容は先ほどと変わらないというのに、その言葉はとても重く、綺麗であった。

「市長の所に行ってみな。それ以上のことは俺には分からん………」

自分でも何故情報を漏らしてしまったのか分からない。嘘だって付けたはずだ。

ただ彼女の綺麗な瞳で見つめられたら、その嘘すら頭の中から消えてしまったのだ。

「ありがとう——」

お礼の言葉を述べ、彼女は頭を下げる。

銀髪の少女はいきなり屈むと地面から何かを拾い上げた。そんな行動に男は目を丸くする。

「吸わないの？」

「あ、ああ………」

恐怖の淵に立たされ、男は何かのに頼ろうとしていたのかもしれない。その左手には愛用の煙草が握られていた。

シュツ——

壁にマッチを擦りつける少女。摩擦熱でリンの炎が生成される。

それはいつも見ているはずなのにとても綺麗であった。

炎を口に咥えた煙草に近づけ数秒、男の口の中にはいつもの煙臭い匂いが入ってきた。

「ふう………」

火が着いたことを確認すると少女は満足そうな笑みを浮かべて帰って行った。あんなに恐ろしいことをされたのにその笑顔は可憐で仕方がない。

その後ろ姿が見えなくなった後も男は路地に立っていた。

「情報を洩らしっちゃったし、俺もクビか……いや、それ以上かもな」

自分の末路を考えると苦笑が込みあがってくる。しかし、その気持ちは何故かどこか清々しかった。

対決！ ヨルムンガンド

「おはようございます」

エレンは市長室に入ってきた市長へと声を掛ける。とたんに彼は驚愕の表情を取る。それもそのはずだ。彼女はここに居るべき人物ではないのだから。

「……………おはようございます。エレンさん、どうやってここに？」

「ふふふ。秘密だよ。それよりもちよっと聞きたいことがあるんだけど」

「なんででしょうか……………？」

彼は平静を装っているが突然現れた少女に警戒心を抱いているらしい。ダルクは抜け目なく彼の動向に注意を配る。

「ルシュって子、知らない？ スラムの子、なんだけど」

「……………」

すぐに彼は返答しなかった。だが、数秒の沈黙の後、彼はこう言った。

「はあ……………エレンさん。あなたはどうしても他人事に首を突っ込みたくなるのですね」

ため息に続く言葉。それはエレンの質問の答えを知っているということと同値であった。

「あなたはニコルのお父さんだから傷つけたくはないの。だから教えて」

エレンは机に手を置き、体を乗り出してそう言った。

「傷つけるですか。それは穏やかではない……………ではその質問に答える前に私からも質問をします。」

「んー？ なに？」

「一人の命と引き換えに何万の人の命を救えるとしたらどうしますか？」

彼の質問は在り来りかつ究極のもの。誰しもその答えを迷ってし

まうものだ。

「なるほど、なるほど………うーん」

真剣そのものでその答えを探すエレン。

「だめだ、やっぱり、選べないや………やっぱり私ならどっちも取るよ。だって絶対に方法があるはずだもん！」

子供のような答えを出すエレン。だがそんな答えを聞き市長の顔には笑みが浮かびあがった。

「エレンさん、あなたは強欲なのですね」

「ゴウヨク？ 失礼な！ ちゃんと我慢だってできるもんっ！ そりゃ、美味しいものを前に出されたら、欲張っちゃうけどさ………」

エレンは頬つぺたを膨らます。どうやら強欲と言われ彼女が連想したのは食べ物関係のことらしい。

「やはり、あなたは面白い人だ。いいでしょう。この街の真実について隠さずに話しましょう。もちろんあなた方の聞く気があればですが」

「そりゃもちろん聞くよ。ね、ダルクちゃん」

「はい」

エレンは市長専用チェアに深く腰を掛けてそう言った。

「そうですか、では話しましょう………」

市長は真剣な面持ちで話を開始する。

「まず、この街の近郊に鉱山があるのをご存知ですよね」

「うん。不法侵入したわけだし」

「あの鉱山が廃止になった理由は御存じでしょうか？」

「うん。あれでしょ。ガスとかなんやらで」

「ええ、残っている記録にはそう書いてあるでしょう。しかし実際は違うのです……いつしか、あの場所には恐ろしい悪魔が住み着いてしまったのです………」

「悪魔？ 悪魔ってなに？」

「奴は自分のことをヨルムンガンと名乗り、鉱山で働いている従

業員を襲いました……一瞬で何十人の命が奪われてしまったのですよ……………」

「そんな……………じゃあなんで今まで何の対策もしなかったのさ！」
「したかったですとも……………しかし、できなかった。奴はこの場所に陣取った瞬間に何万人もの人質を取ったのです」

「人質——街の人のこと？」

「ええ、その通り。悪魔は言いました。もし反抗することがあれば街が消えることになる」と

「そんなの口からの出任せかもしれないじゃん！」

エレンはそう言った。いくら力が強い魔族でも一つの街を滅ぼすことは容易ではないと知っていたからだ。

「そうかもしれません……………しかし、力の無かった私たちは悪魔の言葉に従わざるを得なかったのです……………それからです、代々市長になる人間にある守るべきルールが加わったのは」

「ルール？ 人を鉱山に入らせないこと？」

「それも一つです。しかし、もっと重要なもの。悪魔は月がひとまわりすることによって一人の生贄を要求してきたのです。その贄を用意するそれが市長に課せられた使命になりました」

「そんな……………じゃあ、ひと月に一人ずつ誰かを……………」

「ええ……………そうなりますね」

ドンツ——

「人は、物なんかじゃないんだよ！ そんなこと許されると思っているの！」

机に拳を下ろし、怒りを顕わにするエレン。

「その気持ちも分かります……………私だってこんなことはしたくないのですよ。何度も平和的交渉をしてきました。しかし、その度に悪魔は激怒し犠牲者が出るのです……………」

「だからって——もしかして、今回の生贄って……………ルシュ？」

事実気が付いてしまったエレンの拳は震える。

「スラムの子供がどんな生活をしているか分かる？ そんな子供を生贄にしようとするなんて……………私は許せない……………」

「許されるなんて甘いことは考えておりません。私はただ、街を守る為の最善を尽くすだけです」

「最善？ ふざけないで！ ひと月に一人の犠牲が出る、これのどこが最善なの？ こんな状況、私を変えてやる」

「悪魔を倒しに行くのですか？ 止めなさい。命を捨てるようなものだ。それに倒したところで街がどうなるかも分からない」

まるで脅すような口調の市長。しかしエレンはまったく動じない。「犠牲の上に成り立つ街なんて消えればいい。私は友達を救う。行こう、ダルクちゃん」

パターン――

扉が閉まり、市長は室内へと一人残された。先ほどのエレンの態度を昔の自分と重ねてしまい、何故か笑みがこぼれた。

「ふっ……………私もいつの間にか歳老いてしまったようだな……………」

窓に映る老け顔の男性を見て、彼はそう呟いた。

黒髪の少女は手綱を取り、荒野の道を激走していく。その少女の背中にしがみ付く少女は終始不安な表情をしている。

「エレン。時間から言って、もうルシュは助からないかもしれないかもしれません」

「そ、そんな……………」

ダルクの言葉に動揺をするエレン。客観的な意見を言っただけなのに主はこうも簡単にうろたえてしまう。ダルクはふう、と息を吐き言葉を追加する。

「しかし、人間、諦めなければ奇跡すら起こせるのかもしれませんが。だから今できる最善を尽くしましょう」

「そうだよね……………うんっ！」

ダルクの言葉に元気を貰い、エレンは笑顔に戻った。そうだ。心配していたところで状況は何も変わらない。今は一秒でも早くルシユを探し出す。それが最善の行動だ。

エレンは自分が手綱を握るかの如く、ダルクの細い背中を抱きしめた。

ケンブスの足は速く、すぐに鉱山の正面が見えてくる。鉱山の入り口は前に来た時とは違っていた。大きな扉がエレンたちを受け入れるかの如く、大きな口を開けて待っているのだ。そこにはもう一匹の馬と馬車が放置されている。中を覗いたがルシユの姿はなかった。

「行こう。走るよ」

「ええ。ケンブス、あなたは待っていてください」

馬を降りると、すぐに二人は坑道の入り口を目指して走り出す。

鉱山は暗いその口を開け待ち構えていた。しかし、足を止めることなく、二人は疾走していく。

「いない……………どこにいったんだろ」

奥まで来たエレンは足を止めた。ここまでは一本道だ。すれ違わないということは目標地点はまだ先なのだろう。

「きつとこの下ですね」

ダルクは火が燃え盛る縦穴の底を指した。

「ここかあ……………気を付けないとね」

螺旋に続く階段を一步一步降りて行くと、激しい熱気の渦が顔や、手、体全体に襲いかかってくる。本当に炎の中に居るような感覚である。

最後の一段を降りると、そこにはまた横穴が広がっていた。

「——声が聞こえる……………」

彼女の言うように洞窟の奥からは声が聞こえてくる。しかもそれは複数の人物のものだ。

「なあ、早く行こうぜ……俺はこんな所にずっとは居たくないぜ」「分かってる。だが、俺たちの任務は悪魔に確実に贄を渡すことだろ」

「そうは言っても、こんな少女が喰われる所は見たくないぜ……」男たちの目線の先の贄の少女は眠っている。そんな彼女を見て、二人の男は罪悪感を募らすのであった。

「何しているの」

そこにエレンが現れる。その急な登場に男たちは驚嘆の顔を見せた。それはそうだ。この場所には自分たち以外居るはずはないのだから。

「なぜここに？　ここは危険なんだ。すぐに――」

「危険？」

エレンは辺りを見渡す。そこは洞窟になっており、目線の先の穴からはマグマのものと思われる黒い煙が立ち上がっている。

「とりあえず、ここを出るんだ！」

「出ないよ。その子を助けるまでは」

エレンはルシュの方へと足を進める。

「この子の役割を分かっているのか？　生贄なんだ、彼女は。その子が居ないと、悪魔の怒りを買ってしまおう！」

「そんなの関係無いよ。ダルクちゃん」

エレンはダルクへと指示を出し、ルシュを抱え上げさせる。

「おいっ！　止まれ！　ダメだ」

男二人はエレンとダルクへと銃口を向ける。

「それを向ける方向を間違えていると思いますか――」
ダルクは男たちの後ろ側の穴をジッと眺めている。エレンも同じだ。

まるで火山が爆発したような音がして、大きな火柱が上がる。その迫力にも男たちも振り返るのだ。

「悪魔だ――」

火柱の上には大きな蛇のような醜悪な魔物が乗っていた。体長はゆうに十mを超えている。これが悪魔ヨルムンガンドなのだろう。

「やあやあ、今回は生贄が多い……」

大蛇は身体を着地させると、その細い目で獲物の数を数える。

「ひいひい……」

男たちはその姿を見るや否や銃を構えるのも忘れ、逃げ腰になっている。

「娘が三人も、これは御馳走だ」

蛇が流暢に言語を操る不気味さ、男の頭の中は自分を守ることに精一杯になっていた。

「その通りでございます……この娘たち三人が今回の生贄でございます」

堅い笑みを浮かべ、男は頭に過ぎった台詞を大蛇へと伝える。

「ほほう。気が聞ク。市長に伝えよ。今度からはひと月に三人ずつ食料を寄こすようにト」

「なっ、それは………」

「できないならば、この場でお前らを腹の足しにしてもいいのだがナ」

「ひい……それは、お助けを………」

「ならば行け。私は食事で忙しいのだ」

「は、はいっ！」

男たちは蜘蛛の子を散らすようにその場を逃げ出してしまった。その場に残ったのは少女三人。悪魔の食事としては絶好の機会であった。

「さて、誰から食べるか――」

舌をチロチロと出し、獲物の識別をする蛇。

「はーい。私が行きます」

エレンは手を上げ、この場に似合わないような元気な声を上げた。「ほほう。面白い。自ら名乗り出るとは……決めた。お前はひと飲

みにすル」

大蛇は蛇とは思えないスピードでエレンへと這いその大きな口を開けた。しかしその口が閉まる前に彼女は跳び、

「だあああああああっ！」

気合全開、その頭を拳で殴りつけた。思いもしなかった反撃に蛇は咆哮を上げ、たじろぐ。

「いったあ……………堅すぎだよ」

殴りつけてダメージを受けたのは蛇だけではない。その鋼鉄並みの強度を誇る鱗に阻まれ、エレンも掌を腫らした。

「人間風情が吾輩に楯突くとハ……………面白い。獲物はそうでないト」

蛇はエレンを睨みつけると、舌をチロチロと出し、彼女を威嚇する。エレンも拳を構え蛇の動向に気を配る。

シャアアアアッ！

先に動いたのは蛇の方だ。咆哮を上げ、エレンへとその毒牙を向けぶつかってくる。だが彼女もそんな攻撃を受けるはずはない。紙一重に飛翔する。

しかし、それこそが蛇の狙いであった。飛んで自由が利かなくなった少女の身体に丸太のような尻尾が直撃した。そのまま彼女は固い岩肌へと叩きつけられる。

鉄に固いものを打ち付けたような鈍い音が辺りへと響く。普通の人間なら即死、助かってもし重傷は免れないだろう。

「クッククク……………新鮮なまま喰いたかったのだがナ」

醜惡な笑みをダルクへと向ける大蛇。しかし対峙した少女は凜とした顔を崩さない。

「どこを見ているのですか？ まだ戦いは終わっていませんよ」「なに？」

後ろから瓦礫の崩れる音がした。そこから銀髪の少女は這いだし

てきたのだ。

「あたた………当たっちゃったか」

「なん……だト………?」

大蛇の化け物は驚く。それもそうだろう。彼女は怪我をした様子もなく目の前に立っているのだから。

「エレン、何を遊んでいるのですか?」

ダルクの声が掛かる。

「そうだね。暑いし、ちゃちゃっと終わらせちゃおうか」

エレンはそれに応じるように声をあげる。

「なに? 吾輩を倒すとも言うのか? 不可能だ」

「不可能じゃないよ」

エレンは手を自分の前に手をかざし、眼を閉じる。

「闇の地より生まれし剣よ、我と共に悠久なる光を閉じよ。魔王の名はエレン——」

言葉を発している間、その場に居たすべての人、いやすべての時が止まったように見えた。空気は凍り、炎の揺らめきすら存在しない——そして言葉の終焉と共に彼女の手には等身大の大きな剣が握られていた。装飾された美しい柄、対照的に死を連想させるような黒光りした刃。それはまさに人智を超えた闇の産物であった。

「まさか……魔剣? お前が魔王だト………?」

「うん。そうだよ」

焦りを明らかにした魔物を前にエレンは断言した。

「何故、魔王が人間の味方をする! 魔王と人間は敵の筈だ!」

「そうかもね……人間にも気に入らない人はいっぱいいるからね。けど——」

エレンは剣の切っ先を大蛇の方に向ける

「友達を傷つけるならば、人間だって魔物だって容赦はしないよ」

大剣を構える少女の瞳には迷いや恐怖など微塵もない。この瞬間初めて、ヨルムンガンドは目の前の人物を対等の生物と捉えるのであった。

静と静の対立。指先一本動かさずエレンは大剣を構える――

その均衡を破ったのは蛇の方であった。

突如口から吐きだされた炎は少女の身体をあっという間に包む。マグマと同等の温度は空間にあったすべての物を焼き尽くす。彼女以外は――

構えた剣は炎を切り裂く。豪炎が過ぎ去った後、その白銀の髪が先すら焦がさずエレンはその場に立っていた。

「ば、馬鹿ナ……………」

渾身の一撃を軽くないなされた魔物は驚愕の眩きを漏らす。それは同時にエレンの最大の好機であった。

ヒュッ――

風切り音――そして咆哮。エレンの一閃は堅き鱗ごと大蛇を両断した。

切り口から出た大量の血液は彼女と剣を染める。その中で髪だけが色を変えずにそのままの色をし、毛先から落ちる紅は地面へと水溜まりを作っていた。

断末魔を終え、大蛇の巨体は地面へと叩きつけられた。それが終わりの合図となり、ダルクはエレンへと詰め寄った。

「お疲れ様です」

腕の中の少女を落とさずに器用にタオルを投げて渡すダルク。それを使い、顔を拭うエレン。だがその表情はどこか浮かない。

「ダルクちゃん。ルシュの容態は？」

「おそらくですが、薬で眠らされているだけなのですぐに目を覚ますでしょう」

「そっか……………よかった」

その言葉を聞き、エレンは初めて肩の力を抜いた。これですべてが終わったのだ。

「クッククッ………吾輩がこんなに簡単に倒されるとはナ……」
その声にエレンは瞬時に反応し、剣を構え直し振り返る。蛇は胴を断たれながらも生きていたのだ。蛇は息絶え絶えエレンを睨んでいた。呼吸のたびに口からは大量の血液が流れ出ている。

「もう勝負は着いたよ」

エレンにこれ以上戦う意思はない。剣線を下げ、蛇を見つめていた。

「勝負？ ククク………それはどうかナ？」

大蛇は地面を這いつくばり、崖の方へと近づく。そのたびに赤い線が地面へと繋がっていく。

「吾輩を倒したことであの街は滅びル——お前の大好きな人間の何万人の犠牲者を出してナ………」

「なっ………」

そのセリフを聞いて、一足飛びに蛇に斬りかかろうとしたエレンだった。しかし、噴き出した溶岩がヨルムンガンドの身体を地底へと引きずり降ろしたのだ。

「くっ………」

エレンもマグマの熱気に押され、後退せざるを得ない。バックステップで、いち早く逃げていたダルクの元まで戻る。

「エレン。ここは危険です。上まで戻りましょう」

「うん」

返事をするすぐに彼女らは上を目指す。振りかえらなくても背後の溶岩が激しく唸っていることが分かり、その脚は自然と速くなっていた。

横穴を出た瞬間に背後から火柱が上がった。

「あぶなあ………大丈夫、ダルクちゃん」

「ええ、しかし——」

背後に変化があることを気が付いたのはダルクであった。彼女が立ち止まったことでエレンの足も止まる。

「あっ………何あれ……？」

遙か下方にある溶岩を見て、彼女はそんな疑問を漏らした。エレンを驚かせたのは溶岩の色だ。以前見た時は輝かしい紅色を放っていた物、それが今ではドス黒く変色しているのだ。そこからは先ほどになかった黒い煙が延々上がってきている。

「ダルクちゃん……………どうなっているの？」

「どうやら、あの魔物の最期の抵抗らしいですね」

「どうなるの？　もしかしてアイツの最期の言葉に関係ある？」

「ええ。先ほどよりも火山活動が活発です。おそらくは噴火までその時間は掛からないでしょう」

「そんな……………ここが噴火なんかしたら……………」

「ええ。ダルゴンは全滅でしょうね」

「っ……………」

エレンは黒くボコボコと煮えたぎる溶岩を睨む。しかしそんなことで火山活動が止まってくれるはずもない。

「とりあえず、街まで戻りましょう。ここに居ても何の解決にもなりませんので」

「うん……………」

エレンは後ろ髪惹かれる思いでその場を後にした。

少女たちの帰還 — Come Home —

エレンたち三人は行きの数倍の時間を掛けて街の門へと辿り着く。こんな時間に時間が掛かった理由は簡単だ。ダルクの背負った少女はまだ眠っているのだ。定員二名までのケンブスに全員が乗れる訳もなく、長い道のりを歩くことになったのだ。

行きと違うことはそれだけではない。何故か門の方が騒がしい。それはその筈だ。街の警備兵が揃いも揃って門の前へと集結しているのだ。

程良く近づいたところで馬の蹄の音に男たちも気が付き、エレンたちへと視線が集中する。少女たちを見た男たちは困惑の表情をする。しかし――

「そ、その女だ！ あの悪魔に逆らった女はっ！」

声を上げたのは先ほど洞窟に居た男の一人。形相を変えて、エレンを指差している。

途端に屈強な兵士たちは持っていた長銃をエレンたちへと向けた。「お前！ 悪魔に逆らうとは、何者だ！ それにその背中の娘は贄のはずだ。そんなことをして悪魔が――」

「あの魔物はもういないよ。私が倒した」

その台詞を聞き、男たちの間にざわめきが走る。

「嘘だ。あの悪魔を倒せるわけがないっ！」

「ならどうして私たちは無事でここにいるのでしょうか？」

「っ――」

ダルクの言葉に男たちは黙ってしまう。しかし、警戒心は消えず、銃口は三人へと向けられている。

「それより、こんなことをしている場合じゃないよ。このままじゃ街が消えちゃうかも」

「なっ！」

また男たちにざわめきが走った。先ほどよりも大きい波門だ。

「エレン。それは今言うべきことでは……………」

まず自分たちの無事を確保したいというダルクの考えをエレンは微塵も気にせずにそう言った。

「娘。どういふことだ！ この街が消えるとは」

「えっと、蛇を倒したんだけど、最後に溶岩の中に落ちちゃってそれで――」

「どういふことなのだ！」

「……………鉱山の地下の火山活動が不安定になっています。このままではこの街は噴火によって跡形もなくなるでしょう」

ダルクの言葉により、男たちは黙ってしまう。驚愕の言葉にもざわめきが大きくならなかったのは、彼女の言葉にそれほどの衝撃があったからだろう。

「信じられないと思うのなら、鉱山の奥の間に行ってみると良いでしょう」

少し、考えた後、団長と思われる男が、若い兵士二人に確認をさせるために合図をした。

「お前たちには聞きたいことがまだたくさんある。我々に着いて来てもらおうか！」

銃で威圧をする兵士たち。エレンはダルクと目配せをする。

「ルシュもいます。暴れないのが賢明でしょう」

「そうだね――っと、忘れてた……………」

エレンは銃を持つ男たちに近づいていく。魔物を倒したという話をしたせいか、何もしていないのに兵たちは間合いを計って離れていく。

「ひっ……………な、なんだ！」

そこにいた黒服の男に少女は寄るのだ。そして懷に手を入れる――途端に銃がエレンへと構えられる。

「あー。大丈夫だよ。武器なんて持ってないから」

そう言っただけで彼女は懷から小さい革製の袋を取り出した。そこから何かを取りだし、男の足元へと投げる。

「これ、返すから。ルシュを親元に帰してあげてね。もう生贄はいらないから」

地面に落ちたのは三枚の金貨。エレンがルシュの父から受け取ったものであった。

「あ、ああ……………」

空返事をした男に満足してエレンはダルクの元へと戻る。

「という訳で、誰かルシュをお願い」

少し戸惑った後、団長の指示により、少女はダルクの背中から男の腕に渡る。

「ちゃんと目が覚めるまで面倒みてよね。そうじゃないと許さないから」

「ああ、分かっている……………」

エレンに睨まれた兵士は委縮し、その腕の中の少女をしっかりと抱え直した。

「じゃあ、行こうか。あとケンブスはちゃんと牧舎に入れといてね。できればブラッシングと餌も」

これから牢に入れられるというのに明るい様子のエレンに兵士たちも拍子抜けした様子を見せるのだった。

「ダルクちゃん！　そこにいる？」

「ええ、隣の牢にいますので、そんなに大声を出さないで下さい」

彼女たちの閉じ込められたのは街郊外にある特別牢。戦前は重罪人で溢れかえっていた牢も、今や苔と埃が支配している有様で久々の客を受け付けるのには少々汚かった。

「牢なんて久しぶりだな。なんか懐かしい」

「笑って言うことではないと思いますよ」

「いやあ、そうだけどね。日常に無い経験から生まれる名曲というものもあるものだよ」

牢獄に間違ってピクニックにでも来てしまった子供のようにエレ

ンは楽しげだ。

しばしの会話をしていると牢の扉が開き、誰かが入ってきた。足音からして人数は三人。

「ダルクちゃん、誰か来たよ。お昼の時間かな？」

「いえ、そうではないと思いますが」

「えーっ！ 私の腹時計はお昼を指しているよ！」

そんな会話をしている間に足音は牢の前へと来て止まった。

「あれ？ 市長さんだ」

彼女の言葉通りそこにはダルゴン市長ダフロの姿があった。

「二人だけで話をさせてくれ」

彼の命令を聞き、サイドにいた男たちは牢の外へと向かって行く。扉が完全に閉まりきったところで彼はエレンの入った牢へと近づいてくる。

「エレンさん。まずはあなたに感謝を述べなければいけません。悪魔、ヨルムンガンドを倒して頂いてありがとうございました」

市長はエレンに向かって一礼をする。

「えへへ。そんなお礼なんて照れるなあ」

彼の思わしくない顔に気が付かず、エレンは照れ顔を見せた。

「しかし、その代償として街は創立史上最大の窮地に立たされています」

彼は真剣な顔つきでそう述べる。さすがにエレンも笑ってはいられない。どういったいいのか分からないように困った表情を浮かべる。

「で、どうしますか？ 私たちを処刑でもしてみますか？ あの少女を生贄に捧げたように」

ダルクは厳しい態度で市長を睨む。

「いえ…………強要されたと言え、長年私たちがしてきたことは許されざるべきことはありません。今こそ市民に真実を話そうと思

っています」

「いいのですか？ そんなことをすればあなたは市長としてやっていけなくなるかもしれない」

「ええ………この件で私がどう裁かれても構いません。しかし、もう私は後悔はしたくはないのですよ——今日、あなたがあの少女を助けていなければ、私はまた深い後悔をするところでした………」

ダフロは胸に手を当て、今までの行動を悔いるように言葉を述べた。

「そっか………市長さんも苦労してきたんだね」

気の毒そうな声を上げ、今までとは違う目線で彼のことを見るエレンだ。

「それよりも問題は貴方たちです。この状況を貴方たちが作り出したと知ったら心無い市民が責め立てるかもしれません。その前に街から離れた方がいい」

「えっ？ そんなことできる訳ないじゃん！ 私たちが原因を作りだしちゃったんだし、最期までいるよ」

「しかし——」

「私だって、この街に守りたい人がたくさんいるもん。その人たちを置いて逃げるような真似なんてできない！」

強い言葉で自分の意思を表明する彼女に市長は何も言うことができなかった。

それから間もなく彼女たちは牢から解放された。この件を知った重役には散々反対されたが、市長の強い要望により実現したのだ。牢を出た所で彼女らはある場所へ案内される。そこは市中央にある病院で、その一室に通された。

白の壁に小さなベッドがあるだけの大きな部屋。ベッドの上に一人少女が立っていた。彼女は窓から外の景色をずっと眺めている。

その表情はどこか寂しげだ。

「あっ、ルシュ！ 良かった。起きたんだね！」
「うわぁ！」

一足飛びに窓際の少女にエレンは跳びついた。当然少女は驚きの声を上げるのだ。

「え、エレンお姉ちゃん……………あの、その…………」

「身体大丈夫？ 変なところ無い？」

「うん。大丈夫——」

エレンの元気に押されルシュは、あたふたする。

「そっか、良かった、良かった！ じゃあ、帰ろうよ」

「えっ……………」

ルシュは不安げな顔をした。？ 帰る？ というワードによってその表情は引き起こされたのだろう。

「どうしたの？ 帰らないの？」

「私……………帰っていいのかな？ だって、お父さんは——」

「大丈夫。お父さんはルシュを待っていてくれるよ」

笑顔でエレンは言った。根拠の無い言葉だが、その言葉は少女の不安を拭い去るのには十分過ぎた。ルシュは首を縦に振る。彼女もまた家に帰りたいとずっと願っていたから。

それからすぐにスラムに向かうエレンたち。家に近づくにつれ、ルシュは時折、不安そうな顔を見せる。その度に楽しげな話をし、エレンは彼女を励ますのであった。

それでも覚悟は決まらない。けれど家までの距離はもう無い。ルシュはスカートの裾をギュッと掴み、エレンの言葉を思い出す。父から捨てられた時、もうここには一生戻れないと覚悟した。けれど、今、自分は生きている。あとは父が受け入れてくれれば、自分の望みが叶うのだ。

「ほらっ、行っておいで」

「う、うん……………」

エレンに背中を押され、ルシユはあばら家のドアを叩く。すぐに返答はあった。中からはルシユの父親が出てきた。

「あ——」

ルシユが言葉を発する前に彼は彼女を抱き寄せた。

「お帰り……………」

「ただいま……………」

ルシユは今まで考えていた再開の言葉などすべて忘れ、夢中で父へと抱きつくのであった。先ほどまで涙など見せなかった少女の目には無数の水滴が浮かんでいた。彼女は今までの寂しさを埋めるように父へと懸命にしがみ付いた。父もまたそれに応え娘を抱く。

その様子を見て、エレンは無言で立ち去ろうとした。家族水入らずの邪魔になるかと思ったからだ。しかし——

「エレンさんっ！」

彼女を呼び止める声で足を止める。

「本当にありがとうございます」

ルシユの父は深々とお辞儀をする。ルシユも同時に。その顔は二人ともクシャクシャだ。

「うん。気にしないでいいよ」

一度振り向き笑顔を見せ、エレンはそのまま行ってしまった。

街のためにできること

それから数時間後の夕刻。いつもなら活気のあるはずのこの時間帯。街は騒然としていた。中央広場にはおよそ千人の民衆が市長の言葉を待っていた。当然ながら広場にはエレンとダルクの姿もある。

「多忙の中、みなさんよくお集まりになってくれました。今日、このような集会を開いたのは他でもありません。この街の行く末についてです」

機械により拡張された声は街中至る所のスピーカーにより伝えられる。その範囲はスラムすら例外ではない。

それから市長は衝撃の事実を話し、市民は驚きを隠せなかった。その場で混乱が起こらなかったのは市長の話術のお陰だろう。しかし、市民にとってその晩は不安なものになっただろう。

そして夜が明けた。朝だというのに市議会の会議室には大勢の人が集まっていた。その構成員としては市の重役から学校の先生まで様々、街の知識人と思われる人が勢揃いしていた。このような人が集まった理由は他ではない。間近に迫った街の危機をどう乗り越えるのか話しあうためだ。

その席にはニコルとダルクの姿もあった。ダルクはエレンの強い要望により急きよ参加を決めたのだ。ニコルの場合は司書として図書館に通っている経歴が評価をされた結果らしい。

彼女たちが頭を悩ませている間、エレンはいつものように孤児院に来ていた。

「おっはよう！ みんな！」

元気に声を掛けるといつも通り、元気に子供たちが出てくる――はずであった。しかし、今日は違った。

「あっ、エレン……………おはよう」

子供たちの様子は何か落ち着きない。おそらくは昨日の放送が原

因なのだろう。

「エレン、街が消えちゃうって本当なの？」

誰もかが知りたい疑問を彼はエレンへと投げ掛ける。大抵の大人ならば誤魔化すか、希望を持たせるための嘘を付くだろう。しかし、彼女の場合は違った。

「大丈夫だよ。ダルクお姉ちゃんや市長さん、他の人が今、頑張っているんだよ。絶対にこの街が消えるなんてないから」

その言葉に嘘は無い。何故ならそうエレンが信じているから。

だが、現実はどう甘くは無かった。議会では急ピッチで話し合いがされているにせよ、これといった画期的な案が出る訳でもなく、最終手段の街を放棄するという方向性で話が進められていた。

しかし、この案にも致命的な欠点があることを市長たちは気づいていた。

第一に市民の受け入れ先がないこと——十万人近い人を受け入れる大都市はそうそう見つかるものではない。あるとしてもかなりの長旅を強要してしまうことになる。そうなれば先立つ物はお金と物資の量である。その結果、金のある人以外を見捨てる結果となってしまうのだ。

第二として住民に移動の意思がないことだ。ダルゴンで生まれたものは皆、ここを故郷と思っている。自分の故郷をみすみす捨てられる人などそうは居ないのだから。

この二点がある手前、どちらの方向性でも話は進まないのであった。

——だが、諦めない人がそこにいれば、事態は進展を見せるのである。

エレンたちがヨルムンガンドを倒してから五日が経った日の朝、いつものように市議会には市長ほかの人々が集まっていた。今日は珍しくエレンもその場に居る。彼女の目的は簡単だ。ダルクが解決

策を見つけたというのでそれを聞きに来たのだ。

「みなさん、聞いてください。噴火から都市を守る方法が見つかりました」

少女の声に室内はざわめく。

「はいはい。みなさんお静かに。これからダルクちゃんがちゃんと説明するからね」

「エレン。その地図を広げてください」

「およ？　これ？」

机の上を覆うような大きな地図を彼女は広げる。そこには街とその周辺の地形が描かれていた。

「みなさんもご存じの通り、ダルゴン近郊には大河が流れています。この河の水を利用してダムを作ります」

「ダムだと？」

ダルクの言葉にそこにいた人々は耳を疑ったに違いない。

「火山の噴火を水を張って塞ぎ止めようというのですか？　それには途方もない大きさが必要になりますよ。それに地図上じゃ近く見えますが、河まではそれなりに距離がある——不可能だ」

「ええ、それは分かっています。ですが、不可能って言葉を使うほど、難しいことなのでしょうか？」

知識人の台詞に全く押されず、ダルクはそう言い放った。

「そ、それは……………」

彼女の態度に押され、逆に男は黙ってしまう。

「なるほど。ダルクさん、良いアイディアですね——しかし、彼の言い分も分かる。私たちに残された時間は少ない。しかも街の労働力は無限大ではないのです。つい昨日も、有力な土木工事が街を去って行きました」

市長は冷静な判断でダルクの意見を分析する。

「この意見以外は現実的ではないことも事実です。そんなことを言っている場合ではありませんよ」

「しかし、この都市を去る人が多い中、働き手を見つけれられるかど

うか——」

市長とダルクは真っ向から意見をぶつけ合う。

彼らの攻防戦を止めたのは先ほどまで発言が無かった少女の挙手であった。

「あのさ。私、難しいことは分からないけど、労働力ならあると思うんだけど」

二人が黙ったところでエレンは立ち上がり自分の意見を言った。

「スラムの人たちに手伝ってもらえばいいんじゃないかな？ ほら、みんな仕事欲しがっているし………家族含めた全員のご飯とか出してあげれば、働いてくれるんじゃないかな？」

「……………エレンさん」

「あれ？ それじゃあダメかな？ ならオヤツ付きなら——」

「良いアイデアですよ。スラムには職を失った人が大勢いる。みんなを都市で雇用すれば——ねっ、父さん」

ニコルはエレンの意見を褒め称え、最終決定権を持つダフロに問いかける。

「スラム……か。分かりました。その意見を検討してみましよう」

不安そうな顔をしながらも彼はオーケーサインを出した。

やる事が決まったことで計画は急ピッチで決まっていくなにしる時間がないのだ。市長は大まかな計画が決まったその足でスラムの広場へと来ていた。

重大発表があるということでもスラムの人々も広場へと顔を出している。しかしその場について来ていたエレンにはすぐに分かった。人々の表情は複雑だ。これは市長への強い不満を表しているのだろう。彼もそのことに気が付いているらしい。緊張した面持ちでマイクを握っていた。

彼は今の街の現状とこれから行われる計画について話した。万人に分かるように優しい言葉でゆっくりかつ情熱的に。

彼が言おうとしたことはスラムの人々にも伝わった筈だ。しかし、彼らの表情は依然として暗い。

「何が街を救うだ？　いままで俺たちを散々追いやっておいて、こんな時ばかり頼りやがって！」

「そうだ、そうだ！」

一人が言った言葉により堰が切られ、不満の嵐がステージ上へと降りかかる。

「みなさん、落ち着いてください——」

市長の言葉は彼らを呷るだけで、何の効果も無い。声だけではなく、男たちの投石が始まる。

「市長、下がってください」

「ああ……………しかし」

護衛に守られステージを降りることをやむなくされた彼は口惜しそうな表情をする。

その時、ステージに残ったのはエレンだけだ。だが民衆の熱は冷めていなく、エレンに対してまで石が投げられる。

だが、飛来物に臆することなく、彼女はステージ中央のマイクを取った。そして——

「うるさーい！」

マイクがハウリングするほどの大声が一瞬で民衆を沈黙させる。

「そんなこと言っている場合じゃないでしょ！　このままじゃ、この街が無くなっちゃうんだよ？　なんで仲良く協力できないの？

あなたも、その君も、同じ市民でしょ？」

——同時刻、市街地にいたダルクとニコルの耳にもエレンの声は届いていた。

「エレンさん……………演説しちゃってますね」

「ええ、ああ見えて、お得意ですからね」

ダルクはポツリと呟くと、また自分の作業に戻った。

「私はこの街に来て、まだひと月だけど、この街が好き。美味しい物いっぱい売ってるし、賑やか。スラムにだっていい場所がたくさんある。けど——それが無くなると思うと悲しい。みんなこの街が好きじゃないの？」

民衆は顔を見合わせて、エレンの問いかけを考える。

「この街はまだまだ豊かになる。それこそスラムの人も豊かになるぐらい。けれど、そのためにはあなたたちの協力が必要なの………だから、だから、お願いします」

エレンは勢いよく頭を下げる。それを見て呆然とする市民。

「お願いします」

エレンに続いて市長も大きく頭を下げる。

自分たちを蔑んできた市長が今、この場で頭を下げたのだ。スラム住民は驚きで声すら上げられない。

パチパチパチ――

誰かは知らないが手を叩いたのだろう。拍手の音が聞こえた。

パチパチパチパチ――

連鎖したように拍手の音は広場全体に広がっていく。

ここでエレンは確信していた。自分の思いが伝わったのだと。

活気 ―終焉たる炎の輝きの如く―

その日の朝、中央広場は人の群れによって支配されていた。

「うわぁ……………ダルクちゃん見てよ！ あんなにたくさんの人、みんな来てくれたんだ！」

色とりどりの群衆を見て、興奮気味に声を上げるエレン。

「スラムの人も来てくれてますね」

「えへへ。私の気持ち伝わってくれてうれしいよ」

「さてと、私たちも彼の手伝いでもしましょうか」

ダルクの視線の先には簡易テントで書類の整理に追われているニコルの姿が映った。

「あはは。ニコルも大変そうだね」

エレンは後ろからニコルへと近寄る。気配も消さずに大胆に近づいたはずなのに彼は気が付かない。それほど忙しいからだろう。

「ニコルーっ！」

「わっ！ び、びつくりしたぁ……………なんでしょう、エレンさん……………」

「手伝いに来たよ」

「ありがとうございます。では、来た人の受付をお願いしていいでしょうか？ 僕だけでは追いつかなくて……………」

「おお、受付女とは……………いいよ。やる」

エレンはニコルに場所を譲ってもらい、席に着く。

「えっと、この書類に住所とサインを記入させてください」

ニコルは書類の山を指してそう言った。

「分かった。ほら、ダルクちゃんも座って」

「はい」

二人が座ったところで大勢の人がこちらに向かって流れてくる。どうやら受付の開始時刻になったらしい。

「あつ、第一号のお客様が来たよ！ ダルクちゃん、営業スマイル

だよ。はい、にこつと」

「にこつ」

口から出た言葉に反してダルクはちっとも笑わなかった。

二人は懸命に受付という仕事をこなしていく。だが、いつまで経っても人の長い列は途絶えることはない。

「おっ、譲ちゃんが受付かぁ。頑張ってるな」

「あっ、うん。おじさんも頑張ってる」

仕事中にエレンは何度もこのように声を掛けられた。それもその筈だ。スラムの講演の後からエレンは街のちょっとした有名人になっているのだから。

「さて、まだまだ行くよ！　ダルクちゃん！」

言葉で気合を入れ、エレンは自分の仕事を着実に片づけていくのであった。

この時間から遡ること三十分。スラムの一角にて。

「ふう……………」

少女は水の入った桶を抱え、自分の家に向かっていた。

水の入った桶は重い。ただでさえ身体の小さな少女には尚更そう感じるだろう。しかし、彼女は嫌々水を運んでいるわけではない。これは少女にとっての日課だった。水は必要だ。料理にお風呂に。スラムに水道が出ればどんなに幸せだろうと、エレンの機能の言葉を思い出し夢想する。

「ただいま」

やっと家に着き、彼女は水を台所にある水瓶へと流し込む。

「ルシュ、お帰り。ご苦労様」

「うん。いいの」

少女は笑って、挨拶を返した。

ルシュは思う。朝からこんな幸せでいいのだろうか。

エレンのお陰で自分の生活は百八十度変わった。あの日から父は酒

を止め、自分に叱咤することもなくなった。生活は未だ厳しいが、ルシュは初めての生きがいを手に入れることができたのだった。

「ルシュ。すまんが、留守を頼む」

珍しくルシュの父は外行きの服に着替えていた。

「お父さん、どこに行くの？」

「仕事だ。いつまでもお前に貧しい生活をさせてられないからな」
大きな手で娘の頭を撫でると、彼は家を出ていった。

「エレンさん」

声を掛けられ、エレンは顔を上げる。そこには見たことのある顔の男が居た。

「あつ、ルシュのお父さんだ。どうしたの？」

「いや、私も働きたいと、思いました……………大丈夫でしょうか？」

「そりゃ、大歓迎だよ！ はい、ここにサインして！」

エレンは彼の鼻先に書類を押しつける。その元気に彼の顔にも苦笑が浮かび上がった。

夕方までに集まったのは総勢一万人の人々。性別、年齢、住処、位を関係なく、ダルゴン市民は立ち上がったのだ。

「すごい、書類の山……………明日から忙しくなりそうですね」

疲れ切った表情をするのはニコルだ。だがその顔には満足感も見える。

「エレンさん。すみませんね。一日じゅう手伝ってもらっちゃって」
「ううん。いいんだよ。好きでやってることだから。ねっ、ダルクちゃん」

「そうですね」

エレンはともかく、仏頂面のダルクは好きでやっているように見えないとニコルは思うのだ。

「さてと、私たちはもう一仕事やらなきゃいけないんだ。もう、手

伝いは要らないかな？」

「ええ、大丈夫です」

「じゃあ、また明日ね」

その言葉を残し、エレンは足早にその場を去って行ってしまった。その足取りは普段と変わらずパワフルだ。

「エレンさんたちはタフだなあ……僕も見習わないと」

ニコルはその書類の山を睨み、整頓に移るのであった。

「こんにちは——じゃなくて、こんばんは——っ！」

「おう、エレンちゃん、いらっしやい」

店に入った途端、威勢の良い初老の男性がエレンへと挨拶を返してくる。

「おおっ、店っぽくなってる！」

店の内装を見て、エレンは驚愕の声を上げた。それもその筈だ。ほんの数日前までここはただの廃屋だったのだから。

「いやあ、苦労したぜ。机やら椅子やら全部取り換えなくちゃいけなかったんだからな。まあ、街のバーのオーナーが安く譲ってくれたのがありがたかったな」

「これでバーが再開できるね」

「ああ、これもエレンちゃんのお陰だぜ」

ここの店の店主とエレンがあったのは三日前のことであつた。エレンがいつものようにスラムを歩いていると一人の男が公園の隅の方で酒を飲んでいた。エレンは彼に気にせずにも通り唄を歌っている、いきなり声を掛けられたのだ。

「おい、あんた。もしかして、歌姫か？」

「んー？ 違うけど」

「違ってもいい。唄は得意なんだろう？ だったら、ちょっとした儲け話に乗らねえか？」

「へっ？ 儲け話？」

「ああ。実はよう。俺は三年程前までスラムの一角でバーをやってたんだ。税金が高くて店を畳んじまったがな」

「ふむ」

「だが、俺には叶えていない夢があった。自分の店をこの街一の酒場にするってよお」

男は話の途中だというのに酒を勢いよく呷る。

「で、店を出すチャンスが再び来たってわけだ。今、街の連中は慌てて逃げやがってる。人気のバーも一軒、二軒と店仕舞いしてやがるんだ」

「へえー。夜、静かになったと思ったら、酒場が止めちゃったからなんだ」

エレンは納得した様子で相槌を打った。

「そこでだ。俺が店を出し、どん底の住民を盛り上げようって寸法さ。だが、店を出しただけじゃ客は喰いつかねえ……………だから、あんたの力が必要なんだ」

酒の勢いを使い、威圧的にエレンに近づいてくる男。普段ならば酒臭さに我慢できなくなり、一発ほどお見舞いする所だが、エレンは拳を引っ込め考える。

「スラムに酒場ができれば、活気が出るかな？」

「おう。出るに決まってる。なんせ、街一番の店ができるんだからな」

「ふむふむ……………決めた。私、やるよ！」

エレンは彼の言葉を承諾し、店の看板娘になることを決意したのであった。

店内を駆け巡り、席からの見え方を確認した後、エレンは満足そうに床から一段高くなっている場所に立った。

「ここで歌うのかあ。いい感じかも」

やや興奮気味にエレンはそう言う。

「それでエレンちゃん。給料のほうなんだが、その、前言ってたよ

うにタダでいいのかい？」

マスターは遠慮がちに聞く。

「うん。いいよ。その代わりさ。ダム造りで働いてくれた人には最初の一杯を無料サービスにしてくれないかな？ スラムの人にも飲みに来てほしいし」

「ううっ……なんて良い子だ……俺にも娘が居れば、こんな感じなのかなあ……」

「ちよっと、マスター。なに泣いてるの？」

「泣いてなんかいないさあ。おじさんは嬉しくて、嬉しくて………」

「そんな、大げさな——」

エレン、ダルクの協力もあり、店の準備は整った。労働初日の夜には店を開けるとマスターは言ってくれた。その言葉を聞き、エレンたちの今日の仕事はこれで終わるのであった。

「ふあああ………ねむう………」

「お疲れですね」

帰り道、何度も欠伸をするエレンに対してダルクはそんな言葉を掛けた。

「まあね。ちよっと張り切り過ぎたかも」

こった節々をほぐしながら、エレンはもう一度大欠伸をする。

「今日の街って賑やかだったね」

「ええ、もうすぐ無くなるとは思えせんね」

「もう、ダメだよ、ダルクちゃん！ そんなこと言っちゃ。無くないように明日から頑張るのだからね」

「そうですね」

エレンの言葉を否定しなかったダルクだが、心の中では街の行く末が想像できていた。確かに今日集まった人数はダルクの考えていた以上であった。しかし、それを計算に入れても出てくる答えは同じだ。どう考えてもこの街は終わりであると悟っていた。

火は終焉に近づくほど激しく燃え上がる。今この街は、その炎と似ている。ダルクはそう思った。

「もしかして、ダルクちゃん。また難しい考え事？」

エレンはいつの間にかダルクの顔を覗き込んでいた。毎度のことなので驚きはしないが彼女の顔をつい茫然と眺めてしまう。

そこにあっただのはいつもと同じ笑顔だ。不安の色も何もない。無垢な笑顔。

その笑顔を見ると、自分の中にある答えが間違っているのではないかという錯覚に陥ってしまうのであった。

働く者。支える者

「開門！」

男の声により、街の大きな扉がゆっくりと開いた。待ち焦がれたように人々は外へと出ていく。

「うわぁ……改めて見ると、すごい人だねえ」

働きに出る男たちを兵士の詰所から見守るエレンはそう呟いた。まるで絨毯が動くように人々の波は街の外へと移動していく。

最期の一人が出るまではおよそ十分。エレンは飽きることなく彼らを見送ったのだ。

「よっし、私たちも仕事しようか」

エレンとダルクは目的の場所へと足を運ぶ。彼女たちの向かった先でも大勢の人々が賑わいを見せている。だがここに居るのは先ほどの屈強な男衆ではなく、可憐な女たち、そして少年、少女であった。

中央広場に集められた彼女らは、指揮する者の指示に従い、持ち場に着く。ある者は途方もない大きさの鍋で湯を沸かし、ある者は野菜を洗う。

「ふわぁぁ……すごい量だねえ………」

「ええ、一万人の食事ですからね」

「もう、お腹すいてきちゃったよ」

「つまみ食いなどしないでくださいよ」

「し、しないってつまみ食いなんて！」

必死になる所が怪しいが、敢えて何も言わないダルク。

しばらくすると炊き込みが始まる。エレンも何か手伝おうとしたのだが、

「えっと……ジャガイモってどうやって皮むきするんだっけ？」

包丁で危なげにジャガイモの皮をむくエレン。皮をむかれたジャガイモはつい先ほどまでの半分程度の大きさにまで姿を変えている。

「ふう、最近の娘は料理もできないのかい？　ほら、貸してみな」
体格のいい奥さんが慣れた手つきでイモの皮をむいていく。

「すごいなあ。私って刃物を扱うセンスがないのかな……」

「何を。いつももっと大きな刃物を扱っているではないですか」

ダルクは包丁で綺麗にニンジンの皮をむきながらそう言った。

「おおっ！　そう言えば、そうだ。もしかして、魔剣ならば……」

「もしかしてとは思いますが――魔剣で野菜など斬ったら跡形もなくなると思いますよ」

「そ、そうだよね……魔剣で料理なんて笑えちゃうよね！　あはははは……」

自分の浅はかな考えを見透かされて、エレンは笑いながら誤魔化しをする。だが、ダルクの呆れ顔は変わらない。

「そ、そうだ。ここにいっても手伝えそうにないから、私、違う場所に行ってくるね」

そんなダルクから逃げるようにエレンは広場を横切り、違う職場へと辿り着く。ここでは炊けたご飯を握り飯状にする作業が始まっていた。

「これならば、行ける！」

勝算を胸に、エレンは簡易テントの中に入る。

テントの中では主に女性がコマネズミのように走り回っていた。

そんな忙しそうな職場で目に入ったのは、ひと際、みすばらしい服装をした少女の姿であった。

「ルシュ。熱いから気を付けてね」

「うん」

ルシュの隣りには若い女性が立っており、彼女おにぎりの握り方を教えている。

「あっ！　エレンお姉ちゃん！」

しばらくそこで立ち尽くしていると、ルシュの方からエレンへと声を掛けてきた。隣にいた女性もエレンを見て、軽い会釈をする。

「やつほー、ルシュ。頑張ってるね」

「うん。お父さんも働いているから、私もここで働かせてもらったの」

「そっか」

ルシュの笑顔を見て、エレンは心底ほっとする。彼女は覚えたての握り方を実践し、器用におにぎりを量産していく。その顔は終始楽しそうだ。

「ルシュ。楽しそうだね。まるで親子に見えたよ」

「えっ？ そんな、親子だなんて……………」

言葉に戸惑ったルシュだが、

「私もルシュちゃんの娘ならばいくらでも子供にしたいわ」と、彼女も言ってくれた。

その言葉を聞き、ルシュは顔を赤くし、俯いてしまう。どうやら相当嬉しいようだ。

（親子か……………いいな……………）

ちょっと羨ましく思ってしまった。妄想をし、思考を止めていると、

「エレンちゃんも手伝いに来てくれたのですか？」

「えっ？ う、うん」

妄想の途中で急に名前と呼ばれ、どもってしまう。

「じゃあ、私たちと一緒ににおにぎりを握らない？」

彼女は笑顔で誘いの言葉をエレンへとかけた。

「あっ、はい！ やります！」

彼女の笑顔の誘いを断るわけではない。エレンは気合を入れ、そう返事をするのであった。

彼女からおにぎりの形を教えてもらい、ルシュとエレンはお手本通り量産を開始する。丁寧に握るルシュとは対照的にエレンのおにぎりはなぜか歪な形へと変形してしまう。

「むーっ…………上手くないなあ」

思い通りにいかない作業に悪戦苦闘しながらも、なんとか作業を続け、昼が間近になった時には無事に一万分分の弁当が出来上がった

た。

「はあ……お疲れ様でした」

ルシユはかなり疲れた様子でその場にへたり込んだ。

「お疲れ様」

「お姉ちゃんもお疲れ」

「うん」

これでルシユの仕事は終わりだ。しかし、エレンの仕事はまだ終わっていない。腰を掛けることもなく、辺りをキョロキョロと見回す。弁当は丁寧に包装され、馬車の荷台へと運ばれる。それを運ぶことをもエレンは請け負っていたのだ。

「それじゃ、私はもう一仕事してくるよ」

「ええ。頑張ってね」

ルシユも今日おにぎりの握り方を教えてくれた女の人もエレンを笑顔で見送る。

「あつ、えつと……今日からスラムのバーで歌うので良かったら、聴きにきて………ください」

エレンは女性へと掌サイズのビラを配る。これは昨日、マスターから宣伝用にと大量に貰ったものだが、忙しさのあまり存在をすっかり忘れていた。

「ええ、是非、聴きに行くわ」

彼女はビラに書かれた住所を場所と営業時間を確認し、笑顔で快く返事をしてくれた。

「じゃあ」

宣伝し終わったエレンは手を振り、控えている馬車の方へと走っていった。

（名前、聞いておけばよかったかな……）

彼女の顔を忘れないように、エレンは心の中のメモに笑顔の女性を描き込んだ。

「出発！」

兵士長の声を合図に馬車は一斉に走り出す。その数は約百。その荷には弁当や飲み物といった食料のほか、薬や包帯、タオルや衣服、そして予備の工事道具が乗せられていた。

足の速いケンブスはダルクの手綱捌きにより、集団のほぼ先頭に立っている。一方エレンは後ろの方でのんびりと走っていた。

「はあ。ケンブスもこの子のように大人しなければなあ……」

素直に言うことを聞く雄馬を従わせ、エレンは晴天の街道を走って行った。

カーン、カーンっ！

現場では鐘の音を聞き、男たちは作業を放りだし、馬車へと目散に集まってくる。お目当てはもちろん昼食だ。

「はいはい。並んでくださいーい！」

エレンの馬車の荷台に並べた弁当はどんどん数を減らし、すぐに完売してしまった。何故か隣のおじさんの荷台と比べると二倍以上無くなるのが早い。数分の間で手元に残ったのは、自分の分と指揮する人用の数食のみだ。

「誰かもらっていない人、いなーい？」

現場でしゃがみ込み、弁当を食べている人を掻き分け、エレンは穴ぼこの空いた不安定な地面を歩いていく。

「あつ、エレンさん。僕、貰っていません！」

そう主張したのはニコルであった。彼は見取り図を片手に、まだ工事が着工していない地面に立っていた。

ニコルは工事主任と話しの区切りを付け、こちらへ向かってくる。「へえ、ニコルも頑張ってるんだね」

「ええ、こんな所で地学や力学が役に立つとは思ってもありませんでした」

若いながら彼は貴重な知識人であることを誰もが認めていた。だからこそ、ニコルはこの場で堂々と仕事ができているのだ。

「じゃあ、休憩タイムで。はい。これ」

「ありがとうございます」

彼はお弁当を受け取ると、近くにあった岩へ腰を下ろす。エレンもその隣へと座る。

「わあ、美味しそう」

彼はメニューを見て、そんな率直な感想を述べた。

献立はおにぎり二つに、獣肉とイモとニンジンの煮物だ。決して量は多くないが、味は抜群である。

「あっ、そのおにぎり、私のだ」

「えっ？」

彼がおにぎりに着目すると、その形が歪んでいることに気が付いた。これこそエレンが握った証しだった。

「自分でも食べてないんだけど、どうかな？」

「はい、食べてみます……………」

口に入った途端、程良い塩気が舌を刺激する。形は多少悪いが、味は美味しい。

「美味しいですよ」

「やった！ 褒められた！」

喜びを素直に表し、エレンも食事を開始した。

お昼休みは一時間ほどしかないが、男たちはその時間を有効に活用し、身体を休めたり、会話をして仲間を増やしたりしていた。

少し離れた所から、エレンとニコルはその様子を見て、彼ら自身も他愛の無い世間話で羽根を伸ばした。

カーン、カーンっ！

鐘が鳴らされた。あっという間に休み時間が終了したらしい。

「時間ですね。僕は作業の方へと戻りますので」

「うん。分かった、頑張ってね」

お互いに手を振った後で解散となる。これから街に戻る予定のエレンであったが、帰還手段は行きとは違っていた。なんでも怪我人を街まで運送するために馬車が必要だったので、エレンは快く馬車を譲ったのだ。そして、彼女が乗るのはいつもの荷台。大量のゴミと共に街へと向かう。

「ねえ、ダルクちゃんは昼休み、何してた？」

これはエレンが興味本位で聞いてみたことだ。いつもなら自分にベツタリな彼女がどう過ごすのか知りたかったから。

「なんてことありませんよ。十数回ナンパされただけなので」

「うわぁ…………サラツとすごいと言うよ、この人…………」

確かに男だらけの仕事場に彼女のような可憐な少女が居たら、誰もかもが声を掛けるだろう。

「んー。私は声をかけられなかったのに…………同じ女としてちょっと悔しいかも」

「その代わり、ニコルとは良い雰囲気でしたけどね」

「えっ？ そんな風に見えた？」

「はい。それは。青い恋を実らす、少年少女の構図でしたね」

「あはは。そんなこと言うなんて変なダルクちゃん」

エレンは笑いながら、馬車の窓から顔を出す。工事現場からは大分離れたというのに働く人は小波のように荒れ果てた大地を削っていく、そんな様子が見えるのだ。

「エレン、夕方までは少々休憩にでもしましょう」

「ん？ 別にまだ働けるけど？」

「ええ、そうでしょうね。でも、まだまだ先は長いですよ」

「そうだね。せっかくダルクちゃんが休めって言うならば休もうかな。もちろんダルクちゃんも休憩ね」

「私は……………」

「ダルクちゃんだって働き詰めなんだから、たまには部屋でのんびりとしないと、ね？」

「分かりました。お言葉に甘えて」

会話が終わると沈黙が訪れる。ダルクが振り向けばすでに姫は眠りについていた。ゴミに埋もれながらの就寝はどうかと思うが、その寝顔はいつもの通り可愛らしいものであった。

夜想曲。スラムにて

夕刻。街に賑わいが戻ってきた。男たちが帰還したのだ。現場で貰った給金を握り締め、それぞれの帰路へ着く彼ら。

「お父さん！」

「おっ、ルシュ。迎えに来てくれたのか」

「うん」

先ほどまで疲れていた腕はその力を取り戻すように力強く娘を抱き抱える。

「もう晩御飯、作ってあるんだ」

「そうか。それは楽しみだ」

親子は夕日に染められた通りをスラムの方へと歩いていく。彼らだけではない。様々な人が帰るべき場所に戻っていくのだ。

「ダ、ダルクちゃん。こんな感じでどうかな？」

「ええ、良いと思います。後ろを向いてください。最後のリボンを結びますので」

「うん」

エレンは営業用の黒いドレスを纏い、裏方の部屋に控えていた。街に帰還してまっすぐバーに来る人も少なからずいる筈だ。さほど時間はない。着付けが行われている間にもエレンは「あー」とか「いー」とか、ノドの準備体操をしていた。

「終わりました」

「うん。ありがとう」

リボンを結び終え、ダルクは彼女から離れ、一礼をする。その仕事はまるで着付け師そのものだ。

エレンはカーテンを指で捲り、店内の様子を見る。ここまで響いてくる声で分かっていたが、結構な数の客が来ているようだ。

「うわぁ……………ちよっと、ドキドキするかも」

言葉とは裏腹に彼女の表情は明るい。ワクワクする気持ちが上回っているのだろう。

「よしっ！」

気合を入れ、エレンは跳び出す。その姿を見るや否や、店中からは歓声上がる。客たちの視線が集まる中、エレンは口を開いた。

前振りもない、唐突な歌い出しであったが、その圧倒的な歌唱力の前に男たちは言わずとも沈黙する。エレンの目的は明確だ。男たちが楽しめればいいということ。だからこそ長調な唄を選び、楽しげなメロディーを響かせていく。

彼女が口を閉じると、空気の震えは止まり、一瞬で店内は無音となった。そしてすぐに対照的な騒音に支配される。歓喜の声と拍手が響き、店の中は一層熱気に包まれるのであった。

エレンはインターバルを置きながら五曲ほど歌う。その頃には酒と唄で男たちは良い具合に酔っぱらっていた。

「はい。ここで寝ちゃダメ！ 明日からも仕事でしょ？」

「ああ。そうだな。ワシらは帰るとするよ。じゃあね、エレンちゃん」

酔い潰れる客も居ないまま、ゆっくりと夜の時間が流れていた。

カラーンっ

扉が開く音でそちらを見ると、女性が立っていた。彼女は店の中を見回し、エレンの顔を見ると、軽く手を振った。

「あっ」

すぐに女性のことを思い出し、エレンもその仕草を真似て、手を振り返す。

「こんばんは、エレンちゃん」

「こんばんは」

少し照れながらエレンは挨拶を返す。作業着から女性らしい服装に身を包んだ彼女の様子にエレンは少し見とれてしまう。

彼女はお酒を頼むとペア席の片割れに座る。これはエレンに座れるということなのだろう。ちょうど休憩の時間だ。マスターに許可を取ることもなく、エレンはステージを降りる。

「素敵なおドレスね」

「うん。お気に入りなんだ」

褒められたドレスを披露するようにエレンは一周回ってみせた。それから彼女の正面の椅子へと腰を下ろす。

「さてと、お酒飲もうかしら——」

女性はメニューを見て、カウンターに注文をする。すぐに二つのグラスが机の上に運ばれてきた。

「エレンちゃんも飲んでみて」

彼女は何の躊躇いもなく、エレンへお酒を進める。街や国でまちだが、子供は飲酒をしてはいけないという決まりがある。それを彼女が知らない訳はないのだが——まあ、それがエレンに当てはまるのかは疑問であるが。

「えっと、私、お酒の味、苦手で……」

「これは結構飲みやすいわよ。ジュースみたいなものよ」

「そう……なんだ」

エレンは口にお酒を含む。アルコール特有の風味と甘酸っぱい味が口の中に広がる。荒野の集落で飲んだ強酒とは比べ物にならないほどおいしい。

「あっ、おいしいかも……」

その言葉を聞き、彼女は上機嫌で笑顔を見せてくれた。ここでエレンに会話のチャンスが来る。

「あの、あなたのお名前は？」

重要な質問をする。昼間から一緒にいたというのに、彼女の名前を聞いていなかった。聞くチャンスが無いというよりは、聞けなか

ったのである。エレンが他人に対してこうも消極的になるのは珍しい。その理由が何故なのか、彼女自身すら疑問に感じていた。

「メリアよ。改めてよろしくね」

彼女は握手を求めてくる。それに応じるエレン。彼女の手はエレンより一回り大きく、温かかった。名前を聞いたことで少し緊張が解け、レディ二人だけの時間が始まる。

「メリアさんって、ダルゴンの人？」

「ううん。私は旅をしているの。世界をね」

「へえー。じゃあ、私と同じだ」

他愛の無い話。メリアの、グラスを持ちお酒を飲む仕草はとてもサマになっていて、そのたびにエレンの視線を捉えて離さない。彼女はエレンやダルクには持ちえない大人の魅力というものがあつた。女のエレンでもドキドキするのだ。きつと男の人だったらイチコロだ。エレンはそんなことを思っていた。

「エレンちゃん。そろそろ歌ってくれないか？」

客が総入れ替わりをした所で、マスターはエレンへと耳打ちをする。

「えっと……」

話が盛り上がっているところなので、エレンはバツの悪そうな顔でメリアを見た。

「私は気にしないで。それに私も唄、聞きたいし」

しかし、彼女はそう言ってエレンを送ってくれた。

「うん。じゃあ行ってくる」

エレンは再びステージに上がり、唄を歌う。もう夜も深い。テンポの遅い短調な歌を歌う。

エレンの歌声はいつも通り、店の中の視線を独占する。そこにはメリアの分も含まれている。横目で彼女が聞きいつてくれているのを確認しながら、エレンは歌い続けた。

「本当に良い歌声ね。すごいわ」

「えへへ。歌には自信があるからね」

数曲歌って席に座ると、再び会話が始まる。

メリアはニコル以上に色々な知識を持っており、今まで訪ねた国の様子などをエレンへと教えてくれた。

「メリアさん、一人旅で大変じゃない？ 私はダルクちゃん居るから楽だけど」

「ダルクちゃん？」

「うん。私の親友。なんでもできるんだよ」

「へえ……………」

「今、店の裏に居るから呼んでくるね」

「いいわよ。仕事中でしょ？」

「いいの、いいの」

彼女が遠慮するのを気にせず、カウンターの後ろの扉に押し入って、エレンはすぐにダルクを連れてきた。ダルクはエプロン姿で、その手には洗剤の泡が付いている。どうやら皿洗い中であつたらしい。

「こちらはメリアさん。私たちと同じで旅をしているんだって」

「初めまして」

エレンの紹介にダルクは軽く会釈をする。

「あら、こちらのコも可愛らしいわね」

「そうなんだよ。ダルクちゃんってとっても可愛いんだよねえ」

褒められたのがダルクであるのに、エレンは自分のことのように喜びを露わにする。

「……………私は仕事があるので、失礼します」

「えーっ？ 仕事なんて放っておいて、お話しようよ！」

マスターがすぐ後ろにいるというのに場をわきまえないエレン。「私はエレンとは違って給金をもらっているのです、しっかりと働かないといけません。では」

正論を残してダルクは立ち去った。美女の登場に客の視線はダルクのお尻を追っている。

「あーっ！ 行っちゃった……………ごめんね。ダルクちゃんってい

つも、ああなんだよ」

お客同様にダルクの退場にエレンはため息を漏らした。

「良いわよ。気にしなくて。そろそろ私も帰るし」

「えーっ？」

エレンは残念そうに、立ち上がるメリアを上目使いで見上げる。

「お話ならまた明日にしましょ」

まるで子供に言うことを聞かせるように、メリアはゆっくりと柔らかな口調で言った。

「……………うん。分かった」

その言葉に効果はあり、エレンは残念そうにしながらも、彼女を見送るのであった。

それから深夜近くまで働き、彼女たちの仕事はやっと終わりになるのであった。宿屋に戻った彼女たちは深い眠りにつき、すぐに朝がやってくるのであった。

前夜の密会

次の日も、また次の日も、男たちは働き、エレンもダルクもそれと同じぐらい働いた。彼らの士気に反して、工事は予定に追いつくことができず、かなり遅いペースで進んでいた。予想以上に固い岩盤と晴天続きの暑い気温が彼らの仕事を邪魔する。それでも諦める人など一人も居なく、少しずつではあるがダムは形を造っていった。

ある夜の事。ここはスラムのとあるバー。スラムが賑わい始めたというのに、ここは以前と同じでとても暗くジメジメしている。そんな酒場へと男は足を運ぶのだ。

カランツ――

ベルの音と共に店の扉が開いた。

「いらっしやい」

店の中から聞こえたのはマスターの声ただ一つ。しかし、カウンターには男が座っていた。グラスを片手に静かに物思いにふけっている。

「よお、ダフロお前が誘ってくれるとは思わなかったぜ。マスター、いつもの」

「ふっ、まあな。こんなことをできるのも今のうちかも知れないからな……………ヴィータ」

「そうかもな」

ヴィータと呼ばれる男はカウンターの席へと座る。マスターが注文のお酒をグラスに注ぎ終えたあたりでまた店の扉が開いた。そこ

に立っていたのは中年の女性。

「よお、シスターさんのお出ましか。こりゃあ、明日には世界は終わるのか」

ヴィータは軽口を叩きながらも彼女を自分の隣へと導く。

「やめろヴィータ。縁起でもない。サラには無理して来てもらったんだぞ」

「ええ。子供たちを寝かし付けてから出てくるのは骨が折れるわ」

彼女は笑顔を見せ、席へと座る。

「ご注文は？」

「彼と同じで」

ダフロのことを見て、彼女はそう言った。

「いいのか？ 一介のシスターだろ？」

「ええ、いいの。お酒なんて数年ぶりだけど」

水音、そしてグラスに入った茶褐色のお酒が彼女の前へと置かれる。それを一気に口の中へと呷る。

「ふははは。昔通り、飲みっぷりは健在ってか。マスター俺にも一杯くれ」

ヴィータは上機嫌で次の注文をする。

「昔か……………今思えば、昔は楽しかったな」

「そうね。仕事終わりに良く三人でここに飲みに来てたわよね」

「くくつ、そうだな。その頃はここも綺麗な店構えだったんだけどな」

ヴィータの一言でマスターは眉を顰める。

「怒るなって、こうやって、ずっと常連やってるだろ」

軽口を叩き、マスターをなだめる。効果があったのか、彼はいつもの無表情に戻り、洗いたてのグラスをタオルで拭き始めた。

「あの事件さえ起こらなければ……………」

ダフロのその呟きに隣の兩人は反応を示す。

「けっ、今頃言ったって仕方ねえだろ。それにあれだろ。ほら、あれ。街の前にダムを造って溶岩を塞ぎ止めるんだろ。それが成功す

れば万事オーケーじゃねえか」

「ああ、そうだな……………」

救済策が見つかったというのに彼の顔は暗い。

「ダフロ。はっきり言ったら？ 時間が足りないって」

「ああ、そうだな……………」

「なっ、成功しねえのかよ！ せっかく期待したのに、ぬか喜びさせんじゃねえよ！」

ヴィータは眉を吊り上げ、その怒りを酒へとぶつける。

「やっぱりそうなの……………」

不安が的中してしまったことでサラの表情も暗くなってしまう。

「けっ、ついに神頼みか。サラさんの出番だぜ」

口の悪い彼だが、十代からの仲だ。二人はその皮肉を聞き流す。

「神に祈るわけではないが、私は何故か、この作戦が成功する気がするのだよ」

「はあ？ てめえ、さっきと言ってることが違えぞ！」

矛盾を付き、剣幕を上げるヴィータ。しかしダフロは冷静だ。

「一か月ほど前、この街に来た少女のことを知っているか？ 彼女は誰かかもが、煙たがっていた、この街の病巣に飛び込んで行ったのだ」

「エレンさんのことですね……………彼女に期待しているの？」

「ああ。年半ばいかない少女に頼るとは恥ずかしいのだが……………」

自嘲するようにダフロは鼻で笑った。

「けっ、そのエレンって奴がいくらすぐたって、街を護れるとは思えねえな。危なくなったら俺は降りるぞ」

「ああ、そういう約束でここまで来ただろ。お前には十分世話になったからな」

「ちっ……………お前のスカした所、嫌いだぜ。ああ、分かったよ。最後まで飯でもヤバイブツでも現場に運んでやるぜ。ブラックラビット商会の名に掛けてなっ！」

彼はそう言うと言とジャケットを羽織り、その内側から財布を出す。

「もう行くのか？」

ダフロはヴィータへと尋ねると、「俺も忙しいんだよ」という答えが返ってきた。彼は彼で無理をしてこの集まりに来たのだろう。

「割り勘でいいんだよな、いつもの通り」

「ああ」

「ちっ、こういう時は奢れよ——」

「ルールはルールだからな」

イライラしながらもヴィータはカウンターの上にコインを置く。

「もし、作戦が成功したら、俺にそのエレンってやつを紹介しろ！
今、思い出したが、そいつ隣の酒場で三十人抜きしたらしいかな。
勝負してみてえ」

「ああ、必ず」

「じゃあな。邪魔したな」

扉が閉まり、また沈黙が訪れる。

「相変わらずね。ヴィータも」

「ああ。そうだな」

昔話に花を咲かせたところで夜はさらに更けていく。内心不安を抱えていた二人もこの時だけは何のしがらみにも囚われず酒を楽しんだ。まるでこれが最期の刻であるかのように——

この密会のすぐ後に、ダルゴンは史上空前の危機への本格的なカウントダウンを始めるのであった。

豪炎と終焉

カーン、カーンっ！

その音にエレンは目を覚ます。だが、部屋の中はまだ暗い。咄嗟に何かが起こったのだと感じ取り、ベッドから慌てて飛び起きる。ダルクはすでに身なりを整えにかかっている。彼女もまた何かを感じたらしい。

「大量の魔力が放出されています。おそらく、噴火は間近ですね」「そ、そんな……………」

「私は現場にすぐに向かいます」

「私も——」

「エレンは街の人々を安心させてやってください」
ダルクは厳しい口調でエレンの足を止めさせた。

「う、うん。わかった」

彼女一人いても、街の混乱は収まらないと思う。しかし、エレンが乗ることでケンブスのスピードは落ちる。それでは鉱山に到着する時間が遅れてしまう。ダルクはそのような理由でエレンを置いていくのであった。

言葉の裏に隠れた意味を受け取り、エレンはダルクを見送った。

着替えを済ませ、エレンが外に出ると、空がいつもと違うことに気が付いた。太陽が出ているにも関わらず、外は夜のように暗い。空を仰げば厚い雲のような塊があり、そこから降る黒い雪は街を一層暗く色付けている。

「灰……………」

この灰は言わずとも火山から来ているのだろう。家から外に出た人々はエレンと同じように空を眺め、茫然としている。

「とにかく……………何が起こったのか確かめないと……………」

行く当てもないのでとりあえず広場へと向かう。彼女が着いた時にはすでに男たちが招集されていた。誰しもが不安と緊張に支配され、強張った面持ちでそこに立っていた。

「皆さん。聞いてください。空を見て分かるように、噴火はもう間近です。おそらく三日として時間は残っていないでしょう」

三日、それはダムに水を溜めるまでに最低限かかる時間である。だからだろう。男たちの間に動揺が走ったのは。

「これから堰を切り、ダムに水を張ろうと思います。慌てず指揮に従い、作業をお願いします」

「おい、待てよ！ ダムはまだ七割程度しか完成してないぞ！ そんなもんで街は無事なのかよ！」

男の一人から声上がる。

「……………現時点では推測すらできません。ですがここまで来たのならやるしかありません。後は神に祈りましょう」

「ちっ……………」

男たちは不満の声を上げるも、時間が無いことに押され、足早に仕事場へと出かける。

「ど、どうしよう……………と、とにかく私も何かしないと」

一人残されたエレンは自分にできることを考える。一番先に浮かんだのは、孤児院の子供たちの顔であった。小さい子供たちはこの事態にうろたえているに違いない。目的地が決まったエレンの足はすでにスラムへと向かっていた。

「あっ！ エレン」

孤児院に行くと、ジョシュがすぐに出てきてエレンを迎えてくれた。

「他の子は？」

「ああ、大丈夫。ほら」

室内に閉じこもっているとばかり思っていたが、子供たちは中庭に集まり、空を眺めていた。その顔は何故か笑顔に満ちている。

「あつ、エレン！ 見て見て、雪が降ってきた！」

灰を被り、彼女らはすでに灰色に姿を変えている。だが、その笑顔だけは曇っていない。

「うん。そっか。良かったね」

心配に反して、子供たちはいつも以上に元気であった。そんな様子を見て、エレンは安堵する。

「エレン。あそぼ！」

子供たちは我先にとエレンへと抱きついてくる。

「ごめんね。私やらないといけないことがあるの」

「えーっ」

「ジョシュ。この子たちをお願いね」

「うん。分かった」

「じゃあ」

「エレンも頑張ってね」

「うん」

短く返事をし、エレンは孤児院の門を飛び出した。

市街に戻ると、混乱はピークに達していた。荷物を持ち、避難をしようとする者。どさくさに紛れて窃盗を行う者。

警備兵は出払っているので混乱を抑える者がいないのだろう。逃げまどう人々の声とスピーカーから流れる市長の声により耳が痛い。混沌は混沌を呼んでいる。どうにかしなければ……………

「そ、そうだ！ 市街放送を使えば……………」

エレンはある方法を思いつき、市長がいるはずの中央広場へと駆けだした。

広場では混乱を抑えようと必死に市長が声を張り上げているが、それは逆にパニックを広める要因となっているようだ。

「市長さん！ マイク貸して！」

「エレンさん！ 何を——！」

市長の傍まで行き、マイクを奪い取る。その強引な手法により市

長は慌ててマイクを取り返そうとする。

「いいの。みんな静かにしてね——すう……………」

また、爆音を発するのかもしれない、市長は耳を塞ぐ。しかし、そんな声はいつまで経っても聞こえてこない。手を外して見ると、美しい音色が聞こえてきた。音源を辿る——

ふと横を見ると灰で真っ黒になった少女が唄を歌っているのだ。

エレンの声は電波に乗り、街全体へと広まる。その唄は人々の足を自然と止めてしまう。商品の奪い合いをしていた人も、我先にと逃げ出した人も、親とはぐれて泣いている子供すらスピーカーから流れる曲に黙って耳を傾けるのだ。

彼女が唄を止めた時、街全体は完全に寡黙していた。それはまるで無音のアンコール。人々はもっと唄を聞きたいと思ったのだろうか。いつまで経っても沈黙を守り続けている。

「はい。市長さんからのお願いです」

「は、はい……」

マイクを渡され呆気にとられた彼だが、すぐに使命を思い出した。咳払いをし、演説を開始した。人々はそこでやっと状況を把握し、それに伴い混乱は徐々に収束に向かうのであった。

ダルクが帰ってきたのは昼前のことだ。彼女は街の科学者、魔導師と共に会議室に呼ばれた。そこにエレンが居たのはダルクの指名があったかららしい。

「市長。私めから状況を説明しておきます。予想通り、火山は三日程度で噴火すると思われます」

「そうか……………噴火自体を止める方法はやはり無いのか？」

「ええ、残念ながら……………」

「それで、ダムで溶岩を止められるのか？」

「すべてを止めるのは無理でしょう。しかし、ダムにより街とは違う方向へと流れを変える可能性はあります」

「そうか。ご苦労だった」

彼は学者からの報告を聞き終えると、コホンと咳払いをし、正面を向いた。

「私は最後まで街を助けるつもりでいる。自分の命が惜しいと思う者は家族と一緒に逃げてくれ。しかし、最期まで戦う勇気があるものが居れば、この場に残ってほしい」

重役たちは顔を見合わせ、腹の中を探る。しかし、誰も席を立つ者はいない。全員が覚悟を決めたことで市長は強く発言をする。

「ダルゴン市長として友として、君たちを誇りに思う。一人でも多くの市民を助けるために尽力しようではないか」

彼の言葉に重役は声を上げ、それぞれの持ち場へと会議室を離れていった。

混乱は収束したが、それでも市街はざわめきに包まれている。居住局には大勢の人が群がり、パスの申請を求めたり、財力にものを言わせ、食料を買い込む輩も居た。兵士はならず者を捕えるために走り回る。そんな様子を見て、エレンは何もできない自分を嫌悪するのであった。

「エレン。そんなに気を張らないでください」

常時難しい顔をしているエレンを気遣ってか、ダルクは優しい言葉をかけてくれた。

「うん。大丈夫だよ。きつと……………」

エレンは頷く。彼女の言葉で少し心が落ち着いたみたいだ。その気持ちを保ったまま混乱する街を通り抜け、彼女はスラムの教会へと来ていた。

「こんな時ばかり神様をお願いするのは、ズルいかな？」

苦笑するエレンに対しダルクは首を横に振る。教会の扉を開けると、中から讚美歌が聞こえてきた。驚いたことに教会には大勢の人が詰め込まれている。服装から推測するに彼らはスラムの住人だろう。しかし、中にはしっかりと身なりの人までいる。

「さあ、この街の運命と輝かしい明日を神へと祈りましょう」

シスターの声で人々は目を瞑り、手を合わせる。老若男女、地位問わず彼らは祈っているのだ。この街の無事を。エレンはそれに便乗し、隅の方で手を合わせる。

（これだけの人が無事を祈っているんだ………私が救ってみせる）

自分の意志を確認し、エレンはひっそりと教会を出た。

教会の前、灰色の雪が降る中、エレンはダルクへと話しかけた。

「ダルクちゃん」

「なんででしょうか？」

「もしものがあつたら、私は？行く"から。止めないでね」

エレンは普段とは違う声色でそう言った。言葉からは何の揺らぎもない強い意志が伝わってくる。

「もし承諾できないと言ったら？」

「それでも行くよ」

「ふう……………」

ダルクは深いため息をつき、少女の顔を見る。そこにはいつもの笑顔の少女の顔は無く、一国を救おうとする戦士の顔があつた。

「分かりました。止めません。ですが、命だけは大切にしてくださいね。あなたにはまだやるべきことがあるのでしょ

うん。ありがと……」

エレンはダルクに対してお礼と笑顔を見せた。先ほどまで厳しい顔をしていただけにその笑顔は眩しかった。

それから三日、昼夜問わずにダルゴン付近の空は厚い雲に覆われていた。大抵の人々はダルゴンから遠く逃げ、残るのは旅費もない貧民と故郷を離れたくない人のみであつた。それでもその数は約二万。約五分の一の住人が街と心中しようという覚悟なのである。労

働者は不眠不休で働き続け、何もできない人も神に祈った。すべては未曾有の事態を乗り越えるために。

その日のお昼。エレンがいつものように広場で昼食を作っていると、足元に広がる微小の揺れに感づいた。周りの女衆はそのことにまったく気付かず、与えられた仕事をテキパキとこなしている。束の間の平穏もここまでらしい。ついに来るのだ。

エレンは握ったおにぎりを口に詰め、身を翻し、牧舎のほうへと駆けていく。

「エレンお姉ちゃん！　つまみ食いはダメだよ！」
ルシュの声にも振り向かず、エレンは走るのだ。

ダルクたちが弾きだした計算では、溶岩が街に到着するまでの時間は約二時間ほどだ。それまでに何とかしなければいけない。広場を抜け、誰もいない石畳の上を走る。

「エレン！」
正門ではすでにダルクはケンブスに跨り、出発をする準備をしていた。走り出しているケンブスに駆け乗り、二人はダムへと向かうのであった。

街を出た所で爆発音が聞こえた。それは噴火の証だった。空は不気味に赤く染まり地獄のような空気が荒野を漂う。変化にも怯まずケンブスは速度を上げていく。

ダムに着くと、そこには大勢の男たち、それと市長やニコルが居た。労働者の男たちは街に残した家族を心配し、現場から離れて行っている。

「市長さん！　溶岩が来るよ！　ダムは？」

「ええ。御覧の通り、水は張り終えました」

彼が言った通り、ダムは大量の水で満たされていた。それはまるで砂漠の片隅に存在するオアシス。不自然に削られた大地が水を蓄える様はなんと幻想的なだろう。その全貌を見て、エレンは感動

した。これが自分たちで造り上げたものののだと。

だが、感動ばかりしてもいられない。エレンはすぐに声を上げる。
「市長さん。今すぐ街に戻って！ 混乱する市民たちを助けてあげて！」

「ですが、エレンさん……………私はこの場で——」

「もうっ！ ここに居たって何も出来ることはないでしょ？ 街の人はまだまだあなたの助けが必要なの！ 分かる？」

すごい剣幕で寄ってくるエレンに彼はたじろぐ。

「父さん。行きなよ！ ここは僕たちに任せて！」

「ああ……………そうだな」

市長は取り巻きを連れて馬車へと駆けこんだ。彼がいることによりいざという時の避難指示はできるだろう。

「エレンさん……………あれ……………」

「えっ？」

ニコルの言葉にエレンは彼の指さした方を見る。遠くの空は豪炎で赤く染まっており、あの下には轟々と燃える溶岩が流れているであろう。その赤は徐々にこちらに近づきつつある。その迫力に、周りにいた男たちに動揺が走った。

「なんだよ……………あれ……………あの量を防げるはずがねえ……………」

その男の言う理由もわかる。ここからでもどれほど量が流れてくるのかが見えるのだから。動揺は恐怖を生み、兵士たちも逃げ腰になっている。

「ちょっと、みんな落ち着いてよ！」

エレンは声を上げるが、動揺は一向に収まらない。

「あれ？」

その時だった。頬に何かが当たったのだ。冷たい——まさか。

「みんな、空を見て！」

「エレンさん？ なんですか……………あっ、雨——」

「そうだよ。雨が降ってるんだよ！」

なんとという幸運だ。ダムを作り始めてから一ヶ月。まとまった雨

は全くもって降っていないというのに。

「恵みの雨とはこの事ですね。このタイミングで降ってくれるとは」
ダルクはそう呟く。

「みんなの祈りが届いたんだね！」

「ええ。そうかもしれないね………」

ニコルは茫然として奇跡にも似た現象の中、空を仰ぐ。

「私たちも諦めちゃダメだよ！」

エレンの言葉に兵たちは我を取り戻した。そうだ。前線の自分たちが慌ててどうするのだ！ 使命を思い出し、配列を組み直し、最終局面に備えるのだ。

「全員、ここから退避するぞ！ 離れた所から成り行きを見守る！」

街と鉾山の間は何人も入れるな！」

「おーっ！」

兵士長は部下に指示を与え、兵士たちの士気は一気に上がる。

「エレン。私たちも行きましょう」

「うん」

屈強な男たちの後に続き、エレンたちも現場を離れるのだ。

街と溶岩、その間にダムがある。そこから少し離れた高台にエレンたちは避難した。ここからならば街とダムの様子がよくわかる。そこで雨に濡れながら待つこと一時間ほど。

「来たぞーっ！」

兵士から声が上がる。その声通り、溶岩は姿を現した。先ほどの紅の輝きはなく、茶色く濁ったドロドロが街を目指し、行進を続けていた。

ダムまでの距離はもう殆ど無い。ダムを超えてしまえば、街まで障害物はない。文字通りここが最後の砦なのだ。

男たちは憎い者を見る目で溶岩を睨む。そうだ。この事態を恐れ

魔物に媚を売り、都市を守ってきた。この流れを止めることが出来さえすれば、もう犠牲者を出すことも己が汚れることもないのだ。希望を胸に視覚の全神経を集中させた。

ついに溶岩の先端がダムへと着水する。その瞬間、ダムからは大量の水蒸気が噴き出す。その煙がカーテンとなって結果を覆い隠した。

「見えないよ！ どうなったの？ 成功した？」

「……………どうでしょう」

溶岩はダムへと落ち、その動きを鈍くする。だが、次から次へと煮え切ったマグマがその上を越えていく。

「な、なんてことだ……………」

兵士たちは膝を付く。溶岩は超えてしまったのだ――最後の砦を。溶岩は勢いこそ衰えたものの、その流れは一つの街を飲み込むには十分であろう。

「ま、街が……………俺たちの街が……………」

兵士たちは絶望の淵に立たされた。諦めて嘆く人が続出する中、その少女だけは前を見据えていた。

「ダルクちゃん。やっぱり私の出番みたい」

「ええ。そうらしいですね」

「うん。ケンブスを借りるね」

エレンは漆黒の馬へと乗る。

「エレンさん！ どこに行くんですか？ 今動いたら危険です！」

いち早く気づいたニコルは当然エレンを止めに入る。しかし、彼女は笑顔だけを残し、その場を走り去ってしまった。

「くそっ！」

ニコルはそのままエレンを追うつもりで馬車を走らせようとする。しかし、その前にはダルクが立ちはだかるのだ。

「ダルクさん？」

「退きません。今はエレンを信じてやってください」

「し、しかし、ダルク殿。エレン殿は何をしようとしているのです

か？」

兵士長もダルクの元へと駆け寄り、疑問を投げかける。

「決まっています。エレンは溶岩を食い止めに行ったのです」

「そんな無茶な……………」

「とにかく、ここは危険になります。もう少し離れた所に避難を」
拒もうと思う者は多々居た。しかし、誰にも文句を言わせないようにダルクはその鋭い眼光を向ける。

「わ、分かった……………ここはエレン殿に任せてみよう。全軍、私に続け！」

「エレンさん……………」

ニコルはもう遠くへと行ってしまい、見えなくなった少女を見つめるのであった。

火山岩と風の唄

「よし……この辺でいいか。ケンブス、先に――」

声をかける前に馬は目の前から立ち去って行った。その俊足をフル活用しているのが恨めしい。

「あっ……もう、居ないのね……と、とにかく、やるぞっ！」

最期までも主人を嫌う馬に呆れて肩を落としたが、気合を入れ直し、目線を先へと向ける。

目の前まで溶岩が迫ってきている。その熱気と迫力は本物だ。このまま街へと突っ込めば、街は無くなってしまいうだろう。

エレンは目を瞑り、雨で湿った空気を肺へと吸い込む。息さえも止めた彼女には周りのすべての音が聞こえてきた。天から降ってくる雨音。迫りくるマグマに身を削られ嘆く大地。風と共に聞こえてくる人々の声。そして、祈り――

「聞こえるよ。うん……大丈夫。私が止めてあげるから」

目を見開いた瞬間、エレンの手には漆黒の大剣が握られていた。

魔剣、それは本来、人間を不幸の渦中に追いやる物。しかし、エレンはそれを人の為に使おうとしている。魔の神が居れば、この瞬間にもエレンの身体は砕かれてしまいうだろう。

だが、恐れも無く、エレンは剣を振り上げる。

その行動と共振したように空は震え、雨は一層激しさを増した。いや、それはもう雨とはいえないだろう。一本の水柱がエレンの振り上げた剣に向かって伸びているのだ。そこには自然の力すら凌駕する魔王の姿が垣間見えた。

その姿に怯みもせず、黒い火の河はエレンへと迫っている。それはまるで大蛇のようだ。

「ヨルムンガンドか………決着を着けてつけてあげる」

エレンは振り上げた剣を一気に振り下ろす。それと同時に間合いに入った蛇もエレン目掛けて牙を立てる――

爆音と衝撃が響き渡り、空気を揺らした。兵士たちは両手で地面へとへばり付き、衝撃を殺す。

そんな中、ダルクは一人地面に立ち事の終焉を見守っていた。普通の人間より視力の良い彼女でも舞い散った土煙と水蒸気により、何も見えないのだ。雨は既に止んでいる。恐らくはエレンの一撃によりその水分をすべて使い果たされたからだろう。

「みんな。無事か！」

兵士長はすぐに点呼を取り傷ついた仲間が居ないかを確認した。どうやら全員が無事らしい。

「ごほっ……ごほっ……ダルクさん……何があったのですか？ エレンさんは？」

ニコルは土煙に咽ながらもダルクへと質問してくる。

「分かりません。姿は見えないようですが――」

「えっ……」

ニコルは慌てて先の荒野を見る。しかし、そこにはエレンの姿はおろか、流れる溶岩の姿すら見えない。

「兵士長！ 確認を！」

「ああ、急げ！ 動ける者は私に続け！」

兵士たちは馬に跨り、未だ噴煙の舞う先の荒野へと急行する。

「ダルクさん！ 僕たちも行きましょう！」

「はい」

ニコルの後ろにダルクは乗る。彼女たちを乗せた馬も走り出し、馬の列へと加わった。

馬を走らせて間もなく、ダルクたちは溶岩の河へと来ていた。

「溶岩が………止まっている……」

誰かが呟いた。その通り、溶岩は完全にその動きを止めていた。マグマは完全な黒に色を変えている。表面からはまだ大量の湯気が出ており、どれだけの熱エネルギーを持っていたかを物語っていた。

「やった……俺たちは助かったんだ……」

誰かの呟きだろう。だが、きっかけとしては十分であった。途端に、そこに居た男たちから勝利の雄たけびが聞こえた。

狂喜乱舞する男たちを差し置いて、ニコルはエレンの姿を探した。

「エレンさーんっ！」

声を上げるが、その声は男の歓声にかき消され、どこまでも届かない。どこを見ても、あの笑顔が素敵な少女の姿はない。

兵たちも喜びに一段落すると、この事態を収拾してくれた少女の姿を探すのであった。

「まさか、エレン殿は、溶岩に巻き込まれて——」

「そんなことはありません！　お願いです、探してください！」

「ああ、分かっている！」

兵士は数千メートルにも渡る、黒い大地を隈なく探す。しかし、彼女の姿は一向に見当たらなかった。

諦めムードが漂い始めたその時、ダルクの耳にその音は届いた。

「静かに！」

ダルクは珍しく、声を張り上げ、周りの人間を制する。

全員が馬の足を止め、口を閉ざすと、風の音だけが荒野に響いてくる——いや、風だけではない。微かに聞こえるのだ。声、いや、唄が………

それは風のような優しい歌だった。皆の視線は先の荒野へと注がれる。そして見つけたのだ。黒いステージの上に乗った少女の姿を。

ドレスは所々裂け、靴はどこかに無くしてしまったらしい。けれども、その身体一つで彼女は立っていた。口元からは透き通るようなメロディラインが響いている。

「あつ、みんな」

エレンは黒い塊の上から飛び降りると、荒野へと着地する。その足取りはいつも通り軽い。どうやら怪我などは無いようだ。

「エレンさんっ！」

耐えきれなくなったのか、ニコルはエレンへと飛び付く。

「うわっ？　なに、ニコル？」

「良かった、無事で………本当に良かった……」

彼の眼には涙が浮かんでいた。それは安堵と喜びが生み出したものであった。

「もう、ニコルったら、男の子なのに………それにみんなに見られちゃってるし」

「えっ？」

冷静になってニコルは周りを見渡す。男たちは祝福ムードでエレンたちを見守っているのだ。おまけに拍手すら巻き起こる。

「うわああっ！　僕ったら、つい……ごめんなさい」

恥ずかしくなりニコルは慌ててエレンから離れた。その顔はマグマより真っ赤だ。

「あはは。謝らなくていいのに」

エレンは笑う。

「怪我は無いようですね」

「うん。もちろん、大丈夫」

近づいてきたダルクに健在をアピールし、エレンはその場で回ってみせる。その動きに男たちの肩の力はようやく抜けるのであった。

「よし、鉱山の様子を確認するぞ。小隊、私に続け！　残りの者は通常通り、街の警備に戻るのだ」

兵士長はそう叫び、鉱山へと向かって行った。彼の言葉に促され、兵士は一人、また一人とその場を後にする。

「さてと、私たちも帰ろう。お腹すいちゃった」

「ええ。そうですね。広場にはおにぎりの山があるはずですから」

「えーっ？　もうさすがに飽きちゃったよ……」

いつも通りの二人のやり取りにニコルは笑うのであった。

エピローグ ― 荒野に捧ぐ前奏曲 ―

噴火から早三日が過ぎようとしていた。街の広場は熱気に満ち溢れていた。待ちに待った英雄のお披露目ということで市民たちもお祭りムード一色だ。

特設ステージ前には楽団が配置され、楽しい音楽を奏でている。市長席にはいつも通りダフロの姿がある。本当はこの席は空席の予定だった。

ダフロは事の責任を取り、三日前に辞表を提出した。しかし、議会はその事態の収集能力を見込んで、続投を要請したのだ。辞表が受け付けられない。これはダルゴン史上初めての事であった。議会もこの事件の解決に尽力し、市民の人気者となったダフロを手放したくないと考えたのであろう。ともかく、彼はまた市長の席に座っているのだ。

「皆さん。今日は大変、素晴らしい日です」

彼の演説は始まる。内容は都市の人間ならば知っている様な当然の話だ。そんな変哲の無い話しても、聴衆は真剣な眼差しを向けて聴くのだ。

「こうして私がここで再び話す機会を与えられたのは、ある少女の活躍があったからです。そう皆さんも知っている、歌姫エレンです」
歓声上がる。彼女が公の場に姿を現すのは初めてのことなのだから。

街を救ってくれた少女がどんな容姿なのかを心待ちにし、市民はステージの上のカーテンを見つめた。

「それではエレンさんからひと言、頂こうと思います。どうぞ！」
カーテンは遂にオープンする。しかし、その席には誰も居ない。
「えっ？ エレンさん？」

先ほどまでいた少女は姿形も見えない。

「おいっ！ エレンさんはどこだ！」

「そ、それが先ほどトイレに行くと言ったまま……………」
会場からはざわつく声が聞こえ始める。

「えー。皆さん。落ち着いてください。エレンさんは都合により、少し遅れるそうです」

市長は慌てて彼女を探す指示をし、自分はステージの上で混乱を防ごうと演説を引き延ばしていた。

その頃、エレンはスラムの孤児院で立ち往生していた。少しだけと思っ、来てみたのだが、これが大失敗。もう演説の始まりの予定時間は過ぎている。

「エレン……………本当に行っちゃうの？」

「うん。ごめんね」

「そっか……………」

久しぶりに遊びに来てくれた友が言った言葉は別れ。それを受け入れたくないがために子供たちは泣いて引き留めようとする。しかし、エレンの心は既に決まっていた。

一人ひとりの頭を撫で、笑顔でさよならを言う。次第に子供たちも現実を受け入れ、エレンを笑顔で送ろうとしてくれた。

事件を乗り越えたことでスラムも今後生まれ変わる。エレンはそう確信していた。この子供たちも、いずれは大人になり、ダルゴンの原動力になるのだ。全員の幸せを願い、エレンは子供たちと握手をする。

「エレン……………今まで言えなかったけど、本当にありがとうな……………」

ルシュとジョシュは強がりの笑顔を見せ、エレンにそう言った。

「どういたしまして。二人とも、しっかりとね」

「お姉ちゃんも元気だね！」

子供たちに見送られ、エレンは孤児院の門を出る。決して振り向

かない背中を子供たちは脳裏に刻む。そして思う。彼女のように明るく強く生きていこうと。

「あーっ！ 見つけた！」

「およ？」

スラムを歩いていると馬車からスーツを着た男が降りてきてエレンの手首を捕まえる。

「エレンさん！ 探しましたよ！ あなたが居なくちゃ今日の式は題無しです。お願いですから黙ってついて来てください！」

強引に馬車に連れ込まれ、エレンは広場へと到着する。

「ごほん……ただ今、エレンさんが到着したようなので、もう一度、紹介をします。彼女が街を救った英雄。歌姫エレンです」

カーテンが開き、今度はちゃんと少女が居たことで市長や重役は安堵する。そして住民は待ち焦がれたように歓声を上げる。

「では、エレンさん。ひと言、お願いします」

「えっ？ ひと言？ うーん………」

質問事項は以前に渡してあるというのに、彼女は考えて無かったらしい。マイクを持った反対の手を顎の下に当て、悩みこんでしまう。

「……………今のお気持ちは？」

「気持ち？ お腹すいた……かな」

ドツと民衆からは笑い声が飛び交う。その反応に押し殺されないように市長は次の質問をする。

「私たちはエレンさんの希望の物を用意しようと考えたのですが、どのような事をお望みでしょうか？ 出来る限り叶えたいと思っています
おります」

「あっ、この質問か。これなら考えてきたよ。えっとね……………」

どんなドでかい望みが来るのかと、民衆は息を飲む。市長は食べ物関係の望みが来ると踏んでいた。しかし、彼女の願いはそういう

なものではなかった。

「この街は今から、私の支配下に置きます！」

「……………はっ？」

市長は情けない声を上げ、ステージ中央にいる少女を見た。

「これはこれは……面白い冗談だ」

シラけた民衆を盛り上げようと、市長は必至のフォローを入れる。

「もうっ！ 冗談なんかじゃないよ！ この国は私、魔王エレンの所有物です」

「はあ？」

またまた市長からは困惑の疑問詞が出る。

「え、エレンさん、その、魔王というのは……？」

「だから、私が魔王だってば。証拠を見せるとね」

エレンは掌を空中へとかざす。そしてあっという間に魔剣を出してみる。それを見た聴衆はギョツとした目で、ステージ上の少女を眺めるのだ。

エレンは剣をステージ上に突き刺し、こう言った。

「私が支配者になったんだから他の魔族に媚びないこと。スラム住民の生活環境を改善することに尽力すること——これを守らなかつたら……………滅ぼしちゃうから」

最後のフレーズに市民たちは目を見開いて驚く。

「以上です。みんな、お元気だね」

エレンは何を思ったのか、ステージの端を目掛けて疾走する。そして一気に跳躍をする。その大ジャンプにより、民衆を飛び越え、彼女は広場の入口へと着地した。

「エレンさんっ！」

ステージ上からは市長の声が掛かる。しかし、彼女は振り向かず、そのまま街路を疾走する。あっという間に街の門が見えてきた。エレンはそのまま止まらずに門をくぐり、荒野へと足を踏み出す。

「お待たせ。ダルクちゃん」

「ええ」

言いつけどおり、ダルクは馬車を東門の外へと移動していた。後ろからの追手の姿もない。計画通りできそうだ。エレンはそう思った。

「じゃあ、行こう——」

「エレンさんっ!」

彼女が馬車の荷台へと足を踏み入れた所で、後ろから声が掛かる。
「あちゃ………見つかったみたい……」

荷台の窓から外を見ると、そこにはニコルとメリアの姿があった。
「良くわかったね。ここに来るって」

「メリアさんが教えてくれました」

「そっか」

ニコルの表情は曇りきっている。こんなに空は明るいというのに。
「急に出ていくなんて卑怯ですよ………」

「ごめんね。私、湿っぽいの嫌いだからさ」

エレンは笑う。その笑顔にはどこか力が無い。

「何でも言わずに行っちゃうんですか? あなたが魔王だからですか?」

ニコルが魔王という言葉を使うということはここまで市街放送が聞こえたのだろう。

「まー。そういう所かな……同じ場所には長く居られないんだよ」

魔王であることを隠していても、いずれはバレる。魔王を住ませている都を国のお偉いさんは許してはくれないだろう。これから発展する街に魔王は不要なのだ。

「僕はエレンさんが魔王でも関係ありません………僕は——」

「ニコル。それはダメ。気持ちは嬉しいけど、私と一緒に居ても幸せになれないよ。それにニコルはダルゴンに必要なんだから。ね?」

俯いた頭を伸ばした手が撫でる。その体温は人間と変わらず温かく、優しい。

「また逢えますか?」

「うん。会えるよ」

「そうですか……………そうですね」

ニコルは目を手の甲で擦り、少女のことを見上げた。強がりの笑顔だが、その笑顔を見て、エレンも笑い返してくれる。

「エレンちゃん」

ニコルが変わって、メリアが前へと出る。

「まさかとは思ってたけど、魔王なんて驚きだわ」

「えへへ……まあ、大したことはないんだけどね」

「いずれ、また会いましょう」

「――？」

彼女の快い笑顔と断定的な言葉にエレンは首を傾げる。

「ほら、行かなくていいの？ 追っかけさんたちが来たけど」

メリアの言うように、街からは兵士たちがこちらへと向かってくる。魔王としてエレンを捕まえに来ているわけではなさそうだが、ここで捕まれば、次にいつ街を出られるか分からなくなる。

「あちゃ、こりやすごい人気だわ……」

「ふふ。大変ね」

「えっと、メリアさんもニコルもありがとね。私、行くよ！ ダルクちゃんっ！」

「御意」

ケンプスは急加速を始める。この笑顔もあと数秒で見えなくなってしまうだろう。だから、精一杯の声でニコルは叫んだ。

「ありがと――」

その言葉が彼女に届いたかは分からない。それを確かめる手段もない。しかし、彼は心の中で確信していた。届いていると――

エレンは荒野の凹凸により激しく揺れる荷台の上に乗り、既に小さくなったダルゴンを見つめていた。

「あーあ。またしばらくは野宿暮らししかあ……もう少し、寝溜めしとけばよかったかなあ……………」

「ならば、もう少し滞在しても良かったのでは？」

「ううん。ダメだよ、それは。そうなたら私はダルゴンをもっと好きになっちゃうから」

「そうですか」

ダルクは魔王という運命を背負った少女に少し同情する。この力がなければ彼女も日常という幸せな日々を送れたのだから。

「何、辛気臭い顔してるの？　もしかして、ダルクちゃんも、もつと居たかった？」

「ええ。実を言えば。食事は携帯食の処理で消えたので。もう少し特産物を食べておけば良かったです」

「大丈夫！　そんなダルクちゃんの為に、じゃーんっ！」

エレンは袋の中から大量のお土産を登場させる。いつの間にやら、荷台へと運んでいたらしい。

呆れ、ため息を付くが、風にかき消され、不満は彼女へとは届かないらしい。エレンは上機嫌で荒野の先を見つめている。

「そうだ。歌を唄おう。タイトルは荒野で」

「ええ。良いと思いますよ」

馬車は美しい歌を振りまきながら、荒れた野を走る。

目的地など無い。だが縛られることもない。自由に大空を飛ぶ鳥のように彼女たちは目指すのであった。新たな旅路を――――

エピローグ ―荒野に捧ぐ前奏曲―（後書き）

――とりあえず書いてみての感想――

というわけで、一気に最期までアップしてみました。

前作同様、いや前作以上に粗い作品になってしまったって読者の方には大変読み辛い文章を作ってしまったなあ………と深く反省しています。

そんな稚拙な物語でも読み手がついてくれて、書いた身としてはとても嬉しかったです。

毎日ニヤニヤしながらアクセス数とか、確認してみたりとか………気持ち悪いですね（笑）

ともかく皆さんのおかげで全編を書き終えることができたのでこの場を持って感謝を述べさせてもらいます。

ありがとうございます。

以上、簡単な感想でした。

2011年 4月12日 千ノ葉

プロローグ ―HERO or Coward― (前書き)

「魔王の歌姫」のスピンオフ作品を書いてみました。
興味がある方はどうぞお読みください。

プロローグ ―HERO or Coward―

とある田舎町の酒場。そこでは仕事帰りの男たちが酒を飲み、日々の疲れを労っていた。

その賑やかな店の扉を開ける一人の男が居た。

扉が開いた途端、店の中は静かになる。

訪問者を迎えるのは男たちの蔭口であった。

入店した青年は脇目も振らずにカウンターの一番端の席へと座り、注文を頼もうとする。だが……

「おいっ！ 弱虫勇者が酒飲みかあ？ お前、いつからそんな身分になった？ ああ？」

酒に酔った男はその勢いに任せて青年へと侮蔑の言葉を投げ掛ける。しかし、青年は眉ひとつ動かさず、「マスター。ミルクを一つ頼む」そう注文した。

「がはははっ！ ミルクだとよお！ 酒も飲めねえ下戸のダメ勇者ってか？」

男の言葉に酒場内はドツと沸く。一方、青年は静かにカウンター奥のボードに貼ってある紙に視線を移していた。

「マスター。今日は仕事が入っているか？」

「いや。今日もないな」

「そうか」

青年は一言言うと、ミルクを飲みほし、カウンターへと一枚のコ

インを置く。

「邪魔したな」

後ろから聞こえてくる、自分への侮蔑を背で受けながら青年はバ
ーを後にした。

夕食時の街は賑わいを見せている。外食を楽しむ家族連れや、仕
事帰りの労働者。

夕暮れはそのすべての人を同じ色に染めている。そんな中でも青年
の存在感は圧倒的であった。

彼の髪の色は目の覚めるような蒼色。この地方では珍しい色だ。

夕陽にも染まらない色は、人々の視線を自然と集める。

そして、腰に携えた剣。旅人ならば剣を携えているのは珍しくも無
い。

しかし、青年の剣を納める金色の鞘には銀の獅子の刻印が彫られて
いる。

それは聖剣——つまり勇者の証である武器であった。

勇者とは人々を災厄から救う人を超越した存在。神の代行者とも
呼ばれ、人々に希望をもたらす存在。

しかし、彼の場合は違う。勇者ながら人々に蔑まれている。

その理由は三ヶ月前、彼がこの国の王都を訪れた時のことであった。

王都、それは国の中心となる都。普通、王の住処となる城や宮殿
が構えてあり、貿易の拠点となる大都市だ。

それはこの王都スターシュも例外ではなかった。

大都市にそびえる巨大な王城。賑わう街並み。繁栄を極めた都市に

だけ許されたその姿は実に雄大である。

しかし、郊外に出て少し目を横に向ければ………スラムに貧困した民が目に入るのだ。

そして、野外に広がる広大な墓場——死者が一つの街を創っているような印象を受ける。

十字架の下に眠る者達の供給源は中央広場に置かれた絞首台であった。

疫病の発生。愚かな王はそれを魔女の所業とし、国民、さらには旅人をも魔女裁判にかけたのだ。

だが、そんなのは口実であり、王の本当の目的は都市に蔓延った貧民の排除であった。

王にとってみれば税も払えない人間は人間でないのだろう。

毎日のように広場には肉塊の山が積み上がっていた。

そんな都市を見た勇者は思う。この国は病んでいると———

「勇者、ヴァロードよ。面を上げるがいい。この国の窮地に良くぞ来た」

勇者は跪いて、王座に座る男の顔を見上げる。そこに居たのは醜悪な容姿の太った男であった。

これがこの国の王。そして病巣の中核だと思えば、笑みを込み上げそうになった。

「お主をここに呼んだのは他でもない。この都市の近郊に住んだ魔王を退治してほしいのだ」

「魔王？ この国が魔王の襲撃を受けているとは思えないのだが」

「無礼者！ 王への口のきき方をわきまえんか！」

側近は勇者へ対し、侮蔑の目を向ける。

「……………勇者よ。この国の現状を見たか？ 疫病が流行り、人々の心は疲弊しておる。

そんな国に魔王が攻め込んで来ないはずがなからう。その前に魔王を滅ぼしてほしいのだ」

「魔王を倒し、疫病の不満でも抑えるつもりか？ 都市の衛生管理を怠ったのが原因だと俺は思うのだが」

「無礼者めが……………王の前でもう一度そのようなことを申ししてみよ！ 首を刎ねるぞ！」

側近は顔を紅くして怒りをあらわにする。しかし、勇者は表情一つ変えない。

「ヴァロードよ。良く聞くがいい。私はこの国の王だ。お前の知りも得ぬような富も栄誉も持っている。

お主が言う事を聞いてくれれば、どんな宝でもやろう。だから頼まれてくれぬか？」

さすが搾取に搾取を重ね、栄華を創り上げた王である。言う事が違う。

ヴァロードは再度込み上がって来た笑みを押し殺した。

「……………宝か。くだらない————だが、魔王には興味がある。俺は俺の意思で仕事をするだけだ」

そう言い残し、勇者は王の間を後にした。

後ろからは大臣の悲鳴のような叫び声が聞こえたから足は一層、前

へと進んだ。

魔王の住む森に行く前の準備をするために勇者は商店街へと足を運んでいた。

準備と言っても買い込むのは食料と必要最低限の常備薬のみ。まるでピクニックに行くような軽装だ。

しかし装備を怠っているわけではない。彼の経験上、森に入る上で重装備など荷物になると分かりきっているのだ。

水が足りなくなれば沢を探せばいい。食料が無くなれば果物でも探せばいい――

言うのは簡単だが知識が無ければ出来ない方法である。

だが、彼にとってはそんなこと朝飯前。勇者である前に彼は知識人なのだから。

物を買ひ込み、その日は安宿に泊まり夜を過ごす。

王の推薦状を持っているのでいくらでも豪華な宿には泊まれた。

だが、ヴァロードはそれをしなかった。

飯など最低限食べていれば事足りるし、宿など寝床が固くても十分に眠れるのだから。

それ以上に民から捲き上げた税で宿に泊まる気など彼には毛頭も無かったのだから。

すぐに朝が来た。ヴァロードは宿を引き払うとその足で森へと向かうのだった。

馬を借りなかったので少々遠い距離だが、目を覚ますのには十分な距離だ。

森は深い。入り口からでもそれが分かる。人間を拒むように太い

木々が入り口を守っている。辛うじて付いている道は獣が付けたものだろう。

だが、ヴァロードは少しも躊躇せずに森の中へと足を踏み入れた。

おかし 不可思議だ——これは彼が感じた最初の感想である。

魔王の森と聞いて想像したものは魔獣の徘徊するような魔の森。しかし、ここは穏やか過ぎる。魔獣は愚か獣すら姿を見せない。

まるで訪問者を受け入れるように森は開けていた。

森の中には所々、木々が開けた空白の広場があり、そこには彩色豪華な花々が群生している。

このような美しい花を見るのはヴァロードにとっても初めての経験であった。

(まるで本当に遠足に来てしまったようだな……………)

彼は苦笑する。それと同時に考えるのだ。ここに住むと言われる魔王の事を。

森の中を二日ほど歩いた。

魔物の襲撃もなく、荒野を旅するよりも楽な旅路を歩んでいた勇者の目に巨大な古城が飛び込んできた。

その大きさはスターシュ城の比ではない。まるで一つの山がそびえ立っているようだ。

(ここに魔王が……………)

ヴァロードは警戒心を高め、その城の門へと足を進めた。

門前に誰かが居る。その気配により彼は腰に携えた剣へと指を掛ける。

この気配はよく知っている――魔王という存在のものだ。
胸が高鳴る。だが、不安や恐怖は無い。ヴァロードは一気に木陰を抜け、門の前へと姿を見せる。

「勇者……………か」

そこには思った通り、男が立っていた。長身に長い銀色の髪、そして凍りつくような蒼の瞳。
黒衣に包まれた身体には万人を超越した筋肉が隠されているのだろう。

「お前が魔王か」

「いかにも」

魔王は否定をすることなく、ヴァロードの顔を見る。構えも無いはずなのに隙が微塵も無い。
幾度となく魔族と戦ってきたヴァロードでさえ、戦う前から彼の實力を認めざるを得なかった。

「随分若いな。我を倒して名声でも得ようというのか？」

挑発気味に魔王はそう言った。しかし、ヴァロードは至って冷静だ。

「名声なんざ、どうでもいい。俺は俺のやり方でアンタを見極めるだけだ」

ヴァロードは地を蹴り、魔王へと一閃を繰り出す。

甲高い金属音と衝撃が兩人の手に伝わる。彼の一撃が当たる寸で、魔王はその斬撃を防いだのであった。

その手には大きな黒い剣が握られており、刃と刃がぶつかり合い、火花を散らす。

ヴァロードは後ろに飛び、魔王との間合いを一端大きく開けた。

「魔剣か。あの一瞬で召喚するとはな」

魔王は自分程もある大剣を片手で持ち上げ、それを空中へとかざす。

「勇者よ。どこを狙っている。我を殺す気があるのか？」

ヴァロードが狙ったのは魔王の肩。わざわざ急所を外したことから魔王はお見通しらしい。

「言っただろ。俺はアンタを見極めるだけだとな」

ヴァロードは再度、剣を構えた。

「ふん。私も甘く見られたものだ。戦いたいのなら殺す気で来い」

魔王と再び対峙する。先ほどとは違う。先ほどの一撃は力量を計るものだった。これからが本格的な戦いだ。

今度は魔王から突進してくる。勇者ほどは速くない。しかし、なぜか避けられる気もしない。

絶対的な圧力を持った突進術だ。ならば、選択肢は一つしかない。

ヴァロードは地を蹴り、魔王へと飛び込む。

スピードよりも重さに重点を置き、大地を砕く様に、一步、また一步と魔王へと近づく。

常人なら瞬き一つで終えてしまうような一瞬。その一瞬で彼らは何個もの戦術を頭の中に描き行動しているのだ。

剣と剣がぶつかる。

魔王の一撃は予想通り重い。しかし、勇者も負けじと地に足を絡め、衝撃を受け流す。

突進からの一撃。そして、連撃。いくつもの斬撃が空中を斬る。

その軌道は正確でヴァロードの身体を確実に狙ってくる。

速いが軽い――ヴァロードは正確に一撃一撃をかわす。

時折の隙を付いて、こちらから剣を振るのだが、魔王の身体には遥か届かない。

手を伸ばせば届く距離に居るはずなのに、とてつもなく相手が遠くに居るようにも感じる。

動と動の均衡。それは崩れない。およそ百もの斬撃を繰り出すも、兩人ともに無傷であった。

「はぁ…………やるな。俺が戦った魔王の中で一番強いぜ、アンタ」

距離を取り、ヴァロードは対峙する魔王の強さを称賛する。それほどまでこの目の前の魔王は強いのだ。

「ふん。大した長生きもしていないくせにぬかすな。小僧」

一方、魔王も勇者に笑みを見せる。彼も目の前の勇者を同等の存在であると認めているのだ。

「行くぜ」

勇者はまた走り、魔王へと突進をする。今度は先ほどよりも早い一撃だ。だが、それを魔王はまた軽く捌く。

「ちっ……………」

思わず舌打ちが零れる。だが焦りはしない———

また、斬撃と斬撃の勝負が始まる。長期戦になると踏んだのか、二人とも深入りせずに距離を置いて戦っている。

「おおおおおおっ！」

咆哮に乗せた魔王の一撃——ヴァロードは剣を頭上に構え、防御態勢を取る。

しかし、剣閃は別な所に向けられていると瞬時に理解した。

彼の剣が落ちた先は勇者の剣ではなく、隣にあった何もない地面であった。

「どこを狙っている？」

勇者は地面から大剣を抜く魔王に問いかける。

魔王は静かに勇者の股下を指差した。そこには青色の花が咲いていた。

勝負をしていて気が付かなかったが、門前から移動し、城の花壇の方へと来ていたらしい。

「こちらへ来い。そこで決着を着けよう」

魔王は最初に居た門の周りを指差す。その仕草はどこか優雅である。

そんな仕草に紛らわされたのか——勇者は闘志を弱め、剣を鞘へとしまった。

「どうした？」

魔王は静かに問いかける。

「やめた」

ヴァロードは魔王に背を向ける。それは戦いを拒否する姿勢だ。今、魔王から攻撃を受ければ、彼に避ける手立てはない。しかし、それでも彼は姿勢を崩さない。

「主は何を思っている？ 我を倒すのではなかったのか？」

鏗鳴り——おそらくは魔王は背中越しに漆黒の剣を構えているのだろう。

「言った筈だ。俺はアンタを殺しに来たわけじゃない。アンタを見極めに来たのだと」

「見極める？ どういうことだ？」

「魔王にも倒すべき相手とそうではない相手が居ると言う事だ」

そう言い終えると、ヴァロードは森へと入るため、足を進めた。

「良く分からんな」

彼も闘志を失ったらしい。魔剣を消し、去ろうとする勇者の背中を見た。

「一つ聞きたい。お前はスターシュ王の命を受けてここに來たのか？」

「そうだ」

「なら、お前は我を殺さなければ、罰されるのではないのか？」

「ふん。人間の罰など恐れるに足らんさ……………それに病んだ王の言う事など聞くに足らん」

「病んだ？」

「知らないのか？ 疫病の理由を魔女とアンタのせいにして市民を処刑し続けているのさ」

「なるほど。くだらない人間が考えそうなことだな」

思い当たる節があるのか、魔王は笑いを漏らした。

「まっ、という訳で、俺的にはアンタの首でも取って行けば、王の言っていることの不条理さが示せるんだがな……………そこまで簡単に首を取らせてくれなさそうだし……………つまり、面倒だ」

「ふっ……………笑わせるな」

魔王は再び笑みを漏らす。

「ま、俺はもう行くぜ」

そう言い残すとヴァロードはその場を後にした。

「ふう……………」

街に戻り、彼は久しぶりにベッドへと横たわる。寢床は固いが野宿と比べると天国というものだ。

考えるのは魔王の事。

彼ほど強い者が街を襲わずに狭い森の中に閉じこもっている事自体にヴァロードは違和感を抱いていた。

（それに……………花を踏みつけられるのを嫌う魔王か……………まるであいつだな）

自分の脳裏に浮かんだ過去の記憶に思わず苦笑する。

（まあ、何でもいいさ）

寝返りを打ち窓の方を見る。夜の街は大都市に拘わらず静かだ。

だが、今日も強盗や殺人がどこかで行われているのだろう。憂いを感じるが、その感情も全く無意味だろう。

おそらくこの街にすることが出来るのはあと数日。

それからどうすべきなのか、ヴァロードは頭の中で思考をまとめながら眠りに着いた。

彼の予想通り、勇者が魔王を倒さなかったという噂はすぐに王の耳に届いた。

当然ながらヴァロードは王から呼び出しを受ける。

だが、約束の時間になっても彼は城へと姿を見せなかった。

怒り狂う王の気も知らず、彼は城下街にいた。

行く当ても無く、ブラブラと通りを歩いていると耳に奇妙な何かが

入ったのだ。それは綺麗な歌声だった。

目をやると広場に人が群がっており、ステージ上の少女が歌声の主だと分かった。齢十四ほどの長い黒髪を持つ少女だ。

可愛い容姿からは想像できない程の美しい声で歌う。思わず足を止めて聞き入ってしまった。

唄が終わると広場に集まった人々から歓声が漏れた。拍手に混じり、コインがステージ上に向けて投げられる。

（良い唄だったみたいだな。俺ももう少し聞きたかったな――）

来るタイミングが遅すぎたことを悔やみながらもヴァロードはステージに向かって銅貨を一枚投げてやる。

ステージの少女が裏方へと消えるのを見て、ヴァロードも歩き出した。

勇者のお仕事

王都を出てからすぐに、ヴァロードの噂は国中に広まる。その速度が尋常ではないことから王の粘着質な手回しがあったことは明確であった。

今滞在している街同様、どの街にいてもヴァロードは人々から後ろ指を指される。

そのことは大して気にしないが、勇者としての信用が下がり仕事が入ってこないのは痛手であった。

魔王を倒すだけが勇者の仕事ではない。徘徊する魔物を遊撃するのも勇者の仕事だ。

だが、その情報が入らなければ仕事をしなくてもできない。

この規模の街では強力な魔物が現れたら立ち打ちできないというのに呆れたものだ。

（やはり、違う国に行くべきか……………）

そう思うもこの三ヶ月、ヴァロードの足はほとんど進んでいない。勇者を受け入れてくれる国など多数存在する。出ようと思えばスターシュを出て待遇の良い国を探せる。

だが——そうすればこの国からまた勇者が居なくなるのだ。

ヴァロードもスターシュの噂はよく聞いていた。

絶対王政を盾にし、王は都市部以外にも多くの税金を掛け、農民は重い税に苦しむ生活を送っている。

そのこともあってか、国の人口は減り、放棄された田畑は荒れ果てている。

その荒れた土地は魔物の恰好の住処になるのだ。そして魔物のせい

でまた人口が減る。

減った人口の分を補う為に税が高くなる。

この悪循環は民や王の心を病ませた。王がある勇者を処刑してしまったのも有名な話だ。

これらの理由で勇者はこの国にはほとんど来ない。

本当にこの国を去るべきなのか、ヴァロードは悩んでいた。

また朝が来る。彼を起こしたのは空腹であった。

昨日ろくな食事をしてないせいか胃を内部から食い荒らされているらしい。

まあ、勇者の身体は多少丈夫にできているので空腹程度では死なないが――それでも身体は食料を欲して腹を鳴らす。

仕方がないので最後の携帯食料を取りだし口に含んだ。

味気ない乾いた肉の味だけが口に広がり、胃の虫はある程度大人しくなってくれた。

財布を確認したが、路銀は殆どない。しかし、ヴァロードは早速酒場へと向かう事にする。

朝の店内は静かであった。準備中にも拘わらずマスターは店を開けてくれたのだ。

目的が飲み食いではないのでそうしてくれたのだろう。

勇者が街に来ると人々は仕事の依頼をする。その仲介役となるのが酒場であった。

仕事内容を確認し、勇者はそれを請け負う。大抵の依頼は魔王や魔物の討伐。

しかし極稀に子供の子守りなどを依頼してくる人も居る。勇者を便利屋か何かと勘違いしているのだろう。

今の状況ではそんな依頼も受け負わなくてはならないと思うと正直

心が重い。

三日ほど、この酒場で依頼を待っているのだが、誰一人として依頼をしてこない。

恐らくは王の仕掛けた噂がこんな所まで広まっているのだろう。迷惑な話だ。

今日の依頼も無いものと思い諦めてかけていた彼の耳にマスターからの吉報が届いた。

「今日は依頼が来ているぜ」

マスターはぶっきらぼうにそう言うと、柱に止めてあった小さな紙をヴァロードへと手渡した。

「マスター。これを依頼したのは？」

「子供だ。十ぐらいだったかな………服装からして貧困街のやつだろ」

紙に書いてある字は汚く、所々間違っているが———なんとか解読できる。

内容を要約すると？弟が病気なの助けてください？ということらしい。

報酬金は銅貨五枚。一食になるかならないかの金額だ。

（病気か………俺は医者ではないがな———）

「おい、マスター。この依頼を請けるぜ」

「はあ？ アンタ正気か？ その程度の仕事すんのか？」

「仕事は仕事だろ」

「いいが、仲介料は払ってもらうぞ。その子供からは一銭たりとももらっていないんだからな」

まったく、ここはぼったくりバーか。どんな依頼であれ、仲介料が定額というのだから。

「いいだろう」

ヴァロードは財布から全財産を取りだし、バーのテーブルに置く。銀貨二枚と銅貨六枚。依頼の報酬より遥か高い料金だ。

「ふん。アンタは変わり者らしいな」

侮蔑を含んだ言葉を吐きながら、マスターは住所が書かれた紙をヴァロードへ手渡す。

これで契約完了だ。ヴァロードは軽くなった財布を胸元にしまい、酒場を後にした。

住所の場所へと行く。そこはやはり街の一角の貧困街であった。住所に書いてあった場所には家らしきものが見える。家といっても廃屋に近い。

外装はボロボロで窓はガラスが割れ、板により塞がれている。だが、中から人の気配は感じる。

どうやら依頼主は家の中に居るらしい。

コンコン――

ノックをする。だが、家の中からは反応はない。キャッチセールス

か強盗にでも間違われているのかもしれない。

「おーい。依頼を聞いて来たぞー」

仕方がないので声を掛ける。そうすると慌ただしい足音が聞こえてきた。

「勇者さま！」

「おっと！」

乱暴に開けられたドアを鼻先でかわす。ドアを開いたのは予想通りの女の子であった。

痩せているせいかかなり幼く見えるが、十歳程だろう。クリクリした目と短い茶色の毛が特徴だ。

「君が依頼を？」

「うん。そう。弟が大変なの！一昨日あたりから熱が出ちゃって

………お医者様に見せようかと思ったんだけど、お金がないから

――」

少女は藁にもすがる思いで、ヴァロードに依頼を送ったのだろう。勇者が来てくれた喜びと弟が助からないのではないという不安がその表情から読み取れた。

「とりあえず、弟に合わせてくれ」

「うん」

彼女は家に入ると、ヴァロードを寝室へと案内する。

そこには彼女と同じぐらい、いや、さらに幼い男の子が横たえられていた。その表情は苦しそうだ。

ヴァロードは彼のおでこに手を当てる。かなりの高温が表皮を伝

わってくる。

「熱以外の症状は？」

「えっと、食事を与えても戻しちゃったり、かなり多くの汗をかいたり……あと、うわ言で寒いつて言ってる」

（熱、吐き気、悪寒………細菌性の病気かもしれないな。モルフイン草が利きそうだな）

「とりあえず、栄養のあるものと水分を取らせてくれ。あと、熱が酷いようならば、氷などで身体を冷やしてくれ」

「う、うん………」

「俺はこれから薬を持ってくる。明日の朝には帰ってくる」

心配そうに見上げる少女の頭を撫で、ヴァロードは家を出た。

ヴァロードの足は街を出て、森へと向かう。

目的のモルフイン草は森の深部に生える草で、すり潰せば解熱鎮痛剤となる。

だが希少価値は高く、街で買えば途方も無い値段を要求されるだろう。だからこうして森へと足を踏み入れている。

森は穏やかだ。鳥たちの鳴き声だけで蠢く獣たちの気配は遠い。

どうやら魔族や魔物は居ないらしい。人工的に造られた道が奥の方まで続いている。

だがヴァロードは一種の違和感を覚えていた。

普通の人間ならば気が付かない程のごく小さな嫌悪感をも彼は見逃さなかった。

道を外れ、しばらく森の中を歩くと赤色に染まった石を見つけることができた。大きさは人ひとり分程度である。

その石が数十メートルおきに森の中へと配置されている。そこでヴ

アロードはこの石の役割を確信するのだ。

人避けの結界——結界とは魔力により他者の侵入を防ぐ、魔導師や魔王にとつての常とう手段である。

物理的な壁のようなものを作り出し他者を拒む結界や感覚を狂わせ、引き返すように差し向ける結界などがあるが、この結界は後者の方らしい。

簡単に言えば嫌な臭いを出して害虫を排除する虫除けのようなものだ。

とはいっても効力は殆どないらしい。まあ、この石の様子を見れば分かる。

風化や苔により魔力が削がれ、結界は脆い。あと数年も経てば、完全に消滅してしまうだろう。

ここに結界が張ってあるという事はこの奥には——

ヴァロードは緩みかかった身体を緊張させ、石を超えて森へと入って行く。

勇者？ と 魔王？

雰囲気が変わる――

そう思ったのだが、森の様子が大きく変化しない。

強いて言えば人が入らないだけあって木々が野性的に生い茂っていることだけだ。

魔族の里があるとしても思ったのだが、思い違いだったらしい。

おそらく結界を残し、ここを住居としていたモノは去ったのだろう。

しばらく辺りを散策した後、ヴァロードは本来の仕事を思い出し、早足で森の中を移動する。

石があった所から十数分歩いた所で彼は止まる。目の前の景色が彼の足を止めたのだ。

森をくり抜いたように一面に花畑が広がっている。そこはまるで楽園のようであった。

「薔薇か……………」

屈んで一房の赤い花を鼻へと近づける。鼻腔からは甘いような酸っぱいような香りが巡る。

それはヴァロードにとっても懐かしい香りであった。

「—————」

風に乗り、匂い以外の何物かを感じ取れた。何かが聞こえてきたのだ。

耳を澄ますとその音が唄であることに気が付く。花園の中に誰かが居るらしい。

ヴァロードは唄の主を探すために庭園を進んでいく。

その左手は腰にかけた剣の鞘に触れており、陽気な唄を聞いている

というのに酷く気が落ち着かなかった。

そして、見つけたのだ。唄を歌いながら花へと水をやる少女の姿を。緋色のドレスに金色の髪、頭に結んだ蒼のリボン。人間にしては可憐すぎる容姿に目を奪われた。

成長すればさぞかし美人になることだろう。

しかし、彼女は人間ではないのだ。この美しさも偽りの物かもしれない――

「おい」

「ラララーン？」

ジョウロを持ったまま、彼女はヴァロードの方を向く。

彼女は突然現れた男を目にし、手からジョウロを垂直落下させる。目は見開き、まるで人間を警戒する猫のような顔をしている。

二人の間には何も隔てるものは無かった。だが、空間が運ぶのは沈黙と湿った空気だけ。やけに静かだった。数秒の沈黙の後、少女が先に口を開けた。

「あ、あなた……………まさか、ゆ、勇者？」

名乗ってもいないのに彼女はヴァロードの正体を当てて見せた。恐らく魔王としての本能がそうしたのでだろう。

「ああ。勇者だ。名はヴァロード」

ヴァロードは名を名乗り、少女の顔をじっと見つめる。

少女は目をひそめ、勇者の顔を睨んでくる。あどけなさが残るその表情だが、油断なくヴァロードは構える。

「妾は魔王、オリビアじゃ」

少女はそう名乗る。ヴァロードの予想通り、やはり魔王らしい。

「妾に逢いに来るとは愚かな勇者じゃ。死して愚行を嘆くがよい」

少女はヴァロードの方を向き、臨戦態勢に入る。

（魔力は感じないが……抑えているだけなのか？ それとも魔剣使いか——）

魔王の動向を探る為、ヴァロードは動かない。

向こうもヴァロードの動きを見るようにしてじっとその場に立っている。

（ん？ 足が震えてる？）

目の前の少女は両足をプルプルと震わせている。

やっと地面に立っているその仕草はまるで動物の雛のようであった。

「隙ありじゃ！ 死ねえっ！」

「っ———しまった！」

魔王が手をかざすと空中へと赤い火の玉が生成される。

そして、ヴァロードの身体に向かって飛んでくる。油断したせいで反応が一瞬遅い。

当たる———

強力な魔王の攻撃であればヴァロードは消し炭になっていたはずだ。しかし、こうしてヴァロードはここに平然と立っている。なぜなら生成された火の玉は空中で分離し、ターゲットへと届く前に消えてしまったのだから。

「……………あれ？」

目の前の魔王は疑問を呟いてしまった。どうやら自分で思った以上に術がうまくいかなかったらしい。

「ふ、ふん。今のは練習じゃ！　こ、今度はこれじゃ！」

「ああ……」

彼女はしゃがみ込み、地面へと手を付ける。

「闇の底に住む一族よ。我が声を聞け。そしてその力を示すが良い。魔王の名はオリビア——」

「召喚か！」

ヴァロードは先ほどよりも一步半下がり、剣を抜く。

なぜなら召喚は高等魔術の部類に入り、術者が高度ならば魔王にも匹敵する生物を呼び出せるのだから。

風が巻き起こり、薔薇の花が飛ぶ。そして現れたのは——

「さあ、ケルベロスよ！　あやつを倒すのじゃ！」

「ふにゃ？」

ケルベロスと呼ばれる生物は小さい。そう、まるで紫色の子犬のように見える。

「行け！ ケルベロスよ！」
「ふしゅううう………」

やる気になったのか、ケルベロスはヴァロードに牙を向ける。
地面を疾走する小獣、そして飛躍、そして空振り、そして号泣――

「ふにゃああああ！」

ケルベロスは自ら地面にぶつかり泣き声を上げた。
犬の外見をしているのに猫のように鳴く、その声は同情を誘う。

「なっ！ 勇者め！ よくも妾の配下を」

「悪い。いきなり飛び掛かってくるもんだから、避けっちまった」

「お、おのれ………もういい、ケルベロスよ、戻れ」

魔王がそう言うのとケルベロスは彼女の足元へと戻る。

「こうなったら、肉弾戦で………いや、でも――――」

ブツブツと何か呟く魔王に対し、ヴァロードは半ば呆れてしまった。
思考が決定するまで時間をやろうとも思ったが、こちらとて時間を

無駄にできないことを思い出した。

「そろそろ、いいか？」

「ひいっ！」

声を掛けると、魔王はビクッと身体を震わせる。

「きよ、今日の所は引いてやる。ありがたく思うのじゃ!」

そう言って彼女は後ろを向きそろそろと歩いて行く。
その足元にはケルベロスがすがりついている。

「おい」

「に、逃げるのじゃ!」

突然走り出したのがまずかった。先ほど捨てたジョウロに足を取られ、彼女は派手に転ぶ。
さらに運が悪い事にその地面はジョウロの水で湿って泥んこになっている。

「ううう……………もう、どうして……………」

泣き目になりながら、彼女は立ち上がる。

しかしその服は泥だらけ。膝からはうっすらと血が滲んでいる。

「大丈夫か?」

「ぐすつ……………もうヤダよ……………魔王になんか慣れる訳ないもん……………
……………なんで勇者なんて来るのよ」

ボソボソと彼女は何かぼやいている。

「おい」

「ひいっ!」

また怯えた表情をとる。そんな彼女を相手にヴァロードの闘志は完全に消え失せていた。

「こ、来ないで！ わ、私、悪いことなんてしてない」

先ほどまでの言葉使いも忘れたのか魔王は人間の少女のような言葉使いでヴァロードを見上げてくる。

その瞳からは今にも涙が落ちそうである。

「ふう……………」

ヴァロードは剣を納め、鞘から手を外すと、彼女へと手を伸ばした。

「ほら」

「えっ？」

「立てよ。そのままで居るとドレスが染みになっちまうぞ」

「……………殺さないの？」

怯えたまま彼女はそう言った。

「はあ？」

だがヴァロードは首を傾げる。

「だ、だって、あなたは勇者でしょ？ 私、いや、妾は魔王じゃ、なんで殺さないの？」

魔王言葉と人間言葉が混じっている彼女を思わず笑ってしまった。

「な、なんじゃ、急に失礼なやつじゃ！」

「いや、悪い、悪い…………変な魔王だなんて思ってな」

「変とは何よ！ 失礼ね！」

「くくく………いや、悪い。本当に人間の餓鬼みたいだわ」
「くうううう………」

魔王は悔しそうにヴァロードを見上げるが、その表情も可愛らしい。

魔王というよりは、おてんばな姫に見える。

「くくく、ほら、起き上れよ」

「ありがと………あっ！　べ、別に！　うん、なんでもない！」

憎むべき敵に感謝をしてしまったのが悔しいのか彼女は顔を赤らめ、俯いてしまう。

「膝、擦りむいているな。大丈夫か？」

「べ、別に、何ともない！　魔王だもん！」

魔王ならば転んだ程度では怪我をしない。そう言いかけた言葉を飲み込む。

そんなことをすれば彼女はまた怒るだろうから。

「きよ、今日の所は、引いてやる！　次は容赦しないから覚悟しておけ！」

ビシッと指をさした後、彼女は歩き出す。明らかに足を引きずっているが。

「あっ」

ドテッ——また転んだ。今度は薔薇のツタに引っ掛かったらしい。

「むぐううううう……………」

反対側の膝も擦りむいた彼女はその場にうずくまってしまふ。

「はぁ……………こっちは急いでいるのにな」

ヴァロードは魔王へと背中越しに近づき、脇に手を入れ、一気に担ぎこむ。

「うわぁぁ！ な、何を！」

「運んでやる。黙って家を教えろ」

彼女の身体は軽い。手からは人ほどの体温が伝わってくる。まるで人間の子供のようだ。

「放せ！ 変態！ 触るなぁ！」

元気な姿もまるで子供だ。

「それともここで降ろして自力で歩いていくか？」

「そ、それは嫌だけど……………そ、そういう問題じゃなくて！ 私は魔王であなたは勇者でしょ？」

「ああ。そうだな」

「じゃあ、なんで私を——」

「良いから黙ってろ。ほら、コイツでも持ってる」

身体を下げると自称ケルベロスが魔王の胸の中へと飛び込んだ。できた。

「むう……………」

ケルベロスを抱き、彼女はやっと大人しくなる。

その顔はまだ不機嫌だが、抵抗はしない。どうやら観念したらしい。

「変な所触ったら、殺すからな！」

「はいはい」

口だけは達者な魔王を抱え、勇者は歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1725q/>

魔王の歌姫

2011年12月2日17時09分発行